南国太平記「下」（直木三十五）

三人旅

「のう、深雪、賞めるぜ、俺(おいら)あ――惚れた弱味ってこのことだ。お由羅あ、俺の実の妹で、俺を、この身分にしてくれた、何んだなあ、旦那様みてえなもんさ。そいつを、刺殺(さしころ)そうなんて、八つ裂きにして、串焼きにしてえってのが、人情だが、惚れた人情って奴あ、又、人情の中でも別だわな。その女を、お前、助けようってんだ。何うだい、俺の、真実が判っただろうがな」

小藤次は、深雪の押込められている、薄暗い、じめじめした、鼠の騒ぎ立てる物置部屋の中で、うずくまっていた。深雪は、その前に、膝を揃えて、俯向いていた。薄暗い中に、厚化粧の顔が、冴々として、浮んでいた。

「俺が、必死の命乞いをしたから、そこは実の妹のことだ、いいようにしろって、まあ、命に別条は無え。然し、なあ、深雪、水心あれば、魚心ってんだ。魚心あれば、水心――まあ、何っちでもええやな。憎さが――そうじゃねえ、可愛さ余って、憎さが百倍。こうまでした俺の気を察しねえで、首(かぶり)を、横に振る分にゃあ、俺も男だ、なぶり殺しに殺すか、仲間部屋へ連れ込んで、念仏講にした上で、夜鷹宿へたたき売るか。人間、出ようによって、仏にもなりゃあ、鬼にもならあ――俺あ、お前の生命乞いをして、寿命を、三年縮めたぜ。妹の怒るのも無理はねえや。初めっから、企んで、入り込んだことなんだからのう。それに、俺が、仙波の娘と知ってのことだろう。ぐるになって、妹を殺すつもりかって、叱られたのにゃあ弱ったよ。しかし、流石、薩摩七十七万石を、手玉にとる妹だけに、捌けてらあ、小藤次、お前、あの女に、惚れているんだろうって、図星だね。注意おしよ、一筋縄で行く女じゃあねえから、いうことを聞かして、寝ている間に、咽喉でもやられたら、何うする気かえ、ときたよ。こいつも尤もだ。仕方ねえから、何あに、あっしも男だ、男の力できっと口説き落しまあす、と、大言をはいて来たが、妹の手前だって、お前に、振られた、振られたが、命は助けてやったとは、真逆いえねえじゃねえか」

深雪は、小藤次の言葉を、半分聞きながら、あとの半分では、この場の処置と、父の死のこととを考えていた。そして（後は、とにかく、この場は、承知しておいて、とにかくも、ここを逃げられるものなら、一旦は逃げ出さなくては）

と、考えた。

「いろいろ、と、込入った事情もあろうが、とにかくだ、人間って奴は何が大切だって、出世が大切だ。大工上りでも、出世すりゃ、先祖代々、馬廻りで候のが、ぺこぺこお叩頭すら。お前が、俺の女房になってみな、化粧料だけで、五十石は、俺、妹からむしり取ってでも、差上げちまうよ。御供女中が、少うても三人つかあ。外へ出るにゃあ、女乗物だ。お前は、武士の娘で、朝から晩まで、御座り奉るで育ってきたから、職人気質は、下品に見えるだろうが、これで、付合うと、なかなかいいもんだぜ」

襖の外には、二人の侍女が、深雪の見張として、坐ってい

た。小藤次の、時々の大声が漏れて来ると、盗み笑いをしていた。
「俺あ、男の意地で、うんと云わせるんなら、ふん縛っといても、思いを遂げるぜ。俺が、このままじゃあ逃げるかも知れねえから縛って、猿ぐつわをはめてと、一言云や、それでいいんだ。俺あ、そんなことはしたくねえ。俺が、首ったけなら、お前が、臍ったけ、好いてくれりゃあ、只今死んじまってもええと、こういう御心底だ。うん、と承知してくれりゃあ、後とも云わずに、四国町の家へ連れて戻って、内祝言、高砂やって奴は、ちゃんと、美々しくしてからのことにして、今夜の内に、女房だ。ええ、深雪、その方が、当節あ利口だろうぜ」
「ええ」
深雪は、微かに、答えた。小藤次が
「本当かい？」
「ええ」
「判ったかい」
「はい」
「ええが、はいになった。しめたっ」
小藤次が、笑って、おどけた手付(てつき)をすると同時に、深雪も、笑った。自分で、突いたが、厚着のため、一寸、肌へ傷ついただけの疵が、それでも、安心すると痛んでいるのが、感じられてきた。
「一人かい」
と、次の間の女中に聞いて、小藤次は、足早に、お由羅の居間へ入って行った。お由羅は、腰元を対手に、双六をしていた。
「何か、用かえ」
「あの女のことで――」
小藤次が、坐ると、腰元が、賽(さい)を振る手を止めた。
「次は、梅ヶ枝かえ。お振り」
お由羅は、小藤次へ、振向きもしないで
「そうれ、大井川――ゆっくり、お休み」
「あの女のことで」
「寝首を掻かれんようにの」
お由羅は、濃い青磁色に、紅梅模様を染めて、蕋(しべ)に金銀糸の縫いのした被布を被ていた。堆朱の台に、古金襴をつけた脇息に、片肱をつかせて
「調所の供養じゃと思うて、あれの、命を助ける程に、礼をいうなら、仏に申し上げや」
「ふむ」
小藤次は、腕組をして、賽のころがるのを見ていたが
「拙いな。一寸、貸してみな」
振る番に当った女が、賽を渡すと
「四の目と出りゃ、府中か。それ、こう持って、こう振るんだ――ほら」
註文の四が出た。
「まあ、お上手に、遊ばしますこと」
三人の侍女が、小藤次を見て称(ほ)めた。
「そんなことだけが取柄」
「それで、今から、宅(うち)へ、連れ戻りたいが、ええかい」

お由羅は、脇息から肱を放して
「煙草」
と、いった。一人が、銀の延煙管を取上げて、煙草をつめた。そして、お由羅に渡すと、一人は、高蒔絵した煙草盆を、手頃のところまで、差出した。
「一枚、役者が上ゆえ、気をつけぬと――」
「それくらいのことは、心得ており申す」
腰元が、俯向いて、笑った。
「自分では、心得ており申しても、先方は、もっと心得ており申して――」
と、お由羅が、いうと、腰元は、声を立てて、俯向いて、笑った。
「それくらいのことあ、いくら、何んでも――」
「心得ており申しますかの」
腰元の一人は、胸を押えて、横になって笑いこけた。
「台無しだ。とにかく、心配してもらわんでも、うまく料理するよ。高が小娘一疋(いっぴき)ぐらい、いざとなれば、指の先で、ぴしっ――」
「また、下卑た――」
お由羅が、軽く睨んだ。
「一言お前に届済みにさえしておきゃあいいんだ。後で叱られると、うるせえから――」
「叱られるようなことさえ為(な)さらなんだら、誰が、好んで叱ります？」
「はいはい、何うも、皆様、御邪魔様で――では、深雪を頂戴して参じます」
小藤次は、立上って、一足踏み出しながら
「何れ、支度金を、その内に――」
と、小声で、口早にいって
「次は、誰が振る役」
と、いっている、妹の声を聞きながら、出て行った。そして、廊下づたいに、物置部屋へ来ると、左右に、坐つている侍女へ
「女を、連れて参る」
厳格な顔であった。
「お上へ、伺って参りますから」
「早く致せ」
侍女の一人が、お由羅のところへ、許しを得に行った。小藤次は、襖の中へ入ると同時に、にたにた笑って
「さあ、大手を振って戻ろうぜ」
と、深雪にいった。深雪は、俯向いたままであった。
小藤次は、一人の供と、深雪とを連れて、門を出ると、心の底に、嬉しさと、誇りとをいっぱいに湧き立たせながら、むずかしい顔をして、往来の真中を歩いた。人々は、深雪を眺め、振返って行った。
（別嬪だろう。これが、明日から俺の女房になるんだぜ。丸髷に結ってな）
人通りが無くなると、小藤次は、にやっと、ほくそ笑んでみた。そして、町人の態度で、やさしく
「町籠は、すぐ近いから」
振向くと、深雪は俯向いて歩きながら

「いいえ、それには及びませぬ。歩き慣れて、おりますから――」
「歩き慣れているからって、せいぜい邸の中ぐらいのものだろう。そろりそろりと参られましょうで、四国町へ行く内にゃあ、日が暮れらあ」
小藤次は、人が来ると、すぐ、澄まし返って、武士らしくなった。深雪は
（とにかく、邸は出たが、このまま小藤次の家へ行けば、邸の内で押込めに逢っていたよりも、危い）
と、思った。だが、何もすることもできなかった。曇った心の中に、四国町の街景色、小藤次の家、薩摩屋敷、自分の住家などが、幻になって、浮き、沈みした。
（行けば、又、何んとか、その場逃れのことをいって――それに、南玉の家にも、庄吉のところにも近いし――）
そう思うと、この近くの何っかから、庄吉が、自分が、こうしているのを、見ているように思えた。
（親切な庄吉――）
深雪は、四国町の近くから、四国町を、なるだけ、ゆっくりと歩いていたなら、きっと、南玉か、庄吉かに見つかるであろう、二人が見ないでも、誰かが見て、二人に話をしてくれるであろう、二人が聞いたなら、何んとかしてくれるにちがいない、それが、その夜の出来事になるか、二日目になるか？　何うしてくれるか、判らないが――それまで、小藤次を防いでいたら――と、思った。だが、万一の時、何うして、小藤次の手を、振切るかを考えると、身体中が、寒くなってきた。
（あの下賤な職人が、大勢いて――）
と、思うと、こうして、小藤次と歩いているのでさえ、身体が汚れてくるように感じた。
（だが、この人は、悪い人ではないし、本当に、妾を想っているらしい。でも、妾は、心から嫌いなのだから――堪らない、男臭い臭、下品な物のいい方、卑しい眼付――）
と、思った時
「喜平、駕がある。あつらえて参れ」
と、小藤次が、供に命じた。
「へい」
駕が、一挺、火の番小屋の横に置いてあった。柳の木と、火事見櫓（やぐら）とが、その上に、聳えていた。
「いいえ、歩きます」
「戯談じゃねえ。四国町まで、三日もかからあ、そんな、あんよじゃあ――」
と、声高に、云った時、火の番小屋の中から、駕屋が、手拭を提げて、御辞儀しながら出て来ていた。
（駕に乗っては、四国町の辺の人に、自分が、小藤次の家へ入るのを見つけさせる訳には行かない。それを見つけさせておかなかったら、誰も、庄吉へ、南玉へ、知らしてはくれないから）
深雪は
「要りませぬ。妾、歩いて参ります。妾一人で乗るのは勿体のうございますから」
「何をいう。手前は、高が大工でござります。貴女はお姫様。えへっへっへってんだ。いや、もそっと参ると、又見つかる

から、その時にゃ、わしも乗る。遠慮せんでよい、先ずお乗り」
「いいえ、では、小藤次様が、お先きに」
駕屋が、小走りに、走って来た。そして、駕の垂れを上げて
「何(ど)うぞ、旦那様」
「いや、乗るのは、女じゃ」
駕屋は、御殿風のしいたけ髱(たぼ)の深雪と、小藤次とを見較べて
「じゃあ、お腰元様」
と、御辞儀をした時
「小藤次、御苦労」
と、小藤次の後方で、声がした。

駕へ手をかけていた深雪が
「ああっ」
と、低く叫んで、振向いた。と、同時に、小藤次が、一足退って、刀の柄へ手をかけた。供の小者は、小藤次の後方で、脇差を握った。街の人々が、一時に、四人を眺めた。
「御苦労」
益満が、笑っていた。小藤次は、黙って、柄から手を放した。そして、益満を睨んで
「御苦労？」
益満は、それに答えないで、深雪に
「参ろう」
深雪は、身体を顫わせながら、運命に感謝した。

「はい」
二人が、立去ろうとすると
「待てっ」
「ははあ、何か用かの」
益満は、深雪を、自分の背後へやって
「大工守利武殿には、何か某に御用ばしござるかの」
「人の女を、何うしやがるんでえ」
「貰うて参る」
「貰うて参る？」
小藤次は、藩中一の暴れ者に対して、心の中では脅えていたが、のめのめ引きさがるのは口惜しいし、深雪を手渡すのは、それよりも惜しいし、見ている人々の手前も、このままでは済ませなかった。頭が、じんじん熱くなって来て
（この野郎、何うしてくれよう）
と、叫んでいたが、手は出せなかった。出したくて耐えきれぬまでに、憤りと、口惜しさとが、こみ上げていたが
（うっかり手出しはできぬ）
と、思ってもいた。
「人の女を、畜生っ――喜平っ、一っ走りして、手を借りて来い」
「ようがす」
小者は、益満を睨んで、脇差を押えて、邸の方へ、走って行った。
「旦那、駕は、何うなりますんで――」
駕屋が、小藤次に、無頼漢らしい物のいい方をした。
「黙れっ」

「黙れって、呼んでおいて、旦那」
駕屋は、小藤次の口の利き方で、怪しい侍と考えたらしかった。
「小藤次、乗って参ればよいではないか、遠慮せずに――大身の身じゃ。拙者共は、歩いて参る」
「喧(やかま)しいやい――深雪、おのれ、益満と行く気か」
深雪は、益満の背後から、顔も出さなかった。
「約束を破るのか」
「旦那、駕は、一体――」
「この、獣っ、黙って引込んでろ。話ゃ、後だって、出来らあ」
「獣？――獣たあ、何んでえ。駕をもって、遊んでるんじゃあねえや」
「そうとも、駕屋、しっかりやれ。小藤次、貴公にゃ手頃の対手じゃ。一番、大工上りの手強いところを見せてやれ」
「何っ」
小藤次は、刀へ手をかけないで、腕捲りをした。
「殺されたって、男の意地だ。女は、やらねえ。やいっ、深雪、このまま逃げりゃあ、お尋ね者の益満と一緒に、ただじゃ置かねえぞ。おとなしく一緒に、俺と――」
と、小藤次が、云った時、駕屋が、向う鉢巻をして
「乗らなきゃあ、いくらか、酒手を貰おうかい。えっ、旦那、二本差していて、人を呼んでおいて、駕屋、いらねえじゃあ、旦那の方が、獣でげすぜ」
益満が
「駕屋、この娘を乗せて参れ」
「へい」
「三田四国町、大工小藤次のところまで――」
そう云って、懐から、銀を渡した。
「何を――」
「利武殿の許へ、送り申そう。ついて参られるがよい」
小藤次は、益満を睨みつけていた。深雪が、ためらっているので、眼で合図して、乗せると
「駕屋、急いでくれ」
「合点だっ」
駕は、小走りに走り出した。益満も、つづいた。小藤次は、何う考えていいか、判らないで、ぼんやりしながら――然し、駕が走り出すと、自分も、その背後から、走るより外に、方法が無かった。

往来の人々は、走って行く駕と、人とを見較べて
(何か急用か、大事であろう)
と、見送っていた。益満は、駕脇を走りながら
「何んと、小藤次殿」
と、振向いた。
「ええ？」
「琴平、舟々って唄を、御存じかな」
琴平(こんぴら)、舟々、追手に帆かけて
ひゅら、ひゅっ、ひゅっ
廻れば、讃州、阿呆のごとく
琴平、小藤次は、大工上り
「如何でござるな」

真平、御免御免
お尻に帆かけて
ひゅら
ひゅっ、ひゅっ、ひゅっ

益満は、その唄に合せて、尻を、左右へ、ひょこひょこと振った。深雪は、駕の中から、それを見て、袖を噛みしめて、俯向いた。駕屋が、声を立てて笑った。

小藤次は、益満の人間と、手並とを、人の噂に聞いてはいたが、その突飛な振舞を、何んと考えていいか、判断がつかぬし、その人を馬鹿にした、益満の後方から、従いて行く、自分のことを考えると、一体何う処置していいのか、判らなくなってきた。口惜しさと、憤りとの上を、擽(くすぐ)ったく撫でられているようで、何処までついて行くのか？　何処で離れていいのか？　一体離れたものか、このまま益満の行くところまで、ついて行くのか、ついて行ったなら何うなるのか、離れてしまったなら、深雪は何うなるか？――

（畜生め、一番、後方から斬ってやろうか）

とも、考えたが、それは考えただけであった。

「何うじゃな。上手であろうがな。ひゅっ、ひゅっ、ひゅっ、ひゅっ」

益満が、又、尻を振った。小藤次は、汗を滲ませて、刀を片手で押えながら、呼吸を荒くして走っていた。

「そこを左へ」

益満が、駕屋へ指図した。左へ折れると、片側は、寺で、片側は、草原であった。

「原を突切って」

駕屋が、

「井戸へ気をつけろ」

と、叫んだ。益満が

「この辺は、夜、追剥(おいはぎ)が出るでのう」

「へい」

「昼間、人を斬っても、その古井戸へ投げ込んでおいたなら、判るまい」

「そりゃ、知れっこありませんや」

益満は、小藤次へ、一寸振向いて、じろっと睨んだ。そして

「よし、ここで、ぶった斬ってくれる」

と、呟いた。小藤次は、周章てて立止まった。そして、汗を拭いた。駕も、益満も、どんどん走っていた。

（計られた）

と、思うと、恐怖心と、口惜しさとが、混乱した。小藤次は、離れて行く駕の後方を睨んでいたが、

（ここで見失っても手を分けて探せば、居所ぐらいは――）

と、思った。駕も、益満も、もう小半町近く離れてしまった。そして、ゆるゆる歩んでいた。

「覚えていろ、益満」

益満が、振向いて

「ひゅっ、ひゅっ、ひゅじゃ」

と、笑いながら、尻を振った。そして

「命冥加(いのちみょうが)な大工め。戻れ。又、機があれば、深雪にも逢えよう。深雪は、お前に、惚れたと申しておるぞ。その内、女から押しかけて参る程に、楽しみにして待っておれ」

そう云い終ると、すぐ、駕のあとから、走って行った。
「深雪っ、覚えていろ」
小藤次が、怒鳴った。そして、真赤な顔をして、脣を噛みながら、じっと、駕の小さくなって行くのを睨みつけていた。
駕は、原を出て、街へ入った。と同時に、軒下から、庄吉が出て来て
「うめえ工合に行きましたな」
深雪は、駕の中から、庄吉を、すかして見た。

「危うがすよ、師匠んとこは」
南玉の住居の長屋へ入って行く益満の後方から、庄吉が囁いた。
「この長屋は、義理が堅い。それに、燈台下暗しの譬(たとえ)で、一晩や、二晩は、却ってよい」
益満は、そういいながら、南玉の表を通りすぎて、長屋の突当りの右側まで、駕を入れさせた。
「ここが、隠れ家でのう」
駕から出た深雪が、益満が開けた戸口から入ると、薄暗い、空家のような何一つ調度とても無い家であった。
「寒い寒い。猿から、ちゃんちゃん借りて来い。質から綿入出して来い」
南玉が、そう唄いながら、両手に、薄汚い、模様のちがった座蒲団を提げて、ちょこちょこ自分の家から走って出て来た。そして、上り口に立っている深雪に
「御無事で、何より」
と、いって、庄吉に
「すぐ、火を持って来らあ。寒くなると、死んだ妻のことを思い出してなあ。嬶(おっかあ)、冥途から呼んで来い。綿入質屋から歩いて来い」
南玉は、唄いながら、火種を取りに戻った。
「師匠は、呑気だなあ」
と、いって、庄吉は、二人のあとから上って行った。
「さて」
益満は、坐らない内に
「深雪の始末」
そういって、刀を置いて、坐った。深雪は、その前へ、両手をついて、
「申訳ございませぬ」
と、低い声でいった。
「いいや、由羅の仲間(ちゅうげん)共の話によると、由羅を刺そうとしたそうだの？」
「はい、そして、仕損じましてござります」
「それで囚われたのじゃな。この庄吉が、心配してのう。わしも、忍び込もうかとまで考えたが、仲間に鼻薬を与えて、聞き込むと、小藤次が、上手に立廻ったらしいから、何れ、と、待ち受けておると、案の定――」
「先生、あの尻振りは――」
「あはははは、見ておったか？」
南玉が、火種を持って上って来た。
「戸締りをしておいてくれぬか」
南玉は、火鉢へ火を入れていた。深雪は、益満が、戸締りといったのに、庄吉が立上りもしないので、ちらっと庄吉を

見た。
「南玉、戸締り」
「ははっ――と、立上り」
南玉は、節をつけて、戸締りに立上った。
「深雪、庄吉は、腕を斬られた」
「は」
深雪は、益満が、何故そんな古いことを、改まっていうのか判らなかった。
「小太郎に折られた手首のことではない。ここから斬られたのじゃ」
「ええっ――それは？　何うなされまして？」
「いわば――」
と、益満がいうと、南玉が、戻って来ながら
「主への心中立かの」
庄吉は、俯向いて、淋しい、右肩を眺めていた。
「毒死致した調所、あれから、密貿易（みつがい）の証拠品を盗み出した。その時に、斬り落されたのじゃ」
「まあ」
「庄吉は――その証拠の品を、そちに与えて、公儀へ訴え出させる所存であった。浪人にされて、島津を恨んでおろう。それには、島津を倒すのがよい――と、調所の風評を聞いて、密貿易の証拠を盗ったのは、庄吉としては尤もな考えじゃが、そうもならんで、わしが、二三考えて、訴え出ることは出た。御家へ疵のつかんようにしてのう。調所は、そのために毒死したのじゃ。元兇の一人を討取った手柄は、庄吉が第一、然し、その庄吉は、――のう、庄吉、深雪に申そうか」
「じょ、戯談（じょうだん）を――」
庄吉は、右肩を動かし、左手で益満を止めた。
「思い切ろうか、切るまいかって、唄があらあ」
南玉が
「いっそ、死のうか、何んとしょう、身分ちがいの仲じゃもの、所詮、添われぬ縁じゃもの、チ、チン、過ぎしあの日の思い出を、胸に収めて遠旅にって、深雪さん、庄吉って野郎は、貴女に手柄立てさせたさに、腕を斬られっちめえやがったのでね、唐、天竺、三界（さんがい）かけての、素間抜け野郎でさあ」
深雪は、庄吉の真心を、前から、感じていないのではなかった。だから、腕を斬られてまでと聞くと、ひしひしと身にしみるようであった――だが、余りの情熱さに、薄気味悪くも感じられた。気の毒とも思ったし、可哀そうとも思ったが、それが、自分への恋からである、と考えると、斬られたことには御礼をいいたいが、庄吉を慰めるのは、厭な気がした。
「それで、深雪、そちも存じておろうが、大殿は、参覲交代にて、御国許へ参られる。調所の件で、延び延びになったが、一両日中には立たれよう。さすれば、万事は、国許でということになる。丁度幸い、南玉も、旅慣れておるし、庄吉も――この男は、返す返すも不運での」
「先生、そいつまでは、仰しゃらずに――お嬢さん、ちょいと、申し上げておきたいんは、あっしゃあ、色恋からじゃござんせんよ」
「嘘を吐け」
と、南玉が、鼻先で、指を庄吉へ向けた。

「色恋と、一口に、いってもれえたくねえんだ。そりゃ好きさ。好きでなけりゃ、出来る仕事けえ。だが、巾着切って、剽(ひょう)きん者さ――理窟はよそう。お嬢さん、あの富士春って、あっしの女、御存じでしょう」
「はい、いつか、一度、お目にかかりました」
「あいつめ、あっしの手は無くなるし、二人の仲あ、町内へ知れて、弟子は来なくなるし、近頃は、流しでさあ」
「流し？」
「そう、表口へ、べんべん弾いてくる奴がござんしょう」
「まあ、あんな稼業に――」
「で――」
　と、いった庄吉の言葉は、微かに、湿っていた。
「いつまでも、彼女(あれ)の世話になっていたくはねえし、あっしも、御供をして、南玉と二人でお嬢さんを、お国許へ届けようと、もう、この間っから、相談しておりましてね」
「小父様、それは、本当でござりますか」
「小太郎も探したし、それに、深雪――八郎太殿は、亡くなられたが、存じておろうのう」
「父様(とと)が？　はい」
「不覚の涙を流すでないぞ。赤の他人の庄吉が、腕を斬られてまでも尽しておるのじゃ。忠義のために殺された父御(ててご)へ、涙を流すなど、草葉の蔭で嘆かれるぞ。喜べ。一家、一族、悉く殺されても、意地と、忠義を貫くのが、武士の慣わしじゃ」
　深雪は、俯向いて、そっと、目へ袖を当てた。
「供養にならぬ涙を流そうより、大阪表へ参って、又国許へ参って、手頃の仕事で、父の志をつげ。よいか。わしは、暫く、江戸の同志と謀ることもあり、又天下のために策謀すべきことも起っておる。齢端行かずとも、もう一人立ちはできよう。もし、進退谷(きわ)まらば、死ね。いつまでも、小娘ではない。仙波八郎太の子として、これまでの教訓、よく噛みしめて、物に当れ。よいか。南玉と、庄吉は、付人じゃ。然し、頼りにはするな」
「頼りにするなは、ひどうげすな」
　益満は、口を結んで、俯向いている深雪を、じっと、見下ろしていた。
（いつか見た――今まで、まざまざと残っている、あの父の血塗(ちまみ)れの夢は、正夢であった）
　と、思うと、悲しさと、憤りとが、いっぱいになってきた。
「不束(ふつつか)でござりまするが、御教訓、忘れは致しませぬ」
「うむ」
「して、父上は、如何(いかが)して、亡くなりましたか。いつかの夢に、斬られている姿を、見ましたが。それから、御師匠様からも、それとなく非業の死を遂げたらしいと、聞きましたが、矢張り――」
「その通り――」
　益満は、腕組をしたまま頷いた。南玉と、庄吉とは、顔を見合せた。
「争えんのう、父娘(おやに)だ。どろどろっと出たんだ」
「対手は、牧仲太郎。噂に聞くと、三十人余りの中へ、小太郎と二人で、斬込んだらしいが――」

「兄上は？　そして？」
「小太郎は助かったらしいが、消息が判らぬ。わしが、叡山へ馳せつけたのは、丁度その翌日。牧もおらぬし、小太郎を探したが、見つからぬし、牧のあとを追って、江戸へ戻って来る途中、この庄吉に逢ったのじゃが――」
「あすこで、お目にかからなかったら、あっしゃ死んでおりましたよ」
「御教訓に従いまして、上方へ参ります」
「路銀、支度のことなど、調えておいた」
「足りないところは、張扇（はりおうぎ）から叩き出す」
　と、南玉が云った時、南玉の表口あたりで
「師匠――おおいっ――留守かい」
　と、叫びがした。三人が、表口の方を見て、不安な眼付きをした。益満が
「小藤次の奴輩（やつばら）だの」
　と、笑った。
「留守だよ」
　南玉の向い側の人が云った。
「何処へ行ったい」
「あいつのことだから、判んねえや。寄席で、下足でもいじってやすめえか」
「深雪って、娘が、来なんだかい」
「ここの長屋は、皆、下地っ子に売っちまって、娘は只今、お生憎様だ。そのうち、こしらえておかあ」
　戻って行く足音がした。
「向いの平吉、科白（せりふ）がうめえや。そのうち、こしらえておかあ、と来やがった」
「だって、商売が、新粉細（しんこ）工じゃねえか」
「あっ、そうか」
「旅に立つのは、明朝、明けきらぬうちに、南玉、いつでもよいのう」
「この張扇一本、打出（うちで）の小槌（こづち）みてえなものでげす」
「庄吉の用意は？」
「先生、ちっと、申しにくいんだが――」
「何？――金のことかの」
「いいえ――あいつ」
「富士春か」
「可哀そうな気が――」
「心得た」
「先生、元のように、可愛がってやって下せえ。あっしの頼みだ」
「恭なく、頂戴仕る」
「いや本当に、戯談で無しに――あいつあ真実、手の無いあっしに、よく尽してくれましたよ。だが、今、別れてやるのは、あいつのために、先生、いい別れ時だと、あっしゃあ、思っていますがね」
「庄吉、お前、何故巾着切になった？」
「あっしですかい――さあ、何う云ったら――えらそうな奴の、肝を潰すのが、面白いからでげすかな」
「一寸踏み外した形だのう――惜しいものじゃ。富士春のことは、心配致すな」
「有難うございます。これで、安心した」

「然し、庄吉、世を救うためには殺すかもしれぬ」
「世を救うために――ええ、ようがすとも。深雪さんだって死ぬんだ。ようがすとも」
黄昏が近づいて来たらしく、部屋の中が、暗くなってきた。三人は、時々軽い口を利きながらも、何処となく沈んでいた。

宿命の渦

表には、知らぬ人の名が書いてあった。披くと、小太郎からの手紙で、傷が癒ったから、大阪へ来た、宿にいるから、来るか、行こうか、としてあった。
綱手の胸は、握り締められるように、苦しかった。いつか、この苦しみが来ると、覚悟はしていたが、兄に会えば、兄は月丸との地獄に堕ちた恋を、きっと知っている、というような気がした。
（怒って、斬るであろう。いや、死ね、というだろう。その時は、自害してもいい。然し、その前に、月丸へ、このことを話したい。そして自害したい――いいや、話をしたなら、月丸は、きっと、小太郎を討ちに行くにきまっている。では、このまま、黙って――そんなことは出来ない）
綱手は、同じことを、幾度も繰返して考えていたが
（いやいや、これは、自分の気の咎めで、兄は何も知らない、知ろう道理がない）
綱手は、手紙の文字から、紙から、小太郎が、何か知っているだろうかと、それを探し出すように、暫く、眺めていたが
（小太郎は、知りはすまい、知れよう道理がない）
と、思った。そして、その手紙を持って、女中頭へ頼み、鼻薬を使って、一刻だけの暇をもらった。
（兄は、これから何うするのかしら）
そう思うと、汚い着物を着て、手足の不自由な小太郎が、

頭の中で描かれた。綱手は、頭の物、着物の類を、下女中に命じて、金に替えさせた。
その中には、綱手の宝物にしている櫛があった。それは、百城月丸からの、恋の贈り物で、今もさしていたのだが、それも、その売物の中へ加えた。それは、小太郎へ、月丸との不義の恋を詫びようとする綱手の、せめてもの心からであった。
綱手は、幾度か、その櫛の油を拭いては、眺めながら、月丸が、その櫛を、京の宿の二階で、自分の頭髪(かみ)へさしてくれた時のことを想い出した。そして、小太郎に
(これを、売ります。そして、兄様の、何かの足しに致します。これが、綱手として、今、兄様にお報いできる、たった一つのことでございます)
と、曇った胸で、云ってみた。そして、月丸へは
(妾の心は変りませぬ。櫛の有無で、決して変りは致しませぬ。貴下も、妾の、兄へ尽すこの心が判って下さったなら、叱りはなされますまい。綱手の、今の辛い心を、察して、赦して下さりませ)
と、詫びた。
下女中の、持って戻って来た金に、己の金のありったけを加えて、綱手は、蔵屋敷の門を出た。
小太郎の宿は、横堀の舟着場所の一つになっている高麗橋の川沿いの家であった。
橋の上へ来ると、早船は、目印の旗を立て、伏見通いのは、大きい体を横づけにして、川岸いっぱいに、幾十艘も並んでいた。
柳の植わった岸には、木の下に、大きい荷がいくつも捨てあるし、岸から歩み板が、幾十枚もかかっていて、船頭が、旅客が、口々にざわめいていた。
いろいろの講中の札のかかった、軒の低い、だが、横に広い、宿の暗い土間へ入ると、忙がしそうに、家中を往来していた女中が、番頭が、一時に、綱手を見た。
「お着きやす」
と、云って、一人の番頭が出て来た。綱手が、何も云わぬ先に
「御一人様で――御一人様で」
と、つづけざまに聞いた。
「さあ――何んと致すべきか」
小太郎は、腕組して、川沿いの障子近くに、片膝を立てて凭れていた。明るい障子に、水の影が、揺れていた。
「存じておろうが、大殿は、近々、ここを御通行になる。その節、同志の者に逢うて、談合して、国へ戻ってもよし、また――」
と、いって、小太郎は、綱手を、じっと見つめて
「父上を討った牧仲太郎は、江戸におろうがの」
と、聞いた。綱手は、眼を伏せて
「はい」
と、答えた。
「牧が、江戸におろうなら、まず、こやつを討つのが、順序であろう」
綱手は

「さあ」
と、答えた。牧を小太郎に討たせたくもあったし、討たせたくなくもあった。小太郎が、牧を討たぬと判れば、月丸も、小太郎を討とうとはしないであろうし、自分の苦しさは、半分消えると、思った。
「それが、物の順じゃ」
「でも、江戸にいなさるか――」
「調所が参った上は、居ろう。調所が死んでも、未だ江戸は離れまい。わしの推察では、益満が、江戸へ戻っておるにちがいない。彼奴の手で、仲太郎を討たれては、わしの弓矢が廃(すた)る」
小太郎は、独り言のように云った。
「兄様――それから、路銀は？」
「路銀？　持っておるぞ、腹巻に入ったままであるし、義観和尚から、五両もろうた」
「妾も――」
綱手は、小さい包を出して
「都合して参りました。旅には、何程あっても入用なものゆえ――」
と、小太郎の前へ、差出すと共に、胸がつまった。
「いいや――有難いが、お前が持っている方がよい。わしは、何んとかする。お前は、女で一人じゃ。まして、敵の中にいて――収めておくがよい」
小太郎の、綱手を、信じていて、可愛がってくれているのが、綱手には、悲しかった。
（兄は、何も知らない。自分のしたことを、考えていることを、何も知らない。自分は兄を欺いているのに、兄は、自分を昔のように可愛がっていてくれる）
と、思うと、涙が滲み出てきた。
「何を泣く、泣いて戻る父か――」
「ええ？――泣く？」
綱手は、固い笑(えみ)を、脣へ上げて
「ふっとして――」
と、一言いったが、胸の中は、涙でいっぱいであった。
「邸は、時刻が、厳しかろう。戻ってよいぞ。調所が死んだのでは、最早、邸におることもないが、母上と相談して、すぐに、又蔵にでも迎えに来てもらうよう、飛脚を立てよう。無事なのが、何より――」
小太郎は、心から嬉しそうであった。
「脚は、少し不自由じゃが、剣は、真剣に場馴れて、人には譲らぬぞ」
綱手は、月丸が、小太郎の腕前のことを、いつか聞いていたことを思い出した。そして、何かしら、二人の間に果合でも始まるように感じた。
「何んとしても、江戸の方へ？――国許へ戻って、同志の方なり、母上なりに――」
「それは、牧を討ってからでよい」
小太郎の江戸へ戻る決心は、変らなかった。綱手は、これが、兄との一生の見納めだと思った。せめて、兄の、嬉しそうな顔を、心に残しておきたいと、じっと、顔を眺めていた。
「何を見ておる。少し、痩せたであろうが」
と、小太郎は、頬を撫でて、微笑した。綱手は、抱きしめ

られて、思いきり泣いてみたかった。

斉興、国許への旅中、大阪へ立寄る、日取は――と、江戸から知らせて来たので、大阪蔵屋敷は多忙であった。

塀、壁の修繕、植木の手入れ、調度、器具類の掃除、掛物、什器(じゅうき)類の下調べ、邸の中も、蔵の中も、庭も、門の外も、廊下も、人影と、足音とが、動いていた。

中島兵太夫は、障子を開け放して、植木人足の入っている庭を眺めながら、廊下に立っていた。綱手が

「お召しになりましてござりますか」

と、廊下へ手をつくと

「浜村へ、縁付の一件じゃが、大殿、御越し前に片付けたい。と、申すのは、妹があろうがの、その方に」

「はい」

「その妹が、お部屋へ、無礼を働いた」

「あの、お由羅様に」

「うむ。調所殿の御取計いで、宿元下げ渡しで、けりはついたが、その方のことが、発覚してはおもしろうない。それで、今夜のうちに、堺へ参るよう、手筈を致してある。万事は用人が、心得ておるから、喜兵衛と、相談致すがよい」

「はい」

「月丸にも、そのことを、先刻申しておいた。離れにくい仲であろうが、よく聞きわけて、利発な子じゃ。忙がしかろう」

「いいえ」

「俯向いてばかり居らず、顔を見せてみよ。邸へ参ってから、又、一段と、美しゅうなったぞ、あはははは」

綱手は、父の遺志に反(そむ)き、兄小太郎を裏切り、今また、自分のいったことを、その通りに信用してくれる、人のいい、この中島兵太夫を欺くのかと思うと、百城月丸との恋が、呪わしかった。だが、別れる気はなかった。

(月丸様も、お話を、お聞きなされた上は、出奔の覚悟を、なさって下さったであろう。邸の中は、人目が多いから、打合せはできぬが、自分が、邸を出て行くのを御覧になったら、後を追うて下さるだろう――いいや、いっそ、堺へ行ってしまって、月丸様と、このまま別れたら――却って、月丸様のために、よいのではあるまいか――確かに、それは、よいことにちがいないが、黙って、自分が、抜け出した後に、月丸様は、何うなさるかしら? 矢張り、出奔なさるであろう。さすれば、同じことじゃもの――思いきって、別れ話を、持ち出そうかしら?――でも――でも、お目にかかったなら、別れられはしない。別れられるものか?)

綱手は、自分が何処に居るのかも忘れて、そんなことを、考えていた。

「退るがよい」

兵太夫は、そういって、立上った。綱手は、周章てて

「いろいろと、並々ならぬ、お世話に、相成りましてござりまする。堺へ参りましてからも、後程のことも、くれぐれ、お願い申し上げまする」

と、いいつつ、よくのめのめと、こんな謔が、いえると、自分で浅ましかった。然し

「これも、恋ゆえ――」

と、思った。

「うむ。浜村と、当家とは、只の間柄ではないから」
と、いいつつ、兵太夫は、庭下駄を履きかけて
「寒うなった。国許は、暖かいが――」
ど、独り言のようにいった。一人の侍が
「次の間の、飾り付けを致しましてござりまする。御見分の程を――」
と、いって来た。それを、きっかけに、綱手は、重い心をして、重い身体を、立上らせた。

侍女部屋には、誰も、居なかった。綱手は、呆然として、つづらに、凭れかかった。
(深雪が――無礼を働いた)
綱手は、一目、深雪に逢いたい、と思った。涙が出てきた。
(何んな無礼?――邸外で、働いたのか、町の中で、働いたのか、それとも、奉公に上ってからか――一体、深雪は、何うして暮しているのだろう)
そう思うと、益満の面影が、ぼんやりと、眼の底に浮んできた。
(箱根の山の中で、いつか、肩へ、手をかけた時――)
綱手は、それを想い出して、独りで、顔を赤らめた。それは、益満への、思慕の心からでなく、自分が、人並よりも、淫蕩(いたずら)娘ではないかしら、という、疑いからであった。
(でも、世間で、十九といえば、子供衆のある人もあるのに――)
そう、自分を弁解して見たが、長上(めうえ)の人の許しもなく、男に肌を許した、ということは、心の底に鉛のように、重くなって沈んでいた。
(妹は、もしかしたら、益満様の指図で、お由羅様を殺そうとしたのではないかしら)
そう考えると、そういう気もした。
(危い、大外れたことを――益満様の教えそうなこと――)
綱手は、深雪の、健気な仕業を称めるよりも、益満に、操られて、危い仕事をした深雪が、可哀そうになってきた。
(深雪に逢いたい。深雪に逢うて、深雪を浜村へとつがせて、一生を、安楽に、送らしてやったら)
そう思うと、死んでゆく姉の自分として、ただ一つ、可愛い妹に残しておける、いい形見のように思った。
(そうだ、遺書を書いて、妹へ――)
綱手は、つづらから、身体を離した。そして、立とうとしたが
(でも、死ぬに限った身ではなし、却って、妹をびっくりさせては――)
綱手は、月丸と二人、手をとって、落ちて行く楽しさを、空想し、二人きりで暮している嬉しさを描いてみた。
(行く所まで――こうなった上は、行く所まで――月丸様の、仰しゃったように、義理も、人情も、親、兄弟もすてて、二人だけになって――)
綱手は、そう思うと、二人きりになれるなら、そんなものを、皆、うちすてても、楽しく、暮して行けると、感じた。
人の足音がしたので、立上ると、廊下から、一人の小者が、顔を出した。そして、四辺(あたり)を窺って
「御手紙を、百城様から――」

綱手は
「あい」
と、答えるよりも、走り寄った方が、早かった。小者は、微笑して
「何分――」
と、四辺を見廻して
「人目を――」
「有難う、ござんした。御返事は、そして」
「万事、それに――」
と、いうと、すぐ、姿を、消してしまった。綱手は、四辺を見廻してから、封を切った。胸が、どきどきして、顔がほてった。月丸の手紙には
予て打ち合せの如く、六つを合図として、筋違橋まで出向くこと。もし、それまでに、堺へ行くとなれば、仲間部屋の角柱へ、白紙を貼りつけておくこと。
と、出奔の打ち合せが、書かれてあった。綱手は、読み終ると、廊下づたいに、厠の方へ歩みながら、手紙を、細かく引裂いた。

時刻は、遅くなったが、町家は、油障子の、薄ら影を、街へ流しているだけであった。
「女共から聞いたが――小太郎が、当地に参っている気(げ)じゃが――本当か」
月丸は、低く、静かにいった。綱手には、答えられなかった。居ないと、月丸へ偽ることはできぬし、居る、といえば、討ちに行く、というに決まっていた。

「綱手」
月丸は、綱手へ、顔を向けた。綱手は、頭巾で、頭をかくし、両手を袖へ入れて、胸で合せながら
「参ってはおりますが――」
と、答えると、月丸は、小半町も、そのまま、黙って歩いた。時々、提灯の火が、二人の側を行きすぎたが、二人には、感じなかった。夜鳴うどんの呼声は、町中に響いていたが、二人には、それが何んであるかも、感じなかった。
「宿は？」
綱手は、その問いを、予期していたが、ひやっとした。
「遠いか――近いか」
「はい」
「お前は、小太郎が、わしに討たれると思うている。然し、わしが小太郎の手に、或いはかかるかも知れぬ」
綱手は、小太郎の討たれる方のことを、余分に考えていたが、そういわれると、小太郎を討つよりも、月丸の討たれる方が、厭であった。
「わしは、邸を出奔して、武士の面目を捨てた――と人は見よう。然し、わしは、決して、捨てておらぬ。わしは、牧仲太郎の倅として、武士として、男として、邸武士の出来ぬ手柄を立てたい。立てて見せる。そして、立派に帰参してみせる。敵、味方と別れておっても、元は、同じ家中で、忠義の心に変りはない――仮に綱手、二人が、親の許した仲であったとして、もし、八太郎が、牧仲太郎を討ちに出向き、わしが、父の側におったら、何んとする。男と見て、父の討たれるのを、手を束ねて見るか？　見るのが武士か？　それとも、

八郎太を討つのが、武士か？　小太郎が、敵党の一人である限り、わしは、見逃さぬ。小太郎も又、わしを見逃すまい。この、討つ、討たれつが、古(いにしえ)からの武門の慣い、武士の辛いところじゃ――お前は、恋のために、武士を捨てよと申すであろうが、わしは、恋も完うし、武士も完うしたい。完うして、完う出来ぬことはない。お前の苦しさは、よく判る。お前は又、わしを、欲が深いと考えておるであろう。然し、わしと、お前との恋を、完うせんがためには、帰参する外にないぞ。手柄を立てて――このまま乏しい金がつきて、野垂死をして、それで完うなるような、女々しい恋を、わしは武士の恋とは思わぬ。心中沙汰は、浅はかな町人の業じゃ」

綱手は、月丸の言葉の半分は判った。然し、半分は、月丸の独り勝手な、自分だけに都合のよい言葉のように思えた。

「でも、みすみす、手引して、兄を討たせることは――」

「討たれるかもしれぬ」

「尚、厭でござんす」

「判らぬかの――討つ、討たれるは、末のこと。小太郎の在所(ありか)の手がかりを存じておりながら、みすみす見逃すことは、わしの性としてできぬ。明かさぬなら、明かさぬで、探し、求めて、討ちに参る」

「そんな御無理な」

「そちと、別れても、参る。そちのために、邸も、知行も捨てた。然し、武士の意地は捨てぬぞ。叡山でとった不覚は、そちと、別れても取返さねばならぬ。一旦、思い立った上は、父の倅じゃ」

月丸の決心は、動きそうになかった。

綱手は、月丸を、悉く信用していたが、いつか、袋持三五郎が、憤りながら

「月丸は、見かけによらぬ奸智に長(た)けた奴、油断すな。といっても、恋に、眼の眩(くら)んでいる、お主には、わかるまいが――」

と、いった言葉を思い出した。そして、月丸の態度を、言葉を、吟味したが、綱手には

（袋持様が、二人の仲を、切らせようと、あんなことを――）

と、しか、思えなかった。叡山で、小太郎の部屋へ忍びに行ったことも、綱手には、月丸の、武士の意地から、としか、考えられなかった。少しの疑いはあっても、恋心が、それを打消して、いい方へ、いい方へと、解釈した。

月丸が、歩きながら、こう説いてくると、だんだん、綱手には、尤ものように思えてきたし、小太郎の在所を秘したために、月丸に別れられることは、自分の死ぬことであった。

（同じ死ぬなら、いっそ）

と、自棄な気持が、少しずつ、強くなってきた。

（死のう。死ぬより外はない。その代り、今夜一晩は、語り明して――月丸の、機嫌のいい顔を見て、父に詫び、母に詫びて、死のう――）

と、思った時

「小太郎は、わしのことを知るまい。よって、わしが、牧の倅であることを打明け、父を狙う小太郎を、そのままに、許しておけぬ故に参った、と、尋常に名乗りかけて、勝負致そう。もし、武運拙く、わしが斬られたなら、綱手、死んでく

れい。な、わしを兄へ手引致すのではない。牧の倅を、小太郎の首を狙っている者を、小太郎の許へつれて参るのじゃ。武士の娘として、詮(せん)ない、宿命と、諦めてくれい。わしとて、恋仲の女の兄を討つに、気軽に、参れるか。小太郎に討たれて、二人で抱き合って死ぬか、小太郎を討って、帰参して、二人の恋を完うするか。綱手」

「はい」

綱手は、涙声であった。

「綱手、そちは、わしを、本当には、想ってはいてくれぬな」

月丸は、鋭く、叫ぶように云った。

「えっ？」

「教えずとも、存じておる。小者より聞いておる。然し、そちを欺して、討ちに行くのをしとうないから、そちの口から聞いて、そちの心を知りたいと存じておった。それに、わしが邸までも捨てておるに、兄一人が、これ程申しても捨て切れんか。最早、頼まぬ。小太郎の宿所を申そうか。高麗橋じゃ」

「ええっ」

京から旅人が来るのは船より外になかった。そして、船は、八軒家か、高麗橋へ着くし、そこには宿屋が並んでいるのを、綱手は知らなかった。

「従いて参るなりと、別れるなりと――」

月丸の足が、早くなった。綱手は、月丸の袖を掴んだ。

「御存じの上は――」

と、いって、声がつまってしまった。月丸は、袖を、二三度払って、綱手が、放さないので立止まった。

「見っともない」

綱手は、涙の流れるままの顔で、月丸を見た。そして

「御案内――致します」

涙に、曇った声であった。

「綱手、お互に、苦しいのは、一緒であるぞ」

綱手は、人通りの無いのを見て、月丸の胸へ縋って、顔を押伏せた。月丸は、綱手の肩から、背を抱きながら

「泣くな」

と、云った。そして、じっと、肩を波立たせて泣き入っている綱手を見下ろして、じっと、笑った。手だけは、しかし、抱きしめていた。

小太郎は、延べさせておいた床を、片隅へ押しやらせて、月丸を招じた。そして、床の間の後方に、いつでも、刀を取れるように坐った。

月丸は、わざと、刀の柄を、後方右手に置いて、害心の無いことを示してから

「深夜に、御手数を相掛け、済まぬ儀でござる。申し上げましたる如く、当蔵屋敷詰、無役、百城月丸と申しまする」

と、挨拶した。

「申し遅れましたが、仙波小太郎――御用の趣、何か、妹の儀に就きまして――」

と、微笑むと

「いいや、家中に、御存じの、騒がしきこと有りまする折柄、或いは、御断りになろうかと存じまして、御無礼ながら、左様の口実を設けましたる次第、御容赦に預かりとうござる」

月丸は、丁寧に、礼をした。
「ははあ、――して、実（まこと）の用件は？」
「唯今、申し上げた、某の姓名、百城月丸とは、蔵屋敷のみにての通り名、本名は、牧周馬、御存じの、牧仲太郎の倅でござる」
小太郎は、じっと、月丸を見つめた。月丸は、俯向きながら
「武門の慣わしとして、かく、お見掛け申したる上は、是非に及ばぬ儀と心得――」
ここまで、いって、月丸は、微笑しながら、面を上げた。
小太郎は、頷いた。
「――尋常の勝負を致したい。この儀、御承引下さるまいか」
「いかさま」
小太郎は、もう一度頷いて、月丸の、立派な態度に、感心した。
「貴殿の父、八郎太殿の斬死を御無念と思われると同じこと、父を覘（ねら）う貴殿の在所を知っては、某として、御見逃し仕る訳には参らぬ。討たれるか、討つか、千に一つの勝負を決しとうござる」
月丸の言葉は静かであったが、その決心は、眼の色に輝いていた。
「御心中は、某も、同様――」
「時日、場所共、存分に、御取決めを願いたい。某は、只今即刻にても、苦しゅうござらぬが――」
月丸は、小太郎を、促すように、云った。
「よく、この宿が判りましたのう」
月丸は、答えないで頷いた。
「妹でも、申しましたかの」
「いいや」
「武士として、かく、申し込まれた上は余儀ない事でござろう。承引仕ろう。場所は――何分、不案内の土地のことゆえ、御貴殿の方にてよろしく、お選み願いたい」
「夜も、更けたことゆえ、邪魔物もござるまい。その橋たもとは？」
「成る程」
小太郎は頷いた。
「御一人でござろうな」
「申すまでもござらぬ。余人の手を借りて、卑怯の振舞をなす如き――」
「いやいや、御貴殿のことは疑い申さんが、当地へ参るまでに、様々のことが、ござって、用心の上にも、用心と――」
「御尤もの儀」
「勘定、その外のことを片づける間、暫く、お待ち願いたい」
小太郎は、少し、腑に落ちぬこともあったが、月丸の、偽らない申し条を聞いて、断る訳には行かなかった。口実を設けて、断られぬこともなかったが、同じ家中の者として、そんな振舞はしたくなかった。
下へ降りて行って、番頭に、急に立つから、といい、番頭を外へ出して、街の様子を見にやったが、怪しいこともなかった。小太郎は
（意外な事の起るものだ。然し、これも、宿命であろう）
と、思った。

「牧氏に、お頼み申したいが――」
小太郎は、降りる時にも、街へ出てからも、月丸を、暗闇を、注意していたが、月丸の言葉の如く、誰も、加勢などに来ているものがないと判ると、月丸の武士らしさに、信頼の心が起って、こういった。
「はて――」
「某の妹を御存じか」
「綱手殿か」
「左様――もし、某が、貴殿の刀にかかった上は、仔細のこと、それに、お申し伝えを願いたい」
「論ないこと、しかと、御引受申す」
「刀、懐中物など、形見として、お渡し願いたい」
「申すまでもなきこと――」
小太郎は、未だ、世の中に、何かし残したことがあるように、茫漠とした世の中への望みが、頭の中にいっぱいに拡がっていたが、それが、何ういうことであるか、はっきり判らなかった。
（牧仲太郎を討つことだ）
と、思ったが、それだけでもなかった。そして、その牧を討つことでさえ、何んだか、漠然としたようで、ただ、次々に湧いてくる自分の危急を、可笑しいもののように、微笑んで眺めていた。そして、自分を討ちに来ている者と並んで、静かに、平然として、歩いておれた。
（叡山の上で、右へ、右へと叫んでいた声は、父でなかった。牧が、父を支えながら、叫んでいたのだった。敵ながら天晴れだ、と思ったが、この月丸も、若いが、えらい。討たれてやってもいい――しかし、自分の方が、優れていたなら、討ってもいい――いや、討つのには惜しい男だ。斉彬公は、きっと、惜しまれるにちがいない）
小太郎は、月丸を、長い間の親友のように感じてきた。
薄月の夜であった。河岸の枯柳は、黒く垂れていて、風は無かった。河水は、鈍く光っていた。高麗橋の橋詰には、夜番所があったから、少し行きすぎて、舟着場の端まで行った。
「この辺りなら――」
と、月丸が、振向いて、微笑した。
「結構」
「では、お支度を――」
二人は少し離れた。そして、襷をかけ、股立をとって、跣足になった。そして、刀を抜いて、目釘をしめした。小太郎は、刀を提げて
「某の流儀は、鏡心明智流を元として、一刀流を、いささか、学びましたが――」
と、声をかけた。二間程離れると、もう、はっきり、顔が、見えなかった。
「某は、国許の、薬丸流っきり――」
「薬丸なら、斬られても、一思いでござるな、ははははは」
「では――」
月丸は、刀尖（きっさき）を、地に下ろすと、すぐ、右肩の上へ、真直ぐに刀を立てた。同じ、示現流から、東郷、薬丸の二派に分かれた内の、薬丸流唯一の構えであった。
「いざ」

小太郎は、正眼につけて、一足退った。かと、思う瞬間、一足出た。薬丸流に対して、余り、距離をあけることは、不利であったからであった。
だが、その刹那だった。月丸も一足退ると、正眼に構え直した。小太郎は
（はて）
と、思った。そして、すぐ、正眼から、頭上へ、真直ぐに、大上段に、突き立てるであろうと思っていたが、月丸は、そのまま、じりっと、刻んできた。薬丸流ではなかった。小太郎は
（偽ったな）
と、思った。そして、そう思うと同時に
（負けるものか）
と、決心した。その途端だ。月丸は
「出るなっ、出るなっ」
と、何かへ、叫んだ。

「加勢か」
「いいや」
月丸は、いいや、と云ったが、小太郎には加勢だと思えた。自分が、叡山での斬込みの腕を知っている以上、一人で来た、と云っても、危くなれば、加勢に出て来る者くらいあるのは、当然だと思った。しかし、そうは思いながらも、月丸が、それに対して、立派に
「一人だ」
と、いい切ったことに、憤りを感じて来た。偽らないで、加勢があると云っても、果合を拒むような自分でないのに、武士らしくもないと、思った。と、同時に
（まず、月丸を斬って――）
と、思った。だが、右足に、深手を負って、少し、引きつれる小太郎は、右手へ、敵を受ける不利を考えて、じりっと、背を、川の方へ引いた。そして、誘いの隙を見せた。
だが、月丸は、刀をつけたまま、懸声もせずに、十分の息を引いて、そのまま、小太郎の刀尖に惹かれるように、矢張り、じりっと刻んだだけであった。
「ならぬ――ならぬ。出るなと、申すに」
月丸は、小太郎の背後の何かへ叱りつけた。小太郎は、そう叫んでいる月丸に、十分の隙はあったが
（家中の者の前で、卑怯な振舞をしたくはない。よし、討たれても、こういっている隙へ打込むのは、卑怯だ）
と、思った。だが、その隙を利用して、ととっと、河岸へ退って、柳の大木を、左手に、川をうしろにした。そして、月丸の叫んだ方をすかして見た。
闇の中に、人影が動いていた。柔かであるし、息の調（ととの）ってない動き方、歩き方は、女らしかった。
（妹――？）
と、感じた。だが、その瞬間に、月丸は
「邪魔なっ」
と、呟いて、少し、低い位置に立っている小太郎へ、下段の刀をつけてきた。
「牧殿、あれは？」
「無用っ」

と、答えるが、早いか
「ええいっ」
川面に響き、街へつん裂き亙って、爆弾の如く、全力的な叫び。
「とうっ」
その、張り切った気合を受けて、弾き返した瞬間、小太郎は、柳の木蔭へ、躱けていた。何う斬って、何う引いたか——月丸は、刀を元の如く下段につけて、静まり返っていた。
小太郎は
（出来る）
と、思った。そして、今の一撃に、全力を込めた月丸が、呼吸を調えて、第二の襲撃に移る間に、こっちから、一撃を加えようと、じりっと、一足出た。
「兄さま」
涙と、声とが、もつれ合っていたが、妹綱手であった。小太郎は、その声を聞くと同時に
（妹と月丸と、何かがあるにちがいない）
と、感じた。そして、そう感じると、妹へ、月丸へ、訳もなく、怒りが湧いて来た。何んとなく、二人に計られたように感じた。
綱手の影は、足許が、もつれるように近づいた。
「来るなっ」
「危いっ、寄っては——」
と、小太郎と、月丸とが、同時に叫んだ。
「や、やめて下さりませ。頼みまする。何事も、妾が、わ、妾が、悪いのでござります」
綱手は、裾を帯の間に挟んで、白い足を出して、倒れかかるように、二人の刀の間へ走り込んで来た。その一刹那だ。
「とうっ」
それは、鉄板を突抜くような、強い気合であった。小太郎の刀は、光を掠めた如く、月丸の胸へ走った。
「ああっ」
綱手は、絶叫した。

小太郎の刀は、十分に延びていた。月丸は、よろめいた。それは、小太郎の気合の鋭さに、圧倒された、よろめきであると同時に、その気合と共に、躱けようとした、本能的の、よろめきであった。
だが、刀の延びた割に、小太郎の右足は、小太郎の心のまに踏み込んでいなかった。そして、綱手を、突きはしなかったかと、はっとした——それは、ほんの一秒の、何十分の一かのような隙ではあったが、一寸、心の弛んだ瞬間——その瞬間だけで、刀尖から、掌へ、掌から、腕へ感じて来る手答えが、予期していたよりは、不十分であった。だが
（少しだが、突いたぞ）
と、感じた。
「妾をっ——」
綱手は、狂人のような叫びをあげて、小太郎に、縋ろうとした。
「殺してっ——」
綱手の頭、白い顔が、小太郎の前で、閃き、油の香、白粉の匂が、微かに漂った。

「綱手――」
月丸は、荒い息を、吐き出すと同時に、喘ぐ声で叫んだ。
「除けっ」
小太郎は、縋りつく綱手を、左手の肱と、足とで、払った。
綱手は、よろめいて、倒れかかりながら
「兄さまっ」
両手を、下から延すのを
「たわけがっ」
左手を、柄から放して、突き倒した、かと、思うと
「ええいっ――ええいっ」
猛獣の、吼号するような懸声であった。小太郎は、綱手の取乱した姿に、憤っていて
（武士の娘に、あるまじき、不覚の振舞）
とも、感じたし
（許して、とか、殺してくれ、とか、月丸と、割無き仲になっているのではないか？　仇敵（かたき）の倅と――）
とも、ちらっと、頭に閃いたし――だが、それよりも、綱手を、突倒してまでも、月丸へ、斬りかかって行くのは
（この機を外すと、己が斬られる）
と、思う、剣道上の心得からであった。対手に薄手傷を負わした上は、踏み込み、畳み込んで、仕留めなければ、対手が、どう死物狂いになって来るか、判らないからであった。相打のつもりにでも、かかって来るか、斬らせて斬るつもりで、捨身に来るか？　それからまた、早く、勝負をつけないと、人が集まり、役人の来る恐れがあった。
小太郎は、一撃を与えると共に、綱手を突き倒しておいて、狼の如く、襲いかかった。月丸は
（いけない）
と、感じた。ちらっと
（敵わない）
と、思った。そして、崩れるように、たたっと、四五尺退った。
「ああっ、誰かっ――」
綱手は、髪を乱して、裾を乱して
「来て下さいっ」
小太郎は、それを聞くと同時に、綱手に、激怒した。
（何んという、嗜みのない振舞――言葉）
そう思うと、自分が、卑怯な振舞をして、恥辱を受けていることよりも、恥かしくなってきた。憎悪に輝く眼を、綱手に、向けて、蹴倒した。その、一刹那
「や、やっ――やあーっ」
月丸の、必死の斬込みだ。小太郎は、躱けて、退いた。その袴の裾を、綱手は、しっかと、握った。そして
「ま、待って下さりませ、百城様、兄様っ」
転んだ。引擦られた。引擦られながら、起き上ろうとした。髷が崩れた。眼は狂っていた。頬も、唇も、歪んで、襟も、裾も、肉を現していた。
「綱手っ、危いっ、放せっ」
月丸は、悪魔のようになって、絶叫しながら、畳みかけて打込んで行く。斬らして斬る覚悟の刀。小太郎は、軽く流し、軽く避けて、退きながら、隙を窺っていると、綱手は、半分、立上って、膝をつきながら

「待って――」
と、延上った一瞬へ
「くそっ」
月丸の、必死の、一撃――小太郎は、さっと、退いた。
「ひっ――」
綱手の咽喉から、迸(ほとばし)った叫びは、二人の耳から、胸を、ぐっと突いた。

「ああーっ」
綱手は、牡丹の花弁の落ちるように、崩れ倒れた。
「待てっ、仙波。待てっ、待てっ」
月丸は、刀を引いて、左手で、小太郎を押しとめた。そして、刀を投げすてて、絶望的に
「斬った」
月丸は、吐き出すように叫んで、小太郎にかまわず、綱手の、崩れ倒れている上へ、かがみ込んだ。小太郎は、それを見ながら、刀を提げたまま、黙って、肩で呼吸をしていた。
船の中に、灯が動いていたし、橋の上、街の角には、いくつも、提灯が、並んでいた。
「綱手」
月丸は、綱手の肩をさぐった。そして、腰の印籠へ手をやりつつ
「しっかりしてくれ――綱手っ」
薬を、口の中へ押入れようとすると、綱手は歯を噛みしめ、両手の拳を握って、身体中を、顫わしていた。
「口を――」

月丸は、小太郎へ哀みを乞うように見上げた。
「小柄で、押開けるがよい」
小太郎は、冷やかに、こう云って、川岸から、舟への歩み板を、半分程渡って行って
「船頭、灯をかしてくれぬか」
舟からは、答えがなかった。
「船頭っ」
「へっ」
「灯を貸せ」
灯が、動いて、船頭が、裸蝋燭を持って来た。
「済まぬ。借りるぞ。ついでに、水をすぐにな」
「へえ」
「恐ろしゅうはない。斬られた者を、介抱するのじゃ」
船頭は、黙って引込んだ。小太郎が、蝋燭を持って、二人の横へ来ると、綱手は、白い眼をして、唇を痙攣させていた。襟から、胸へ、肩へ、血が流れていた。着物は、土まみれになっていたし、髪の根は落ちて、毛が顔へかかっていた。
小太郎は、今まで、憤って、死ね、不覚者、そんな不覚者は、斬られた方がいいのだ、と思っていたが、その姿を見ると、その憤りの上へ、悲しさと、可哀そうさとが、漲(みなぎ)り上って来た。
「深手か」
と、いって、月丸の上へ、膝をついて、蝋燭を差出すと、月丸は、蒼白な顔をして、額に、脂汗を出しながら
「許して――」
と、いったまま、俯向いて、頬も、唇も、ぴくぴく引きつ

らせていた。月丸は、綱手の口へ薬を押込んでから、活を入れた。小太郎は
（助からぬらしいなら、生き返さない方がいい。苦しますのは、いじらしい）
とも、思ったが、生き返らせて、一言でも、言葉を交したい、とも、思った。
綱手の眼に、黒い瞳が、ちらっと、現れると共に、大きい息をして、身体を、手を、脚を、首をもがいた。月丸が
「綱手」
と、耳許で、叫んだ。
「綱手っ、見えるか」
小太郎が、蝋燭と、顔とを、差出した。綱手は、もう、乱れかかろうとする視力を、集めて、二人の顔を見ると、頷いた。そして、顫える手を、延して、小太郎の膝を、掴んだ。小太郎は、微かに、涙をためていた。
「月丸様と――」
綱手は、微かに、これだけいって、眼を閉じて、首垂れた。船頭が、水を持って来た。
「水じゃっ。飲むか」
小太郎が、口へ当てがった。綱手は、細く口を開いた。水を、苦しそうに、が、甘そうに飲む綱手を眺めている内に、小太郎は、憤りを、すっかり忘れてしまって、不幸な家に生れて、こんな死様をする妹は、仮令何をしようとも許してやらなければならない、という風に考えられて来た。
肩から、背へ、大きく、深く斬り割った疵であった。月丸が、布を当て、帯で縛ったくらいでは、血はとまらなかった。
月丸は、膝の上へ、綱手を抱き上げて、その肩をしっかり押えて、抱きしめながら、顔を綱手の胸の上へ伏せていた。
「綱手、許してくれえ」
微かに、むせんで、そういったまま、肩に波を打たせて、顔を埋めていた。綱手は、水から、口を離すと、どんよりとして来た眼で、小太郎を見上げて
「契りました――知らずに――ゆ、許して」
小太郎は頷いた。
「手を――握って」
動かない左手の手の指を動かしながら、右手を、小太郎の膝へかけた。小太郎は、その手を、握りしめた。
「死にます――不孝を――許して」
だんだん、言葉が、もつれて、微かになってきた。
「許す――こ、心残りなく行けっ」
綱手は、頷いて
「お顔を――」
小太郎は、顔を差しつけた。
「もっと――明るく――暗うて――暗うて」
「もう、眼が見えんか」
「いいえ、暗うて――」
そういって綱手は、もう、半分、眼を上ずらせていた。
「兄様、知らずに――契って――」
「よ、よく、判ったぞっ。許すぞ、綱手、許すぞ」
「もう――一度――顔を――顔を――兄様――深雪、母上に、もう一度――」

「綱手っ――百城殿の膝の上じゃぞ、判るかっ」
百城は、顔を上げた。そして
「綱手、月丸じゃ」
「ああ、月丸様――うれしい――もっと、抱きしめて――身体が、下へ――下へ、落ちて行きます」
綱手の呼吸は、微かになって、眼が閉じてしまった。小太郎は、胸へ手を入れ、額へ手を当ててみてから、静かに
「心残りなく成仏せい。許すぞ」
と、いうと、涙を落した。
「小太郎殿――申訳ござらぬ」
月丸は、死んで行く綱手を、しっかと抱きしめていた。
「あーっ」
綱手が、微かに、呻いた。
「うれしい――一緒に――」
と、いうと、微笑んだ。
人が、だんだん、集まって、三人の周囲へ近づいて来た。提灯の明りに、三人の姿が、はっきり現れて来た。
「綱手っ、駄目かっ、死ぬのかっ」
月丸は、綱手の顔を、じっと凝視めたが、そのままで返事は無かった。月丸も、死ぬものと信じて、二人手をとって行く夢を見ながら死んで行く綱手の純情を思うと、月丸は、身体中をしめつけられるように、苦しくなってきた。
「牧殿、勝負は、後日に――葬いを、お頼み申す」
「不覚の段、お許し下され」
と、いうと、月丸は、綱手の胸へ顔を伏せた。小太郎は、懐から、金子を取出して、綱手の、帯へ押込んだ。そして
「南無阿弥陀仏」
と、念じて、首を垂れていたが、静かに立上った。
「仙波氏」
小太郎を見上げた百城の顔は、綱手の血で染っていた。
「某を討果して――」
「何を――いずれは死絶える家でござる。縁あれば――」
小太郎は、微笑んで、足早に、人込みの中へ消えてしまった。

移り行く

富士春の頭髪には、油気さえ、少くなっていた。襟垢のついた小紋に、山の擦れた繻子の帯をしめて、火鉢の前で、俯向いていた。

（さんざ、人に苦労をさせておいて――意地だの、男だのって――これまでに尽してやったのを忘れて、それで、男かい――）

今朝からは、鏡を見るのさえ、厭であった。過去の、淫らな暮しを考え、齢のことを思い、それから、この男なら一生と、見込んだ庄吉のことを――昨夜から戻らぬ庄吉のことを思うと、淋しさと、心細さと、悲しさと、そうして、怒りと、恨みと――いろいろの物がごっちゃになって――何をするのも、見るのも、いうのも、厭になってしまった。

（弟子は、一人も来なくなるし――もう、売る着物も無いし――）

それでも、富士春は、庄吉が、欺したとは思えなかった。外に、女が出来ているとも思えなかった。何も、打明けないで、やさしく恨みをいうと

「済まぬ、今に判る――俺（おいら）、いよいよとなれば、お前と一緒に死んでもいいんだ」

と、いうし――そして、それは、偽りとは見えぬし、怒って詰（なじ）ると

「男の意地って、そんな訳のもんじゃあねえや」

と、斬落された方の肩を聳かしたが、それも偽りとは見えなかった。

（何うしたのだろう？　何処で、何をしているのだろう）

と、思うと、怒りながら、恨みながら、戻って来て欲しい気もした。溝板（どぶ）を踏む足音が聞えると

（戻った？――何う云ってやろう）

と、考えたが、いつも、ちがった長屋の他の人の足音であった。富士春は、起きたままで、御飯も食べないで、寝不足の、重い頭と、鉛のように沈んだ心とを、持て余しながら、もう、小半日も、こうして、俯向いていた。

足音が、格子の前で止まった。富士春は、はっとして、顔を上げたが、すぐ、元の通りになって、何んなに、怒っているか？　恋しがっていたか？　悄然としているこの姿を見せてやろう、と、額へ手を当てた時、足音が、土間の中へ入って来た。

（庄吉ではないらしい）

と、思うと、失望と、うるささとで、そのまま、見向きもしなかった。入って来た男が、そのまま黙って立っているらしく、足音も、格子の音もしなかった。

「誰？」

富士春は、俯向いたまま、咎めるように聞いた。

「俺だ」

聞いたことのない声であった。

「誰？――何んの御用？」

富士春が顔を上げると、土間の提灯の下に、頬冠りをした町人風の男が、立っていた。そして

「富士春、そちゃ、見忘れたか？」

下手な仮声(こわいろ)であった。富士春は、うるさくもあったし、そうした茶番に、腹立たしさを感じた。それで、黙って、又、俯向くと
「益満だあ」
手拭をとると、益満であった。頭を、町人風に結んで、前掛をしめ、刀も差していなかった。
「おや」
富士春は、益満なら、いろいろ聞きたいこともあり、聞いてほしいこともあると――笑顔になって
「まあ、そのお身なりは？」
「押掛け聟になろうと――何うじゃ、よく似つくであろうが――」
と、云いながら、上って来た。

「火も、おこさずと――」
富士春は、火箸で、小さく消え残っている炭火を集めて
「久しゅう見えずに――何うなさいました？」
益満を、見上げた眼は、いつものような色っぽさと同時に、縋りたいとしているような色が現れていた。
「いろいろと、庄吉同様、又、富士春同様に、苦労をしてのう」
「そして、また、そのお身なりは？」
「無断で屋敷を飛び出したゆえ、殿への詫なり、二つには又、庄吉の身代りとして、この家へ入り込むからは、こうした粋な姿になって――」
「庄吉の身代りに入り込むって、願ってもないことでござんすが、そりゃ、庄吉も、承知の上で？」
富士春は、火種へ、眼を落して、心の動揺を見せまいとしていた。
「と、申すのは、実は、偽り――」
富士春は、人の気もしらないで、又、いつものように、からかってと、思うと、好きな益満にさえ、鋭い眼を向けた。益満は、その眼を、じっと見つめて
「庄公とは、昨夜逢った。庄公は、惚れておるぞ。しかし、訳があって、暫く、旅じゃ。これは、庄吉からの、ことづかりもの」
益満は、こう云って、懐中から、小さい包を出した。その重さで、金だと判っていた。富士春は、庄吉が、急に、そんな金のできる筈がないと、信じていたし、益満が、何も、かも、呑み込んでの計らいだとも思えた。それで
「ことづかりもの、実は、偽り――」
と、益満へ微笑んで、云った。
「何れにもせよ。流しでは暮せまい。又、某から頼みたいこともあり、とにかく、庄吉の身の上は、益満がしかと引受けるから、黙って、化粧でもして――さ、気を浮立たせて、久し振りに

三日月さまかや、ちらと見た
細身の刀は、主かいな
小唄吟(ずさ)みで、辻斬りの
前髪若衆の、色袴

富士春、お前のように浮気者にも操があるように、庄吉にも、真心があるぞ。くよくよするな。然し、齢は争えぬ、化

粧をせんと、そろそろ、小皺が、目立って来たのう」
益満は、火鉢越しに、覗き込んだ。
「ええ、だから、男は――庄吉だけは、末長うと思いましたに――」
「庄吉も、同じ台詞を云いよったぞ。長うはない。四五日で戻る。或いは、こういう内に戻るかもしれぬ。さ、髪を結うて、化粧をして、着物を――蔵から出して来て――」
益満は、金包を、眼でさして
「その辺へ、仕舞っときな」
「でも――」
「と、遠慮するような、昔は、仲でなかったのう。お前、湯へ行って来る間に、俺あ、肴をあつらえておかあ。何うじゃ。姿も町人なら、言葉も、上手であろう。益満休之助、神出鬼没、江戸中を――江戸中の女を、引っ掻き廻す――これが、隠れ蓑」
「腰が、淋しゅうござんせんか」
「野暮な邸の、大小棄てて、と、唄にあろう――富士春、もう一度、わしと、昔のようになってもよいぞ。それなら、このまま、町人暮しもしよう。ま、暫くは、庄吉恋し、その内、去る者、日々に疎しでのう。これでも、捨てた男ではあるまい。のう、婆あ。湯へ入って来い」
富士春は、益満の、何処をつかまえていいのか判らなかったが、包の金が多分らしいので、ほっと安心をした。そして
「では、その間、留守番を」
と、快活にいうと
「その間、小唄でも――」
と、云って、益満は、柱にかけてある三味線を取りに立上った。
「こりゃ又、異な姿だのう。何んと致した」
名越左源太は、襖を開けて入ると同時に、坐りもしないで、笑った。益満は
「遅参致しました」
と、両手をついて、挨拶した。部屋は、茶室造りであったが、庭は、石一つない、粗末なものであった。
「外のことでないが、大殿が、御帰国になったに就いて、国許の同志は、君側の奸者共を一挙に、殲滅させようと、計画しておる。それと一緒に、江戸では――いろいろと、論も出たが、久光殿をばじゃな――この君、在ればこそ、じゃで、勿体ないが――」
左源太は、斬る真似をした。
「はっ」
「それで、何うじゃ、その役を勤めるか、但しは又、何か、よい工夫が、あるか？　その談合のために、呼んだが、益満――国許では、赤山靭負殿も、このことには御賛成であるし、益満なら心丈夫だとの仰せもある。一つ、勤めてくれ。外に、この大役を安心して任せる者がない。恩賞としては、何れ、斉彬公御世継の上は、靭負殿よりの取計らいにて、三百石には取立てて得させる」
「有難く存じまする」
「早速承引してくれて、わしも嬉しい」
「いいや――」

益満が、こういって、膝へ手を置いて、名越を見た眼は、齢が上で、格が遥かに上の者までも、威圧するに十分なものであった。それが、町人姿になっても、明瞭と、現れていた。名越は

（又、一こね、こねるかな）

と、思って

「異論かの」

と、微笑した。そして、心の落ちつかんのを見せまいと、煙草入れを取上げた。

「過日、斉彬公の御前へ罷り出ました節、君より、天下の形勢に就いて、御言葉がございました」

「わしも聞いた」

名越は、煙を、天井の方へ吹き出しながら

「それで――」

「その夜――いろいろと、思案仕りましたが、禁裏の御気配、京都へ集まっております浪人共の正論、引続く不作、窮民の増加、異国船の頻々たる来訪。又、オロシャの侵略――何んとなく、日本の四方、日本の上下に、不穏の気が充満して参っておりまする」

名越は

（そろそろ難かしい事を云い出しおったぞ。一を聞くと、十に拡げるのが、名人じゃ、この男は――）

と、思ったが、そうしたことは、斉彬公から聞いてもいて、朧げながら、自分も感じているので

「そう」

と、頷いた。

「それを処理する幕府として――人、策共に皆無でございまする。金子が足りぬゆえ、町人より献金させよ、人がないゆえ、島津斉彬を、異国方に取立てよ、と、己を弥縫するに急であって、政道を布く暇さえございませぬ。近頃、天下に、密々と行われておりまする、幕府衰亡の取沙汰、これを、史上より見ましても、三百年を経れば、一新するのが、常道となっておりまする」

「その論もよいが、わしの、只今の――」

「斉彬公の仰せの如く、家中に党を立てて、争う機ではございませぬ。敵は、久光殿でなく、お由羅殿でなく、徳川幕府――」

「益満っ」

名越は、煙管を、畳の上に投げ出して、鋭くいった。

「裏切る所存か」

「議論は、終りまで、お聞き願いとう存じまする」

益満は、身体も、睫毛も、動かさなかった。

左源太は、益満へ、鋭い眼を与えておいて、横を向いてしまった。益満は、ちらっと、それを見たが、平然として

「名越殿」

名越は黙って、益満の方へ振向いたが、顔を見たまま、返事をしなかった。益満は、その顔へ、笑いかけながら

「手前――女を、一人、助けねばならず、家も、国も、天下も――」

「余論を申すな。今の続きを申すがよい」

「これも、その続きの一つでございまする。女は、常磐津の

師匠で、富士春と申し、なかなか、あでやかでござりまする
が――」
「それが、天下、国家と、何んの係りがあるのか？」
「酔うて枕す、美人の膝、醒めては握る、天下の権。楚の項
羽が、虞美人を抱いて泣き、本朝では、源九郎と、静の故事
など――外に向っては、天下の経綸を論じ、且、行うのは、
大丈夫の本懐なり、又、使命でもござりまするが、内へ入っ
て、喃々と、惚れた女の手玉にとられるのも、人間、男女の、
生れた時よりの大道で、天下を救うのと、その是非、その大
小、必ずしも、痴情を、卑しむことはできませぬ」
「それで――」
左源太は、うるさそうに、冷たく云った。
「それで――案じまするに、物に大小はござりませぬ。女を
救うも、久光公を斬るも、徳川幕府を倒すのも、手前にとっ
ては、同じ仕事でござりまして、しかも、これは、同じ時、
一緒に、手をつけてもよろしく――久光公への悪逆をのみが、
益満の仕事でなく、と申して、女のことばかりでもなく、天
下の事のみでもなく、つまり、出でては、天下、入っては女、
自由、自在、融通、無礙に働きたいと、存じおりまする。従
って、浪士と交って、京師へ参ることもござりますれば、女
と、遊里に彷徨っておることもござりましょう。益満は、そ
んな人間だと思召して、万事、お任せ下さるならば、多少の日日
はかかりましても、心ず仕遂げて御覧に入れまする」
「左様か――それでは、もう一度、皆の者と、談合してみよ
う」
「少し、寝言を申しすぎて、御意に逆いましたと見受けます
るが、それ程の仕事ならば、某ならずとも、久光公附の、奥
小姓一人を味方に引入れさえしますれば、訳のないことでご
ざりまする。例えば、貴船作太郎の如き、仰せつけなさらば、
否みは、致しますまい」
「聞いておく。御苦労であった」
左源太は、不機嫌であった。
「手前、近頃考えまするに、善悪不二、大道無門」
「そういう講釈は後日、ゆるりと聞こう」
左源太は、怒ったように、さっと、立上った。そして
「御暇申しまする」
と、挨拶をした益満を残しておいて、手荒く、襖を開けて、
出て行ってしまった。益満は、微笑して
「一間の内に、入りにけり。ででん、でん。あとには、独り、
益満が、でん――」
口の中で、義太夫節を、唄いながら、立上った。そして、
次の間の、襖際へ置いてあった脇差を、左手に提げて、廊下
に出た。
「卿等、碌々人に拠って事をなすの徒。燕雀、何んぞ、大
鵬の志を知らんや、か――吾に、洛陽負廓田二頃有らしめば、豈
よく六国の相印を佩びんや、か」
と、小さい声で、いいつつ、玄関へ出て来ると、玄関脇の、
番部屋の襖が開いて、二三人が、外へ出ようとした。そして、
益満を見ると
「待てっ、益満」
と、低く、叫んだ。
「話がある。入れ」

三人が、益満の前へ突っ立って、睨みつけた。益満は（名越が、もう、自分の云ったことを、この人間に喋ったのか。呆れた小人）
と、思った。
「何んじゃ、この頭は？」
一人が、益満の頭を、指先で突いた。
「計は密なるを以てよしとす、とは兵法の初歩じゃ」
益満は、襖のところから、こう、大声で云いながら、部屋の中へ入った。六七人の、同志の、身分の低い、若い人々が、壁に凭れたり、柱によりかかったりして、腕組していた。
「何を云っとる。坐れ、益満。今日は、返事の如何により、許さぬぞ」
一人が、こういって、刀を、膝の前へ突き立てた。
「ただ今、名越殿から、以ての外のことを聞いた。吾々の前で、もう一度、名越殿へ申し上げたことを、申してみい」
いくらか身分の高い、齢の行った一人が、こういって、益満の正面から
「本心を聞きたい」
入口の襖のところへも、二人が、刀を持って、坐った。部屋の人々は、四方から益満を、睨みつけていた。
「本心を明かさぬと、斬るとでも、申すのか」
「いいや――」
「その明かした本心の如何に、よりじゃ」
「明かしたことが、本心であるか、ないか、何うして判断する？」
暫く、一座の人々は、黙っていた。
「議論ではない。討つか、討たぬか。何うして討つか。それを聞きたい」
益満の左右の人々は、鯉口をゆるめた。
「討つ、ともいえぬ。討たぬ、ともいえぬ。まして、その手段など――」
「何っ」
「それ程の大事を、うかうかと、口外できるか？　口外するのが武士か？　敵を欺くためには、先ず、味方を欺く、という教えを、何う聞いておる。馬鹿めっ。斬れっ。人を疑うにも、程があるぞ。某（それがし）如きを、か程までに疑うような、やくざ共に、口を裂かれても、計が漏らせるか？　同志とはいい条、この大勢の面々に、秘計を語る如き輩で、大事が成せるか？　名越殿にも申せ、かような、徒（いたず）らに、血気と、浅慮のみの人間に対して、軽々しく、物を仰せられるな、と」
「浅慮であろうと――同志ではないか」
「同志に対して――」
「計が定まったなら、一々、回状にして、同志へ廻せ、とでも、申すのか？　某は、貴公らと同輩ではあるが、某一人が、計を行う上は、同志であって、同輩ではないぞ」
「貴公と、議論はせん。一言聞く、久光を斬るか？」
「斬らぬ」
「何っ」
一人が、片膝を立てた。
「久光を斬って、何んになるか？　久光公を、根元の、元兇のと、久光公が、斉彬公を呪詛しておられるとでも申すのか。久光公に、逆心があるとでも申すのか？　お由羅を残して、

久光公を、何んの訳で斬るのか？　申してみい。聞こう。調所は、自滅した。自滅させたのは、誰じゃ。仰々しく、刀を握ったり、膝を立てたり、左様な、軽々しき振舞をする奴輩に、大事が成せるか？　大勢がかりで、某一人を取巻いて、隼人の恥を存じておるか？　それとも、一人になって、某と、只今申した事を論ずる仁がおるか？　一人で、某と、果し合う仁がおるか。恥を知れ」

一人は、刀を下へ置いた。一人は膝を坐らせた。誰も、何も云わなかった。

「先刻、某の、頭を突いた者があったの。指が腐るぞ」

益満は、勢よく立上った。二人の襖際の若侍が、身体を開いて避けた。人々は、黙って、益満の出て行くのを眺めていた。左源太が、次の間から、出て来て

「あいつには敵わん」

と、立ったままで、大きい声で云った。

「王侯将相、何(いずく)んぞ種あらんや」

益満の声が、玄関でしていた。

蜘蛛の巣網

「おう、おう、おう、おっ」

南玉が、曲り角――道しるべと、石燈籠との立っている角の、低い、小さい、駄菓子を置いた休み茶屋の前で、立止まった。

「何んだ、講釈のびらかえ」

庄吉が、振向くと

「軍談講釈、江戸初下り、扇風舎桃林って――この野郎、女をこしらえて、ずらかったと思ったら、こんなところに、うろついてやあがら」

南玉が、大きな声で、びらを読んで、独り言を云った。茶店の中に、腰かけていた人々が、南玉の顔を見た。南玉は、その内の一人へ

「この講釈のかかっている小屋は、入ってますかい」

と、聞いた。

「よしねえ、見っともねえ」

庄吉が、止めた。

「何うだか――俺、知らんが、茂作、どうだの、流行(はや)ってるけえ」

「講釈か」

「うん」

「なかなか、面白えって、評判だよ」

人々の中の二三人が、こういうと、南玉が

「この桃林野郎の、私は、師匠だがね。京の一条、東小路中

納言様に招かれて、この弟子をつれて行く途中だが、一つ聞かして上げようかな、今晩」
「何んて、名ですい」
「桃牛舎南玉って、これで、下々の小屋へは、なかなか出んでのう。大名、大旗本の、つれづれを慰めに廻っているが――」
「余り、聞かん名だのう」
「聞かんに蜜柑に、竹に虎。はい、御免なさい。いずれ、今夜は、小屋でお目にかかりましょう」
南玉が、茶店を離れて、庄吉と、深雪の立っているところへ来た。
「冷汗をかくぜ、爺さん。東小路中納言だなんて、俺あ、横っ飛びに、逃げ出したよ」
「あはははは、今夜、久し振りに、一席叩いてこまそ。三文にでもなりゃあ、得というもんだ」
「本当に、桃林って知っていなさるのかい」
「一寸、馴染がある――何うでえ、庄公、一つ、富士春仕込みの、怪しげ節でも、助けにやらんけ。割をやらあ」
「よしてくれ。乞食芸人になっちゃあ、仲間へ面出しが出来ねえや」
「これで、お嬢さんが、娘手踊か、水芸とくりゃあ、儲かるがのう」
「小父様、お琴は？」
「琴？　――ころん、ころんって、眠いやつだのう。こ、ことこわしとは、これよりぞ始まる。小屋へは向きやせん――」
「東小路中納言向きだのう」

町へ近づいたので、屋並が多くなってきた。びらが、大きい木の幹だの、辻堂の狐格子だの、酒屋の軒下だのへ、貼ってあった。
「庄公、江戸の流行唄、って触込みで、益満さんのよく唄う、小手をかざして、御陣原見れば、でもやりねえよ。温まるかもしれねえよ」
「田舎じゃあ、判らねえか知れねえが――小屋へは、初めてだからのう。半畳でも入ったら、ぽーっとすらあ」
「半畳って、何？」
と、深雪が聞いた。
「いろいろと、あっての。商売繁昌。火事半鐘、木綿半丈、絹半丈」
町へ入って少し行くと、汚い、薄い板で囲って、板屋根を葺いただけの小屋があった。表に、幟が一本立っていて、扇風舎桃林の名が、紅を滲ませていた。南玉が、入口から、真暗な中へ
「桃林っ」
と、大声で呼ぶと、遥か奥の方から
「何んでえ。誰だ」
と、返事した。

南玉は、張扇で読み台を一つ叩くと、肩を聳かして
「もやもやもやと、もやつき渡る、朝霧の中へ、俄然――忽然として現れ出でたる旗印、地から降ったか、天から湧いたか、とんと判らん、摩訶不思議、あらら不思議に、妙不思議、奇怪奇手烈、テンツクテン――」

南玉は、力任せに、ぱちんと台を、叩いた。
「おもしれえぞっ」
と、客が叫んだ。蜜柑が一つ、飛んで来た。
「蜜柑、きんかん、わしゃ好かん。朝から敵は叶わんと、瞳を定めて、よく見れば、これぞ、上杉方名代の勇将、柿崎和泉守政景が、大大根の打掛纏い、一手の軍勢一千と八百。政景その日の扮装は――」
小屋の表では、頻りに客を呼んでいた。莚を敷いただけの上へ、群衆は、寝たり、坐ったりして、物を食べながら
「上手だに。よく喋るでねえか」
とか
「桃林よりゃ面白え」
とか、評判していた。
「――一天高しと、押し頂き、青貝打ったる三間柄、大身の槍を引提げて、乗ったる馬は薄栗毛、目指すは、信玄只一人、その坊主首引っちぎり、手毬の代りになしくれん、進めや、進め、いざ進め――」
入口の狭いところに垂らしてある、垢まみれの暖簾をくぐって、齢の若い侍が、宿のどてらに、一本差したまま、入ってきた。そして、南玉を見て、微笑して、そっと、人々の背後へしゃがんだ。
「時しもあれや、時こそあれ、一天俄に、掻き晴れて、眺め見渡す隅田川、あれ鳥が鳴く、犬が鳴く――総勢八千六百余騎、おめき渡って打ちかかれば、武田信玄公におかせられましては、いざ、強敵の御入来、せくな、騒ぐな、周章てるな、明日という日が無いじゃ無し、と、忽ち、備える、四十と八陣。世にいう、待味方の陣備えとは、これじゃ、皆の衆。ばらりと振った采配に、ひらりと変る陣備え、変るが早いか、おててこて、猫に、鳶に、河童の屁、いざ来い、来れっ、と待ち受けたりーいっ」
南玉は、顔を赤くし、少し、額に汗を出して、伸び上りながら
「謙信公は、これを見て、やああ、奇怪なり、くそ坊主、いで目に物見せてくれん、ついでに、素っ首土産にしょ、と、抜き放ったる業物は、備前の住人、大兼光、三尺八寸二分二厘、真向、上段、大上段、頭の頭上に振りかざし、当るを幸い、右左、前後左右に、前後、細かに切ったが千六本、細かく突いたがところてん。切られの与三が四十と八ヶ所、弘法大師は八十八ヶ所、斬ったの、突いたの、忽ちに、逃ぐるを追うて、駈込む本陣、徐かなること林の如く、迅きこと火の如しと、名高い孫子の一本旗。やれ、忝なし、嬉しやな。多年の恨みじゃ、信玄殿、この太刀食って、斃ばれと、えい、やっ、発止と、打ちおろせえーりー。さ、この勝負、いかがに相成るか、明晩の前講にて――」
南玉は、台へ両手をついて、頭を下げた。
「もっとやれえ」
「謙信が勝だに。知ってるで、俺あ」
「祝儀出すで」
蜜柑が、いくつも、飛んだ。南玉は、笑って、蜜柑を拾いながら、立上ると
「南玉」
（小太郎の声だが）

と、思って、その方を見ると、入口の横の羽目の前に、小太郎が、微笑しながら、立っていた。
「只今、只今っ」
と、周章てて叫んで、南玉は、楽屋へ入っていった。

「明日ありと、思う心の仇桜」
南玉の、大きい声が、段梯子の下でした。
「親爺、いい機嫌になって戻って来たの」
庄吉が、深雪を見て、微笑んだ。
「ほんに――」
深雪も、笑ったとき
「人間の運というものは、不思議、奇手烈、妙ちきりん、庄公、びっくりするな」
足音は、南玉一人でなかった。
「久しく、吃驚というものを食ったことがねえ。食わせてくれ」
と、庄吉が、怒鳴った時、障子が開いた。南玉の後方に、小太郎が立っていた。
「おおっ」
「何うだ、一番、食っただろう」
そういいながら入って来た南玉の後方を見た深雪が
「ああ」
と、叫んで、膝を立てた。
「あの、辻びらを見た時、こつんと、頭へ来たんだ」
南玉が、喋っているうちに、小太郎は、じろっと、庄吉を見て、深雪の側へ坐った。庄吉は、俯向いて

「お久しゅう」
と、挨拶した。小太郎は、それに答えないで
「あらまし、南玉から聞いた」
「仕損じまして、面目次第も、ござりませぬ」
「深雪、父上のことは存じておろうな」
「はい」
「綱手も、死んだぞ」
「あ――ど、どうして？」
「殺された」
「牧に？」
「いいや」
「誰に？」
小太郎は、答えなかった。
「綱手さんも――へえ――小太郎さん、何うして殺されなすったのでげすな」
南玉が、小太郎の顔を覗き込んだ。
「いろいろ訳があった」
小太郎は、こういって、眼へ、袖を当てた深雪へ
「泣くな」
と、叱った。
「はい」
「訳とは？――若旦那」
「綱手に、無理の無いところもある。然し、為すまじきことをした。宿命であろう。殺した者は、牧の倅じゃ」
「ち、畜生っ、矢張り、牧でござんすか。又何うして――その、すまじきこととは？」

「何れ、申す機があろう。深雪、お前も齢頃であるが、男には気をつけい。綱手は、それで、殺されたのじゃぞ。いや、殺されたと申そうより、我身で、我身を殺さねばならんようになったのじゃ」
深雪は、黙って、俯向いていた。膝の上へ、滴(しずく)が時々落ちた。
「奥様は」
「国へ戻ったらしいが――母も、何うなったか――」
四人は、黙って、溜息をついているだけであった。
「庄吉」
「へえ」
「いろいろと、世話になったそうじゃが、礼を申すぞ」
「いいえ」
庄吉は、小太郎へ微笑んだ。
「乗りかけた船でござんして――」
「深雪、江戸へ、わしと一緒に戻れ。南玉と、庄吉とは、如何致す」
庄吉は、左手を懐へ深く突き込んで、俯向いてしまった。
「若旦那――江戸へ戻るのも、よろしゅうございますが、戻ると、深雪さんの身体が、危いのでねえ」
「何う危い」
「小藤次の野郎め、草を分けてでも、探すって惚れ方で、彼方一人なら、益満さんだって、こうして、わざわざ、お国へ送り届けるなんてこたあ、なさいませんが、何んしろ、あいつの後方には、七十七万石ってのが、ついておりましょう。此奴が、何を仕出かすか判らねえので――」
「よし」
小太郎が、鋭く止めた。
「深雪、そち一人、生き残る所存か」
深雪は、涙の目で、小太郎を見て、首を横に振った。
「そうであろうな。では、江戸へ戻れ。益満には、そち如き手足纏(てあしまと)いであろうが、わしは、一人の妹として、生きるも、殺すも、二人っきりじゃ。一家五人の内、二人っきりになったわしらが、こうして逢うて別れては、世上の物笑いになる。又よし、乞食をしても、他人の世話にはなりとうない」
「一寸――ちょ、一寸、若旦那。他人の世話になりとうない、と、仰しゃいましたな」
南玉が、小太郎へ膝を向けた。
「悪気で申したことではないぞ。心苦しいから――」
「それは判っておりますが、この深雪さんが、お由羅邸へ、奉公に上んなすったのも、他人の世話でございますよ。何んなことでも、これから、二人っきりでおやんなせえますか。益満さんも、他人――」
「益満とは――」
「ま、お聞きなせえ。益満さんは、一味だから、朋輩だからと、仰しゃるんでしょうが、それなら、その益満さんの見込んだ、あっしらは、又、味方の、従兄弟(いとこ)味方、な、従兄弟同士ってこのことだ、同じ長屋にいたから味方で、泥溝泥(どぶどろ)長屋にいたから味方でないってこともございますまい。益満さんが、すっかり、何も、かも打明けて、南玉頼むぞ、庄吉やってくれと、この庄吉なんて、大馬鹿野郎あ、片手斬られてまでの働きでございますよ」

小太郎は、庄吉の右手を見て
「何うして、斬られた。斬落されているな」
「へえ、調所さんのために、えいっ、ぽろっ。何うせ、若旦那に折られて、使えなくなった腕でござんすから、惜しくはございませんや」
「その時盗んだ書類で、調所の罪が、発覚したんでさあ。それがね、この男が、深雪さんに――てな――つまり、一手柄立てさしたい、盗んだ書類を、深雪さんに渡して、御大老へ駕訴(かごそ)をさせようって、大芝居をするつもりでござんしたがね、益満さんに笑われて、益満さんが、島津の家には傷がつかず、調所だけ死ぬようにと――あの人の智慧は、文殊さまみてえでげすな」
「よく判った。然し、わしは、深雪と、江戸へ戻る。志は受ける。一緒に、戻るなら戻れ。戻るのが不服なら、これは、南玉――わしが悪かろうと、よかろうと、お前方の勝手じゃ。わしは、妹と二人で、牧の行方を探して、討つか、討たれるか、このまま、深雪を、国へ帰すことはできん」
「庄吉、何うする」
「戻るより外に仕方あるめえ」
「時に――若旦那、甚だ、不躾(ぶしつけ)で、叱らんで下せえ。あんた、路銀は？」
「多少、持参しておる」
「牧を探すのに、五年、十年かかっても、大丈夫でげすかい」
「そうはあろう訳がないでないか」
「でげしょうな。庄吉、今度は、お二人のお供だ。乗りかかった船で、一番、牧のところまで、食いつこうじゃねえか。手前だって、このまま別れられねえだろう。若旦那、大船に乗ったつもりでいておくんなせえ。南玉といやあ、天下の講釈師だ。庄吉といやあ、巾着切の名人だ」
「叱(し)っ」
「路銀は、他人様の、懐中(ぽっぽ)に、あずけてあるんだ。のう、庄公、いやあー、目出度(めでて)え、こうなりゃ、意地だあ」

流行物

「南玉が、舞戻って来た」
益満が、立止まって、独り言のように、いった。富士春が、益満を眺めている眼の方を見ると、床屋の、油障子の下に
久々にて御目通り、桃牛舎南玉
と、書いた、寄席のびらが、貼ってあった。床屋の店先で、将棋をさしていた若い衆が、二人の姿を見て
「ようよう」
と、冷かした。益満は、濃染の手拭で顔をかくし、富士春は、編笠をきて、益満が唄うと、女が弾く、流しの、流行唄(はやりうた)唄いの姿であった。
「堪(こた)えられねえぞ。畜生っ、こう、突いたら何うする」
「あれえー、お父さん、恐いようっ、と、ひらりと躱(かわ)して、角の王手だ」
若い衆は、二人を見たり、盤を見たりしながら、ほのかに、店から流れ出している灯の中に立っている、睦まじそうな二人に
「王手、嬉しい、二人の仲、か――俺(おいら)、癪だから、こう、お城の中へ、お引っこもりだわな」
二人は、店先を離れた。
「庄公も？――」
富士春は、益満の肩のところで、呟くように聞いた。
「さあ――とにかく、寄席へ行けば、判るであろうが――」
南玉、何処へ行く
油買いに、酢買いに
隣りの油は、十文で
横町の油は、七文で
三文、徳しょと、急いだら
横町の、犬の糞、踏んづけた
益満は、唄いながら、ずんずん歩いて行った。富士春は、庄吉にも逢いたし、益満と又、いつの間にか、昔のような仲になっていることを、庄吉に知られたくないし――
（庄吉のことを、口へ出したので、休さん、気を悪くしたのではないかしら――）
と、心配しながら、益満の、機嫌をとるように、出鱈目な、その唄と、節とに合せて、三味線を弾きながら、ついて行った。
街は、すっかり暗くなっていたが、寄席へ行くのには、少し早かった。
「女師匠の浮気さは、か。のう、お春」
「ええ？」
富士春は、朗らかな益満の声に、笑顔と、媚とを見せた。
女師匠の浮気さは
水に落した月の影
「まあ――それから」
掬めば、止まらず
掬まなけりゃ
つんと、すました、仇姿
と、云って、益満は、扇で、富士春の肩を軽く叩いた。
「ま、いやな――」

富士春は、大仰に、そして、媚(なま)めかしく、身体を躱(さ)けて
「撲(なぐ)ったりしてさ」
と、睨んだ時
ええ、じれったい
益満は、手早く、編笠の上から、又一つ叩いた。
「あれ、又一つ――」
と、云って
益満は、大きい声で、節をつけた。そして、すまして、歩きながら
飛び込みゃ
からんで、命とり
「憎い人だねえ」
と、富士春が、うしろから、小走りに、声をかけると、通っていた若い衆が
「えへんっ、えへんっ、だ」
と、富士春と、すれちがいざま、怒鳴って行った。

寄席の裏木戸から
「御免よ」
と、声をかけた。誰もいなかった。汚い入口の右手に、下駄箱があって、正面に、色の褪せた暖簾が、かかっていた。その奥が、楽屋から、すぐ高座らしく、裏木戸を入って、戸口に立つと、南玉の演じている声が、聞えていた。
「去る程に」
とんと、扇が入った。
「一夜明くれば、御正月――には、これあらで、いつなんめり、延元の元年、五月は二十と五日の日。小手をかざして、御陣原――にはこれあらで、兵庫沖、かすむ霞の晴れ間より、ちらりと見ゆる軍船(いくさぶね)。漁(いさり)にかえる海人(あまびと)か、晦日の金か、三日月か、宵にちらりと見たばかり。潮路、はあーるかに、見渡せばあー」
扇が二つ入った。
「取梶、面梶、刀鍛冶。煙波、渺々(びょうびょう)たる海の面、埋まったりや、数万艘、二引両、四目結、左巴(ひだりともえ)に、筋違い、打身に、切疵、肩の凝り、これなん、逆賊尊氏の兵船。えんや、やっこらさっと、漕いできたあ。義貞朝臣、これを見そなわせ給い、いかに、者共、よっく聞け、耳かっぽじって、承われ――」
楽屋から、一人の男が出て来て、益満を見ると
「何んだい、お前さん」
「南玉に、逢いたいが――」
「今、駄目だよ」
そう、ぶっきら棒に云って、横へ入ってしまった。
「かかりけるところに、本間孫四郎重氏、黄瓦毛の太く逞しきに、打乗って、紅下濃(くれないすそご)の鎧(よろい)着て、和田の岬の波打際に、たんだ一騎にて御入来。大音あげて弁ずらく、将軍西国より御上洛ならば、さだめて、鞆、尾の道の傾城(けいせい)共を、御召連れなされ候わん。それに食わせる引出物。一匹射留めて進上しよう。お口を開いて待っていな、と、上差(うわさし)の流鏑矢(ながれかぶらや)引抜いて、二所籐(とう)の弓に取副(とりそ)え、小松の蔭に馬を寄せ、浪の上なる鶚(みさご)を的に、きりりや、きりりと、引絞ったりー」
益満は、富士春を、振返って

「ざんば岬を、弾いてくれ」
「ここで？」
富士春が、弾き出すと
ざんば岬を、あとに見て
袖をつらねて諸人の
泣いて別るる、旅衣
と、益満が、唄い出した。
「おいっ、誰かいねえのかい。裏が、やかましいぜ」
楽屋の中から、誰かが、怒鳴った。
「どじめっ」
さっきの男が現れて来て
「ちったあ向うを見ろ。手前も、芸人じゃあねえか。軍談席の木戸で、唄を唄う奴があるかい」
と、いいつつ、益満の前へ立った。
「さて、いよいよ、これから、湊川の合戦というところ、まず、今晩はこれぎり」
南玉の、声がして、すぐ、ちらっと、姿が掠めて見えた。
そして、楽屋の横から出て来て、裏木戸の方を見ると
「いやあ、判りましたかい」
と、叫んで、小走りに、出て来た。
「訳があって引返してきやしたがね、何処を探しても――」
と、いいつつ、二人の姿を見て
「何うなすったんで？」
と、小声で聞いた。
「出よう」
「ええ――定。何を、ぼんやりしてやがるんだ。履物を出してくれ――寄席へ出て、びらを撒きゃ、何っかから現れて来るだろうと、撒きやしたぜ、三千六百枚」
「嘘を吐(つ)け、出よう」
三人は、裏木戸を出た。

小太郎は、南玉の後から
（こんな汚いところに――）
と、思いながら、益満の住んでいる、陽当りの悪い、古い、臭のする長屋へ入って行った。南玉が
「今晩は」
と、いうと
「誰だっ」
聞いたことのない、侍らしい声がした。だが、すぐ
「おお」
と、益満が云った。土間へ入ると、障子が開いて、益満が立っていた。小太郎を見ると
「よう」
小太郎は、それへ笑って
「客？」
と、奥を、顎でさした。
「構わぬ。引合せよう」
行燈と、燭台とを置いて、二人の浪人者らしいのが、振向いた。南玉は、上り口の間から
「ええ」
と、云って、敷居際へ、手をついた。
「入れ。親爺――これが、桃牛舎南玉。これが、仙波小太郎」

お互に、挨拶が終ると
「よく無事だったのう。八郎太殿の話は、京で聞いた。天晴れだ、という話であった。わしは、二日おくれて、叡山へついた」
こう、軽く云って、益満は、小太郎の顔をじっと見た。
「益満――綱手も――」
「南玉から聞いた。悲しいか？」
「悲しいか？　とは？」
生死さえ判らなくなった自分が、こうして戻って来たのに、余りに、軽く、冷たそうな益満の態度に
「骨肉の情でないか」
「斉彬公は、四人の御世子を、人手にかけられたが、眉一つ――」
小太郎は
「判った。判っている」
と、口早に、益満の次の言葉を止めた。
「それで――用件があるが――」
小太郎は、二人の見知らぬ浪人の前で、こう云って躊躇してみせた。
「牧を討つことか」
益満は、こう云って微笑した。
「そうじゃ。江戸に――居るらしい」
「何うしても、討ちたいか？」
小太郎は、こうした益満の言葉へ、うっかり返事をすると、すぐ、頭ごなしにやられるので
「何うしても、とは？」
「一生かかっても、牧を討ちたいか？」
「親の敵なり、悪逆の徒ではないか？」
「日夜、一生、牧にかかりきれるか？」
「うむ」
「明日は、牧へ、何ういう手立をとるな」
「居所を突きとめる」
「何うした方策で？」
「それを聞きに参った」
益満は、煙管を、弄（もてあそ）びながら
「小太郎、怒るな」
小太郎は、黙って頷いた。そして、益満の次の言葉を、不安そうに待った。
「もし――もしだぞ、わしが、それを、断る、と、云ったなら？」
「断る？」
「引受けるかもしれぬ。だが、わしが、牧の在所を探したとして、もしもじゃな、到底、三人や、五人では、歯が立たぬと、判ったなら？」
「それまでに、堅固か、牧の警固は？」
小太郎は、益満を見つめながら、低く、呟くように云った。
「小太、少し、牧の話から外れるがなあ――叡山へ参った時、京で、いろいろ見たこと、聞いたこと――それを、今度、戻って来て、斉彬公の御意見と合せると――わしは、考えた。陥入（おちい）ろうとする絶壁の手前で、成る程と、判った」
「一向に、判らねえ」

と、南玉が、首をぐりぐり振った。二人の浪人は、腕組をして、微笑していた。
「斉彬公が、いつも、仰せられるな。家中に党を樹つべき時ではない、天下は大変な時じゃ、と」
「ふむ」
「わしは、そうかしらと思いもしたが、よくは判らなんだ。勤王の、佐幕のと多事らしいが、何うせ流行(はやり)物じゃ、一時のことじゃ、と思うていた。そして、京へ行って、尊王、倒幕、開国、攘夷、と、いろいろのことを聞きもし、見もしたが、何んの、浪人共の苦しまぎれ、金儲け、と、考えていた。ところが、斉彬公から、いろいろと説かれ、二ヶ月ぶりで、江戸へ戻ると――小太郎、僅か二ヶ月の間に、江戸も変って来た――判るか？」
「判らぬ」
「こういう二人の男が、そのために命を棄てに、江戸へ出て来ている。二ヶ月前まで無かったことじゃ。何んのために棄てるか？　家のためでもない。親のためでもない。天下のために、棄てようと、申すのじゃ。姓名をいって、国をいわなんだが、お二人とも、水戸の方じゃ。尊王、倒幕を、正義と信じ、天下の大勢と見てとって、脱藩した人々じゃ。遊びでもなければ、金儲けでもない。この仁など、酒まで断って――」
「断ったのではない。金がないからじゃ」
と、一人の浪人が笑った。
「これを、小太、江戸の侍と較べてみい。旗本の馬鹿者共の遊興ぶり、暮しぶりと較べてみい。天下は、確かに一新しそうだ。そして、その魁(さきがけ)を為すものは、水戸か、薩摩か？この方々は、水戸の人じゃが、斉彬公を擁立して、天下の勢の赴くところへ、赴かしめようと、この間から、その話じゃ」
「するてえと、つまり、将軍家を、倒そうというんですかい」
南玉は、尤もらしく腕組をして
「由比正雪じゃあるめえし、益満さん、いくら、貴下が、利発でも――」
「駄講釈師の知ったことではない」
「ところが、これで、学文は、和、漢、蘭に亙り――」
「この間も、名越殿と、これで、少し、争ったが、小太、牧を討つのもよい、天下のためも、御家のためも、親のためも、何れも人間の大義にはちがいないが、然し、天下を双肩に荷うのも、おもしろいではないか。何れを主、何れを従とはわしは申さぬ。ただ、牧一人を討つため、無益の日をおくるのが惜しい。牧を追求する暇に、この天下の大仕事へも加わらんか」
「わしには――少し、大きすぎる。今のわしは、ただ、牧が憎い。その憎む心で動くほか、何う教えられようとも、動く気はせん。益満の申し分は、真実であろう。ちらちらと、近頃聞く、尊王、倒幕――それが、本物か、流行(はやり)物か、わしらの若さでは、判断がつかぬ。ただ判断のつくのは、斉彬公のために、悪逆の徒を滅すことは、何よりも、家来としての為すべきことだ、ということだけじゃ――南玉、戻ろうか？」
益満は、微笑したままで、小太郎の顔を、じっと、眺めていた。
「然し――」

と、南玉は、益満に
「これまで一緒に――」
小太郎は、二人の浪人に
「長く、御無礼仕りました」
と、手をついて、立上った。
「小太郎様、もう少し」
南玉が、手を延した時、小太郎は、次の間へ、出てしまった。

お為派崩れ

島津斉興は、大きい眼鏡の中から、皺の重くたれた眼瞼を、しばたたきながら、口を曲げて、手紙を読んでいた。そして、読み終ると、脣を尖らせて、暫く、じっと、前の方を凝視めていた。
「何か――」
お由羅が、横から、いうと
「うむ」
と、その方を振向いて
「又じゃ」
投げつけるようにいって、手紙を、お由羅の膝の前へ抛りつけた。そして、大きい声で
「わしが、こうして、国へ戻っている間に、こそこそと致さずと、江戸在府中に、堂々とすればよいではないか」
お由羅が、手紙を読んでいた顔を上げて
「本当に――」
と、空虚な、相槌を打ったが、少し、読んで行くと
「ま、これは、真実ではござりましょうか」
お由羅の声は、真剣で、眉は心配そうに、歪んでいた。
「わしを、幕府の力で無理に隠居させようなどと――身は、聞かん、聞かんぞ――」
斉興は、頭を振った。そして
「茶をもて」
と、怒鳴った。

齢をとって、少し気が短くなっていたし、道中の疲れも、前年より出ていたし、江戸の邸とちがって、鹿児島のこの邸は、少しずつ好みのちがった――何んとなく、落ちつかぬところがあったし、それから、女中、近習が、目立って、動作に気が利かなかったし――そういった小さいことと、久し振りの拝謁者を、一々引見したから起ってきた、神経的な疲労もあったし――そして、それよりも、もっと、斉興の気持を悪くし、憤らせたことは、斉彬贔屓の人々の多いことと、お由羅を軽蔑した眼で見る人の多いこと、それから、何よりも第一に、自分を隠居させて、斉彬を立てようとしている人間の多いことであった。そして、その国へ戻って間のない時に、江戸邸から、幕府は、何うしても斉彬を当主にして、対外問題に当らせようとしていると、知らせて来たのであった。

「斉彬に、譲りたい。わしは、楽隠居をしたい。うるさいことをしたくないが、時と場合による」

斉興は、独り言のように呟いた。

「ま、何うして、こんなに、御老中方は、斉彬様に、家督を譲らせようと、致しますのやら――又、舶来舶来と、重豪公の真似をして、折角のお金を無くなすことは、眼に見えておりますもの」

「いや、それは、何れは、斉彬の世になるのじゃから、無くなるなら、いつかは無くなるが、西丸留守居の筒井肥前め、早く隠居を致せといわんばかりに、茶壺と、十徳を、二度まで、出しおった。当家は、世子が、二十歳になれば、家を譲るのは、代々の慣わしになっているが、慣わしは、時世と共に、変って行くものじゃ。わしは、わしの家憲で、やって行く」

斉興は、こういって、茶を飲んでから

「それに――」

と、お由羅を、険しい眼で凝視めた。お由羅は、同情するように、よく判ります、というように、眉をひそめて、頷いた。

「それに、宇和島、福岡の親族共が、わしの隠居に同意しおって、内密で、幕府へ策動しているが、何んちゅう輩じゃ」

「本当に」

と、いった時、次の間の襖の外から

「島津石見様、火急の御用にて、拝謁、願い出られましてござりまする」

と、近習がいった。

「又か――火急の用とは、何んじゃ――よい。通せ」

斉興は、不機嫌に、こういって、火鉢の上へ丸くかがみこんでしまった。

「何んじゃ、火急の用とは？」

斉興は、緋羅紗（ひらしゃ）のかかった、朱塗の脇息へ凭れて、堆朱の手焙へ、手をかざしていた。床の間には、銀製の、西洋人形の立っている置時計があったし、掛軸は、重豪公の横文字の茶掛けであった。

お由羅は、緋羅紗の褥（しとね）の上へ坐っていたし、その側の、硝子（ガラス）の鏡、モザイックの手函、硝子の瓶――そうした調度類は、悉く舶来品であった。

「はい」

島津石見は、それだけ答えて、静かに腕組をした。お由羅は、江戸からの手紙を巻き納めて、斉興の方へ押しやった。
「用事は？」
「例の――秋水一揮党の輩が、赤山靱負殿を大将として、何か、よりより寄っては、密議を致しておりましたが、殿が、御帰国遊ばされて以来（このかた）、急に、会合が劇しくなりまして、何か企んでおります模様でござりますで、手をつくして、調べましたところ――」
石見は、俯向いて、暫く、言葉を切ってから、斉興を、じっと見て
「久しい前から、二三、家中の徒輩が、唱えよりました、殿の御隠居――御家督を、斉彬様へ譲らせ申そうという企て――」
「それは、江戸表に於ても、わしが、帰国と一緒に、策動しておる。今、その旨をかいて、江戸から書状が参ったところじゃ。見てみい。何も、わしが、十五歳で家を継いだからとて、斉彬が四十になれば、何うしても家を譲らねばならんという法があるか。石見」
斉興は、手を延して、手紙を受取ろうとした。お由羅が、素早くとって、石見の方へ
「御覧なされませ」
と、押しやった。石見は、膝を進め、身体を延して、手紙を手にとった。そして、裏を返して
「二階堂から――」
と、頷いた。
「阿部が、一もなく、二もなく、斉彬を引出して、異国方の掛にしようと致しておる。それを頼みとして、家中の斉彬派の若造共が、いろいろうごめいておるらしいが――」
石見は、手紙を読みながら
「はい、はい」
と、斉興に返事をして、頷いていた。
「異国との交易を禁じておる幕府が、異国と、交通を始めるなど、いろいろと、浮説の多い時分に、幕府己の威信を、傷つけるものではないか」
と、斉興が、いい終った時、石見は、手紙を巻きながら
「仰せの通り――それから、秋水党の徒輩、もし、殿の御隠退が、のびのびと相成るようなら、何か、過激の手立にて、斉彬様を擁立し――彼奴らの、言葉を借りまするとと、君側の奸を除く、と申しますが――」
「ま、そんなことを、申しておりますか」
と、お由羅が、云った。石見は、お由羅へ笑いながら
「さしずめ、お部屋は、玉藻前（たまものまえ）と申すところでござるな」
「よし。もそっと、調べてみい。一指でも動かしたなら、その分には捨ておかぬから」
「それで、その、秋水党なる者の面々は――」
「それは、わしも、承知致しておる」
「如何して、御承知で、ござりまするか」
「調所の倅が、そいつらの連名を書いて、大阪で、知らせてくれた。山一、高崎、近藤などであろう」
「はい」
「不敵な奴等め。わしを、何んと心得ておるか」
斉興は、もう、米噛をふくらませていた。

「考えの足りない方達でございますね」
と、お由羅が、静かに云った。
何んの物音も聞えない、奥まった部屋であった。燭台の灯は、少しも揺れないで、きらきらしていた。その一つの灯の下で、手紙を披(ひろ)げて、読んでいるのは、山田一郎右衛門で、その横で、その前で、腕を組んだり、時々蝋燭の心を切ったり、手紙を覗き込んだり、俯向いたり、眼を閉じて聞き入ったりしている人々は、赤山靱負、高崎五郎右衛門、井上出雲守、吉井七之丞、近藤隆左衛門の人々であった。
一、笑（調所笑左衛門のこと）吐血の事、方円寺にては無之御座候。全く、胃血之よしに御座候。最早死去の事と相成り可申と存候。一、Joera（お由羅のこと）云々、又井上（出雲守のこと）云々、是又致承知候。此度、三人の切地(きれじ)、さや形ちりめん六尺遣申候。一、二、三。印付け可遣候、折角内密之取計い専一に存申候
井上出雲守が頷いて
「祈祷に用いる、肌付の品々、確かに入手した」
「次に――
一つ、先比(さきごろ)遣候修法は、当正月元日よりはじめ申候、不動尊も大慶に存候、両尊共に修法いたし候――
公も、われわれの申分を聞入れて下された。修法は、迷信じゃと、なかなか、お用いにならなんだが――」
と、山田が、微笑した。そして、猶(なお)、斉彬公からの手紙（この手紙は、村野伝之丞の息村野山人が、秘蔵されています）を、読んで行った。
一、二（二階堂志津馬のこと）も、去冬より今迄に、金子等も余程つかいこみ、帳面を、仲（仲吉利のこと）へ次渡候事出来兼候よし、其外追々筆紙に難述(のべがたき)様子。しかし、表は、先ず、よろしく相成り候え共、奥の処、甚だ心配に而御座候間、姦女（お由羅のこと）退散之儀、折角工夫、専一に頼入申候
「そうじゃ」
と、高崎が、叫んだ。人々は、一斉に顔を上げた。
「公も、もう、お判りになったであろう。奥向より、表のことへ喙(くちばし)を入れるは愚か、呪殺まで試みた女を、今日まで生かしておいたのは不思議じゃ。公が、ここまで、お判りなら、論は無い。由羅を斬って、我々が腹をすればよい」
高崎は、顔を赤くして、大声でいった。
「それもよいが」
と、赤山が、口を出した。人々は、黙っていた。赤山は、役は、物頭にすぎなかったが、日置郡、日置郷、八千七百五十四石の一所持の格式者で、城代家老、島津和泉久風の二男であった。
「それもよいが、この春には、福岡（黒田美濃守）も、八戸（南部遠江守）も、中津（奥平大膳太夫）も、宇和島（伊達宗城）と一緒に江戸へ出て、斉興公の隠居を願い出るし、閣老も、肚は、そうときまっているのじゃから、いよいよ斉彬、御家督になってから、一挙にして、奸物共を、殺滅してもおそうは無い。篤之助も、無事に育つようであるし、吾々の企ても、薄々存じているからには、もう此上、そう易々と、不

逞の振舞も、しにくかろう。春と申しても、つい、半月か、一月の間じゃで――」
「御尤もでござりまする――それでもう少しにて、終ります故――
一つ、将（将曹）之、調（調所）より勘弁之よし、尤に候、近（近藤隆左衛門）等の如く悪み候而は不宜（よろしからず）
――
と、まで、読んできた時、襖のところの鈴が、からからと鳴った。吉井が、手を叩いた。
「誰か、参ったかの」
赤山が、襖の方へ、振向くと、襖も開けないで、誰かが
「篤之助様が、又、お亡くなりになりましたぞ。只今、江戸表より、野村喜八郎様、到着なされました」
と、叫んだ。
「亡くなったっ」
井上出雲守が、真赤になって、半分立上りかけて、又坐った。
「入っても宜しゅうございましょうか。野村氏も、一緒に――」
と、襖の外の若侍が、いった。
「よい」
靱負が答えた。襖が開くと、旅姿のままで、畳敷の廊下の、暗いところへ、野村が、平伏していた。若侍は、人々に、一礼して去ってしまった。
「これへ参れ。真実かっ」
「はっ」
野村は、お叩頭をしてから、膝で歩いて、敷居を入ったところへ坐ると、襖をしめた。そして
「見苦しい姿にて、御無礼仕りまする」
と、人々へ、平伏した。
「呪殺か」
「はっ、そのように、心得まする」
野村は、手をついたままであった。人々は、暫く、沈黙していた。
「赤山殿」
近藤が、呼びかけて、眼が合うと
「春まで、待てませぬな」
「うむ」
「明日にも、手筈通り、取りかかりますか」
人々も、赤山も、頷いた。そして、又、暫く、一座は、黙って考え込んでいた。
「牧は、討てぬか、未だ」
「仙波の倅が、しきりに探しおりますが」
「倅の外に、誰が、討取りに――」
「益満など、とんと、冷淡になりましたとの噂でござりまする」
「益休（ますきゅう）が？」
「玄白斎の弟子など、何を致しているのか、牧一人ぐらいを討つに――」
「行方が判りませぬとのことにて――」
「江戸の奴等は、腑甲斐がない。奸党討伐は、吾々にて致そ

う」
と、高崎がいった。
「将曹、平、仲等が、殿と共に、帰国中を幸い、お由羅と共に、一挙に討取ろう。そして、久光公へは、誰かが参って、事の次第を、よく申し上げた上にて、お首(しるし)を頂戴しよう。もう、一時たりとも、猶予ならん」
「そうじゃ、奸者共も、薄々と、吾等の企てを存じておる上は、何をしでかすか計られんから、手筈通りに、豊後の邸は、大砲にて、打っ払い、将曹の邸は、取巻いて、鏖殺(おうさつ)してくれよう。高木市助が、参っておろうが、此奴に、すぐ、大砲の引出し方を命じて、肱岡に、吉井、土持、山内等が将曹へかかる」
高崎は、静かに、だが、決心と憤慨とに充ちた口調で、こういった。
「それでは、至急に、若者達を集めて、手筈の次第を申し聞かそう」
山田が、立上った。
「夜更けゆえ、提灯などつけては、目立っていかん。それを心得て、忍び忍びに、集まって参るよう、申しつけてもらいたい。こちらから参る者も、十分に、気をつけて、察しられぬよう廻るように――」
赤山が、山田へ、注意した。
「十分に――」
と、山田が頷いて、出て行った。
「何んという無残なことを致す輩か」
井上出雲守は、腕組をして、俯向いたまま、呟いた。
「師を呪殺し、主君を呪殺して――」
暫く、誰も、物をいわなかった。赤山が
「野村、疲れておろう。退って、休憩するがよいぞ」
「はっ、お差支えなければ、御役に立てて頂きとう存じまするが」
と、野村は、じっと、赤山を見た。
近藤隆左衛門の邸の、質素な――だが、頑丈な門を出た、和田仁十郎と、高木市助との二人は、足早に、急ぎながら
「こう早う、きまろうとは思わなんだ。先ずもって、目出度かりける次第なり、じゃ」
「うむ」
「大砲庫の鍵は、誰が、あずかっておる」
「郷田じゃ」
「お為派か？」
「うむ」
「弾薬庫は？」
「それを考えておるが――」
「お由羅派か？」
「寺本じゃが、あいつの心底が判らんで――郷田も、この間、話しておったが、何うも、企てを聞かしてええか、悪いか――もし、二人で行って、鍵を渡さぬか、とやこう申せば、打った斬るの外に無いが――上手に、欺したら――」
「斬れ、斬れ」
「うむ。なまじ、不愍(ふびん)をかけて、欺し損じでもすると、面倒じゃで。そうも考えるが、あいつは、子供が多いでのう。倅

も女房もよく知っているから、不愍がかかって」
と、云った時、和田が、急に立止まると、後方を振向いた。そして、じっと、闇の中をすかしながら、小声で
「足音がせなんだか？」
と、高木に云った。
「足音？」
高木は、こういって静かに、もと来た方へ歩き出した。風が歩むように、影が歩むように、静かに身構えることのできる鼠のように、その脚は、獲物へ近づく猫のように――音もなく、声もなく、二三間、引返した。
和田は、往来の真中に立ったまま、じっと高木の方を凝視めていた。
「うぬっ」
高木の、呻くような、低い、絶叫が聞えると、大地に足音が、けたたましく響いたし、袴の音が、草履の音が――それから、闇と、融け合いながらも、黒く閃く影があって、高木の手から、逃れたらしく、魔のような早さで、閃いて、消えた。
「高木っ」
和田は、刀を押えて、走り出した。
「高木っ」
「おおっ」
高木の声は、遥かのところから答えた。何者かを追っかけているらしく、二つの足音が、夜更けの、侍町の大地を、微かに、だが、あわただしく、響かせていた。両側の家の中から、犬が吠え出した。二三疋は、和田にも吠えついてきた。
（細作（しのび）かしら？――今の話が聞えたであろうか？　もし、聞えたとすれば一党の破滅になる――いいや、聞えても、そこまで判るまい。いいや、聞えはすまい。何んぼう、静かでも、あのくらいでの話が聞えるものなら、その前に、わしの耳に、つけて来ている足音が入る筈だ）
和田は、そうしたことを、頭の中へ、ちらちらさせながら、走った。
「高木っ、大丈夫か？」
「うむ」
と、答えた時の高木の声は、少し離れていたが、すぐ
「逃した」
と、云った声は、和田の前すぐのところから聞えて、闇の中に、高木の黒い影が立っていた。
同じ邸の、裏木戸からも、二人ずつ、三人ずつ、外の様子を透かして見ては、右へ、左へ、時々に出て行った。
「暑い」
甲突（こうとつ）川に沿う道を、それらの中の二人が、小走りに走っていた。二人とも、兵児帯に、裾短い、着流しで、草履ばきであった。
「急ぐと暑くなるもんじゃ」
「少し、歩こうか」
「では、俺だけ、走る」
二人は、喘ぎながら、急いでいたが、一人が、走るのを止めて
「誰か、来よる」

と、呟いた。二人の行く先に、提灯の火が見えていた。道は、一筋だけであった。
「灯が、動かん」
大久保は、こういって
（もしかしたなら、お由羅派の細作共ではないかしら）
と、思ったが、西郷吉之助は、返事もしないで、前方を急いでいた。大久保は、すぐ、走って追いついた。
「和田の家の前じゃ」
大久保は、こういって
「廻り道をしようか」
「俺はせん。何が怖い？」
灯は、横目付、和田八之進の邸の前で、八之進は、由羅派の人であった。その灯の中に、二人の人影が、動いていた。そして、二人の足音が近づくと、提灯が上ったし、二人の侍が、こっちを、じっと眺めていた。
「見張じゃ、西郷」
「うん」
と、いった時、邸の軒下に、まだ人がいたらしく、道の真中へ、三人の影が立って
「止まれ」
と、叫んだ。そして、三人の方から、近づいて来た。
「面倒らしいぞ」
大久保が、こういった時、提灯の灯で、二人を照らしながら
「何処へ行く」
と、咎めた。大久保が
「貴公達何んじゃ」
「何？」
「夜、歩くと咎めるという布令は、いつ頃から出た」
「何を申す。軽輩の分際で、布令が無くとも、役の表によって調べる。姓名を申せ」
「役の表？――何役じゃ。誰じゃ？」
「名乗らぬか」
一人が、正面から、大久保を睨みつけた。提灯を持った小者が、西郷が、側で笑っているのを見て
「姓名は？」
と、聞いた。
「ははははは」
大久保を睨んでいた侍が、その笑い声を聞いて、西郷を、ちらっと、睨んだが
「何が可笑しい」
「あははははは」
侍は、大久保に
「名乗らんか」
「その邸は、横目付和田殿の邸でござろう」
「そうじゃ」
「和田殿に、横目付が、いつから、奉行の下職を請合いなされたかと、聞いて参れ。その返事によって名乗ろう。役目の表などと、貴公、奉行所の者か？」
「何？」
「役目が相違しておろう。それとも、企むところがあっての、偽りか？　まず、貴公の姓名を聞こう。その上にて、不審が

あれば、奉行所へ同道致そう」
侍は、黙った。
「一蔵、もうええ」
と、西郷がいった。そして
「女郎買いの戻りじゃで、内分に、内分に」
と、いって、歩き出した。侍は、二人を、睨みつけたまま、じっと、立っていた。

祇園橋を渡って、磯浜の方へ――右手は低い土堤(どて)であった。その土堤続きの柵の中に、大砲と、弾薬とがあった。高木と、和田とは、その土堤に沿うて、歩いていた。和田が
「油断は、ならんぞ」
「うむ。然し、もし、洩れてでも居たなら、郷田から、今朝の内に、何んとか知らして来る筈だ」
二人は、暮れかかろうとする、淋しい道を、急いでいた。雲は、落陽(ゆうひ)で、上を真赤に、下を、どす黒く、不気味に、染めていた。桜島は、すっかり暮れたらしく、暗い色をしていた。
土堤沿いに行って、角を曲ると、すぐ松の木の間に、黒い門と、黒い柵とが、見えた。そこが、入口であった。二人が、門の右手の、くぐり戸を押すと
「誰だ」
と、中から咎めた。和田が、一足引いて、柵の間から、顔を見たが、知らぬ士であった。高木は、押しても開かないくぐりを、叩いて
「郷田はおるか？」
「ああ、今、開ける」
鍵の音がして、内部から、くぐりが開いた。二人が頭を低くして入ると、側の小屋の中にも、見慣れない士が三人土間にいて、二人が入って来ると、急に話をやめた。
「何処にいる？」
「案内仕ります」
二人の士が、先にたった。轍(わだち)の跡が入り乱れている道であった。その小さい原を横切って行く行手に、もう一つ木柵が引廻されていて、その中に、詰所と、白い庫(くら)とが、並んでいた。
「暫く――」
と、云って、案内の士が、先へ走って行った。二人は、ゆるゆる歩きながら
「ああいう下々の奴はいいかしら。郷田一人が呑込んでおっても、一人では、大砲は運べまいし――」
「それは、郷田の指図一つで、何うにでもなろう」
と、云った時、木柵のところから
「こちらへ」
と、叫んで、一人の士が、手招きした。二人は、急いで近づいた。粗末な、黒い板の、扉のところに、二三人の士が立っていた。柵の中には、提灯の灯が、うろうろしていた。
和田が、人々へ、軽く、頭を下げて、その門のくぐりへ頭を入れると同時に
「何するっ」
と、叫んだ。そして、右手で、柱を掴んで、身体を引こうとしたが、二三本の手が、和田の肩へ、帯へかかった。和田

は
「高木、逃げろ」
と、叫びつつ、中へ、引き摺り込まれて行った。和田が
「何をするっ」
と、叫んだ、瞬間、門の前に立って、じっと二人を眺めていた三人の士が、高木の首へ、手へ、飛びかかった。
「何をっ」
高木は、真赤な顔になって
(露見したな)
と、思いながら、一人の士の胸を、左手の肱で、突き上げざま、前の一人へ、頭突をくれて、後方から組もうとするのを、素早く、身体を、ちぢめて、右手へ抜けた。そして
「和田っ」
と、叫んだ。それは、丁度、和田が
「高木、逃げろ」
と、叫んだのと、同時であった。
「手向いするかっ」
一人が、腕捲りした。一人は、柄へ手をかけた。三人とも、高木の腕に、一寸、恐れながら、それでも、隙を窺っていた。
和田は、頭の毛を掴まれた。その掴んでいる手を、掴み返しながら
「これが――」
と、云った時、一人の手が、自分の腰から、刀を抜き取ろうとしているのを、腰に、感じた。和田は、柱を掴んでいた手を放して、刀を握りながら
「士を召捕る作法かっ」
と、叫んだ時、五六人もの手が、肩へ、襟へ、腰へ集まって来て、門の中へ、引き摺り込んでしまった。
「高木、逃げろっ」
「黙れっ」
びしっと、頬に音立てて、熱さを感じた。
「無礼者」
和田は、激怒に、狂人の如く、昂奮して、動かない両手を、力任せに振ろうとした。その手へ、腰へ、細引がかかったらしく、肌が、肉が、きりっと、痛んだ。そして、身体が、軽くなったと、感じた時には、両手が動かなくなっていた。肩からも、胴にも、縄がかかっていた。
「不届者が」
一人の士が、正面から、和田を睨みつけていた。和田が、睨み返すと
「斬るな。手取りに致せっ」
と、叫んで、その士は、門の方へ、走って行った。和田は、人々に、囲まれたまま、襟を乱して、肩の骨を、乳の上までを、現しながら、突立っていた。
門から、少し遠いところに、懸声と、足音とが、響いていた。和田が、振向くと、もう暗くて、提灯の灯しか、見えなかった。
「和田っ」
と、高木が、叫んだ。
「おーいっ」
「無事か」

と、絶叫した。和田が
「やられた」
と、叫ぼうとすると、一人が、口を押えた。そして
「黙れっ、喋ってはならん」
と、云いつつ、両腕を掴んで、奥の方へ引立てた。和田は、烈しく、顔を振って
「やられた」
と、指の間から、叫んだが、もう、その声は、高木に聞えぬらしく、遥かに、遠いところで、いろんな叫びが、ごっちゃになって、乱れていた。
「郷田は、居ないのか」
和田は、細引の結び目を、指先で、調べながら聞いた。だが、誰も返事をしなかった。門の外から
「おーい、誰か、二三人来い。早く、早くっ」
と、叫んだ。
「大丈夫か」
「大丈夫だ。わしと、時田とが、見張っておるから」
と、いうと同時に、二三人が、走って行ってしまった。
(高木は、暴れているな、暴れても――無益だのに――)
と、和田は思った。何っか、引掻かれたのか、撲たれたのか、身体中ひりひりしたり、鈍く痛んだりしてきた。
(昨夜、二人をつけて来た奴が、矢張り、話を聞いたのだろう――捕えられたのは、二人だけか、悉く、露見したのか?)
和田は、悲しさも、憤りも、何もなく、静かに
(外の人は、無事であってくれ。高木も)
と、心の中で、祈った。刀を抜いているらしく、烈しい、気合が、聞えて来た。
「待てっ。待てと、申すに」
高木は、じりじり退きつつ、叫んだ。手は刀にかかっていた。三人の対手は、黙って、隙をうかがっていた。
「誰の指図で、何ゆえに召捕るのか? 拙者に、罪があれば、何ゆえ、評定所より――」
「黙れっ、黙れっ」
「何? ――訳を明かさずして、盗賊と同じように召捕るからには、捨ておかんぞ。訳を申せ、訳を――訳さえ判らば、召捕らしてもやろう。申せ。申さぬかっ」
高木の、後方から、走って来る二三人の足音がした。
(門番所の奴だな)
と、感じると、共に
(後方から、かかられてはいけない)
と、思った。高木は
「いわぬかっ」
と、絶叫すると同時に
「ええいっ」
刀が光った。人々が、さっと、退いた瞬間、左手へ走り出した。
「此奴っ」
と、一人が、叫んだ。門から、走って来た三人が
「抜いているか」
と、走りながら叫んで、提灯を、高木の方へ突き出した。
「おおっ」

「高木、手向い致すか、卑怯者っ。申訳あれば、目付の前で申せっ」
高木の後方から、走りつつ、一人が、叫んだ。高木は、木柵の前まで来ると、向き直って、刀を構えた。
「神妙にせんか」
「何故、士を捕えるに、士の扱いをせん。欺し討をして、どっちが、卑怯だっ。一応の筋道さえ申さず、不意討をして――たわけっ、薩摩隼人は、死んでも、盗賊に等しい縄目にかかると思うか。さ、来いっ、かかって来いっ」
六人の内、三人は、棒を持っていた。
「かかって来い。うぬら、奸者共の指図を受けて、吾々、正義の士の――」
「何っ、何が、正義だっ。どっちが奸者だ。家を乱そうと、企んで、何が、何が、正義だっ」
六人の背後に、足音がして、提灯を持った士が近づいた。そして
「抜いたか」
と、聞いた。
「はい」
「高木」
その士は、提灯を、高木の方へ突き出した。そして
「四ツ本じゃ。和田が、捕えられたのを見棄てて、一人、逃げる所存か」
睨みながら、唇へ、微笑を浮べていた。
「逃げる？」
高木の眼が、きらっと、閃くと
「この、ど狐がっ」
「危いっ」
「おのれっ」
高木と、四ツ本との間へ、怒声と、棒とが入り乱れて飛んだ。四ツ本は、素早く退いて
「加勢を呼べっ」
と、叫んだ。一人が、走って行った。高木は、刀を提げたまま、じっと、立っていたが、四ツ本が、人々の背後へ入って、陰険な眼で、睨んでいるのを見ると
「出ろっ、四ツ本、卑怯者っ」
と、叫んで、刀を振りかざすが早いか、飛びかかった。
「ええいっ、えいっ」
棒が、肩へ、股へ飛んだ。
「それでも、武士かっ」
高木は、暗い中へ逃げ去った四ツ本の後姿へ、こう叫ぶと、力任せに、刀を投げつけた。そして、素早く、脇差も投げ出すと
「和田は、何処にいる」
と、聞いた。
「神妙にしろ」
「同じ家中だ。貴公等を斬ったとて、褒められはせん。和田のところへ、連れて参れ」
と、云って、突っ立っていた。
「不届者がっ」
斉興は、唇を、びくびくさせて、斉彬派の人々の姓名を、

読んでいた。
「何れも、重い役目で、一藩に、範を垂るべき人間でないか」
「はい」
伊集院平は、膝へ両手を置いて
「それで、誰々を、如何ように、処分仕りましょうか――」
と、斉興を見た。
「処分か？」
斉興は、書面から、眼を放して
「将曹の邸へ、斬込もうとした奴は、誰と、誰とじゃ」
「それは――国分猪十郎、土持岱助らでござります。拙者の邸へは山内作二郎、松元一左衛門。それから、仲吉利の許へは、吉井七之丞、肱岡五郎太、村田平内左衛門等でござります」
「大砲を持出して、豊後の屋敷を撃とうとしたのは？」
「高木市助に、和田仁十郎」
「それを、指図しておるのが、山一に、近藤、高崎か」
「はい」
「そちに任せる。それぞれの罪によって、重くば切腹、軽くて、遠島――」
「はっ」
「然し――」
斉興は、眼鏡を外して、袖で拭きつつ
「赤山など濫(みだ)りに重罪にしては――家中の者が動揺して、軽輩共が、又、二の舞を起してはならんから――蟄居(ちっきょ)か、謹慎ぐらいにして――」
「はっ」
斉興は、暫く、考えていたが
「いや、他国へ聞えても面白うない。こっそり、切腹でもさせてしまえ。ここも、江戸表も、ずい分、根深いのじゃから、十分注意をして、手早く、片づけんと、事が面倒になる」
「それで、いろいろと、苦心しておりますが――」
「それから、調所の倅は、如何した？」
「さあ、和田と、高木の大砲盗み出しのことを、密告して来て以来、とんと参りませんが――」
「あいつ、大阪を逐電(ちくてん)したが、今度参ったなら、元々へ戻るよう、よく申し聞かせておいてやれ。よく働く――親爺に似て、なかなかの才物じゃ」
「はっ――それでは、万事、お任せ下されますか」
「うむ」
「では、早速に――」
平は、こう云って、腰を上げたが
「横目付は、和田と、四ツ本に致しまして、大目付は――」
平は、首を傾けて
「川上――これなら、藩中で、公平の噂の高い男ゆえ――」
「川上か。よかろう、他国へ聞かれても、偏頗(へんぱ)の沙汰があっては、悪い。川上はよい」
「裁許掛は、川北孫左衛門ということに、致します」
「よし、任しておく」
「はっ。では、これにて」
「御苦労」
平が、一礼して立上ると
「ついでに、由羅へ、もう、用は済んだと、申しておいてく

れんか」
「かしこまりました」
「うるさい世の中じゃの。わしも、早う、隠居したいわい。今に、わしの首まで覘(ねら)う奴が出るかも知れんて――」
平は、立ったまま聞き終って、障子を開けて、出た。
「由羅へ、申してくれ」
と、斉興は、もう一度云った。そして、欠伸(あくび)をして、老眼に、涙をためていた。それから、紙を出して、力無さそうに、鼻汁をかんだ。

廊下へ、出迎えている士に
「川北は、参ったか」
と、平が聞いた。
「只今、お上りなされました」
平は、黙って、士の開けた襖の中へ入って行った。そこにも、一人の士が、坐っていた。そして、次の間への襖を開けた。二十畳の部屋に、行燈が一つあるだけで、天井も、床の間も、薄暗かった。その、広い部屋の、敷居のところ、隅のところに、裁許掛、川北孫左衛門が、坐っていた。膝の前に、座蒲団と、茶とが、置いてあった。
「遅いのに、呼立てた」
と、云って、平は、褥へ坐ると
「はっ」
侍女が二人、燭台を二つ、運んで来た。
「大事が、起ってのう。もそっと――ずっと、こっちへ、内々に話をしたいから――」
と、云って、侍女に
「それを、ここへ」
と、蒲団を指した。
「予て――」
平は、こう一言云って、手焙(てあぶり)の火を、いじりながら
「早く行け」
と、女に云った。
「家中に、紛擾(ふんじょう)が起きている」
川北が、頷いた。
「それが、不届と申そうか、言語道断な振舞を致しおって、将曹の邸へ、斬込むの、豊後の邸を、大砲で、ぶっ払うのと、この上もない、上を軽んじたる致し方で、老公も、大の御立腹じゃ。それで、只今、御相談申し上げて、その首謀者の処分を、伺って来たが」
平は、懐中から紙を出して、披げた。そして
「こういう顔触れじゃ」
と、川北の前へ、差出した。川北は
「はあ」
と、云って、暫く見ていたが
「成る程、御立派な方々で、ござりますな」
「それで、こういう、家中の乱れを、余り世上へ知らしたくないし、何を又、企むかもしれんで、早く処分をしたい」
「はい」
「うむ、近藤、山田、高崎、土持――」
と、平は、書面を覗き込みながら
「村田、国分と、この六人は、切腹じゃ。それから、吉井、

松元、山内、肱岡、これが蟄居。赤山殿、中村、野村、村野、木村、これが謹慎――」
「お尋ね申しますが、誰方が、お調べになりまして、左様の、処分に、お決めなされましたか？」
「調べる？――それは」
平は、一寸、言葉を濁したが
「和田と、四ツ本とで、調べた」
「和田氏と、四ツ本氏と――」
川北は、首を傾けてから、じっと平を凝視めて
「手前の、役表、裁許掛は――」
「一応、その方へも計り、又、その方も取調べるのが、順序ではあるが、何分にも、火急を要することゆえ、このまま、この人々へ、処分方を伝達してもらいたい」
「ははあ――川上矢五太夫氏は、御承知にござりますか」
「今、これへ参るであろう」
「近頃、当家は、奥と、表とが、混同して参りました。表より、奥を指図するのは、とにかく、奥より、藩政へまで、喙（くちばし）を出す方が出来て――」
「そういうことは、後で聞く」
と、いった時
「川上様、お上り」
と、次の間からいった。
「参った」
平は、こういって、手を叩いた。襖が、開いた。
川上矢五太夫は、伊集院平が、もう一度、繰返した説明を、聞き終ると
「孫左」
と、川北を、振向いた。そして
「これは、慣習に反く、違例であろう」
と、云った。
「かようの伝令は、今までに聞きませぬ」
「うむ」
川上は、頷いて、平へ向き直った。
「御存じの如く、罪の有無は、裁許掛が、これを、検察、糺弾致しまする。而して、その罪状を、老職に申し上げ、御老職より、君公の決裁を受け――」
「それくらいのことは、存じておる」
「それに、何故、役目ちがいの、目付が、取調べましたか」
「火急のことじゃから――」
「火急ゆえ、こうして、川北も参っておりますが――」
「お上の、御決裁は仰いである。嘘と申すなら、御前へ出て聞くがよい」
「いいや、嘘、欺（いつわ）りとは、申しませぬ。ただ、違法であると、申すのみでござります」
「お上が、御決裁済みなら、よいではないか」
「お上が、法を乱して、よい、という訳がござりますか？法は、仮令（たとい）、老公たりとも、将軍たりとも、乱すことは出来ませぬ。重い方こそ、なるべく、法の表に従うようになさるのが、順でござりますが、上よりこれを乱して、何んとして、下を取締りますか」
川上は、左肩を聳（そびや）かして、右手を、膝の上へ握り拳にして

突き立てた。
「議論を、吹っかけるのか」
「左様、御心得が、無さすぎると考えまする。第一に、この、書状の人々は、藩中に於ても、屈指の人物であり、人望もあれば、人品もよく、訳もないに、不敵の振舞などなさる方ではござりませぬ。その方々を、一応の取調べもなされずに、即日、切腹などと――それで、何んのための大目付、何んのための、裁許掛でござりますか？」
川上は、顔を赤くして、平を、じっと、睨みつけた。
「宮中、府中の別がなくなることは、古(いにしえ)より、その家の滅亡の基とされております」
川北が、静かにいった。
「それが、お由羅様、お入り以来、次第に乱れ勝ちにて、そのため、家中が二派に分れるようなこととなり、ひいて、此度の大事。その上に、厳然たるべき法を乱すなど――」
「川北は、上のお指図へ反く所存か」
平が、大きい声を出した。
「法は、曲げられませぬ」
「何？」
「上が、法をお曲げになれば、何故、平様が、御諫言なされませぬ。上がお曲げになったまま、下へ強請して、それで、殿の補佐する御家老と申せましょうか」
平の顔は、みるみる赤くなった。川北を、じっと、暫く、睨みつけていたが
「よし。頼まぬ」
と、低く叫んだ。
「裁許掛は、一人ではない」
「左様、腸(はらわた)の腐ったのも居りましょう」
「退れっ」
平は、怒鳴った。川北が
「平殿」
と、怒鳴った。平は、川北を、睨みつけて、立上った。
「かような無法の例を残して――」
と、云いかけると、平は、急ぎ足に、襖外へ出た。そして、侍に
「退げろ」
と、云った。二人は、じっと、平の出て行った後方を、睨んでいた。

川上矢五太夫は、門から、走って入るように、急ぎ足で、玄関へ上ると
「誰か――誰か居るか」
と、怒鳴った。
「はいっ、はいっ」
周章(あわ)てて、それに答える声が、納戸からも、玄関脇の部屋からも、起った。矢五太夫が、廊下へ、荒い足音を立てて、自分の部屋の方へ行く、後方から、若党が、女中が――そして、行手の部屋から、女房と、その後方に、七瀬とが、出て来て
「何か？」
と、不安そうな表情をして、出迎えた。
「手分けをして、急ぎの使に、行ってくれ」

こう云いながら、自分の部屋へ入って、廊下の敷居際に、うずくまっている若党に、部屋へ入って来て、刀を受取ろうと、手を差出している女房に
「お前は、近藤隆左衛門殿のお邸へ参って、只今、容易ならぬ使者が、殿より立ちますから、御覚悟なされますようと、申して参れ。何ういう使者だ、と聞かれたなら、内密の用につき、心利いた者を、至急、およこし下されますよう――火急の用にて、諸方へお知らせしておりますゆえ、手不足の当方より、一々、その旨を話す者を、差上げられませぬから、と――」
こう云って、若党に
「そちは、山一殿のところへ参り、善助を、高崎殿のところへ、やってくれ、口上を、間違えるな。もし、失念致したなら、お命にかかわることゆえ、と申せ――それから、七瀬」
七瀬は、胸を騒がしながら、坐っていたが
「はい」
と、見上げると
「御足労だが、国分猪十郎の許へ参って、右の口上、申し伝えて来てくれんか」
矢五太夫は、人々に、こういいながら、机の前へ坐って、急いで、墨を磨(す)り出していた。女房が
「このままで――よろしゅうございましょうか」
と、自分の着物を見ると
「命にかかわることじゃ。走って行け。万作も急げっ」
口早にいって、料紙へ、何か認(したた)めながら、三人が
「では、行って参ります」
手をつくと
「それから――出口の、新納(にいろ)殿のところへ、飛脚を出したいから、一人、急いで、寄越すようにと、問屋場へ、立寄って、註文して参れ、急ぐぞ」
三人は、命にかかわる、との言葉と、常の様子でない、矢五太夫の態度とに、何か、大事が起ったとは察しられたが、それが、何か判らぬので、不安を感じながら、廊下へ出た。
七瀬が、小声で、口早に
「お由羅派の――何か――」
と、聞くと、矢五太夫は、筆をとめて
「正義派が、総崩れになりそうじゃ」
と、七瀬を、睨みつけるようにして、いって、すぐ、筆を走らせた。
「はっ」
七瀬は、そう、溜息とも、言葉とも、つかないものを、吐き出して、すぐ、二人の後方から、廊下を小走りに、走って行った。
（夫の斬死も、無駄になったし――その上に、大殿様の、お指図らしいが――）
と、思うと、頭の中も、胸の中も、蒼黒い毒煙が、這い廻っているように、苦しくなってきた。内玄関へ出ると、万作が
「何事でございますかな」
と、草履を履きながら、七瀬を見上げた。
「さあ」
と、いったが、七瀬は、逆上(のぼ)せてくるくらいに、何かしら、

腹が立ってきた。神にも、仏にも、思いっきり、その無情をなじりたいような気持であった。万作は、すぐ、走って行った。七瀬は、自分の草履を、叩きつけるように、土間へ、投げ下ろした。

（お国許で、こんな騒ぎが、起っている以上、大阪にも、何か、起っているにちがいない――綱手は、何うしているかしら）

七瀬は、往来の人々が、怪しんで、振向くくらいに、急ぎ足で、歩きながら

（調所様は、よい方であったが、今度の蔵屋敷の方は、何んな人かしら――）

敵党の人だとは知っていたが、調所には、好意がもてた。向うから、馬蹄の音が、聞えて来たので、軒下の方へ、避けながら、馬上の人を眺めると

（見たことのある――）

と、感じた。そして、じっと、凝視めていると、顔が、明瞭としてきた。

（ああっ、四ツ本喜十郎）

七瀬は、一寸、立止まって、馬上の四ツ本を睨みつけた。そして、四ツ本の、すぐ、後方から、同じような栗毛の馬に乗って来る男の顔を見ると

（おお百城様）

二人は、馬を、急がせて、通りすぎようとして、七瀬の眼と合った。四ツ本は、じろっと、眺めたままであった。

（百城様が、四ツ本などと、一緒に――何んのために――）

頼もしい、味方であると信じていた百城が、四ツ本と、一緒なので、七瀬は、不愉快さを感じながら

（何をしに、こんなところに――）

と、思った時、百城が

「七瀬殿」

馬上から叫んで

「四ツ本氏、手前、すぐ、つづきますゆえ」

と、声をかけて、馬上から

「ちと、お話が――」

七瀬は

「後程、ゆっくりと、ちと、取急ぐ御用を達しに参りますゆえ――」

と、歩き出しながら、振向いて、去ろうとした。百城は、手荒く、手綱を引いて、馬の首を、七瀬の方へ向けつつ

「いや――一言」

馬の首を、立直して、小走りに行く七瀬の後方から

「綱手殿が――」

七瀬は、振向いて

「ええ？」

百城は、じっと、七瀬の眼を見つめて、暫く、黙っていたが

「綱手殿のことを、御存じでは？」

「綱手が？」

四ツ本が、遠くで、馬をとめていたが

「牧っ」

と、叫んだ。

「只今」
（牧？）
七瀬は、牧と呼ばれて、何うして、百城が返事をしたのか、判らなかった。
（牧？――もしかしたなら、仲太郎の倅の）
と、思って、不安そうに、百城の眼から、何かを読もうと、見つめていると
「綱手は――」
七瀬は、百城の、いい渋っているのに、腹が立って来た。
「急ぎますゆえ、これにて――」
と、お叩頭をして
「川上矢五太夫様の許におりますから」
と、いいすてて歩きかけると
「綱手殿は、お果てになりましたぞ――」
百城の言葉は、かすれていた。七瀬が、顔色を変えて、振向くと、百城が、赤い顔をして
「許して下され」
と、低く叫んで、馬の首へ、俯向きながら、手綱を引き、足で蹴って、急いで、馬を返しかけた。
「綱手が」
と、七瀬は叫んだ。百城は、俯向いて
「拙者の手にかかって――」
と、いいながら、向き直った馬に角（かく）を入れた。
「綱手は――死にましたか？――百城様」
七瀬は、こう叫んで、二三歩、馬の方へ馳せ寄ったが、馬は、走り出していた。七瀬は、暫く、じっと立っていたが、すぐ、国分の家の方へ走り出した。蒼白な顔になってしまっていた。

川上、川北の二人の、硬直な裁許掛が、伊集院平の命令を聞かなかったので、同じ掛の三原喜之助の手から、処分の伝達が、斉彬派の人々の許へなされた。
お由羅派の人々は、そうした処分が行われると知って、喜んだり、眉をひそめたりしていたが、それでも、万一のことを考えて、邸の周囲を見廻ったり、隣りの斉彬派の人の行動をうかがったりした。そして、じっと、静かに、耳を立て、眼を見張っていた。
だが、斉彬派の人々は、そうしておれなかった。馬が走ったし、提灯が飛んだし、若侍が、若党が、小者が――女まで、険しい眼をし、呼吸をはずませて、走った。
近しい朋輩、親族の人々は、そうした知らせを聞くと共に、馬上で、徒歩で、処分を受けた人々のところへ、駈け集まって来た。そして、門を閉じ、警戒を厳重にして、書院で、凝議した。
「わしは、評定所へ出る。そして、争う。それは――」
近藤隆左衛門は、人々を前にして、いくらか、興奮しながら
「――わしは、命を惜しむからではない。評定所にも、人間らしい、武士らしい者が、未だ、一人や、二人は、残っていると、思うからだ。その者共に、こうした違法の断罪手続きを詰（なじ）り、それから、わしらの心事を、知らせたいのだ。評定所に召出す、ということが、切腹しろ、との、謎であること

くらいは、よく心得ているが、このまま、黙って腹を切りたくはない。いうべきことをいいたい――いっても無駄かもしれぬ、いや、無駄にちがいあるまいが、わしは、最期の間際まで、斉彬公のために、又、お家のために、少しでも、尽したい。できるなら、大殿の前で、舌を抜かれるまで、その御処置――わしへの処置ではないぞ、斉彬公への処置じゃ、その、処置方を諫めて、そして、死にたい」

隆左衛門は、少し、顔を赤くしながら、膝の上へ、手をつき、肱を張って

「そうでないか」

「御尤もと心得ます」

と、一人が、俯向いている一座の人々の中から、顔を上げていった。

「わしには、石田三成が、刑場へ引かれる道で、柿は、痰(たん)の毒だ、といった心懸が、よくわかる。今死罪になる者として、痰の毒でも、ないではないか――と、これは、三成の心を知らぬ者の言じゃ。忠義の者は、最後まで、命を惜しんで、そのあらんかぎりで、忠を尽そうとする。判ってくれるか？」

誰も、口で答えなかった。だが、一斉に頷いた。廊下を轟かして、本田孫右衛門と郷田忠兵衛とが入って来た。人々は二人へ目礼をした。

「覚悟はできておるか？」

郷田は、近藤よりも、齢が上であったし、席も上であった。

「申すまでもないが、今夜は切らん」

「何故、切らん」

「お達し通りに、評定所へ出て、お由羅派の徒輩に、一言云いたい」

「無駄じゃ」

「無駄ではない」

隆左衛門が、眼を険しくした時、本田が

「今、川北に逢って参ったが、話の外の沙汰じゃ。そりゃ、評定所で、争うのも――」

「争うのではない。申し聞かしてやるのじゃ」

「それでもよいが、四ツ本一人を対手にするようなものじゃ。川北も、川上も、この伝達を拒んだがため、評定所へは出ん。獣を対手に、しゃべり立てて見たところで、始まらんではないか、近藤」

「四ツ本一人？」

近藤は、睨みつけるように、本田を見た。

「彼奴を、人間と思うか？　申し残すことがあれば、ここに集まっておる者に申せ」

「そうじゃ」

と、郷田も、頷いた。

「倅までが、遠島か」

高崎五郎右衛門は、左手で、火箸を握って、灰の中へ突き立てながら、女房を見て、静かに云った。幼い左太郎（後の、高崎正風）は、父母や、自分の運命も知らないで、いつものように、あやしてくれぬ二人へ、笑顔を向けたり、手を出したり、足をもがいたりして、催促していた。

「井上出雲守様が――」

と、廊下から、つつましく、取次が云った。
「お通し申せ」
そう云って、涙に濡れている妻の眼を見ると、妻は急いで、眼を拭って
「この子は、何う致しましたら」
夫の眼へ哀憐を乞うように
「田舎へでも――」
と、までは、云ったが
(逃しましょうか)
と、口先まで出ていた言葉は、殺してしまった。だが、五郎右衛門は、それを察していて、言下に
「ならぬ」
と、云った。足音が、あわただしくして、出雲守が、引締った表情をして入って来た。
「意外なことが――」
「今更、何んとも致し方がない。それに就て、貴公に頼んでおきたいことがある」
出雲守は、女の出した座蒲団を敷いて
「微少ながら、何んなりとも、頼まれ申そう」
「事が、事じゃで、このままで、止むべきではない。直ちに、残りの同志を集めて、再挙して頂きたいが――」
「勿論のこと――」
左太郎は、見知らぬ人を見ても、快活に、手を握り、足を踏んで、嬉々としていた。女房は、客の前で、涙を出すまいとしながら、今宵の内に、死ななくてはならぬ夫のことと、遠島に処せられる、幼い子のことを考えて、出すまいとして出て来る涙を、袖で拭っていた。
「座を設けて、支度をしておけ」
五郎右衛門は、その女房に、叱るように己の切腹の座の指図をした。
「はい」
女は、出雲守に礼をして、立って行こうと、左太郎を抱き上げると、ああ、と叫んで、父親の方を向いた。それは、父と、自分との運命を知っていて、別れを惜しむように思えた。
「ああ」
五郎右衛門は、笑顔を子供に向けて、同じように、答えた。子供は、母の手の中から抜け出そうとして、もがきながら、母と一緒に出て行った。五郎右衛門は、暫く、それを見送ってから
「わしは、命は、かねてより、無きものとしておるが、今度の処置は、余りにも、無残すぎる。あれを遠島に処すなど、鬼畜の業ではないか」
「あれとは、奥をか」
「いいや、左太郎を――」
「子供を――」
出雲守は、そう云ったまま、黙ってしまった。
「今度の処置は、これのみではなく、次々に同志の上へ、加わって来るであろう。それを防ぐには――大殿の、君側の奸より出る指図ゆえ、防ぎようはないが、大殿を隠居おさせ申して、斉彬公を世に出すこと、これが第一。それから、福岡の黒田美濃守に、お縋り申すことが第二――」
五郎右衛門は、今宵限りの命の人とも見えぬ落ちつきを以

て、静かに語り出した。
「それから――御老中は、斉彬殿贔屓であるし、閣議に於ても、最早、家督のことは、時日だけのことと決定してもおるし、御老中に、お縋り致すのも、有力な方法であろう。それに、悪逆の徒の、彼の牧仲太郎は、是非とも、討取らねばならぬ。彼の者の、祈祷の効験の有無はとにかく、世子を呪うておる、その一条のみにても、打ち捨てておく訳には行かぬ」
出雲守は、腕を組んで、黙々として、聞いていた。主人の切腹の座を設けている邸の人々は、すすり泣いたり、囁き合ったりしていたが、その悲しい、人を押しつけるような空気が、邸中いっぱいに拡がっていて、二人の耳にも、入って来た。
「もし――有力な同志が出来たなら、最後の手段として、久光殿と、由羅を討つ。或いは、何れか一人を――平、将曹の如き、その罪は憎むべしと雖も、末輩にすぎぬ」
出雲守は、死んで行く人の云うことを、そのままに聞き入れて、快く自裁させようと、何んの、自分の意見も云わないで、頷いていた。
「それから――恐らく、わしらの志は、軽輩が継いでくれよう。見渡したところ、家中に於て、相当の位置におるもので、斉彬公に、お味方しておる者は、僅かであるが、軽輩中の、頼もしい者、伊地知、西郷、大久保、樺山等は、悉く斉彬公に、心服しておる。わしは、この若者の前途を考えると、必ずや、わが党の勝利になると思うて、安心できる。のう、出雲守、そうではないか」
五郎右衛門が、こういい終った時
「出雲守様へ申し上げます」
と、襖の外から、一人が
「ただ今、川上様から、お使が参りまして、お目にかかりたいと――」
「用向きは！」
「是非、直々にと、申されておりますが」
出雲守が
「暫時」
と、いって、立上って、出て行った。
五郎右衛門が
「座は、出来たか」
と、大きい声で聞いた。
「はい」
「銘々（めいめい）、見苦しい振舞をしたり、騒いだり、泣いたりしてはならんぞ。よく、申し伝えておけ」
「かしこまりましてござります」
人気が無くなると、五郎右衛門は、じっと、考え込んだ。出雲守が、足早に入って来て
「わしにも、手が、廻って来たらしい。今、川上から、内所（ないしょ）で知らせて来てくれたが――わしは、出奔しよう。ここにおっては、危いかもしれん」
「そうだ、出雲。逃げてくれ。同志が、悉く死んでもならん。逃げられる者は逃げて、再挙を計ってくれ」
「聞いたことは、よく合点した。わしは、これから、山田殿の許へ参り、その足で国越え致そう」

「うむ、そうしてくれ。頼んだぞ、出雲」
出雲は、頷いた。
「別れの盃を交したいが、急ぐゆえ――」
出雲守は立上った。
「これで、お別れじゃ。無事に、働いてくれ。わしの分もな」
「最期も見届けないが、許してくれ」
「いいや、急ぐがよい」
五郎右衛門は、出雲を見送るために立上った。
「長い間、交際(つきあ)ったのう。三十幾年――」
「はははは。もう、死んでも、未練のない齢じゃ。腹に皺の寄らぬうちに死ぬのも、武士らしゅうてよい」
二人は、話しながら、玄関へ出た。出雲守が、供が草履を持って来るのを、待っていると
「辞世じゃ
思ふことまだ及ばぬに消ゆるとも
心ばかりは今朝の白雪
出雲、桜時じゃに、雪がちらちらして参った。天にも異変があると見えるのう」
出雲は、空を見上げた。いつの間にか真暗な夜空から、ちらちら、春の雪が、落ちて来ていた。

蒲団を、二つに折って、白い布に包んだのが、部屋の真中に置いてあった。そして、それを、半ば屏風で囲い、その前には、経机があった。その上には、線香の立った香炉と短冊と、硯函とが、置いてあった。五郎右衛門は、それを見廻してから、茶の間の襖を開けた。

そこの正面にある仏壇には、灯がまたたいていて、その前に、古くからいる召使が、泣き倒れていた。五郎右衛門は、ちらっと、それを見たまま、出ようとすると、左太郎を晴着に着替えさせた妻が、眼を赤くして、入って来た。
「未だ、時刻には大分間があろう」
と、云うと
「はい――皆様が、お待ちかねで、ございますから――」
書院に待たせてある親族、朋輩、隣家の人達の、咳だの、話声だのが、微かに聞えて来るようであった。
「うむ」
五郎右衛門は、妻へ頷いてから、左太郎へ、手を出して
「坊」
と、いうと、左太郎も、すぐ手を出して、抱かれようとした。
「何が嬉しい？　うむ、さあ、抱いてやろう、さあ」
父の胸に掴みかかるように、母を蹴り、身体を延して飛びついて行く左太郎の勢いに、女房は、よろめきながら
「しっかりと――抱いておもらい。これが――これが、今生(こんじょう)での――」
と、いうと、涙で、途切れてしまった。召使の老女が
「奥様」
と、いったきり、畳の上へ、泣き伏してしまった。五郎右衛門は、子供の笑顔に、自分も、笑顔を、突きつけて
「お母様を、大切にして、えらい者になるのじゃぞ」
左太郎は、そういっている、父の、頬を掴んで
「とと、ああん」

と、叫びながら、身体を反らせた。それは、外へ出よう、という、いつもの、合図であった。
「今日は、馬には、乗れん。もう、暗いからの」
左太郎は、身体を反らして
「とと、馬」
母親は、袖を顔へ当てていた。
「さあ、遅うなるから――」
と、左太郎を、母親に渡そうとすると、左太郎は、身体をもがいて、泣顔になった。そして、母親に抱かれると、足で母の腹を蹴って、泣き出した。
「乳でも、飲ませてやれ」
「はい」
「泣くのではない。不覚者っ、何が悲しい」
「旦那様――この、お坊さまを、遠島になどと――」
と、老女が、おろおろした声で、二人の間へ、顔を出した。
「お前も、よく勤めてくれた。後のことは、親族共が取計らってくれるから、心配致すな」
「いいえ、妾は――妾は、お坊様のお供をして、何処までも参りますから――決して、御――御心配の――」
と、まで云って、又、泣き伏した。左太郎は、母親に、乳房を、押しつけられて、暫く、乳を呑んでいたが、眼を閉じたかと思うと、もう眠入るらしく、時々しか、乳房をふくんでいる口を動かさなくなった。
「坊や、坊や、お父様の死目に――」
と、云って、母親は、子供の背へ顔を押しつけて泣き入った。五郎右衛門は、じっと、子供の寝顔を眺めていたが、眼瞼に、涙が、滲み上ってきた。
「余り、同志の者に、遅れてもならぬ。それでは、御一同」
と、云って、山田一郎右衛門は、立上った。白無垢の着物に、白の麻上下をつけ、左手に、愛蔵の鎧通を握っていた。
一郎右衛門が、人々の間を歩き出すと同時に、襖が開いて、次の間が見えた。金屏風を立て、畳を二畳裏返した上に、蒲団を敷き、その上に、舶来の毛氈と、その上を蓋うて白布とが敷かれてあった。
一郎右衛門が、その上に坐ると、人々は、上席の人から、立上って、次々に、その部屋へ入って、一郎右衛門の座の三方へ坐った。入りきらない人々は、次の間だの、廊下だのへ坐って、心もち、顔を蒼くしながら
（ああして物を云っている人が、今少しの後に死ぬ。そんなことがあろうか）
と、いうような――必ず来る運命ではあるが、来るまで感じることのできない――何かしら、不安なものに心の底を痛くしながら、ただ、不思議な、苛立たしさと、少しの腹立たしさとを感じるだけで、何んの悲しみもなく、じっと、一郎右衛門を、見守っていた。
一郎右衛門は、静かに、立昇る香の煙が、天井へまでも、消えないで、昇って行くのを、じっと、眺めていたが、机の上の短冊をとって、歌を書きつけた。そして
「辞世」
と、云った。人々は、一斉に、頭を下げて、聞き入った。
白雪と消えてゆく身にも思ふぞよ

曇らぬ空の月の晴れよと

二度、繰返して

「御一同、さらば」

と、云った。人々は、微かに、肌を顫わせながら、軽い恐怖と、好奇心とに、身体を固くして、じっと、見つめていた。一郎右衛門は、肩衣を脱いで、袴を、ぐっと下へ押し下げた。そして、暫く、左の手で腹をもんでいたが、膝の前の、鎧通を取って、鞘を払った。人々が、時々、軽い咳をするだけで、何んの物音もしなかった。

一郎右衛門は、鎧通を、白い布で捲いて、三寸程刀尖を出した。そして、左の腕を捲って、二の腕を、軽く一寸程切った。顔は、すっかり、蒼白になっていて、手が微かに、顫えていた。一郎右衛門は、布で血を拭いて、袖をおろすと、左手で、又、腹を撫でた。

暫く、そうしてから、腹のたるんでいる皮を、左手へ、ぐっと、引寄せると同時に、刀尖を、その指の際へ当てて、肩で、大きい呼吸をした。一郎右衛門の眼も、一座の人々の眼も、異様に、光ってきた。

左手の指先で、刀尖を、ここと思うところへ当てて、一郎右衛門は、眼を閉じた。唾をのんだ。又、大きい呼吸をした。そして、人々が、同じように、溜息をした時

「うむ」

と、低く、声をかけると、右手を押した。その瞬間、ぐっと、口が引締って、眉が、歪んだ。額に、冷汗らしく、きらきらと、浮き出してきた。

一郎右衛門は、眉に、眼に、口に力を入れながら、刃が、一寸余り入ると、張切っている皮を、左から右へ――拳が、目に立って震えてきた。

（失敗らぬよう）

と、人々は、念じた。そして、自分が、切腹しているのと同じように、額に、腋の下に、冷汗を出して、膝も、身体も、顫わせながら、蒼白になっていた。

一郎右衛門の顔は、灰色に変じた。眼の周囲に、黒い曇りが現れて来た。それは、苦痛と、それから、死の前兆であった。一郎右衛門は、二寸余り切ると、眼を開いて、肩で、大きい呼吸をした。

「なかなか――」

と、一郎右衛門は、歪んだ微笑した。だが、誰もそれに答えて、笑いもしなかったし、物もいわなかった。一人の若侍は、眼球を剥き出して、乗り出すようにしながら、手許を見つめていた。一人は、脣を噛んでいたし、ある人は、俯向いて、時々、ちらちらとしか見なかった。

切口の上と下とに、微かな血が滲み出して来て、細く、肌を伝いかけた。一郎右衛門は、眼を閉じて、暫く、じっとしていたが

「えいっ」

と、叫んで――人々が、その叫び声に、ぐっと、胃の腑を、突かれた時、力任せに、右手へ、掻切ってしまった。と同時に、刀を突き立てたまま右手をがくがく震わせ、左手を、蒲団の上へ突いて、俯向きながら、髪の毛を、びりびり震わしていた。人々は、固唾を飲んだ。

切口は、五分余りも、口を開けて、血に染んだ白い脂肪が、厚い層を現していた。そして、その分厚な脂肪の下から、灰色の大腸が、ちらっと、見えていたが、一郎右衛門が、苦痛に、呼吸を大きくし、身体中に、力を入れると同時に、それが、ぐっと食(は)み出して来た。そして、呼吸をするたびに、少しずつ、押し出されて来て、一管が、切口から食み出すと同時に、すぐ、そのつづきが、だらだらと出て、切口から垂れ下った。

一郎右衛門は、俯向いて、手をついたまま、肩で呼吸をしているだけであった。

「山田殿っ」

一人が、叫んだ。返事をしなかった。

「介錯(かいしゃく)を――」

一郎右衛門は、首を振った。そして、ついていた手を、膝の上へ上げて、右手の刀を、抜いた。そして、顔を上げようとしたが、暫く、じっと――それは、残りの力を集めて、頸を掻切るためでもあったし、苦痛を耐える最後の努力でもあった。

そして、左手で、静かに、切口をいじって、食み出している大腸へ触れると、それを切口へ押込もうとした。いつの間にか、分量の多くない血ではあったが、下腹一面が、薄く、血染めになって、帯の辺まで、滲み出していた。

顔を上げた一郎右衛門の表情は死鬼のようであった。眉も、眼も、常とは変ってしまっていたし、その顔色は、暗灰色に変じていた。

一郎右衛門は、右手の鎧通の尖(さき)を、震える手で、膝へ当てて、拭いた。そして、左手を軽く持ち添えると、がくがく震わしながら、右の頸部へ、刀尖を当てた。そうして、大動脈の筋を探していたが、探し当てたらしく、左手で、刀尖を狂わぬよう押しつけて、すぐ、その手を柄頭へ当てて、両手に力を込めた。

「お心、静かに」

と、誰かが、叫んだ。低いが、唱号を称えている声がした。すすり泣きが、聞え出した。微かな声で

「それでは――」

と、云った一郎右衛門は、眼を開いたが、もう、その力さえ十分でなかったし、瞳は開きかけて空虚であったし、すぐ、眼は閉じてしまった。

「うむっ」

呻きとも、叫びともわからぬ声がして、脣を、きつく噛んだ刹那、鎧通が、頸動脈を突き通したらしく、濃い、太い、勢のいい鮮血が、二尺余りも、横ざまに飛んだ。そして、畳の上へ、叩きつけたように散った。頸から、胸へ、血の流れ落ちるのが、人々に見えた刹那、一郎右衛門の身体は、頭から、よろめき出して、崩れるように、右手の前へ、突伏してしまった。

雪空は低く、暗かったが、地上には、雪が薄くつもっていて、人影は、ほのかに判っていた。

井上出雲守は、小脇差を差し、笠と、蓑(みの)とに身体をつつんで、人目につかぬ脇道から、城下を離れるため、急いでいた。

春の雪ではあったが、足は、凍えて、いつの間にか、指の

感覚が無くなっていたし、両掛けにしている小さい荷物が、旅慣れない肩には、もう、重くなって来ていた。だが
（福岡へ――）
と、思って、冷える手を懐へ入れたり、擦り合せたりして、街道筋へ出る、曲り角まで来た。そして、街道筋の模様を、暫くうかがってから、林の中を、左の方へ斜めに横切って、街道へ出た。
（同志のために、斉彬公のために、お家のために）
出雲は、時々、後方を振向いたり、前をすかして見たりしながら、小走りに――道端の茶店を通り抜けようとした途端
「待てっ」
暗い油障子の半分開いている中から、一人の侍が出て来た。出雲守は
（しまった）
と、感じた。そして、たたっと退った。それを追い込むように、侍が
「何者だ」
と、手を延して、笠を掴もうとした。障子に鈍い灯がさして、提灯と、もう一人の侍とが出て来た。そして
「判ったか？」
「灯を貸してくれ――」
と、振向いてから、出雲守に
「何れへ参る」
出雲守は、笠へ手をかけて、顔を見ようとするのを、一足退って、避けると同時に、足構えをした。そして、侍が、提灯の方へ、手を出した隙を
「やっ」
右脚で、払った大外刈。全力的に突いた両手の力。
「くそっ」
よろめきながら、手を延して、出雲守の胸を掴もうとする相手の体の崩れに、どっと、体当りをくれると、己も、よろめきながら――だが、提灯を持った侍が
「待てっ」
と、いう叫びを、後に、走り出していた。
「待たぬかっ」
足音が、すぐ迫っていた。出雲守は、脇差の鯉口を切った。そして、迫って来る足音で、その距離を計りながら
（ここを、無事に、逃げられますよう）
と、心の中で、何かに、祈った。そして、時々、ちらっと、振返りながら、幾度か、己の呼吸と、距離とを計ってから
（ここだ）
さっと、左膝を雪の中へ曲げるが早いか、全身の力を右手にこめて、ぴゅーっと、振った片手薙（なぎ）――
「あっ」
と、低く、短い叫びと同時に、追手は踏み止まって、ぐっと、腹を引いて、刀尖を避けたが、出雲守の掌へは、肉を斬った手答えを感じたし、対手は、刀を抜いたまま、よろめいた。そして
「己っ、手向いを」
と、叫んだ。出雲守は、それを聞きながら、対手が、何うしたか？――倒れたか？　追って来るか？　眼の底に、その、よろめく姿を残したまま、立上ると、走り出していた。前か

がみに、笠を押えて、右手に刀を持って、荷物を捨ててしまって――。
だが、突倒された男が、出雲守と同じ速度で起き上って、追って来た。そして、出雲守の抜刀したのを見ると、走りながら、刀を抜いて
「卑怯者っ」
と、叫んだ。神官である井上出雲守は、若侍を対手に、勝てようとは思わなかった。走った。走った。神に祈りながら走った。だが、足音は、だんだん近づいて来た。

出雲守は、追われている鹿の如くに走った。追っつかれたら、それまでだと思った。もう、神に祈るだけの余裕も無かった。
眉をしかめ、口を開いて、荒い呼吸をしながら、絶望的な気持で、走った。
（同志は、切腹したが、自分は、こうまでして逃げて、逃げきれずに、泥まみれになって死ぬのか）
と、思うと、自分の身体を、泥の中へ抛げつけたいように感じた。
（神官は、矢張り神官だ。武士とちがって、いざとなると、おくれた振舞をする）
と、思われるのが、口惜しかった。追って来る侍に
（わしは、卑怯で、逃げるのではないぞ）
と、怒鳴りたかった。そして、その侍が、自分の気持さえわかってくれたなら、潔く、首を渡してやってもいい、と思った。だが、そんなことを思いながらも、心の底では
（死んだって、福岡まで）
と、絶叫していた。
「おーい」
少し、後方から、腹に疵を受けた一人の方が、呼んでいた。だが、出雲を迫って来る侍は、答えなかった。ただ、足音だけが、だんだん、近く迫って来ていた。
夜の雪空は、暗い低さで、積った雪あかりに、やっと、道は見えていたが、急な曲り角になると、田圃の中へ、飛び込みそうになっては、危く身を躱して、走らなくてはならなかった。出雲守は、脚が動かなくなるか、呼吸が切れるか、何っちかだ、と思った。そして、走りながら、眼を閉じた時、その急な曲り角へ、又、走りかかっていた。そして、眼を開いた時
（しまった）
と、頭の中を、一掴みにされたように、感じた。走って来た勢いで、もう、踏み止まれなかった。そして、踏み止まれないと同時に、もし踏み止まったなら、追手の手にかかるのが、明らかであった。出雲守は
（しまった）
と、頭の中で、絶望的に叫んだが、その瞬間、身体も、脚も、本能的に、全力を挙げて、前へ飛んでいた。それは、追手から逃げようとする一念が、咄嗟（とっさ）の内に、そうさせたのであった。
がばっ、という音と一緒に、出雲守は、泥田の中へ、前のめりに、両手を突き出して、飛び込んでいた。両脚が、膝のところまで、泥の中へめり込んだ。両手は、前へ延びたまま

――泥水を、跳ね上げて、脚と同じように泥の中へ突っ込んだ。顔も、胸も――そして、脚の底は、泥の中へ吸いついて

（逃げなければ――）

と、思っても、動かなかった。出雲守が、落込むと同時に

「あっ」

と、いう叫び声がした。追手は、泥田の間際で、踏み止まろうとしたが、はずみで、片脚を、田の中へ滑り込ませて、身体を反らした途端、泥道へ尻餅をついてしまったのであった。だが、すぐ、起き上って

「待てっ」

と、叫んだ。

出雲守は、右脚を持ち上げると、左脚が少し、泥深く入るし、左脚を持ち上げると、右脚の、にえ込むのに、憤りの涙が、出て来そうになっていたが

「出て来ぬかっ」

と、いう叫びを聞いた瞬間

（ここまでは入って来れまい）

と、判断した。そして、振向いて、闇の中の人影をすかすと、侍は田の傍に突っ立ったままでいた。出雲守は

（助かる――これが、天の与えだ）

と、感じた。同時に、大きく、肩で呼吸をした。そして、田の中を、静かに歩いて行った。

卍（まんじ）地獄

「こちら様に――百城様、又は、牧様と、仰せられます方は、おいでなされましょうか」

七瀬は、四ツ本の邸の、内玄関に立った。取次に出た女中が

「貴女様は？」

「七瀬と申しまする。もし、おいでででござりましたなら、お手間は、お取らせ致しませぬ、一寸、お目にかかりたい、と、仰しゃって下さりませ」

女中が、立って行って、暫くすると、足早な、男の足音が、響いて来て、襖の内から、百城が、現れた。

「おお」

百城の微笑した顔へ、七瀬も、軽く笑って、お叩頭をしたが、顔色が、少し変った。

「遠慮なく、お上りなされ」

百城は、薩摩飛白の着流しの上に、四ツ本の物らしい、縮緬の羽織を着ていた。七瀬が上ると

「こちらへ」

と、いって、薄暗い廊下から、茶の間へ案内して行った。茶の間には、さっきの取次に出た女中が、座蒲団を用意していたが、挨拶をして、出て行った。

「ここなら、外へ洩れんでいい――一別以来、お変りもなく」

百城は、手をついた。

「貴下様にもお変りもなく。この間は、途中にて、失礼致し

まして――」
七瀬は、敷居際で、お叩頭をした。女中が、茶を持って入って、百城も、すすめるので、座蒲団へ坐ると
「その節、綱手殿のことを、一言」
「はい」
「実は――過ちながら、某が、手にかけたと――まず、同様の仕儀にて、お果てになり申しました」
七瀬は、膝へ手を置いて、少し蒼白めた顔をして、黙っていた。百城も、暫く黙っていたが、俯向いたまま
「その――某の過ちと申すのは――小太郎殿と」
七瀬は、ちらっと、百城を見て、すぐ、眼を伏せた。
「武士の意地として、果合を――」
「小太郎と？」
「いや、某などの及ぶ腕ではなく、不覚を取りましたが、その果合の砌（みぎり）、綱手殿が、二人の中へ、割って入り、止めようとなされたのへ――過ち、と申そうより未熟、不覚、血迷っていたと申しましょうか、打ち込んだ刀が、止まらずに、急所へ斬込み――」
七瀬は、脣を、しっかり引き締めた。
「お詫びの致しようもなき仕儀――お目にかかれる顔もございませぬが――」
百城は、言葉を切って、俯向いてしまった。
「不躾ながら、あれと、貴下様との間には？」
「契り申しました」
そう云って、百城は、じっと、七瀬を凝視した。
「綱手は、貴下様を、牧仲太郎様の御子息と知って？」
「いいや、お身が御存じなかったように、綱手殿も御存じなく」
「そして――貴下様は、娘を仙波の娘と知って、仙波の斬死を、御存じの上で？」
七瀬も、百城を、正面から、凝視めた。百城は、頷いた。
「何も、かも。然し、七瀬殿、綱手殿への恋は、偽りでございませぬ」
「百城様、貴下は、こちらへお戻りなされましてから、姿を変えて――つい、この騒ぎの前など、和田様、高木様などの、後方（あと）を、お蹤（つ）けになりました由、真実で、ございましょうか」
「左様、牧仲太郎の倅として、又斉興公の臣として――」
「よく判りました。それでは、妾から申しまする。逆縁ながら綱手の仇敵へ、斉彬公の御家来として、妾は、お立合を、お願い申します」
七瀬は、懐へ手を入れて、秘めていた脇差を取出した。
「立合とは？」
百城は、ちらっと、脇差を見て、組んでいた腕を解いた。
「果合でございましょう」
七瀬は、脇差を左手へ置いて
「御当家で、御迷惑ならば、何ちらへでも」
「果合などと――家来の務は務、恋は恋。それは、綱手殿にもよくお話を――」
七瀬は、首を振って
「聞きとうございませぬ」
と、叫んだ。

「さ、ここでか、外へ出なされますか」
「いや、よく話をして」
「いえ、いえ。殺すか、殺されるか？　仙波八郎太の妻として、夫の同志を売る貴下様を、仮令、殺されようとも、お見逃し申す訳には参りませぬ。さ、お立ちなされませ」
七瀬は、片膝を立てて、脇差を取上げた。
「お待ちなされ。とにかく、話をお聞きの上にて」
「いいえ。妾も、不覚でござりました。百城様とばかり信じて、牧様の御子息とは露知らず――」
と、いうと、七瀬は、夫への申訳の無さ、娘へ、百城の頼もしさを語った手前として、締めつけられるように胸が苦しくなって来た。百城を、牧の倅と知り、百城の忍び姿の噂を聞いた時
（娘に取返しのつかぬことを云った）
と、思ったが、この間、百城が、馬上から、声をかけて行った、綱手に対する一言を、胸が潰れるように聞いた。それは、綱手と別れてから、二人の間のことを心配していたいろいろの想像よりも、もっと、考えられぬ恐ろしい結果であった。そして、いろいろとそのことを考えると、百城を一太刀でも斬って、自分も死ぬ外に、夫への申訳は、立たないと思った。自分だけを殺したのでは、不憫な綱手に対して、あの世で顔を合せられないと考えた。
（あの娘は、契った、敵の倅と――そして、死んだ。苦労をして――殺されて――）
七瀬は、百城と逢った夜から幾夜か、幾度か、綱手のために、泣き明かして
（死んだものは仕方がない。だが、妾は、あの子の魂を慰めてやらなくてはならんし、夫へ申訳もしなくてはならんし――小太郎にも、深雪にも、母の不行届を、詫びなくてはならぬし――」
七瀬の眼は、険しくなってきた。
「尋常に、お立ちなされ、挑まれて立たぬは、御卑怯でございませぬか」
「まず――」
「いいえ、いいえ。お立ちなされぬなら、そのままに――」
七瀬は、柄へ手をかけた。
「狼藉な」
百城は、聞きわけのない、七瀬の態度――無法な、無謀な――及びもつかぬ女の腕でありながら、刀にかけて、己を通そうとする愚かさに、腹が立ってきた。
（綱手は、満足して死んだに――それが、綱手を慰める母の態度か）
と、思ったが
「綱手は、喜んで死んだ」
とは、初めに、二人を欺いて、素性を隠していた百城として、気が咎めて云えなかったし、云っても、信じてもらえるとは思わなかった。
「さあ」
七瀬は、脇差を抜いた。そして、膝を立てて、立上りかけた。
「何をなさる」
百城は、鞘ぐるみ、脇差を抜取って、片膝を立てて身構え

た。

「何をなさる。無法な――思慮の無い」

百城は、片膝立てたままで、低く、叫んだ。七瀬は、立上って、脇差を、突き出して、じりじり迫った。

「卑怯なっ、何故立たぬ」

百城は、大人気なく、女一人ぐらいを対手に、立ちたくなかったが、七瀬は、立ちもしない百城に、女と侮られていることを感じると、だんだん憎しみを深くしながら

（娘を欺し、自分を欺して――顔に似ぬ、図々しい――）

と――そう感じて来ると、気が苛立って来た。

「立てっ」

七瀬が、こう叫んだ時、廊下に足音がして、女中が近づいて来た。

「今、入ってはならぬ」

百城は、この場を人に見せて、邸を騒がしたくはなかった。それから、綱手への志としても、七瀬を殺したくなかった。押えて、よく訳をいえば、判ると、考えていた。

「娘の敵（かたき）」

七瀬は、近づいたが、踏み込みもしないで、斬りつけた。百城は、自分の好意を無にして、女中の耳へ十分入るように、そんなことを叫んだ七瀬へ、怒りが湧いてきた。躱して立上った。そして、鞘ぐるみの脇差を突き出して

「この家の主人に聞えたなら、縄目の恥を見ますぞ。はしたない」

廊下から

「百城様」

と、女中が呼んだ。その途端

「えいっ」

七瀬が、再び斬りつけた。百城が、払った。かんと、強い響きがして、七瀬の左手が、刀の柄から離れた。七瀬は、蒼白になって、ヒステリカルな眼を光らせて

「おのれ――よくも、娘を――」

七瀬は、二度の失敗に、取乱しかけてきた。及ばぬ腕だと、知ると、一太刀も斬らないで、自殺しなくてはならぬ口惜しさに、唇も、身体も、拳も、脚も、わなわな顫え出してきた。廊下に人の走って来る音がした。と同時に、七瀬は、両手に力を込めて、斬りつけた。躱した。畳みかけた。躱した。百城は、足も動かさずに、巧みに、上半身を躱していたが、七瀬は、足許を乱して、百城の躱す巧みさと、自分の刀の短さとに、苛立ちながら、身体を浮かして、次の刀を、手いっぱいに――腰までも延し切って、斬りつけた途端――さっと、百城の身体が、沈むと、右手の鞘が、七瀬の両腕の下を、払い上げた。襖が開いて

「何事じゃ」

四ツ本が、刀を持って入って来た。そして

「無礼者っ」

と、叫んだ。七瀬は、腕を打たれて刀を取落そうとして、刀の方へ気をとられた隙、百城は、左手で、七瀬の肱を掴んだ。七瀬は、もがきながら

「放せっ」

と、髪を乱して叫んだ。

「この、たわけ者がっ」
四ツ本が、七瀬の腰を蹴ると、同時に、肩を力任せに突飛ばした。七瀬は、裾を乱して、倒れかけたが――百城の手が、肱から離れた刹那、力任せに、刀を振廻した。その刀尖が、四ツ本の頬から鼻へかけて掠めた。すっと、薄赤い線が、滲み出ると、忽ち、血の粒が、湧き上って来た。それを、ちらっと見ながら、七瀬は、倒れまいと、片膝をついたが、それでも支えきれずに、倒れかけて、畳へ左手をついて、転ぶのを防ぎながら、四ツ本の顔を見ると狂人のように
「覚えたか」
と、四ツ本を睨んだ。四ツ本は、脣を噛むと同時に、抜き討ちに、大きく一足踏み込んで、斬り降ろした。七瀬は、首をすくめ、眼を閉じて、右手の刀で、受けようとした。百城が
「待った」
と、叫んで、手を出して、四ツ本の腕を押えたが、遅かった。刀は、七瀬の腋の下から、胸へかけて、打込んでいた。
「ううっ、わっ」
と、叫ぶと、七瀬は、刀を落して、両手を広げたが、すぐ、胸のところへ縮めて、顫わせながら、転がってしまった。

鷹野変

薄く、低く、土煙を揚げて、片側並木の、田圃道から、村の中へ、三十人余りの、乗馬と、徒歩の人々が、入って来た。
子供が、家から走って出て、周章てて引込むし、百姓の女は、赤ん坊を背負って、軒下へ立つし、鶏は、馬の脚下から、飛び立って、駈け込んだ。
（久光ではなかろうか）
と、小太郎は、思った。久しく杜絶えていた鷹狩を、久光が、将軍から、鷹匠をかりて、試みるということを聞いていたし、この辺の近くに、お鷹野のあることも、知っていた。
先に立つ二人の徒歩のすぐ後に、拳へ、鷹を止めた二人の鷹匠が、裏金の笠に、小紋の鷹野支度をして、馬上で、つづいていた。そして、その後方に、久光が、同じ姿をして、徒歩士を、左右――茅葺の屋根、軒下に釣るした、いろいろのもの、道傍へ、軒下へ寄って、小さくなっている百姓などを、微笑で眺めつづけていた。
（久光であろう、きっと――）
と、小太郎が、百姓家の軒下から、家の横へ入って、近づいて来る人々の顔を、はっきり見ようとすると、先頭の一人の士が、急に走り出して来て、右手へ入ってしまった。
（御場段切れだ）
小太郎は、往来へ一足出て、士の入ったところを見て
（そうだ）
一行は、寺の前で立止まった。久光のほか、悉く馬から降

りて、二十人余りの者が、一列に立ち並んだ。胡牀(こしょう)を持っている者。医者らしい坊主頭。槍持。挟箱――そんなものも見えていた。人々が、頭を下げると、久光が、馬をすすめた。二人の鷹匠と、三人の近侍と、それだけになって、近づいて来た。小太郎は、又、隠れた。鷹野へは、多人数で行けぬから、近くへ、供を残しておいて、小人数で行くのが、御場段切れの、法であった。

（久光を討つなら、今だ）

小太郎は、少し、逆上したように、大きく息をついて、馬の足音の近づくのへ、神経を立てていた。

朱総(しゅぶさ)と、紫総とを、脚につけた鷹を据えて、鷹匠が、現れると、すぐ、馬が見えて、その金と、朱との、豪華な鞍の上に、久光の、横顔が笑っていた。

（矢張り、そうだ――討つにしても、討たんにしても――いいや、隙があったなら、討つ方がよい――いいや、わしの敵は、牧だ。牧を討って、父の怨みを晴らすまで、なまじのことをしてはならぬ）

小太郎は、腕組をして、考えていた。

（とにかく、お鷹野のところまで、蹤けて行って――）

小太郎は、編笠の中から、寺の方を見て、人影の無いのを見定めると、遥かに行く、久光の馬を追って、歩きだした。

（いいや、私の怨みを晴らすよりも、元兇を除くことが、大切ではないか？　そうだ）

小太郎は、心の中で、頷いた。だが、牧のことを考える時のように、憤りが、口惜しさが、湧き立って来なかった。

牧を討つ、ということは、自分の心の中から押滲んで来る力であったが、久光を討つということは、人から、命ぜられてすることのように思えた。

（矢張り、牧を先に――久光を、後に）

そう考えたが、お鷹野の方へは、歩いて行っていた。一人の百姓風の男が、腕組をし、頬冠りをして、小太郎の前を、歩いていた。

（見つかったなら、疑われるかもしれん――近寄らない方がいい）

そうも、思ったし

（顔見知りの者は居ないであろう）

とも、思った。いつの間にか、久光の姿は、無くなっていた。

街道の右手に、雑木林の点在している広い原があった。黒い森と、幾段にもなった草原とが、高くなり、低くなりして、遥かまでつづいていた。

小太郎の前を歩いていた男が、林の中へ入って行って、草の中へしゃがんだ。そして、ちらっと、小太郎の方を見た。

小太郎は、腕組をして、往来に立ったまま、小さく、黒く、動いて行く、久光の人数を、じっと眺めていた。村の若者、子供などが、口々に語りながら、原へ入る畝道のところまで来て

「あいつ、お鷹野へ、入っとる」

と、草原の男へいった。所々に、立札が立っていて、原へ入るのを、禁じてあった。男は、子供の言葉が聞えたらしいが、腰から、煙草入を出して、煙管を口にくわえた。小太郎

は、子供達が
「あんな遠くへ行っちゃ、見えねえではねえか」
とか
「詰んないから、戻ろうよ」
とか、いいつつ、じっと、鷹狩の方を眺めている子供の側に立っていたが、男の顔を見ると
（見覚えのある――）
と、思った。そして、男の口から出る煙に包まれている眼を、口を、じっと見つめていたが一
（広岡だ）
胸が、突かれた。
（久光を狙っているのだ。きっと――）
小太郎は、編笠をきたまま、畝を越えて、草を踏んで、徐(しず)かに、男の方へ近づいた。男は、ゆっくりと、だが、手際よく、煙管を、腰へ差して、立上った。
「仙波じゃ」
小太郎は、低くいった。
「そうらしいと思うた。人目に立つ」
と、広岡は、口早にいって、立木の多い、少し、村の方へ引返した窪地のところへ、歩いて行った。小太郎も、村人を警戒しながら、素知らぬ振りをして、ついて行った。子供も、若者も、ちりぢりになって――若者は、畠へ、子供は、走って、遊んでいた。
「討つ所存か」
小太郎は、編笠をとった。
「その疵は？」
広岡は、生々しい、小太郎の頸の疵を見ていった。
「叡山で、牧を襲って」
「そうだってのう。大した働きをしたと、聞いたが――」
広岡は、こういって、久光の方を、ちらっと、振向いてから
「益満が、引受けんで、わしへ廻って来たが、究竟の機じゃ」
「うむ」
「何うして、貴公は、また」
広岡は、一人の同志の来たことに、嬉しくもあったが
（もし、小太郎の方が、討ったなら、自分の立場が無くなる）
とも、考えて、こう聞いた。
「つい、ふらふらと――そこで、見たものじゃから」
「討つか？」
「さあ――」
久光の一行は、鷹を放ったらしく、小さい、黒点が、一直線に、昇って行った。その昇って行く下のところに、白い点が、急速度に閃いていた。黒点が、昇りつめたらしく、ぴたっと止まると、その瞬間、流星の落ちるように、その白い点の方角へ、落ちかかった。それは、正確そのもののように――そして、白点が、上下に、左右に、あわただしく閃く、と見る瞬間、黒と白とは一つになって、一直線に落下して、忽ち、見えなくなってしまった。
久光の人数が、原の中を、二人の方へ、動き出すと同時に、二人は、草原を出て、村の方へ歩き出した。村への入口に、汚い、小さい地蔵堂があった。破れた扉に、赤い、白い涎(よだれ)か

けが、いくつも縛りつけてあったし、堂の中の石地蔵は頭の上にまで、それを乗せていた。
（討つか――討つまいか）
小太郎には、未だ、決心が、つかなかった。だが、広岡が
「ここより外にはない。ここなら、警固方から見えぬ。あちらからも、判らぬ」
二人は、地蔵堂の横に立った。そこは、久光からは、堂の蔭になっていたし、警固の者のいる寺からは、百姓家の蔭に――そうして、堂の前は、雑木の林であった。広岡が
「初太刀は、某に――仕損じても、仕損じんでも」
小太郎は、頷いた。広岡は、往来を覗いて見て
「もう、出て来る頃じゃに」
と、呟いた。そして、懐中している脇差の鯉口をゆるめて、目釘へ、唾をつけていた。小太郎は
（この男を、犬死さす訳にも行かぬ――いいや、五人に、二人としても、久光と、鷹匠は物の数ではない。さすれば、三人に二人――十中の九まで、仕損じはない――久光は討てる。易々として討てるなら、討って――この場を逃げて、牧をも討つ――そうだ、何う逃げるかが考えるべきところじゃ。要は、逃路、逃げる方法――）
小太郎が、じっと、地上を眺めていると
「出た」
と、広岡がいった。小太郎は、一足引いた。久光の一行が、今、二人の立っている畝道から出て来て、近づいて来るのが、頭の中へ、鮮かに描き出された。
広岡は、ぴたりと、堂の板へ、右手をつけて、その手に、一尺八寸の大脇差を抜いて、持っていた。小太郎は、片膝を、地につけて、広岡の脚下から、頭を下げて、丁度、堂の縁側の下から、往来へ現れて来る、久光の一行の脚を見るように、構えていた。
「未だか」
広岡が聞いた。
「うむ」
二人は、少し、顔色を蒼くしていた。
「見えた――松の前――もう二三間」
そこまでいって、小太郎は立上った。と同時に、鉄蹄の響き、人の足音がして――その瞬間、広岡は、往来へ閃き出ていた。そして
「御家のためにっ」
と、叫んだ。
久光は、馬を乗下げようと、馬上で、身体を反らしていた。一人の鷹匠は、馬にぶっつかりながら、周章てて馬の横へ廻った。一人の近侍は、鞘ぐるみ、刀を抜いて――馬上の久光へ斬りかかろうと、片手上段で、飛びかかった広岡の刀を払った。
小太郎は、久光の顔に、狼狽と、恐怖との歪みを見た。そして、供の三人が
「曲者っ、曲者っ」
と、叫んだり、一人の鷹匠が
「大変だっ」
と、叫びながら、走り出したのを見ると
（斬られるな）

と、思った。だが、三人の近侍は、馬側へ集まって、一人は、素手で
「広岡っ。たわけっ、たわけっ」
と、狂的に絶叫しながら、広岡へ組みつこうとした。広岡は、初太刀を払われて、二の太刀を――片手突きに突いた。
「誰か」
と、久光は、絶叫して、鞍の上で、身体を反らせた。馬が、前足をあがいた。久光は、落ちまいと、手綱を引きしめていたが、突いた刀が、帯へ、刀尖が当ると同時に、ぐらっと、大きく揺れた。

久光は、蒼白になっていた。広岡の刀の、反対側へ飛び降りて、馬を楯にするという寸法よりも、馬を走らせて、逃げようとしていたが、広岡の刀を避けて、身体を反らしたり、曲げたりしたため、馬が走らなかった。
広岡は、一人の近侍を組みつかせたまま、素早く、三度目の刀を、振下ろしたが、それは、一人の鞘ぐるみの刀で、受留められてしまった。
「仙波っ」
広岡は、捻じ倒そうとする近侍の脚がらみに、よろめきながら、こう叫んだ。一人が、広岡の後方から、組みついて、右腕を掴んだ。
「仙波っ」
広岡が、又、叫んだ。小太郎は、ほんの瞬間に起った刃の閃き、人々の格闘を、自分に関係の無い人々が起したように、眺めていたが、広岡が、つづけざまに、来援を求めた叫びを聞くと
「おお」
と、答えた。人々は、夢中に、組み合っていたが、久光は、小太郎の返事を聞くと同時に、ちらっと、小太郎を見た。その眼と、小太郎の眼とが、ぶつかった。久光の眼の表情は、怒りと、驚きと、恐れとの混じたものであった。小太郎は、それを見ると同時に、編笠を捨てて、お叩頭をした。
（討つべき人ではない）
と、感じた。それは、武士としての、本能的な、主君に対する感情であった。
「仙波っ」
右手の、自由を失った広岡は、三人に組みつかれて、脚をよろめかし、手を振上げ、身体をもがいて、闘っていた。
（不覚だ。ああいう、斬込み方をするなど、何故、近侍を一人倒しておいてから、斬りつけぬ？）
小太郎は、不用意な襲い方をして、すぐ、自分に、援けを叫んでいる広岡に、憤りたくなった。
久光は、手綱を捌いて、鞍へ、落ちつくと共に
「手に余らば、斬れ」
と、云って、馬を走らせて行った。広岡は、それを見もしないで
「何をっ」
と、叫んだ――そして、その瞬間、四人は、一塊になって、よろよろと、二三尺よろめくと、転んでしまった。広岡は、上からも、下からも、抱き締められて、顔も、身体も見えなかった。

（広岡を助けて逃してやらなくては）
小太郎が、そう思って、一足踏み出した時、多勢の叫び声と、足音とが、聞えて来た。
（見つかってはいけない。犬死だ）
と、思った。素早く、編笠を拾い上げて、かぶろうとすると、人々の身体の下、脚の間から、広岡の、乱れた髪、歪んだ顔が見えた。広岡は、ちらっと、小太郎を見て
「卑怯者っ」
と、叫んだ。
「いいや――」
と、小太郎も、叫んだが、すぐ、堂の後方へ走って入った。
「卑怯者っ、卑法者っ」
と、つづけざまに、絶叫した。
と、同時に、一人の侍が
「何か、縛るもの――何をっ、何をっ」
と、叫んでいるのが、聞えた。
（捕えられた）
小太郎は、そう思いながら、堂の裏の林の中へ、走り込んでいた。

「師匠、一寸、顔を貸してもらいたいが」
大家の声が、入口でした。小太郎と、深雪と、庄吉と、四人で、話をしていた南玉が
「よいしょ、只今」
と、立上って、入口の格子戸の外に立っている大家へ
「急ぎか。耳寄りな話か」
「何――一寸、そこまで、来てもらいたいんだが」
「心得た」
南玉は、土間の草履を、引っかけて、格子をくぐった。大家は、黙って、長屋の入口の方へ歩いて行った。
「昼間は、暖けえが、夜は矢張り、寒いね、大家さん」
「うん」
大家は、長屋の入口まで出ると、其処に立っている侍に
「召連れましてござります」
と、お辞儀をした。侍が
「桃牛舎南玉は、其方か」
「へえ、何か、御用で、ございますか」
「身共は、奉行所の者であるが、その方の住居に、元、薩州の家来、仙波小太郎と申す者がおるか？」
南玉は、身体中を固くして
（しまった）
と、全身で叫んだ。
「済まねえが、師匠、外のことたあ違うんだから――俺――侍は、いるって、云ったよ。仕方ねえからのう」
大家は、気の毒そうに云った。南玉は、俯向いて、黙っていた。
「何んと致した？――返答が、できんとあれば、踏込むぞ」
「へえ」
侍が、左手を挙げた。軒下、家の横に忍んでいた捕吏（とりかた）が、足早に、近よって来た。
「この爺を、誰か、見張っておれ」
侍は、こう命じて

「素直に申さんと、為にならんぞ」
「全く――」
「何？」
「いえ、全く、為にはなりませんが――出し抜けに、びっくりしちまって、そう早くは、返事が――」
「居るのか、居らんのか」
侍は、声を荒くした。
（逃げられめえかな――おかしい、と、感じて、庄公でも出て来てくれたら）
南玉は、捕吏を対手に戦っている小太郎を考え、その後方で、顫えている深雪を、想像してみた。
「居ません、と、居るのに申し上げやぁ致しませんが――ここが、大事で――」
同心は、一人の捕吏に、南玉を渡して、長屋の中へ入って行った。捕吏が、その後方から、忍び足につづいた。
「大家さん、大変だ、こりゃ」
「何う調べたか、ちゃんと、お調べがついているんだから、隠せねえや」
大家は、気の毒そうに云った。捕吏が
「何うも居るのが判っているに、素直に云わぬと――」
「為にならねえことぐらいは、子供の時分から、心得ているが、そうは行かねえや――大家さん、えらい騒ぎが起りますぜ」
「手向いでもしなさるかのう――困った。当分、借手が無くならあ。あの血ってやつは、なかなか、落ちないもんでのう」
南玉は、それに、答えないで、長屋の中に、すぐ音立てて起って来る、小太郎の抵抗を、想像して、心臓を喘がせていた。
「御免」
入口から、声がした。
「へえ――誰方？」
庄吉が、襖の中から、顔を振向けた。
「こちらに、仙波小太郎さんって、おいでですかえ」
小太郎も、庄吉も、胸を突かれた。御鷹野から戻って来た時から、小太郎には
（もしかしたなら――）
と、いう不安があった。庄吉は、巾着切として、すぐ、奉行所の手段の、常套的なものが、頭へ響いた。
（俺ではねえかしら）
と、ちらっと、思ったが、明らかに、仙波小太郎といっている以上、小太郎の心配している鷹野からのことにちがいない、と思うと、後方へ、手を振って、早く、逃げて下さい、と合図をしたかったが、自分では、右手を振ったつもりのが、その手が無かった。そして、それの無いのを考えないくらいに、庄吉は、危険の迫っているのに、気をとられていた。庄吉は
「小太郎？」
と、いいながら、時間を、少しでも、延そうとして、立上って、表の間へ出て来た。
「何ちらさまで？」
庄吉は、南玉が、出て行ったままで戻らないのと思い合せ

ると、もう、自分の判断に、間違いはないと、考えた。そして、小太郎と、深雪とが、物音も立てないで、坐っているらしいのを感じて
「居りませんよ」
と、いった刹那、変装している手先は、ちらっと、庄吉を見てから、格子の外へ、手を振った。足音が集まって来た。
「若旦那っ、手が廻ったっ」
庄吉が、こう叫んだ時、一人の手先が、飛び上って来て右手を掴んだ。だが、右手が無くて、袖だけを掴んで、足を払った。庄吉は、よろめいて、壁へ、どんと、ぶつかりながら
「何をするんでえ」
と、睨みつけた。手先の中に、混って、同心が、土間へ入ると
「小太郎、神妙に致せ、無駄な振舞致すな」
そういった時、左手に刀を提げた小太郎が、襖のところへ、現れて来た。表の間へ、上って、踏み込もうとした二三人の手先が、立止まって
「御用」
と、叫びつつ、身構えた。小太郎は、土間の人数、表の気配をうかがって、それが、相当に多人数であると、判ると同時に、憤りと、悔恨とが、頭の中を、突っつき廻して、馳せめぐった。
（自分一人に、こんな人数を向けて――斬り破る見込みはない。斬り破っても、逃げ果(おお)せるものでない。潔く、捕えられた方がいい）
小太郎は、自分の処置を、すぐ、こう判断すると同時に、こんなにまでして、自分を召捕らしに来た久光の心が判らなかった。
（あの時斬りつけたら、斬れるものを、主君とあがめて、手を出さなかったのに、礼さえつくしたのに、そして、それを、見ていながら、自分に対して、こんな処置をとるとは？）
と、思うと、久光の無情さに、極度の怒りが燃えて来た。
（矢張り、討つんだった――斉彬公の仰せの如き人ではない。お由羅の子だ。鬼畜の如き心をもっている）
そう久光を、非難する一方、深雪のことを考え、一家のこと、父のこと、母のこと――小太郎は、静かに、刀を差出して
「同道致そう」
と、いった。
「若旦那っ」
庄吉は、壁際に押しつけられながら
「そんな」
と、いうと、涙が流れて来た。同心が
「神妙の至り」
と、頷いて、手先に、刀を取れと、合図した。
「お兄様」
小太郎は、それに答えないで
「刀を、お渡し申す上は、縄を御容赦願いたい」
同心は、暫く考えていたが
「いかにも」
と、頷いた。二人の手先が、小太郎の左右に添って、袖を

掴んだ。
「今一つ、無心ながら、妹と、暫く話を致したい」
「よろしい」
深雪は、蒼白になっていたが、泣いてはいなかった。
「万事は、益満と、談合致せ。お国許では、お歴々達が、何んの罪咎もないに、切腹をしていなさる。それに較べると、わしは、よくここまで生延びてきた。同志として、軽輩として、かく、多人数の捕吏を受けることは、武士の面目として、この上もない。わしは、潔く、処置を受ける」
と、云った時、二三人の足音がして、南玉が
「放せったら」
と、叫んで、格子を入ろうとした。手先の一人が、肩を掴んだ。
「若旦那っ」
南玉は、捕吏に、左右から押えられている小太郎の立姿を見て
「一体――」
と、いうと、顔をしかめて、眼を撫でた。
「牧を――あんた、牧を、一体」
「親爺――庄吉、いろいろと世話になって、何一つ、恩返しもできんが、許してくれい。二人の世話にならんなどと申したが、わしの間違いじゃ。よく尽してくれた。改めて礼を申すぞ。この上は深雪をよろしく頼むぞ。天にも、地にも、仙波の家のは、これ一人に相成った」
小太郎の眼の中には、薄く涙が、滲み出て来た。
「余り、未練らしく振舞って、笑われとうない。深雪、申し聞かさずとも、一人前の判断のできる齢じゃ。よく考えて、この二人とも、益満とも、談合して――」
深雪は、俯向いて、黙っていた。いいたいことが、いっぱいあったが、何からいっていいのか、判らないし、何ういえばいいのかも、考えられなかった。
捕吏は、深雪を、じろじろ眺めて、早く、顔を上げたらいい、と思った。南玉も、庄吉も、黙っていた。長屋の人々は、格子の外から、いっぱいになって、中の気配をうかがっていた。
「忝(かたじけ)のうござる」
小太郎は、同心に一礼して、歩き出した。
「お兄様」
深雪が、立上って、手を延した。
「何んじゃ」
小太郎が、振向くと一緒に、涙が、頬を伝って、咽(むせ)び泣きの声が、漏れてきた。
「未練者」
小太郎は、睨みつけたが、同じように、涙を浮べていた。
「深雪さん、とにかく――」
庄吉は、深雪に、蹤いて行け、と、眼で合図をした。小太郎は、群集の中を、袖をとられて出て行った。庄吉と、南玉と、深雪とが、人々の後方からつづくと、長屋の一人が
「庄公、お前でなくてよかったのう」
と、云った。
「この野郎っ」
庄吉は、左手で、そう云った男の、横面を撲った。

「何うするの、こうするのって、何うも、こうも、ありゃしねえ」
南玉は、いつもの、飄逸さを、すっかり無くしていた。庄吉も、深雪も、黙って、俯向いていた。
「俺、これから、吉んとこへ行って、仲間の奴らに、手別けしてもらって、益満さんを捜そう」
「そうかい。そうしてくれ。一刻でも、早い方がいいや」
「行って来らあ」
庄吉が、立上った。
(俺が、片腕を失くしたくらい、何んでもねえ。深雪は、自分が殺されるよりも、辛いだろう。人間ってやつの、運ってものは、一つ悪くなると、何処まで、曲り出すものか、判らねえ)
庄吉が、入口を出ると、向い側から、大家が、顔を出して
「もしもし」
と、呼んだ。
「何んですえ」
「何っかへ、お出かけですかい」
庄吉は
(何を、いってやがるんだ)
と、思った。そして、返事もしないで、歩き出すと
「もしもし一寸」
大家は、草履を、引っかけて、走り出して来た。そして、庄吉に
「係り合いの人が、勝手に、出歩いちゃあ、私が、迷惑します。御奉行所から、御達しのあるまで、動かないで、いてもらわんと。もし――」
庄吉が、とんとん歩いて行くので、大家は、こう云って、庄吉の袖を掴んだ。
「何?」
「何、って、困りますよ」
「うるせえや」
庄吉は、袖を払ったが、臂から下の無い腕では、掴んだ手を、振切ることが、出来なかった。庄吉は、かっとなった。
「放せっ、この、ぼけ茄子」
「何を」
「何も、くそもあるもんか。この、珍毛唐あ」
「おい、誰か、来てくれえ」
庄吉の、凄い見幕に、大家は、手を放した。庄吉は、右袖をひらひらさせながら、走り出した。
「仕様んねえ、畜生だな」
大家は、呟いて、引返した。そして、南玉の家の表から
「今のは、誰だえ。師匠」
南玉は、黙っていた。
「御奉行所から、お達しのあるまで、係り合いの者は、一足も動いちゃならねえと、この長屋の者まで、出ないでいるのに――困るなあ、私だって、忙がしい用事を控えて、そのために、こうして、来ているんだよ。一体、何処の奴だえ、あの野郎は?」
「聞いてみな」
「誰に?」
「あの野郎って野郎に」

「変に、突っかかりなさんな。外のことじゃあねえ。何んなことになるかも知れないよ。大捕物の係り合いだからのう」
「大捕物が、怖くて、高座で、板が叩けるけえ」
「南玉さん」
「今日の南玉は、いつもの、南玉たあ、ちがうぞ」
大家は、黙って、引返した。
「だんだん人気が、悪くなるよ。喜(よし)さん、近頃は、物騒だねえ。黒船は来るし、変な浪人がうろうろするし――」
大家は、呟きながら、向う側の家へ入って行った。

萌出る物

謹慎の意を表して、二尺ぐらいの長さの木に、小さく、高崎五郎右衛門の墓、と書いてある、墓標の木が、土の下から、半分、現れていた。
二人の人夫は、鋤で、土を掻き分けて、埋めてある死体を掘り出していた。三人の土分の者が、五人の足軽に、その周囲を、警戒させて、少し離れたところで雑談していた。
「もう、腐っているかな」
「暖かいから、判らんぞ」
「然し――老公も、御立腹は、尤もながら、別に、死体を掘り出して、又、獄門にしなくても、よかりそうなものではないか」
「余程、御立腹と見えるのう」
「お為派も、悪いには、悪いが――然し、このことが、江戸へ聞えたなら、老公は、いよいよ隠居だのう」
「それは、決まっているらしいが――もし、斉彬公の世になったなら、この仕返しが、きっと、来るであろう」
人夫は、時々泥まみれの手で、汗を拭いては、土を掻き分けて行った。埋めて、大して日の経たぬ土は、湿っていたし、柔かくもあった。鋤が棺に当ったらしく、堅い手答えがした。
「旦那様、誰方(どなた)か、一寸、手をかして頂けませんで、ございましょうか」
恐る恐る聞いた。
「何うした」

「持ち上げるんで――」
「人間一疋を持ち上げるのに、二人がかりで出来ん法があるか」
「へえ」
「二人でやれっ。やらんと、賃銀を、与えんぞ」
「へえ」
　人夫は、棺の周囲の土へ、鍬を打込んで行った。鍬の先が、棺の木に当って、土に汚れて、薄黒くなった肌に、白い傷が、いくつも、ついた。それは、死んで、この棺の中に、納まっている高崎五郎右衛門の死体へ、傷をつけているのと、同じように思えた。少し離れたところの焚火の周囲に、しゃがんでいた足軽の一人が
「誰か、来る」
　と、云った。人々が、一時に、その眼の方を見ると、大きい、太った男が、近づいて来ていた。
「御奉行様の、身寄りかのう」
「聞いて、駈けつけたのだろう」
「駈けつけるって、あんなものじゃない。あいつあ、人並より、のろいではないか」
　ところどころに、墓標が立っていたり、ところどころに木と草叢とのある原――いくつかの、罪人の死体の埋まっている原の中を、だんだん近づいて来る侍を、じっと、眺めていた足軽の一人が
「あいつは、西郷でないか？　そうじゃ、吉之助じゃ」
　と、云った。
「吉兵衛の倅か」
　棺を、すっかり掘り出した二人の人夫は、土の中へ、脚を埋めて、二人とも、棺を肩へ当てて、穴の中から、棺を土の上へ、押上げていた。
「よいしょ」
「こらっ」
　二人は、足を踏ん張り、土を掴み、歯を食いしばって、押出していた。
　西郷は、静かに、近づいて、棺の押上げられているのを見ると、ずかずかと、二人の方へ、足早に歩いて来た。
「これは、何んのために？」
　西郷は、二人の土の側へ立った。二人は、上りきらなくて、一休みしている二人の人夫を見ながら
「死体を、獄門にかけるためじゃ」
　西郷は、穴と、棺とを眺めていたが
「高崎殿だけでござりますか、それとも、余の人々も――」
「同罪の人は、同罪であろう」
　人夫の休んでいるのを、じっと、睨んでいた一人が
「何をしとる」
　と、叫んだ。
「へえ――余り、重いんで」
「中身は、老いぼれの死体だけではないか。なまけ者がっ」
　二人の人夫は、肩を、棺へ当てた。そして、顔を、赤くして、押上げかけた。西郷は、掘った土の中へ、草履を埋めながら、ずかずかと、穴の縁へ行った。
「何をするのか」

一人の侍が、怒鳴った。
「高崎殿も、浮ばれまいから、せめて、某でも、手伝って――」
西郷は、静かに、こう答えて、人夫に
「待て」
と、云った。
「へえ、何う、致しましたら？」
「手伝ってやる」
「いえいえ、滅相もない」
「棺を、横に致せ」
西郷は、ずるずると、土と一緒に、穴の中へ入って来た。足軽が二人、穴の上へ来て
「吉之助さん、およしなされ」
西郷は、答えないで
「そちらへ、二人かかるがよい」
「旦那、そっち一人で？」
人夫は、西郷の大きい体を見て
（力がありそうだ）
と、肚の中では、その加勢を喜んではいたが、目付の侍に叱られるのを恐れて
「いえ、二人でやっつけます。何うか、お上んなすって」
「よいから、押せ」
「へえ」
西郷が、棺の下へ、肩を入れたのを見て、二人も、肩を当てた。
「よいか――それっ」
棺は、ぐらっと、一揺ぎすると同時に、ぐぐっと、押上げられた。一人の足軽が、穴の外から、棺へ手をかけて
「大丈夫ですかい」
「さ、もう一押し」
西郷は、土を踏み固めて
「よいかな――そらっ」
棺は、穴の縁へ乗りかかって、すぐ、地上の方へ倒れかかった。
「何うも、有難うございました」
人夫は、礼をいって、土を踏み崩して、穴の外へ出た。西郷が出ようとすると、土は、崩れ落ちるばかりで、登れなかった。人夫が
「旦那様」
と、手を出した。一人の人夫が
「一寸――」
と、いって、穴の中へ、飛び込んだ。そして
「押しますから」
西郷は、二人の人夫に、尻を押され、手を引かれて、穴から出た。二人の侍が
「近いから、転がして行け」
西郷は、二人をじっと見て
「転がして――それが、元の御船奉行への作法でござるか」
二人は、答えないで
「早くせい。早く」
と、いった。西郷は、黙って、棺を見ていたが、だんだん俯向いて行った。

何処から洩れたか、刑場へは、遺族の人々の関係者、無関係な見物人が、集まって来ていた。
死体は、棺は、番小屋の前へ投げ出されて、土まみれになっていた。群集は、お互に険しい眼をして、黙っていた。掛の者は、番小屋の土間で
「首は、誰に斬らそうかの」
「誰に斬らす？」
「ああ見物が多くては、後の噂が困るでないか。拙者が、首を斬るのを見ていて、城下へ拡まっては、家の者へも合す顔が無い」
「役ならば、致し方もあるまい」
「いやだ。元来、一旦処置をして、而も、立派に腹をしたものを、その上、死体を掘り出して、曝すなど、あるまじきことじゃ」
「それは判っておるが、今更――」
と、いった時、足軽だの、人夫だの、番小屋の者などが、棺の蓋を、こじ開けて、木を軋らせたり、折れる音を立てたりしていた。
遺族の人々が、涙ぐんだ眼で、憤りの眼で、何かいいつつ近づこうとするのを、足軽が、押留めていた。
死体は、何れも、白無垢を着ていた。外は寒かったが、暖かい土の中に埋もれていた死体は、外からも、内部からも腐敗しかけていて、髪の毛は、一固まりになって、剥(む)け落ちていたし、唇は、黒くなって腐り、歯が剥き出していて、人々へ怨恨を訴えているように見える。
自分で頸を突いた人も、介錯人に首を打落させた人も、その首を継ぐために、幾重にも、白布を巻いていた。半分開いて、白く剥き出している眼、睫毛が抜け落ちた眼瞼の中から、微かに、人々を眺めている眼。合掌した掌。その掌の珠数、持物、脇差、香花――そんなものが、棺の中から持ち出されて、棺の上に置かれてあった。
誰の顔も、生前とは変っていた。肉が落ちてしまっていたし、色が変って、斑点が出来ていたし――そういうものを、掘り出して見ることは、死んだ人へ最大の恥辱を与えるのだ、という感じが、人足の頭へも感じられた。見るべからざるものを見、見すべからざるものを見せた――お互に、憤り、恥ずべきものであった。
「小屋番に、斬らせるか」
と、侍がいった時、国分猪十郎の首が、布を解かれて、土の上へ転がったらしく、一人の足軽が、拾い上げて、鼻をつまみながら
「御検分」
と、叫んだ。その途端、群集の中から
「礼を存ぜぬか、礼を。たわけがっ」
と、叫ぶ者があった。それと一緒に、群集が、口々に、何か云いつつ、どよめいた。足軽は、鼻をつまんでいた手を放して
「臭えからの」
と、呟いた。
「足軽などに、斬らせては、却って悪口を吐くであろう。礼を正しくして、斬る外はあるまい」
「うむ」

一人は、俯向いて、じっと、土間を、見入っていた。
群集が、どよめいて、動いた。僧侶が二人、その中を掻分けて出て来た。足軽が
「何用で」
と、咎めると
「死体に、坊主は、つきものじゃで」
と、笑いながら、小走りに、死体の方へ走って行った。その後方へついて来た西郷吉之助は、群集の前に立って、僧侶が、死体へ、黙祷して、合掌すると同時に、自分も、合掌して、首垂れた。四辺の人々も、皆合掌した。

赤山靱負は、うすら寒い、暗い、自分の部屋で、書類を破り棄てていた。一寸見ただけで、破ったり、暫く、読み返してみてから破ったり――。
靱負の前には、女房と、老人の用人とが、その破った書類を掻集めたり、一面に陳べてある、刀剣、書物へ、細長い白紙を、貼ったり、差込んだりしていた。二つの、大きい手函の中の書類を、悉く、破りすてると
「焼き棄てえ」
靱負は、少し、眼瞼の赤くなっている女房の眼へ
「庭で――」
「はい」
女房は、静かに、立って行った。そして、廊下で、手を叩いた。遥かのところで
「はい」
と、いう返事がした。庭番が、来たらしく、女房が、何か命じていた。靱負は、暫く、刀剣を見廻していたが、用人が、小さい帳面を、膝へ置いたのを見て
「その永正祐定は、樺山」
用人は、頷いて、帳面へ印をつけ、刀に縛りつけた白紙へ、樺山と、書いた。
靱負は、遠島という処分になったのであるが、この処分は、習慣として、自裁をすすめる方法であった。あからさまに、切腹を命ずる程の罪もないが、死んだ方がいい、と思った人間に対しての処分法であった。それから又、遠島に処せられたとしても、一生、生きて戻れぬ上からは、武士の面目として、切腹するのが、当前でもあった。卑怯に、島流しにされながら、のめのめと、生きていることは、隼人の意地として、出来ないことであった。
「吉兵衛が、参りました」
襖外で、そういう声がした。
「通せ」
靱負が、答えると同時に、襖が開いて、西郷吉兵衛が、入って来た。そして、敷居際へ、平伏した。
「それは、吉井へ――」
靱負は、用人へ、そう云ってから
「近う、参れ」
「はっ」
「介錯をしてもらいたい」
吉兵衛は、じっと、靱負の顔を、眺めていた。用人が、手をとめたのを見ると
「国重は、三原へ」

「はい」
用人は、周章てて、筆を走らせた。
「して――その日は？」
「今夜」
「然し、余り――それは」
靱負は、じろっと、吉兵衛を見て
「死体さえ掘り起す殿ではないか。わしが、今まで、こうしているのさえ、忌々しかろ」
「いささか、手前、腑に落ちませぬが――」
「何が？」
「追っつけ、斉彬公の御代になりますが、公の御代になれば、当然、この処分は、御取消に、相成りましょう。一旦の、御立腹にて、早忽（そうこつ）と、腹をなさることは――」
「皆、そういうが、お前もか。斉彬の代になるのを待つつもりで、あれ見よ、赤山は、未だ生延びておる、と、後ろ指を指されるのが、嬉しいか」
「いや、決して左様な――」
「恥を忍んで、斉彬のために尽せ、というのであろう」
「はい」
「斉彬の代に、近々なるときまっておれば、それでよいではないか。そのためにわしが企てたことだ。後のことは斉彬が、何んとかするであろう――倅は、家にいるか」
「はい」
「呼べ」
靱負は、そういってから、用人に
「この形見分けは、吉兵衛から、それぞれに届けさせい」
と、いった。
吉之助は、両手をついたまま、いつまで経っても、顔を上げなかった。
「お前を、見込んで、頼んでおきたいことがある」
靱負が、こういうと、吉之助は、手の甲で、眼を撫でた。
「斉彬へ、手紙を書いておいた。お前を、庭番にするようにと――親爺から、時々、聞いておるが、この先、当家を背負って立つ者は、軽輩に多いらしい。その中でも、わしは、お前を、見込んでいる。わしの存じている若者の中では、お前が、一等じゃ。未だ、思慮も、分別も、未熟なところはあろうが、わしは、お前の、素朴な、一本気な――その、すぐに泣くところが、大好きじゃ。斉彬には、それがない。お前が、斉彬から、学ぶものも、多いであろうし、斉彬が、お前から、省みることも、多いであろう。そして、お互に、えらくなる。わしは、斉彬をよく知っておる。当今、天下第一の人物じゃ。この人物に、お前が、薫陶されたなら、この末、よし、お由羅の陰謀が、成就しようとも、十分、久光を守立てて、天下に号令のできる人間になれるであろう。久光は、愚かではないが、斉彬あっての、久光じゃ。斉彬が無くなったら、無一物になろうかも知れん。その時、お前が、斉彬の意を帯（たい）して、久光の後見をしてくれたなら、当家は、三百諸侯の中で、矢張り、ただ今の如く、重きを置かれるであろう――斉彬は、よく士を愛するが、国許に、お前の居ることを知らんかもしれぬ。お前と話したなら、きっと気に入るであろう。わしは、それを信じて、安心して死ぬ。親爺に、介錯をしてもろうて、

倅に、行末を頼んでの。わしの、家来に、お前等二人のいることは、わしの誇りじゃ」
　靱負は、こういって、笑ったが、その眼の中には、微かに涙が、薄紅く光っていた。
「忝のう存じまする」
　吉兵衛が、手をついていた膝の上へ、涙を落した。吉之助は俯向いて、眼を閉じていたが、父が、こういうと、垂れていた頭を、もっと低くした。
「この間、高崎の死体を掘り出す時に、人夫へ手伝ったということを聞いたが、真実かの」
「はい」
「それもよい。だが、なるべくば、その情をもっと大きく、天下蒼生のために、用いるよう心掛けてくれ。斉彬は、冷徹、信ずる理前の通りに行おうとしているし、お前は、熱情をもって、人間の大道を行こうとしているが、極まるところ、二つは合致していて、何れも、人間の大道は通じておる。そうであろう」
　靱負は、こういった時、隣りの部屋で、三時の時計が、ゆるやかに、鈍く、響き渡った。三人は、暫く、黙っていた。
「わしの、この肌衣を、形見に与えよう。血染めになったのを――」
「はい」
　吉之助の声は、顫えていた。
「悉く、お集まりに、相成りまして、ござります」
　次から、切腹の座に、つらなる人々の、到着したことを、知らせに来た。
「では、戻るがよい」
　吉之助は、真赤な、そして、涙の溢れている、大きい眼を上げて、靱負を見た。
「泣くな」
　靱負は、そういって、微笑した。
「大久保は、何があっても泣かんし、お前は何かがあると、すぐ泣く」
　靱負は、そういいながら、立上った。そして
「判ったか」
「はっ」
　吉之助が、そう答えると、振向きもしないで、次の間へ入ってしまった。吉之助は、掌を顔へ当てた。

　斉彬は、伊達宗城の言葉の終るのを待って、静かに
「然し、余の事とちがい、父の心一つにて決することゆえ、お志は忝ないが、万事父の心任せに――」
「そういうとは、身も、承知して参った。然し、お身のために、いろいろと、心を砕いている家中の者が、可哀そうとは、思わんかのう。お由羅方の人を、処分するか、せんかは、お身の心一つで――恐らくお身は、手をつけまいが、斉興殿は、この上、何をなさるかも知れん。もし、この後、ああしたことをなさるなら、いよいよ何事が起るか、判らんではないか？
　お身の孝心は、宗城、感じ入るが、父上一人の御機嫌をとるために、島津の家を亡ぼして、それが、賢人の道かの」
　斉彬は、微笑して
「亡びもせん。父も、よいお齢じゃで、その内に、お亡くな

りになろう。それまでに、十人、二十人死んだとて、軽輩に、よい人物がうんといる」
「わが子を呪殺した人物でさえ、助けたいお身だから――成る程」
と、宗城は、頷いて
「では、身は、身として、別に考えることに致そう。一言、申しておくが、調所笑左の、密貿易の一件。あれが、伊勢殿の手に入っておる。これを持ち出して――」
「それはいかん」
「身は、仮令、当家が、半地になろうとも、お身を殺しとうない。百万石にも代えられん天下の材と思うから、交りを絶つのを覚悟の上にて、非常手段をとる。これも、閣老と御相談した。多少、減地はされるであろうが、斉興公が何んとしても、隠居届をなされぬ上は、これを持ち出して、詰め寄るより外にない」
「それは、困る」
「福岡も、南部も、御同意だ。お身は、いつも、天下のために、己は、生犠になってもいいと、申しておられるが、その尊い命を、見す見す縮められても、私事の孝のために、黙視しておられるのが、身の腑には、落ちん。わが子の命のことは、とにかく、多くの忠臣が、死罪となるのに、腕を拱いて、斉興公任せにしておるのも、判らん」
「判らぬことはないが、家のことに、かまう暇がない」
「命が失くなって、天下のために計れるか」
「命は、天でないか」
「もういわぬ。これだけ申せば、お身に判らん筈はない。身は、身で、処置をする。もし、御意に逆ったなら、交りを絶つも、よろしい。御暇しよう」
「ふむ――」
斉彬は、腕組をして
「よく、考えておこう」
宗城は、立上りかけて
「いつもの、明断に、似ぬではないか」
と、いってから、立上った。
「困ったことになったわい」
斉彬は、こう呟いて
「父上の、お戻りを待って、よく、談合してからに――」
と、宗城を見上げた。
「明断、明断」
と、宗城は、振向きもしないで大声でいった。斉彬は、鈴の紐を引いてから、静かに立上った。宗城が、案内もまたずに、出て行った。一人の近侍が、入って来て、斉彬が考えながら、坐っているのを見て
「何か、お争いでも――」
「いいや、わしの心の中での――」
「勝様、お待ちでございます」
と、答えると、宗城を、見送るため、それから、待っている勝安房に逢うため、立上った。
「封襲した上は、近々、帰国せずばなるまい。帰国の上は、海防のことも、心のままにならずと、心痛しておったが、貴殿の御意見を聞いて、大いに、安堵致した。日本のために、

切に働いてもらいたい」
斉彬は、そう云って、軽く頭を下げ、手を膝に置いた。
「恐れ入ります。いろいろの御高説、何れ程、勉強になりましたか判りませぬ。お説に従い、身命を賭して、努力仕ります」
幕命を受けて、海軍のこと、造船のこと、国防のことを聞きに来た勝安房は、斉彬の熱誠と、知識とに、身体を固くして顫えながら、今の日本の危機を感じ、自分の責任の重さを感じ、それから、斉彬の存在に安心して、心の底からの、畏敬の、挨拶をした。
庭の松の木越しに、品川の海が見えていた。薩摩の旗印を立てた船が、幾艘も、もやっているのを、主客二人が、暫く、眺めているうちに、帆柱へ、旗が、するすると、閃きながら登りかけた。白地に、日の丸の旗印であった。帆先で、翻ると、それは鮮かに――単純ではあるが、単純ゆえに、他の船印よりも、目につくし、単純なものの力と、美しさとが、感じられた。
「あれは？　あの船印は？」
と、安房が聞いた。
「日の本を象ったもので、わしが、考案したが、如何であろうかな。真中の朱は、太陽のつもりだが、いろいろと考えた末、物は、簡単なのがええと思うて、あれにした」
勝は頷いた。
「あれが、やがて、日本の旗印となりましょう――そうありたいと心得ます」
斉彬は、微笑して
「水戸の浪人等が、わしを担いで、倒幕の戦を起そうとしているのを、勝は、信じているかの」
「浪人の手では起り得ませぬが、或いは、幕府自ら、倒れるかも知れませぬ。古今興亡の歴史を顧みまして、三百年は、永い天下でございます。一新すべき時が参っておりましょう。手前、せめても、それに対して善処をしたいと――史上に見る、悲惨な末路に、将軍を陥れたくないと、それのみ、心痛しております」
「勝は、私事を捨てて、天下の難に赴きうる。わしは、それが、羨ましい。わしの身辺には、紛擾、ますます頻出して――」
斉彬は、そこまで云って、黙ってしまった。安房も、暫く、黙っていたが
「お察し申し上げます」
と、俯向いて云った。
「もう、勝にも、逢えんかもしれぬ」
勝は、顔を上げて、斉彬を見て
「それは？」
「お身のような、人材の居るのを知って、安心をした。わしは、ここ三十幾年、安心というものをしたことがなかった――ほっと、重荷を、降ろしたように感じる。こういう時に、人間は、えて、病などに罹るものじゃ。今、ふっと、もう二度と、江戸は、見られんというような気がした」
斉彬は微笑して
「牧の呪いかも知れん、ははは」
と、笑った。

「そういう噂も、ございますが――」
勝も、微笑して
「西洋科学にも、こればかりは、ございますまい」
「牧も、英才であったが、身を誤った」
斉彬が、呟いた。庭に、人影が動いて
「恐れながら――」
斉彬が見ると、庭番が、蹲(うずくま)っていた。
斉彬が、頷くと
「お国許より、急使でございます」
「通せ」
「書状を、持参致しましたが――」
斉彬が、手を出すと、庭番は、廊下から、手を延した。勝が、取次いで、斉彬に渡した。

庭番は、去ろうとした。斉彬は、手紙の封を切りながら
「休息させてやれ」
と、その後姿へ、声をかけた。
「それでは、これにて――」
勝が、膝を動かすと
「暫く――この状に、何んな珍聞があろうも知れん。又、イギリス船が、来襲したとか――」
と、云いつつ、封を切って、眼を当てると、微笑が、すぐに消えてしまった。勝は
(何か、大事だな)
と、思いながら、日の丸の旗の翻っているのを眺めて
(水戸、越前、土佐、それぞれに、大名中の人物にちがいはないが、この公とは段がちがう。人物の練れている点、肚の据っている点、知識の広い点、見識の抜群さ、頭脳の鋭利さ――)
安房が、そう考えて、斉彬の顔を、じっと見ると、斉彬は下脣を噛みながら、溜息をした。
(国許に、何か重大事が起ったな)
勝が、こう感じた時、斉彬は、手紙を巻き納めて
「親の心、子知らずと申して――」
淋しそうに、微笑した。
「はっ」
「わしのためを思ってくれた家来共が、大分、父上のために、処分されたが、若い者が、未だ、一揉しようと――何うも、困った人々じゃ。ここに――」
斉彬は、手紙の上へ、眼を落して
「西郷吉之助、大久保一蔵などと申す者の名が出ているが、勝、よく憶えておいてくれんか」
「はい、西郷吉之助、大久保一蔵」
「わしの亡い後は、こういう軽輩上りが、仕事をしてくれるであろう。家老でもない、重役でもない、軽輩共じゃ」
「羨ましく存じます」
「そうか」
「徳川の旗本共の行状を、お聞き及びでございましょうか」
「薄々――」
「廟堂に、一人、二人の人材があったとて、この旗本の上に立って、何が、出来ましょう。それに、浪人の勢いは、勇気は――尊王、倒幕という理窟を考えるだけでも、それを唱道

するだけでも、無為の旗本より、優れております。殿の御推挙なさる人物なら――やがては、日本を背負って立つ底(てい)の――」
「それは判らんが、何時か、どこかで、逢う日があろう。わしは、勝という偉者が、徳川にいるということを、この連中に、伝えておこう。敵として逢っても頼もしいし、手を握るならこの上もない」
「忝なく存じます。それでは、手前、これにてお暇仕ります」
「久し振りで、気の合うた話をして、晴々とした。もう、帰国までに、会えまいが、くれぐれも、日本のために働いてくれ。頼む」
「はい」
勝は、これまで逢った何の大名よりも、親しく、友人のように、師のように、話をしてくれた斉彬の別れの言葉に、感激して、涙が出て来るように感じた。
「これ」
斉彬は、次の間の近侍を呼んだ。
「お帰りになるぞ」
「日本のために――」
勝は、手をついて、溢れ上ってくる感激を、眼の中に燃えさせて
「御自愛下されますよう」
「うむ――疲れたぞ、勝。いろいろのものと、闘って来たわい――よく、闘ったわい」
斉彬が、こういうと同時に、勝は、はらはらと、涙を落した。
「わしは子を亡くするので、家来を、皆わが子だと思うているが、その子同士が、よいとか、よくないとか、争ってのう――」
勝は、だんだん頭を下げて行った。斉彬は海の方を眺めている。
「斉彬様、いよいよ御世継のことと、御内定に、相成りました由、只今、御家老御用人より、お知らせが、参りましてございます」
久光の用人が、いった。久光は、脇息から、手を放して、火鉢の縁を掴んだ。そして、大きい声で
「ふむ」
と、いった。
「父上が、隠居届を出されたのか？」
「いいえ、福岡、宇和島、南部の三公から、御願いがございまして、閣老において、御内諾とのことにございます」
久光は、じっと、用人の顔を、見ていたが
「それでは、父が、厭じゃと申した時に、何うもならんではないか？」
「勿論、左様でございます。閣老とても、内政にまで――」
「では、決定したようでも、何う変るか知れんではないか」
「多分、御国許の今度のことを口実に――」
「左様な、馬鹿な。左様のことをすれば、いよいよ父を怒らせるだけではないか。隠居したくとも、せんと云い出しかねぬ父ではないか」
「はい、それなら、又、一段の儀でございます」

「何が、一段じゃ、たわけたことを申すな。父を、世間から、後ろ指をさせて、一段の儀か」
「お家のためには」
「何が、お家のため？　あれだけの士を殺して、何が御家のためじゃ」
「お叱りを蒙りまして、恐れ入りまするが、家中の大多数が、斉彬様に反対の上は――」
「黙れ。予が――支度させい、駕を。伯父の許へ参って聞いて参る」
「はっ――それから、お鷹野の御戻り道にて、無礼を働きましたる仙波小太郎の儀」
「それが？」
「奉行所の手にて居所相判りましたゆえ、召捕らせておきましたが――」
「誰が、召捕れと申した。何故、予に、断りもなく、左様の処置を致す」
「重々のお怒り、恐れ入りまするが、罪の有無は、とにかく、一応取調べませぬと」
「とにかくも、一応もない」
「いいえ。彼の者も、彼の者の父も、牧殿の御祈祷場へ斬込みましたゆえ、これのみにても、十分、死罪に値致します」
「許しやれ」
「なりませぬ。家中の掟が乱れます。大殿様の、今度の御処置を御存じの筈。仮令（たとい）、善にもあれ、悪にもあれ、上席の者に向って、不逞の企みをなす者を、許しておいては――」
「煩い。退れ」
「何を仰せられます」
用人は、皺の顔の中から、久光を睨んだ。
「斉彬様のおことと申せば――」
「退らんか」
「退りません」
久光は、火箸をとると、用人の顔へ投げつけた。一本が当って、膝の上に落ちた。一本は、頭上を飛び越した。
「何んとなされます」
用人が、こういって、膝の前へ、拳を置いた時、若侍が二人、用人の左右へ、走り寄った。と同時に、女中と、近侍とが、久光の側へ、小腰をかがめて近寄ると
「殿」
と、いって、手を出して、支えた。
「動きませぬ」
と、いった用人を、二人の侍が、抱いて、連れ出そうとした。
「何をする」
用人は、強い力の中で、もがいた。
「誰か、奉行所へ参って、仙波を放免しろと云って参れ。広岡は、何処へあずけたか、彼奴も、助けてやれ。いつまでも、兄上を、部屋住にしておくから、いろいろ不祥のことが起るのじゃ」
久光は、独り言のように叫んだ。真赤な顔をしていた。
牧仲太郎は、お由羅の邸の、奥の部屋で、書見していた。
「牧様、火急のお使が、将曹様の御用人より参られましたが」

「お通し下さい」
牧は、前よりも、蒼白い、そして、痩せた顔をしていた。一日中、部屋へ引籠って、書見しているほか、自分からは、口さえ利かなかった。
牧のために、特別につけてある美しい女中は、食事の時にさえ、遠ざけられた。そして、食事は、牧の註文で、麦飯に、味噌汁だけであった。
使の士は、入って来ると、険しい、牧の眼に、眼を伏せて
「斉彬様、御相続の儀、只今、閣老にて御内定になりましてござります」
牧は、頷いた。
「それに就きまして――」
「御苦労」
「将曹様より、御依頼の件――」
「判っております」
「はっ――外に――御用は？」
「無い」
使は、立上るより外に無かった。
「お暇仕ります」
牧は、返事もしないで、書物へ向った。侍が、去ってしまうと、手を延して、床の間から、算木（さんぎ）の入った、白緞子で包んだ小函と、筮竹（ぜいちく）の包とを取った。そして、机の上へ、算木を陳べて、幾度か裏返したり、表へ向けたりしてから、筮竹を頂いて、数えてみた。幾度となく、同じことを繰返してから、暫く、瞑目した。そして、眼を開くと、立上って廊下へ出て
「山内」
と、叫んだ。
「はっ」
山内でない声の返事が聞えて、暫くすると、山内が
「御用で」
と、廊下へ現れた。酒気を帯びていた。牧は、ちらっと、それを見ると、眉をひそめたが
「旅支度を、すぐに――」
「旅に？」
「支度をすれば、よろしい」
牧は、こう云いすてて、部屋へ、入ってしまった。そして、違棚の上の、手函の中から、金包を出した。押入の中から、小さい、支那渡りの赤塗の、金具の光った箱を出した。その中には、旅に必要な品々が、入っていた。女の足音がして
「入りましても――」
と、聞いた。
「拙者は、祈祷のために、旅へ出る。いつ戻るか、判らぬから、お由羅殿が、お戻りになったら、左様申し伝えてもらいたい」
牧は、こう云って、脚絆を、足へ当てていた。
「では、お部屋様の、お戻りの先に」
「左様」
「お許しがござりませぬに、お出ましになりましては――」
「左様のことは、よろしい」
「はい」
「駕を二挺申しつけて、山内へ、早く支度をするようと、申

してもらいたい」
「はい」
それ以上に云っても、答える牧ではなかった。女中が、去った。牧は、支度をしてから、部屋の中の品々を、それぞれのところへ片づけて、火鉢の灰の形までも、正しく、整えた。そして、じっと俯向いて、腕組したまま、いつまでも、坐っていた。

まんじ乱れ

髪を束ねて――いつの間にか、少し、やつれを見せ、身躾みの化粧も、この頃は、しなくなって――垢染みた着物に――それは、この長屋の人々と、同じようにまで、汚くなった深雪が、洗濯している手を止めて
「あっ」
と、いった。そして、立上って、眉を歪めて
「お兄様」
小太郎は、奉行所へ引かれた時と、同じ姿で――だが、いつの間にか、蒼白い顔になって
「無事か。皆、変りはないか」
「ええ」
深雪は、前掛で、手を拭きながら、胸を嬉しさでいっぱいにしながら、兄に従って、井戸端から、家の方へ、小走りについて行った。長屋の人々が、二人をのぞいて見て
「おお、若旦那」
とか
「よく、御無事で」
とか、声をかけた。深雪は
「有難うございます、有難うございます」
と、左右へ、お叩頭をしながら、涙を浮べていた。
「庄吉に、南玉は？」
「呼んで参りましょうか」
「それにも及ばぬ」

「ええ、もう、参りましょう」
口早に、こう云って、二人は、家の中へ上って行った。
「もう、大事ないのでございますか」
「うむ」
「ま、何うして、では、召捕りに？」
「判らぬが、察するところ、御鷹野の連累（れんるい）として、念のために捕えたが、久光公から、何か、御言葉が出たらしい。将曹でも居ったなら、斬られたかも知れんが、あいつ、国許に戻っておるし、斉彬公の御世継の話の定まりそうな折柄、奉行も、濫りに、手をつけて、役の表に障ってならぬと、それで、無事に放免したらしい。召捕らせたのは、将曹か、平か、お由羅あたりの指金らしいが――当節は、奉行も、利口で、風向次第、何んとでもするものらしい」
「まあ、御奉行様が、左様なことを――」
「奉行も、老中も――益満の申す如く、徳川の綱紀は、乱れて来ているらしい」
「妾――お兄様、幾度死のうかと、決心しましたか知れません、本当に――」
深雪は、こういうと、袖を目へ当てた。
「南玉に、庄吉は、相変らず、来ておるかの？」
「はい、いろいろと、骨を折ってくれましたが――」
と、いった時、ことこと走る音が、近づいて来た。
「庄吉でございましょう」
「走って参ったの」
いい終るか、終らぬかに、格子戸を開けて
「本当だっ――若旦那っ」
庄吉が、敷居に躓きながら、駈け込んで来た。
「今、町内の奴が、確かに、小太郎さんだと知らせに来てくれましてね。横っ飛びにすっとんで来たが――若旦那」
と、いって、片手で、何かを拝んで
「死んだ大旦那様の御加護だ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」
「心配かけたの」
「自分の災難よりも辛いや、見ちゃおれませんでしたよ。一時は、こんなに、眼を泣きはらして――御覧なさい、この、痩せ方を」
庄吉は、深雪を見てから、小太郎の方を向いて
「ところで、一体、奉行の野郎、何んてことをしましたのかい」
と、顔をのぞき込んだ。
「うわーっ、うわーっだ」
南玉が、大きい声を出して、長屋の入口から、走り込んで来た。そして、土間に立って、小太郎に、口々に、挨拶している人々に
「赤飯炊いてくれ、赤飯を。鯛をつけてな、鯛を――」
人々が、振向いて
「師匠、嬉しいだろう」
「何をっ、こうなるとは、ちゃんと、天文で見抜いていたんだ」
「諚をつけ、二三日、飯が食えねえって云ってやがったくせに――」
「あの時は、腹をこわしていたんだ。退け、退け、おけら」

南玉は、人々を掻き分けて
「いや、実に、何うも――」
上り口の端へ上って、ぺたりと、坐ってしまった。そして、胸を叩きながら
「ああ、苦しい」
「小父様、お冷でも？」
と、深雪がいって、立上ると
「老人の冷水――いや、齢はとっても、桃牛舎南玉、這(は)って参ります、這ってな」
南玉は、ごそごそ這いながら、奥の間へ入った。長屋の人々が、見舞の品を置いて、戻って行った。
「有難うよ、有難うよ」
庄吉が、一々、挨拶した。南玉が
「又、明晩も、早々から」
と、お叩頭をして
「若旦那、あっしゃあ、奉行め、もし、若旦那を罪にしゃあがったら、高座で、奉行が袖の下を取って、罪のない者を、召捕ったと、御政道をめちゃめちゃにこき下ろしてやろうと――」
「袖の下などと、何故判る？」
「そりゃ、ちゃんと、上は天文から――」
「下夜鷹の湯巻に至るまで」
と、庄吉が、口を出した。
「実は、益満さんに、飛んで行きましたよ、何うしようかって――するてえと、先生 曰(のたまわ)く、捨てておけ、と。嚇(かっ)としましたよ。張扇で、叩き殺そうかと思いましたが、待てしばし。待て待てしばし、待てしばし。腹立つ胸を押殺して、こは如何なこと、益満殿――と、聞くと――今の町奉行ってのは、妄狂いをしていて、これが――」
と、南玉は、指で丸を作った。
「要るんで、お由羅方の誰かの指金で、捕らしたのだろうが、斉彬さんが、御家督ときまったと聞いたら、びっくりして、戻すだろうと――若旦那、そうでござんしょうか？」
「そうらしい。わし如き者でも、死罪にするには、奉行の一存では行かんからのう。老中、将軍の判がいるし、一応、薩藩へ、問い合わさなくてはならんからなあ」
「成る程、人の命だの、南玉の講釈なんてものは、尊うござんすからの」
「何、いってやがる。ところで、若旦那、すっかり、旅の陽焼けがとれて、いい男っ振りに、又、戻りましたねえ」
小太郎は、微笑して
「深雪、身体を拭きたいが」
「では、お風呂へ」
「いや、相談事があるし、取急ぐから」
深雪が、井戸端へ、立って行った。小太郎は、じっと、その後姿を見送っていたが
「不憫な奴じゃ」
と、呟いた。
「然し、何んて、やさしい、利口な方だろう、若旦那。もう、三十若いと、厭とは云わさんが――庄吉、無理はない、人の懐をねらうだけあって、手前、眼が高えや」
「こん畜生、いやな称め方をする爺だ」

と、云った時、深雪が、水を汲んで、戻って来た。
建込んだ長屋の、薄暗い、狭い部屋――それは、夏に近い夕だけに、四人も坐っていると、むっとするくらいであった。
「深雪」
と、小太郎が、顔を挙げて、鋭く云った。
「はい」
と、深雪が、周章てて、眼を上げた。
「操を、棄ててくれぬか」
深雪は、小太郎の眼から、眼を外らして、低く
「ええ」
と、頷いた。庄吉が
「何か、思案が、つきましたかい」
「小藤次の口から、牧の在所(ありか)を聞き出す外に、手段(てだて)はない。のめのめこうして暮していて、暮しにつまって、朋輩へ、無心に行ったり、又、思いがけぬ災難に逢ったり、或いは屋敷の者の手で、牧を討たしたくはない」
小太郎は、低く、こう云ってから、強い調子で
「父も、綱手も、死んだ。覚悟は、申さずともついておろう。小藤次に、肌を許して、牧の在所を聞き出したうえ、自害せい。わしも、牧を討取った上にて、お前の後を追おう――」
「若旦那」
と、南玉が云った。小太郎は、じろっと、振向いて
「止める事ならんぞ」
と、云った途端、庄吉が
「益満の野郎――命が惜しさに、急に、変心しゃあがって、今更、助太刀するの、せんのって、土台、あん畜生が、いけねえから、こういうことになっちまったんだ。俺(おいら)あ、もうこうなりゃ、承知できねえ。破れ、かぶれだ。あん畜生の首根っ子を押えて、うんと、いわすか、いわさんか。畜生、いわなけりゃ、鼻の頭を、齧(かじ)りとっちまうんだ」
庄吉は、真赤になって、怒鳴った。
「命の恩人だが、もう、こんな命は、要らねえから、要らねえ命を助けてもらったのに、恩も、へったくれもねえ。そうだろう、師匠」
「庄公、手前、嫉妬じゃあねえか。嫉妬なら、みっともねえぜ」
「馬鹿にするねえ。このもうろく講釈。女なんざ、泥溝へ棄てる程あらあ」
「深雪さんもね」
「うるせえ、俺、これから、益満の野郎を探して、いいたいことだけいって、鼻を齧って来るんだ」
庄吉は、こういって、深雪の、俯向いている顔を覗き込みながら
「立派に、仕遂げて来なせえ。あっしゃあ、蔭ながら、祈っておりやすぜ――さよなら、いろいろ、いいてえことがあるんだが――」
庄吉は、懐へ入れていた手を出して
「まあ、よしやしょう。若旦那、長々の、おつき合いで、あっしのような――や、やくざ者を――」
庄吉は、だんだん俯向いて、泣声になってきた。
「わしが、手首を折ったのに、それを恨みもせず――よく

――よく、つくしてくれた。何も、今生で、礼ができんで、心苦しいが、あの世から――」
小太郎も、俯向いた。南玉は、手拭で、鼻の下をこすっていた。
「深雪さん、そいじゃあ、お別れしますぜ」
庄吉は、立ちかけた。そして、又、坐って
「操を破ったって――ねえ、何んな、ぼろを下げたって、仮令、夜鷹、辻君になったって、惚れた女は、惚れた女――として、ねえ、惚れた上は、鼻が欠けても、盲になっても、惚れ止めねえのが、本当の、男の、恋ってもんだ。あっしゃ、そうだ――さよなら、もう、お目にかかれるか、かかれねえか？　あっしの死ぬのが早いか、深雪さんの死ぬのが早いか――人間、二度たあ、死なねえや。一つ、益満の畜生に、ずばりと、一思いに、斬られてえや。さよなら、幾度いっても、同じだ、今度は、本当に――さよなら」
庄吉は、立上った。
「行くか」
と、小太郎が、見上げた。
「ええ――師匠」
「うん」
「あばよ」
庄吉が、一足踏み出した時
「庄さん」
と、深雪が、叫んで、膝を向けた。涙のたまった眼で、庄吉を見上げて、手を頭へやって、簪（かんざし）を抜いた。そして
「形見に――」
小太郎は、ちらっと見たが、黙って、腕を組んだ。庄吉は、深雪と簪とを、見較べて、暫く、突っ立ったままでいたが
「下さるんですかい、あっしに？」
「何も――お礼を――これを、せめて形見に――」
「ええ」
と、頷くと、庄吉は、はらはらと、涙を落した。そして、それを、手で払って、膝をつくと
「おもらい――申しやす」
左手に受けると、暫く、押し頂いていた。簪の足に、沁（し）んでいる油は、女の情熱と、肌とを思わせるように粘っていた。
「頂きやす――有難うごぜえやす」
庄吉は、眼を閉じて、簪を、頂いて、暫く、じっとしていたが
「あっしゃねえ――」
と、云って
「いいや」
と、独り言を、云って、首を振った。そして
「云わねえったら、口を割らねえのが、仲間の作法だ――」
「そうだ」
と、南玉が
「お嬢さんの心は、判ってらあ」
「師匠――俺、たった今まで、自棄を起して、死ぬつもりだったが、一寸――ほんの、ちょっぴり、思案をかえらあ」
「そうかい」
「何う変えるか、代は、見てのお戻りってんだが、休公の、

鼻を齧るのだけは、変えねえ――じゃ、いよいよ、これが、ぎりぎりけっちゃくの、さよなら、だ。さよなら――お嬢さんにゃ、しかし、もう一度、お目にかかりやす」
庄吉は、土間へ、降りた。
「さよなら」
「行くか」
と、南玉と、小太郎とが、答えた。
「南玉」
すぐ、小太郎が云った。南玉が、顔を挙げると
「これを、小藤次の許まで、送って行ってくれんか」
「ええ――然し、若旦那。小藤次が、牧の行方を知らん時には――」
「肌さえ許せば、御自身、御存じのうても、誰方か、からか、聞いてくれましょう」
と、深雪が、いった。小太郎が頷いた。
「覚悟を、きめなすったかえ？」
「ええ」
深雪は、はっきりした口調であったが、顔が、少し、蒼白(あおざ)めていた。
「ようがす――と、いって、いよいよ行くとなりゃ、化粧もして――」
「ええ――兄様、風呂へ参ります暇は、ございましょうか」
小太郎は、深雪の健気な決心を見ると共に、胸を掴みしめられるように苦しくなってきた。
（一家中、不幸なら、せめて、この深雪だけでも、幸にしてやりたいのを――死ぬより厭がっている男に、肌を許せ、というわしは――いわなくてはならん、わしは――一体――それが、兄の道か？　妹をまで生犠(いけにえ)にして――）
と、思うと、自分も、益満も、牧も、堪らぬ程、憎くなってきた。
「明日でもよい、今夜、一夜は、ここに臥て――」
「はい」
小声で、そう答えると共に、深雪は、又、涙を浮べてきた。
小太郎は、俯向いて、眼を閉じた。南玉は、顔中を、撫で廻していた。
「おう、流しっ、上ってくれ」
両国下手の、川沿い、黒い高塀の料理屋の二階からであった。
「有難う」
富士春は、よく、透る声で、返事をした。そして、打ち水してある石の上を、植込みの竹の横を、くぐりから、内玄関へ廻った。
「今晩は、有難う存じます。姐(ねえ)さん、今晩は、有難う存じます」
富士春は、人々へ、お叩頭した。
「お座敷は、二階ですよ」
「はい、何ちらから？」
「突き当って、右ですよ」
玄関の女は、突けんどんにいった。外の女は、二人の姿を、じっと、眺めたり、忙がしそうに、広い廊下を、行き戻りしていた。二人は、編笠をかぶったまま、廊下へ出た。

二階、三階
こちゃ苦界
益満は、唄いながら、広い階段を、上りきると
座敷は、ここかい
ちがうかい
「おーいっ、ここだよ」
そうかい――
と、益満が、唄うと
「この人は――」
と、富士春が、袖を引いた。
「ええ、お有難う存じます」
「有難う存じます」
二人が、廊下へ手をつくと
「入んねえ」
「御免下さいまし」
客は、三十七、八の遊人風の人であった。盃を、益満に出して
「一つ、やりねえ」
益満は、手を延して、盃をもらった。女中が、酌をした。
「今、一人来るんだ。一寸、待ってくれ、呼びにやってるから、お前さんの唄を、是非聞きたいって奴でね。つい、そこだから、すぐ来らあ」
そういっているうちに、手早く、金を包んで、富士春の前へ抛げ出した。
「二つ、三つで結構だ」
「有難う存じます」
富士春は、帯の間へ、鳥目を押し込んだ。
「いらっしゃいます方は、方と致しまして、何か一つ」
富士春は、三味線を抱えた。
「野暮に出来ていて、流行唄一つ知らんでの、よろしく、頼まあ」
「まあ、お固うございますこと。たまる一方で――」
「借金山となりにけりさ」
「まあ、御上手な――」
「口先だけは――言訳に慣れているからの」
「ほほほ、これは、とても、妾一人では、太刀打が」
「亭主と、束になって、押寄せるかの」
「亭主と、見えて、実は、いそ的で、へい」
と、益満が、引取った。
「いそ的と見えて、実は、色的で」
益満が、答えようとした途端、襖が開いて
「よっ」
「早かったな」
庄吉は、上座に布いてあった座蒲団へ坐ると、俯向いている富士春へ
「久し振りだな」
「ええ」
「冠り物をとれ。益満さん、一寸、話があるんだ。その暑くるしい奴を、取ってくんねえか」
「へいへい」
「厭なこと、いうねえ。へいへい、何が、へいへいだ」
「およしよ、庄さん」

富士春がとめた。
「何うかしてるよ、この人は」
「うん、何うかしてるんだ。人間、時々、何うかすらあ。手前も、何うかしてやがる。それよりも、おいっ、益満、手前が、一番、何うか、しちまってるぞ。何うか――」
「御勘弁を――」
「巫山戯(ふざけ)るなっ。もっと、前へ出ろ。そもそもだな。そもそもと、来らあ、こん畜生」

「お勇ましいことで、ございますな」
益満が、にやりと、笑った。
「何、何、何っ――」
庄吉の朋輩が
「おい、話をするんなら、もっと、穏かにしろや」
「ほんとに、見とむない――お前さん、嫉妬なのかえ」
「黙ってろ、手前なんぞの出る幕じゃあねえ。幕へ出なさるなあ、お嬢さんだ。手前なんざ、奈落で、廻り舞台を担いでろっ」
富士春は、益満と、いつの間にか、後ろめたい関係になっていたので、庄吉の意気込みに、気圧(けお)されていたが、お嬢さん、と聞くと、自分が、着物を曲げてまで、苦労して来たことが、思い出されて
(五分と、五分だ)
と、思った。そして、そう思うと同時に、いつまでも、深雪深雪と、物にもならない娘っ子を、命がけで追い廻している庄吉に、情なさと、嫉妬と、腹立たしさが、起ってきた。

「そうかい――本当に、妾ゃ、縁の下の力持ちさ。腐った性根も知らないで、いろいろ苦労をしてさ」
「苦労は、手前ばかりじゃあねえ。義経だって、九郎と云わあ。うるせいっ、なあ、益満さん。お前さん、一旦、約束しておきながら、それも、他人とじゃあねえ、義兄弟と、ちゃんと、牧を討つと、約束しておきながら、今更になって、変更(へんが)えとは、一体、何うしたんですい？　今日も、小太郎の旦那が、深雪、操をすてて、牧の在所を、突きとめてくれ、小藤次に、肌を許したなら、聞き出せる術もあろうと、天にも、地にも、たった一人の妹の、操を破らせる話だ。そしたら、深雪さんが、はい、と、活溌(かっぱつ)に、聞き出しましょうって。お春のような、のべつに、操を破っている代物とは、代物がちがうんだぜ」
「おやっ」
「うるせいっ、おやおや、どっこい、すとひよっとこ。泣きもしねえで、はい、と答えた健気さに、益満さん、俺あ、肚の中で、泣いた」
「小藤次に、してやられて、口惜しいからだろう」
「黙ってろっ」
庄吉は、左手で徳利を掴んで、富士春を睨んだ。朋輩が
「よせったら――お春さん、暫く、黙って」
「ええ、でも、憎らしい、まるで人を、夜鷹かなんぞのように――」
「夜鷹？　手前なんざ、夜鳶(よとんび)だ、河童の屁玉に、のら猫だ」
「お上手で、恐れ入りやす」
益満が、笑った。

「笑い話じゃねえ。一体、武士が、一旦誓って置きながら、今更、知らん顔するたあ、ちっと、休さん、話がちがいますぜ。貴下は、命の恩人だ。だが、俺、もう命は要らねえから、返しますよ。ね、返しちまえば、五分と、五分だ。一体、何うしてくれるのか。小太郎さんも、深雪さんも、このまま見殺しにするのか、それとも、助けてくれるか、その返事が聞きたいんだ。返事の模様によっちゃあ、あっしにも、一寸、考えがあるんだ」

「へ、考えがね、凄うがすな」

「そのおかしな物いいをよしてくんな。そいつが、第一、気に入らねえ。昔の通りで、話をしてくれ」

「へへへへへ、只今は、身分がちがいます。昔は、昔、今は今」

「そうかい、何処までも、白っぱくれて、胡麻化そうというんだね。おい、益休(ますきゅう)っ」

庄吉は、懐から、白鞘を出して、畳の上へ置いた。

「お前さん、俺の気性を、知っていなさるだろうな」

益満は

「弱りましたな」

と、腕組をした。

「手前は、弱っただけで済むかも知れねえが、若旦那や、お嬢さんは、ええ、おいっ、命がけだぜ。命より大事な操まで棄ててかかろうってんだぜ。手前が、髷を切って、大道芸人になっているのたあ、ちっとばかしちがうんだ。ちっとばかし、ちがってるってのは、それだけじゃあねえ。この庄吉も、ちがってるし、この男は、俺の兄弟分だが、こいつもちがってるし、お春も、おかしな女だ。俺に、血の道を上げて、こいつも、ちがってらあな。ちがわねえのは――手前も、ちったあちがっていたが、何んのざまだ。さあ、助ける気がなくなったのなら、俺と勝負だ。益休」

「こっちゃあ又、ちがいすぎちまって」

益満は、髷へ手を当てて、笑った。

「嘗(な)めてやがらあ。ようし、手前が、嘗めるんなら、俺は、齧るんだ。もう口は利かねえ。うぬっ」

庄吉は、白鞘をとって、口で鞘をくわえて、左手で抜いた。

「兄貴、待てっ」

朋輩が、中腰に立って、庄吉の袖を掴んだ。

「よせっ、もう勘弁ならねえ」

富士春が

「庄さんっ」

と、叫んで、左手で、庄吉を止める手付きをして、右手を、益満へ振って

「逃げて、早くっ、危いから」

益満は、笑いながら

「よう、音羽屋っ」

「待てっ、兄貴、俺に、一寸いいてえことがあるから、そいつをいっちまうまで、一寸、待ってくれ、兄貴」

男が、ぐっと、庄吉の袖を引いた。庄吉は、立ったまま、振上げていた短刀だけは、下へおろした。朋輩は、じっと、益満を睨んで

「名乗りもしねえで、失礼さんでごぜえやすが、こいつと同

じ、やくざで、吉と申しやす。お見知り置きを願いやす」
膝へ手をついて、お辞儀をした。そして、首を上げた途端
「仕方が無えな、庄公」
と、益満がいって
「深雪は、未だ、小太郎のところにいるか、それとも、小藤次のところに行ったか」
「何？」
「深雪の操を破らさんでも、小藤次を誘(おび)き出して、首根っ子を押えりゃあ、それまでではないか」
「へん、近頃、問屋じゃ、そうは卸(おろ)さねえ。小藤次は、知りませんとくらあ」
「小藤次を囮(おとり)にして、牧の行方を知っている者を誘(おび)き出せばよい。わしに、任せておけ。吉さん、羨ましいな。お前さん方の、仲間の義理は――士が、お前さん方程の、意地と、義理とを持っていりゃあ、天下が取れる」
「益満さん、本当に、庄公に、味方してやって、おくんなさい」
「庄吉、小太郎のところへ参って、深雪がいるかいないか、見て来い。もしいたなら、この吉に、小藤次の許へ行ってもらって、深雪が見つかりましたから、と、ここへ、誘き出して参れ。又、もし、行った後なら、わしが、小藤次の家へ、忍び込む。近頃は、押込、屋尻切(やじりき)りの修業までしているからの」
「困ったなあ、兄貴」
庄吉は、立ったままで、吉の方へ、首を傾げて、吉の顔を見た。

「何が？」
「引っ込みがつかねえじゃねえか。いうことだけはいっちまったし――さんざ、いわせてから、お前――益満さんも、人が悪いや」
「未だ未だ、庄公は、深雪を救けることばかりにかかっているが、牧の在所が判ったとして、もし、小太郎が、討手に行く時、わしが助太刀せん、と申したら、何うする？　もう一度、弁じるか？　聞いていると、南玉の講釈よりおもしろい、序(ついで)にやってみるか」
「あれだ――若旦那に、助太刀せん時にゃあ――今度は、尻を齧らあ。とにかく、早いところから片付けて――吉、俺、一っ走り行って来らあ」
「お前さん、駕でも云ったら」
「へっ、駕で行くのは、お春じゃないか、私ゃ、振られて行くわいな、ってことは、昔話だ。簪を持ってるぞ、簪を――」
「くれるのかえ」
「何い、ぬかしゃがる。後光がさしてらあ、雨、坊主に、桐、桜。松に来んとは、気にかかる。ささよいやさ、えっさっさ」
庄吉は、走って出て行った。

「おう、戻って来たぜ」
三人は、未だ、寝ていなかった。南玉が、すかして見て
「何うした」
いい終らぬうちに、庄吉は、上って来て
「ま、よかった。今日は、大芝居つづきだ」
そういって坐ると

「お目出度う」
と、いって庄吉は、深雪に、お辞儀をした。
「何うしたい、えらい元気で」
「何な、益満の野郎の鼻を齧るつもりで行ったさ。そして、とんとんと、啖呵を切っちまったら、お前、深雪さんの操を破らさんでも、小藤次を誘き出して、首を締めりゃ、牧の野郎の行方は判るではないか。だから、俺は云ったよ、小藤次が知らんと云や、何うするって」
「成る程」
「するてえと、子曰く、小藤次は囮にして、知っている奴を誘き出すって。矢っ張り、智慧があらあなあ、深雪さん、それで——」
庄吉が、ここまでいうと、小太郎が
「深雪、すぐ行け」
「ええ？　はいっ」
「若旦那」
庄吉が、小太郎の顔を見ると
「人手を借りとうない」
小太郎は、鋭くいった。四人は、そのまま、白けて黙っていた。深雪は、合せ鏡を出して、暗い灯の横で、髪を撫でつけた。庄吉は、俯向いていたが
「師匠、一寸」
南玉が、俯向いて立上った。二人は、表の間へ出て、その隅の、暗いところへ立って
「もし、深雪さんが、行っちまった後なら、益満さんが、小藤次の家へ、忍び込んで、盗み出そうてんだ。大丈夫だが、師匠、俺、すぐ、一っ走り、益満さんのところへ行って来るから、お前、一緒にくっついて行って、俺が駈けつけるまで、どっかで、引っ張っていてくれめえか、すぐだから——」
「心得た。だが、二人とも、親譲りの、強情っ張りだからの」
「頼まあ、俺、じゃあ、行くから」
南玉は、頷いて、元の座へ戻りかけた。庄吉は、ちらっと、二人を見て、土間へ降りると、すぐ、走って出てしまった。
「南玉、志は有難いが、余計なことは、せぬようにの」
「ええ」
南玉は、そう答えて
「深雪さん、大急ぎで、風呂へ、一つ」
「いいえ、このまま、お髪(ぐし)だけかいて、参ります」
「そりゃいかん——」
「そのままでよい、早く致せ。うるさくていけぬ」
「はい——済みました。着物も、このままで参ります」
深雪は、鏡を片づけて、膝を二人へ向けて
「小父さま、長々と、御世話になりました。御恩返しも致しませずに——」
「今、お茶を一つ、いれるからの」
「いいえ」
深雪は、首を振って
「兄を、この上とも、よろしくお願い申します。これで、お別れになるかも知れませぬが、お身体を、おいとい遊ばして——兄様、それでは——行って、参ります」
「うむ」
立とうとする深雪が、俯向いたまま、畳へ、涙を落した。

それと、同時に、南玉が
「いけねえ」
と、泣声で叫んで
「角まで、送らあ。提灯をさがしますから、一寸」
立ちかけると
「これにある」
と、小太郎が、柱にぶら下げてあった提灯を取った。
「では、兄様」
「何を泣くっ」
「はい」
深雪は、立上った。南玉は、提灯をつけた。暗い土間で、もう一度、振向いて、出て行く妹の後姿を、じっと、見ていた小太郎は、二人の足音が消えると共に、唇を噛んで、涙を落した。そして、立上ると、土間へ、跣足のままで飛び下りて、外へ顔を出した。提灯の灯影の中に、二人の歩んで行く姿が見えていた。だが、すぐ、露路の入口を曲ろうとした。そして、その途端、深雪は、振向いたようであった。小太郎は、心の中で
（深雪）
と、叫んだ。そして、湧いて落ちる涙で、胸も、頭も締めつけられるように苦しくなってきた。
「ここを曲って――」
「小父様、ここを、真直ぐに参った方が」
「近いにゃ、近いが、病犬（やまいぬ）がいるで、夜は通れん」
南玉は、左へ曲った。
「一寸これを」
提灯を出したので、受取って
「何か？」
「犬のことを云ったら、犬便、犬のおしっこ、一寸、こう片足を上げて、石の上へ――」
南玉は、軒下の石のところへ立って
「しい、こっこっこ、しいっ、こっこっこ」
いくら経っても、南玉は、小便を止めなかった。
「小父様」
と、先に立って、ゆるゆる歩いていた深雪が、声をかけた。
「ああ、提灯提灯、早く早く」
「何うなされました」
深雪が、戻って来ると
「暗いと、見えん。おしっこで、へまむし入道を書いていたが、何処が、鼻やら、頭やら、かね。はい、お待遠さま」
深雪の、頭の中は、ぼんやりとしていたが、こうして歩いていると、家の中にいる程、悲しくはなかった。そして、諦めがついて来たが、いつかの、小藤次の体臭、手の毛、呼吸の臭を思い出すと、身体中が、寒くなった。
（お母様は、お国許に、無事にいなさるかしら――）
深雪は、もう一度、母に逢って、抱きしめてもらいたかった。母の膝の上で、思いきり、泣いて見たかった。
「ここを曲りましては？」
「その横町は、ももんがあが出る」
「出ても、かまいません」
「その外、三つ目小僧に、幽霊」

南玉のいうのもかまわないで、深雪は、右へ曲った。
（いけねえ、庄公め、何処へ行ってやがるんだろう。うまく小藤次の辺で、逢えばよいが、この様子じゃ、きついらしいからな）
南玉は
「齢をとると、どうも、冷えて、又、小便」
「小父様、妾一人でまいります。道は、存じておりますから――」
「ちょっ、ちょっ、一寸、小便め、びっくりして、潜っちまやがった」
「本当に――あの、くれぐれも、兄を。あのように、かたくなでございますから――」
「かたくななのは、貴女も、そうで、老人をいじめて――」
「何か、いじめましたかしら」
「小便をさせないで、出物、はれ物――」
「でも、早く参りませぬと、もしも、臥(やす)んでしまいましては――」
「何も、そう、周章てて、抱かれに行かずとも――」
深雪は、黙って、足早に、歩き出した。三田の通りへ出ると、暖かい夜とて、通行人が、ちらちらしていた。
（困った。もう、二町と、ありゃしねえ）
南玉は、思案につきた。
「よう」
と、声をかけて、一人の若い衆に、擦れちがうと、侍が一人、小者を二人供にして、足早に歩いて来た。小者は、ちらっと、深雪を見てから、すぐ、南玉へ眼をくれて
「今晩は、師匠」
と、いった。
「ええ」
南玉が、士を見ると同時に、士が、深雪を見て
「珍しい。深雪ではないか」
と、声をかけて、立止まった。
「ああっ」
深雪は、小腰をかがめて
「お変りもございませんで、お目出度う存じます」
「まだ、江戸にいたか」
「はい」
「小太郎は、如何している？」
「共々――」
「その方は、講釈師だの、よく、益満と一緒に歩いていた」
「はい、名越の殿様でございますか。お目にはかかっておりますが、つい、御挨拶も致しませず、手前、桃牛舎南玉と申します、何分よろしく」
「只今の住居は？」
「はい、宇田川町の、こちらの家に」
「小太郎は、牧をねらっておるらしいが、牧の消息を存じているか」
「いいえ、それを――」
「又、上方へ上るのを見かけたと、国許から、参った使が、申していたが――」
「あの、上方へ」

「うむ、国許にも、大騒ぎがあったぞ。小太郎にも話してやってくれ。お為派の重立った者は、悉く切腹した、わしも、いつ何うなるか判らん」
「ええっ」
「然し――いや、急ぐから、又逢おう、邸へ遊びに参れ」
名越左源太は、こういいすてて、行ってしまった。
「お嬢さん、若旦那に、このことを、一刻も早く、さあ」
「ええ」
二人は、一寸、戻りかけた。だが、すぐ、深雪が、立止まって
「小父さんだけ戻って、兄に、このことを知らせて下さいませ。妾は、矢張り、小藤次のところへ参りますから」
「め、めっそうな。証拠人がいぬと――」
「いいえ、小父さんだけで――」
「ああっ、しまった。名越が、何を、いったっけ。牧が、牧が――湯治に行った。ちがう。吉原へ女郎買いに――ちがう。何うも、老人は、物憶えが悪うて――」
「まあ、嘘ばかり――頼みます、妾は、お先きに――」
「お嬢さん。その名越に逢うた人に、逢うて、牧が、何処へ行ったか、聞いたら――名越を追っかけて、その使の名を聞こう。な、これが早道だ」
「小父様一人で行って聞いて下さいませ」
「これもいかんか。そんなら、この手は、何うだ」
南玉は、深雪の前に、大手を拡げた。
「何を為されます」
「通せん坊、通せんぼ」
南玉は、両手を拡げて、足踏しながら、深雪の行方をふさいだ。
「人様が怪しみます」
深雪は、南玉の手を、押除けて、歩き出した。
「困ったなあ、深雪さん。折角の、益満さんの厚意を無にして――」
深雪は、もう、答えなかった。南玉は、もし、手を出して止めたなら、きっと、深雪は怒るにちがいない、と思った。そして、街を眺めて、駕の提灯が二つ、走って来ないかしらと、思った。だが、街は、暗いだけであった。
「ああっ」
南玉が、叫んで倒れた。深雪は、振向いただけであった。
「生爪剥がした。あ、痛っ、痛、たっ」
深雪は、ぐんぐん歩いていた。
「これも利かねえか」
南玉は、跳ね起きて走り出した。
小藤次の家の前に立った深雪は、戸を叩こうとして、手をとめた。何かしら、汚い物へ触れるような気がしたし、叩くということが、自分の操を破るのと、同じような気持がした。だが、それは、ほんの瞬間だけで、すぐ叩いた。返事が無かった。
「今晩は」
三度目は、物音がして
「誰だい」
「今晩は」

足音が近づいて
「誰？」
「お開け下さいまし」
南玉は、心の内で、神に祈りながら、街を見ると、微かに、灯影が、近づいて来た。
（あれであってくれ）
と、思った時、戸の上の方についている小さい窓が、開いて
「誰方？」
「小藤次様は、御在宅でございましょうか」
「親方かい？　貴女は？」
「深雪でございます」
「深雪？」
「お目にかかりとうて、夜更けに参りましたが――」
南玉は、戸に、背をつけて、近づいて来る提灯が、二つなら、益満と、庄吉――。
（もし、そうだったら、袖を掴んでも、中へは入れねえぞ）
と、足を構えていた。だが、提灯は、三つであった。
（駄目だ）
「親方は――今夜、御殿泊りだけど」
そういいながら、下職は、じっと、深雪をすかし見た。南玉は
（しめたっ）
と、心の中で、叫んで
「じゃあ、いくら恋しくったって、仕方がねえ、明日になさい、ね」
「深雪さんなら、御殿へ行って、知らして来らあ、近えから――入って、待っててくんな。おーい。三公っ」
職人が、叫んだ。そして、戸を開けようと、掛金を外すらしく、ことこと音がした。深雪は、宿直（とのい）と聞いて、ほっとした、と同時に
（戻って、明日のことに）
とも、思ったし
（いいや、このまま――なまじ、戻っては）
とも、思って、じっと、地獄へ陥ちるような心持で、物音を、聞いていた。
「さ、明朝」
と、南玉が、肩のところで囁いた時、駕屋の足音が近づいて
「おおっ」
「はっ」
駕人足の懸声がして、駕がとまった。南玉は
（益満さんだ）
振向くと、垂れを上げて、庄吉が
「師匠っ」
「早く、来いっ」
戸が開いた。深雪が、素早く入ろうとした。
「深雪」
益満が、駕の中から、叫ぶと同時に、庄吉が
「お嬢さん」
袖を引いた。南玉が、手を掴んだ。深雪が、身体に力を入れて入ろうとするのを、二人が引きとめた。南玉が

「小藤次は、御殿泊りで、居ねえんで――」
「お嬢さん、小藤次さんに逢いたかろうが、明日になせえ、な、留守に行くにゃ及ばねえ。一寸、話があるんだ」
益満が、駕の中から、声をかけた。深雪は、頭を戸から出した。
「ここで、話ができる。若い衆、一寸の間だ」
庄吉が
「一寸、内所話」
と、云って、戸を閉めてしまった。南玉が
「牧は、上方へ参ったそうで、たった今、名越さんから、聞きました」
「上方っ」
庄吉は、声をひそめて
「吉っ、仲間へ触れりゃ、五日、七日の内に、判らあな。しめたっ」
「七日と踏みゃあ、大丈夫だ」
「ようし、俺、今度、左の腕を、切られに行かあ。休さん、あっしら二人に任しておくんなせえ。さあ、しめた」
「籠屋、女を乗せて、宇田川町へ戻ってくれ」
益満は、落ちついた声で云った。

動揺

「未だ、お眼覚めでは、ございませぬか」
と、いって、お由羅が、もう、朝の化粧を済ませて、斉興の枕頭に坐った。斉興は、枕の上へ両手を置いて、その上へ俯向きになったまま、お由羅の言葉へ、答えなかった。
「お悪いところでも？」
「いいや」
斉興は、上夜具を半分除けて、俯向きに臥たまま
「近頃、とんと、気が弱うなった」
と、呟いた。
「何んぞ、お気にかかりますことでも？」
「うむ」
「あの騒ぎのことでも、お気にかかるのでございますか？」
「いや――」
と、斉興はいったが、お由羅の心の中で
（きっとそうだ）
と、考えた。そして
（本当に、ああまで死ななくてもいいものを、勝手に、切腹したりして――）
と、お為派の死んで行った人々に憐さと――同時に腹立たしさとを、一所（いっしょ）に感じていた。
「将曹様が、お待ちになっております。起きて、陽の目を御覧なされませ。気が晴れます。今日は、からりとした日和で、

開聞岳まで見えます」
　斉興は、未だ、俯向いたまま、肩で呼吸をして
「齢をとった。齢のせいであろう」
「何を仰せられます」
「いいや――夢を見た」
「何か――お気に召さぬような？――そうそう、今日は、妾も、まあ厭な夢を見まして――この歯がすっかり、上も下も抜けてしまった夢をみて、ぞっとしたら、眼がさめましたが、未だ、歯の根に夢が残っているような――」
「わしは、高崎の夢をみたが――」
　斉興は、そう云って
（将曹も、やりすぎる）
　と、思った。と同時に、すぐ
（然し、やるなら、あれまでやらぬと、何を又、仕出かすか知れん――だが、今度のことで、わしは、隠居せずばなるまいが――したくない――未だ、したくない）
　と、考えた。そして
「将曹を、これへ」
　と、云って、頭を上げた。
「眼が血走っております」
　お由羅は、心配そうに覗き込んだ。
「昨夜は、ろくろく眠らなんだ。斉彬も、不孝な奴じゃ」
「では、将曹様を、これへ？」
「うむ」
「それでは、お顔の水を、こちらへ運ばせましょう」
「口だけ嗽（すす）げばよい」
　お由羅が、出て行った。斉興は、又元のように枕の上へ、額をつけながら
（将曹は、不逞の徒を、根絶させると申したが――あれだけやらぬと、彼奴の命が危いから――それは、将曹として尤もだが、わしの命を取ろうという奴もないであろうから、わしの命令としては、少し、殺しすぎたと、世上から見られても、仕方あるまい）
　そう思っている時、侍女が、黒塗の浅い器と、薩摩紅硝子のコップとを持って来た。別の女が、同じ塗の桶に入れた水と、手拭と、房楊枝（ふさようじ）とを持って来て、枕頭へ置いた。
「よし、わしがする」
　と、斉興が、手を振った。そして、起き上って、房楊枝をとった時、お由羅と、将曹とが入って来た。
「早朝から――急用か」
「はっ」
　将曹は、敷居際へ平伏してから、枕頭へ出て来た。
「何んじゃ」
　斉興は、房楊枝をつかいながら、聞いた。お由羅が、コップに水をとった。
「処分すべき人は、悉く、処分を終りましたが、井上出雲が、唯一人、捕まりませぬ」
「引渡さんのか？」
「何んと掛合いましても、福岡では、知らぬと突張っております。それのみでなく、宇和島殿と共に、閣老を動かして、いよいよお上の御隠居を、強制するようでございます」

「強制？」
と、云って、唾を吐き、水で漱ぎ終った斉興が
「わしにも、それなら手段がある」
お由羅が、長煙管を、斉興に差出した。
斉興は、それを吸いながら
「第一、無理に押しつけられる性のことではなかろうがな、将曹」
「それが――例の、密貿易の書類、あれで、詰腹を切らそうと、某は、そう観ておりますが――」
斉興は、暫く、喫っていたが、吐月峯へ、雁首を叩きつけながら
「奇怪な計をやる」
と、呟いた。
「それから――例の、軽輩の秋水党、こいつ奴が、又二の舞を演じて、某らを討取ろうと――」
と、云って、お由羅の顔を見て
「お部屋を第一番に斬ろうと、よりより集まっておるとのことにござります」
「誰々じゃ、その軽輩等は？」
「名が判りませぬが、西郷とか、有村とか、大久保などの輩であろうと存じます」
斉興は、眼を閉じていた。
「なかなか、重立った者を処分したくらいで、治まりそうにもござりませぬ」
斉興は、煙管をお由羅の方へ差出したが、未だ、黙っていた。
「それで――某、一存でござりまするが、早々、一旦、江戸へお戻りになりましては――御家督のこともあり――恐らく、近々、閣老より、御呼立ての沙汰があろうと考えますが、その前に、御出府なされましては？――」
「秋水党は、幾人くらいおる？」
「さあ――詳しいことは、何うも申し上げられませぬが、若者の重な奴は悉く入っておる模様でござります」
「そして、妾をねらって――妾をねらっておる者は？」
「悉くの奴が、ねらっております」
お由羅は、歯の抜けた昨夜の夢を思い出して
（不吉な）
と、感じた。そして
「何れ、近々、出府するものなら、早く為されましては？」
斉興は俯向いていたが
「そうか」
と、云って、眼を閉じた。
「そんなに、若い奴等が、団結しておるのかのう」
三人とも、若い人々の意気、武芸、学問を知っていた。
「そうか」
と、斉興が、又呟いた。
「四面楚歌か」
「いいえ、左様ではござりませぬが」
と、将曹が云いかけると、斉興は、肩で溜息をして
「仕方があるまいな」
「仕方があるまい、とは？」
「家を譲ることじゃ。斉彬は大事でないが、家は大事じゃ。

若者は殺せぬ――斉彬は、そんなに、若者に人望があるのかのう」
斉興は、しみじみと云った。お由羅は、俯向いて、煙草をつめた煙管を、膝へ置いたままにしていた。

「西郷」
と、声をかけて、庭の雑草の中を、有村俊斎（後の海江田信義）が、入って来た。吉之助は、何か書物（かきもの）をしていたが、俊斎を、ちらっと、上眼で見て、又、書きつづけていた。有村は、縁側から上って、机の側へ坐った。そして
「何を、書いている？」
吉之助は、筆を置いて
「福岡から――出雲守からの便りを聞いたか？」
「聞かん」
「福岡（斉彬の弟、黒田美濃守長博）、宇和島（伊達遠江守宗城）、南部（南部利剛）の三公と、阿部伊勢とが、内々談合してのう、近日、斉彬公御世継と決まるらしい」
「本当か？　それは？」
俊斎は、睨むように、西郷の眼を見た。
「出雲守は、そう申している」
「本当かも知れん。なら、目出度いことだ。赤山殿の魂魄（こんぱく）も、浮ぶことだろう――ところで、皆が集まっているが、出向いてくれんか」
「何処へ」
「韃靼冬（だったんとう）へ――御世継は、御世継として、何うしても、われわれ秋水党は、お由羅、将曹を初め、奸物を斬らんと、勘弁ならん――」
「誰々が、集まっている？」
「大山（綱良）、樺山（資之）、などだが、一緒に来てもらいたい」
「行こう」
「死屍に鞭うつということは、士を恥かしめる上において、この上無しとされているが、死屍を掘り起して、曝すなどとは、斉興公はともかく、将曹め、主君を恥かしめて悔無きの徒だ。かようのことが、世上へ洩れた時、何う恥辱を受けるか、己のみでなく、主を辱かしめ、家名を辱かしめ、八つ裂きにするより外に、申しようのない奸悪の徒だ。俺は、玉藻前を思い出した。お由羅という奸婦は、公の世子を呪い殺すどころか、あいつ、妊婦の腹を裂いて、赤子の生胆を取りかねまじき奴じゃ。美女には、得てしてああいう惨忍な、鬼畜がおる。今度のことも、あの女の指図かもしれん。わしらの企てが破れたなら、或いは油煮、鋸引きに処せられるかもしれんが、それを覚悟の上にて、彼等を殲滅（せんめつ）させるつもりだ」
「それでは――」
と、吉之助がいって、机の上の書類を、仕舞いかけた。
「何を書いていた？」
「斉彬公が、御世継となれば、一つ建白書を出そうと思うてな、下書をしていた」
俊斎が、手を出して
「一寸、見せてみい」
「ほんの項目だぞ」
俊斎が頷いて、受取りながら

「大久保は、何うしておる？」
と、聞いた。
「とんと、逢わん」
と、云いながら、西郷は、はだけた着物の前を合せて、大刀をとった。
「彼奴、真逆、裏切りはせんであろうな」
「さあ」
「判らんか」
「判らん」
「時によれば、彼奴を、血祭に上げるか」
「大久保を血祭にするくらいなら、犬の首でも斬ろうがましじゃ」
俊斎が、紙を繰って、目を当てた時、垣根の外から
「吉之助」
と、人声がした。俊斎が
「大久保だ」
と、呟いて、書類を、膝の上へ置いた。
「俊斎もか」
と、云って、大久保が、垣根を跨いで、入って来た。
大久保は、笑いながら
「韃靼冬へ、出向くのか？」
と、俊斎の、険しい眼へいった。
「うむ――貴公は？」
「俺は、やめだ」
大久保は、こういって、二人のところへ上って来た。そして、俊斎の膝の上の、表紙を読んで
「見せてみい」
と、手にとった。西郷が
「行こうか」
と、俊斎に、声をかけた。
「行こう」
「待て、一寸、話がある」
と、大久保が、止めながら、読んで行った。
一、知政の当初、国政を誤りたる専横の徒を、貶黜（へんちゅつ）すべき事
一、お由羅の方以下の奸人を処分する事
一、近藤崩れ（お為派崩れ）に、流謫（るたく）したる人々を、速に召喚する事
一、兵政を改革し、範を水戸に、取る事
一、天下の気運に乗じ、幕府と雖も、天朝のお為とすべき事
一、異国交易の儀、配慮深かるべきこと
「成る程」
大久保は、こう云って、書類を、机の上へ置いて、立っている西郷に
「坐れ」
と、云った。そして
「有村、韃靼冬に、集まっているらしいが、人の余り近寄らぬところへと思うて、選んだにしては危いのう」
「そうか」
有村は、冷やかに答えた。

「名越の別荘へなど、何処に、犬がかくれているか？――思慮が無さすぎる」
「人間思慮のありすぎる奴も、おもしろうない」
「西郷」
と、大久保は、西郷の大きい、光る眼を、じっと凝視めながら
「大殿の今度の御処置だけで、天下に、恥を晒したに、又候騒動を持上げて、斉彬公のお心にもとるなど、思慮があると思うか、無いと思うか。子は父のために痩す、という言葉があるが、斉彬公は、大殿のために、何うしてその非を匿そうかと努められるであろう。それに、奸人を処分せよ、などと、大殿の非を再び天下に晒し、斉彬公の不孝を天下に示し――それで、斉彬公の意にかなう家来か――」
「西郷、行こう」
と、有村が云った。西郷は、黙っていた。
「斉彬公に、建白書などと、釈迦に説法だとは思わんか。筆がちぢんで書けぬことはないか？　俺は、ただ、斉彬公のお意に、これ従うという方だ。俺達の考えること、することは、公にとって、百も御承知のことで、俺は、ただ、動かずして命を待つ、ということにしておる。俺達のすることは、ただ、俺達虫けらの虫休めで、決して、公のお為になることではない」
「俺はな、見ん恋をしている。殿に、早う逢いとうて、それは、拙い恋文だのう。そんなものでも書かんと、気がすまん。大久保、では、何うしたなら、斉彬公のお気に入るか教えてくれるか。お前のように、俺は、じっとしてはおられんからの」
「産業立国」
「ああ、それか？――それもいい、然し、斉彬公のお志は、天下にもあるからのう。産業立国だけでもない。それは、基礎だが――大久保の好きなことだが、それだけでもない」
と、西郷が、云った。
「貴公は、天下をとることを考え、俺は治めることを考えているが――取ってから治めるものか、治まった国が、天下を取るものか――わしは、近頃の天下の動揺も知っていると共に、当家の動揺も知っている」
「貴公の論は、了えんでいかん」
と、有村がいって
「行こう」
と、勢いよく立上った。西郷は、有村に答えないで
「のう、大久保、斉彬公が、仰せられる、天下のため、ということは、今を指すのではあるまいか。俺はいい日の下に生れ、いい主の下におると、この心が躍り上っている。古くば、関ヶ原、近くば、木曾川治水、積年の鬱憤を、晴らすべき時節じゃ」
大久保は、又、建白書の草案を、膝の上で披げていた。
「そのためには、非常手段を取ってもよいと思うてな――」
西郷は、大久保が、膝から眼を放さないので
「大久保」
と、言葉をかけた。大久保は、頷いて――だが、俯向いたまま

「手段とは？」
「益満に、昨日、手紙を出した。あいつなら、やると思うが――江戸中を荒し廻って――人を斬るなり――押込もよい、強奪もよい。とにかく、江戸中を騒がせて、三田の御邸へ匿れるのじゃ。上役人から、引渡せと申して参ろう。知らんと答える。これが、度重なると、そうでなくてさえ、斉彬公を奉じて、倒幕をしようという輩の多い時、幕府は黙っていまい。人数を向けよう。それを口実に、戦うのだ。倒幕の挙は、口火さえつけば、一挙に爆発するであろう。そして、いよいよ戦となれば、先ず、幕府には金子がない。当家には、調所の残しておいた三百万両の非常準備金がある。それから、江戸は四方から攻めかかれるが、当国は一方口じゃ。そして、天子を奉じて、錦旗を翻すなら、戦はそれまでであろう。斉彬公は、未だ、倒れんとする幕府を何んとかして生かそうと、考えておられるらしいが――それで、俺は、天下の気運に乗じ、幕府と雖も、天朝のお為とすべきこと、と、穏かに書いておいたが、俺は、先手を打って――脱藩しても、口火を切るつもりだ」
「大久保」
　大久保は、顔をあげて
「三百万両で、幕府が倒せるか？」
「天下の勢いということもある」
「もし、天下が、徳川へついたなら？」
「そんなことはない。少くも、天下は二分してしまう」
「それでも、三百万両で、事足りるか」
「それは判らん」
「足りぬ時に、何うする？」
「何んとかなろう。そう一々、先のことを考えていては、何もできん」
「斉彬公は、その、先の先まで、考えておられるではないか？
　調所は、一生かかって、薩摩のために、三百万両を積立てた。常人にできぬ腕だ。だが、斉彬公は、日本国中のために、三千万両、三億万両の富を作ろうとしておられる。それが判らんか？」
「判らん、判らん」
　と、有村が、大きい声を出した。
「判らんなら、聞かしてやろう」
　大久保は、有村の方を向いて、有村の顔を睨みつけた。そして
「斉彬公のため、斉彬公のためと、斉彬公の御意に反いても、為だというのか」
　大久保は、いつになく、熱していた。有村も、大久保の顔を睨みつけていた。
「高崎殿への、御書状のことを聞いたであろう。将曹、平の如き人物に対してでさえ、人には何か、取柄のあるものゆえ、喧(やかま)しく申すなと仰せられた。幕府に対しても、このお心で、接しておられる。犯さずして、救いたい、というお心だ」
「救えるか？」
「日本中が、富めば、幕府は自然に倒れよう。と、申しても、判るまいが、当家の力にて、日本が富めば、幕府を倒さずとても、天下は、当家へ集まってくる。今日の問題は、幕府を

倒すか、倒さぬかということでなく、日本の進歩を、異国と同じところまで、引上げるか、引上げぬかだ。公が、何故、硝子を製造し、紡績機を造り、反射炉を作り、大砲を鋳造し、異国の科学に、いそしんでおられるか、判るか？　専心、産業の開発に、力を尽していなさる意が、那辺にあるか、判るか？　戦はいつでも起せる。民の力を養うことは、そうは行かない。幕府も、敵であると共に、異国も敵だ。公は、四方、八方のことを考えて、その根本を、国力の充満と考えておられる。三百万両の金の如き、眼中に無いぞ。謂わんや、お由羅や、将曹の如き、蠅にも如かぬ。その虫を相手に、二十人の、三十人の集まって、一体、何を斉彬公のおためにしようと、申すのだ。有村、それが、忠義と申すことか？　忠義とはそれだけか？――俺は、お由羅が憎い。憎くて耐らんぞ。然し、こうまで考えてくると、俺は、公の仰せのままに、御指図のままに働くより外に、本当の公への忠義というものはないと思うのだ」

大久保が、言葉を、これで切ってしまったが、有村は、何も云わなかった。西郷が、頷いて

「よく判る。理窟は、そうにちがいない。だが、俺は、俺の出来ることからして行こう。お前が、理窟を考えている間に、俺は、同志を糾合しよう。人、各々、性に従って、長短がある。俺は、今更、科学者にもなれん。ただ、名も、金も要らん。赤心をもって、公のため、天下のために働いてみる」

「そうか」

大久保が、こう云った時、女中が

「旦那様が、お召しでございます」

と、云って来た。西郷が、去った。二人は、黙って、明るい陽ざしの庭を眺めていた。暫くして、西郷が出て来て

「有村」

と、云って、刀を、刀掛けに置いて、坐った。

「大殿が、急に、御出府になるぞ」

「駄目か」

有村が、叫んだ。

「同志の者に――御出府のこともあるし、御家督がきまるし、斉彬公の御代になってからのことにしては、と、申して参らんか。今から、用意しても、追いつくまい」

有村は、立上った。大久保が

「その方がよい」

と、云った。有村は、西郷に目礼したままで、足早に、出て行ってしまった。

「西郷、なまじなことをしては、当家に、人種が無くなるぞ」

「斉彬公と、貴公とさえ残っておってくれたなら、何んとかなるであろう。俺は、何んでも、頼まれたら、断れんからのう」

と、云って、西郷が、笑った。

「益満とは――又、乱暴者を選んだの。何をするか知れん、彼奴は」

「困ったら、貴公が、尻拭いをしてくれ。俺は、大久保のように、じっと、考えておれん性だ」

西郷は、そう云って、笑った。

韃靼冬へ集まっていた若い人々は、西郷が来ないので、雑

草の深い庭へ出て、草の頭をむしってみたり、縁側へ寝転んで、美少年の噂をしたり、懐から、日本外史を出して読んだり、それから、七八人の人々は、見取図を書いて、何う襲撃したらいいかを話していた。
町から、登り道になって、だんだん淋しくなってくる韃靼冬には、二人の見張が出ていて、同志以外の者の来るのを見張っていた。その一人が
「誰か、走って来よる」
と、木の間の中で叫んだ。一人が
「俊斎だ」
と、じっと、凝視めていた。
「俊斎だ」
俊斎は、眉を歪めて、口を開いて、喘ぎながら、右手で袴を掴んで、左手で刀を押えて、走って来た。一人が、林の中から
「水」
と、叫んだ。俊斎は、ちらっと見たまま、走り抜けようとした。
「水」
それは、合言葉であった。俊斎は、答えないで、走り抜けてしまった。
「待て」
見張が、叫んで、走り出ると共に、俊斎が振向いて
「たわけっ」
と、睨みつけて怒鳴った。
「然し、合言葉を」
と、見張が、云ったとき、俊斎は、もう、七八間も、走ってしまっていた。
「自ら、盟約を破って——有村は、いつもあれだ」
見張が呟いた。
「乱暴者は、仕方がない」
二人は、森の中へ、又入った。そこから、名越左源太の別荘、韃靼冬の屋根が、木の間に見えていた。俊斎が、その門をたたいて
「水っ——有村だ」
と、叫んだ。すぐ、門が開いた。庭の人々も、縁側の人々も、一斉に、有村を見た。そして
「吉之助は？」
と、聞いた。
「吉之助どころか、大殿は、明日にも、御出立になるぞ」
庭の人々も、座敷の人々も、俊斎を見、俊斎の方へ寄ろうとした。そして、俊斎が、座敷の方へ歩いて行くので
「集まれ、皆上れ」
と、叫んだ。
「西郷吉兵衛が聞いて来よった。俺は、それを聞いて、吉之助んところを出て、柴山へ寄ってみたら、矢張り、そうだと、いっていた」
「洩れたか」
と、一人が、絶叫した。そして
「吾々の襲撃を怖れてであろう」
俊斎も、人々も、立ったままで、丸くなっていた。柴山が
「座につけ、周章ててはいかん」

と、云った。人々は、刀を引きずりながら、それぞれのところへ坐った。
「洩れたものなら、もう捕吏(とりかた)が来ておらなくてはならん筈だ。洩れたのではない」
「では、何うしてだ」
「吉之助は、何故来ん」
「大久保は？」
人々が、口々に喋(しゃべ)り出した時
「俺は、一足先に、お暇する」
と、云って、立った者がいた。人々が見ると、伊牟田恭平であった。
「俺は、脱藩して、途中に待受けて、お由羅を討つつもりだ」
静かな言葉であった。

人々は、暫く、恭平の顔を、じっと、眺めたままで、黙っていたが、有村が
「俺も、そう考えている」
と、いった。
「それがいい」
と、人々が叫んだ。
「俺も行こう」
一人の若者が、黒い刀をとって、立上って叫んだ。
「厭だ」
恭平が、睨みつけて
「俺は一人でやるんだ。束になって、やりたい奴は、同志を集めてやるがいい」

大山綱良が
「何をいう、伊牟田」
「吉之助が何んだ。吉之助が、来んで、事を挙げられんなら、吉之助が死んだら、何うするのだ。俺は、俺一人でやる。お先に、御免蒙る」
「有村、西郷は、何うした？　伊牟田、待って、話を聞いてからでも、遅くはない。濫りに、結束を破ると、俺が、捨てておかんぞ。坐れ」
大山が叫んだ。
「大久保が、丁度来よって、例の産業立国論を――忘れていた、忘れていた」
俊斎は、高い声を出して
「斉彬公の御世嗣は、決定したらしい。大殿の御出府も、このことのためらしいが――」
「誰に聞いた？」
「吉之助に――」
「吉之助は、家におるか？」
「居る」
「そして、彼奴は、何う申している。何故、ここへ来ん」
「斉彬公の御代となっても、奸臣は、罰されまい。奸臣を処罰することは、大殿の非を、世上へ示すようなものだ。謂わんや、奸臣を討つの、斬るのと、既に、近藤崩れがあった上に、又、家中に紛擾を起しては――」
「それは、口賢(くちさか)しい、大久保の意見ではないか？」
「正義のために、奸臣を斬るに、何を、世上を憚るのだ」
「出府の時日を、確めて、一挙に立とう。西郷が、反対なら、

反対でよい」
「そうだ」
人々は、口々に叫び出した。有村が
「俺も、途中でお由羅を討とう。恭平、どっちが早いか、やろうではないか」
伊牟田は、それに答えもしないで、暫く黙っていたが
「見渡すところ、その議論に於て、大久保に優るものなく、その明断に於て西郷に優る者なく、謂わば、これ、烏合(うごう)の徒だ」
「何？」
「俺はとにかく、一人で、江戸までの途中で、元兇共の一人でもいいから、討取りたい。又、京都の模様を見て、討幕の仕事にも、手を出したい。碌々、薩南の一隅で、議論倒れに日を送っている時節では、無いようだ。俺は、身分も低いし、身軽だし、こんな時には、便利じゃ。これから、西郷を訪うて、そうして、上方へ立とう。俺一人が抜けたとて、髪の毛一本抜けた程にも、感じまい」
恭平は、こういって、立上った。
「大久保を斬れ」
と、一人が、叫んだ。
「あいつが、吾々を、動揺させる元兇だ」
「馬鹿っ、動揺する貴様の尻でも、斬っておけ」
と、樺山が、叫んだ。
「何うするんだ。立つのか、立たんのか」
と、一人が、叫んだが、誰も、何んとも云わなかった。恭平が静かに出て行った。

巷騒

「何を、騒いでいるのか？」
と、小太郎が呟いた。深雪は、自分の着物、頭のものなどを、膝の前へ、揃えて
「さあ」
と、表の方を見た。
長屋の人々が、七八人――女も、男も、軒下に立って、不安な顔をし、口早に、喋っていた。
「その黒船って奴は、お前、何んしろ、船の中から、煙を吐くんだそうだ。煙を吐いて走る船なんてものが、あるものけえ。魔物の仕業だわな」
「そいつが、品川へ来るのかえ？」
「来るよ。来たら、何をしゃあがるか判らねえ、何んしろ、ギヤマンで、赤いものを飲んでるって噂だが、こいつは、人の血だねえ。天狗が、人を裂くっていうが、人を裂いて、血を吸うから、だんだん鼻が高くなるんだ。だから、あの毛唐も、鼻が高えや」
「じゃ、荷造りでもして、そろそろ逃げなくちゃ――お梅、お前、浦和の孫太郎のところへ、すぐ逃げて行け。何をされるか知れねえからのう」
「そうだ、ちゃんと、用意しておくのに、越したことはねえ」
長屋の人々が、そうした噂をしている間に、表通りを、荷車に、家財をつんで、通る人があった。
「若旦那」

と、一人が、表から
「黒船が、参りよりまして、江戸中、灰になるかも知れませんぜ」
「黒船が、浦賀へ来たことか」
「へえ」
「あれは、通商を求めに、参ったのじゃ」
「通商って？」
「交易じゃ」
「交易？」
「うむ」
「交易って、何んでござんす」
「交際を致そうと申すのじゃ」
「へえ――物を云いますかい？」
「人間ではないか」
「然し、人を取って食うんでしょう」
「そんなものではない。日本人より、遥かに、利口な奴で、只今申した黒船の如きは、帆前船は、風をたよりで動かすが、あれは、石炭を焚いて、風が無くても、一刻(いっとき)に、十里、二十里と走る」
「本当ですかい」
「本当じゃ」
「落ちついていて、深雪さんみたいな、別嬪は、飛んだことになりますぜ」
　小太郎は、返事をしないで、側へ積み上げた着物、陳べた刀の類、調度を、眺めていた。
「師匠」
と、誰かが、南玉が、来たらしく、声をかけた。
「黒船の話を聞いたか？」
「黒船か、うむ、
　黒船に、赤い毛をした奴が乗り
　青い眼をして、白い歯を出す
とは、何んなものだの」
「品川へ来るって話じゃないか」
「うむ――
　碧眼、紅毛が来たとても
　シャスポー、エンピール、何んのその
　岩をも通す、桑の弓
　皆朱の長柄を、掻込んで
　白銀造(しろがねづく)りの、太刀佩(は)いて
　馬上、ゆたかに、桃牛舎
　南玉師匠が、乗込めば――
はい、若旦那、乗込みましたよ」
南玉は、踊りながら、入って来た。
「遅かったのう。何うであった？」
南玉は、手を、横に振って
「駄目、駄目」
深雪が、眉をひそめて
「困りましたな、お兄様」
「何処の、古着屋も、古道具屋も、皆、黒船騒ぎで、品物を買うどころか、あべこべに、売って逃げようとしておりましてな」

南玉は、そう云って、懐から、小さい風呂敷を出して
「しかし、十五両がとこ、慥(こしら)えて参りましたよ。若旦那、又、厭な顔をなさるかも知れませんが、席亭から、借りた金で――牧の行方は、庄公の仲間も、骨折ってくれてますから、追っつけ知れましょうが、何んしろ、旅には路銀、これんばかしの道具や、着物を売った金では、心細うがすからな、いくら、南玉、張扇で、叩き出すからっても、先ず、持っているに越したことは、ございやせん。さ、お納めおきを願います」
「南玉、今生では、返却できんかも知れぬ。いつもながら、何んと申してよいか――」
小太郎は、手をついた。
「若旦那、それがいけねえ。水臭いって云うもんだ。な、南玉は、ちゃんと、算盤玉を弾いての仕事だ。ようがすかい。若旦那が、牧の野郎に逢う。ちゃん、ちゃんとやって、首尾よく行けば、帰参でげしょう。そうしたなら、この金に、利子をつけて――ね、深雪さん、倍にして、返して下さるでしょう」
「いや、その時には、南玉、百両にしても、礼を申すが、まず、望みの無いことじゃ」
「斬死すると、仰しゃるのでしょう」
「うむ」
「その時のことも、ちゃんと、心得てまさあ。その刀が、青江助次で、何う安う踏んでも、三十両。こいつだけ拾ってもどりゃ――え、若旦那、こんなものだ。十五両、おつりがくらあ。安心して、お使いなせえ」
小太郎は、微笑して
「そうか。この刀をのう。そうか」
と、刀を見て
「安うても、七、八十両にはなろう。死んだなら拾って参るがよい。今、改めて、師匠に譲ろう。そうじゃ。庄吉には、小刀の貞治信綱を譲ろう。成る程、よいところへ、眼をつけた」
「困ったなあ。今のは、謔でげすよ」
「いや、志はよく判っておる。礼ができんで、苦しゅう思うていたが、教えてもろうた。わしが、斬死したなら、二人で、大小を分けてくれ。それでは、明朝、早々に、出立するとしようかの」
「ところで、お上じゃ、浪人を募集していますね。支度金十両くれるって、一番、金だけもろうて、ずらかったら？」
「それもよかろう。南玉、そちが、応募してみては」
「小父様、張扇で、お対手仕る」
「やっとうが出来るなら――口だけじゃ、何うもね」
「と、仰しゃいましては」
と、深雪が、笑った。
「ささ、この扇、扇がお役に立つならば、叩いてお金が、出るならば、益満さんから、借りないに――」
「南玉、何んと申した」
南玉は、きょろきょろと、四方を見廻して
「庄吉、何うした？」
と、叫んだ。
「南玉っ」

「出鱈目を、一々、若旦那。本当に、益休と、つきまぜてえや」
小太郎は、俯向いた。隣長屋が、荷物を造りかけたらしく、物音が、床板へ響いて来た。

当節、世間で、恐いもの
安政地震に、神田火事
水戸の親爺（烈公）に俺が嬶（かか）
浪人、ころりに、鼠取り
人の女房を口説く時
女郎の手管に、鈴ヶ森
オランダ、アメリカ
オロシャ船

流しの唄が、後方に、聞えていたが、庄吉には、気がつかなかった。
（あいつの、懐中物を――）
小太郎と、深雪とが、日数の定まらぬ旅へ立つ路銀に、物を売るのを見て、庄吉は、決心した。
（仕納めだ）
と、思った。
（いいや、手はじめだ。右手は、いつ、仕事仕舞いをしたか？――そうだ。若旦那の、印籠が、お仕舞いだったが、左手は、初めてだ。左手のかんで、何のくらいやれるものか？――仲間の奴も、見てやがるだろうが、庄吉、一世一代の仕事の仕始めの、仕納めだ。今までだって、俺は、悪事をしたことはねえが、今度の金も、お二人への金だ）

庄吉の蹤（つ）けて行く人は、町家の旦那らしく、結城紬に、雪駄の後金を鳴らして、急いでいた。往来の人々は、誰も彼も不安そうに、急ぎ、口早に話し合っていた。家の中で、荷造りしているところが、所々にあった。
庄吉は、右の軒下を、足早に――だが、目立たぬように急いで、その男を追い抜いてしまった。そして、小半町も先へ行って、くるっと振向いて、その男の正面から、俯向きつつ歩いて来た。
久しくしなかった仕事に、心が顫えた。初めて左手を使うということに、不安があった。だが
（俺が、仇に使おうって金じゃねえ。難儀していなさる、お二人を救おうって金だ。なあ、観音さん、阿弥陀さん。御利益を垂れんと、眼が潰れるぜ」
とんと、軽く、ぶっつかっておいて――首からかかっている紐を切っておいて、懐中物を抜く――それは、左右の手を使っても、困難な仕事であったが、庄吉は
（逃げられさえすりゃいいんだ）
と、すぐ、追われるのを、覚悟していた。そして、俯向いて

当節、世間で、恐いもの――
と、首を振りながら、右肩を上げて、商人（あきんど）の正面から、突っかかろうとした時、商人が
「ああっ、もしっ」
と、叫んだ。庄吉が、眼を上げると、吉公の後姿が、行きすぎようとしていて、商人が、それへ、手を出して、追い縋ろうとしていた。庄吉は

（吉だっ）
と、思った瞬間
（俺の仕事の邪魔を――そうじゃねえ、吉め、此奴を、俺がつけていると知って、俺の代りをしてくれやがったのだろう）
と、判断した。
「もしっ」
商人が、顔を、少し、蒼白めさせて、そう吉に呼んだ時、庄吉は、商人に、どんと、ぶっつかっていた。
「おう、危えっ」
庄吉は、よろめいて、同じように、よろめいている商人に
「まごまごするねえっ」
「済みません」
口早に、いって、もう七八間も離れて、振向きもせずに行く吉公へ
「待てっ」
と、商人が、叫んで
「泥棒っ」
駈け出そうとする商人へ
「この野郎っ」
庄吉は、左手で、袖を掴んだ。

「泥棒たあ、何んでえ」
町人は、庄吉の手を掴んで、振切りながら
「そいつ、捕まえてくれっ」
と、叫んで、走り出した。庄吉は
（誰か、品物を受取った子分の奴がいるだろう）
と、四辺を眺めたが、それらしいものが居なかったし、吉公が、渡した様子も無かった。庄吉は
（掏ったものを、持っていちゃ、駄目じゃねえか）
と、吉松の後方へ、怒ってみた。それと同時に、自分を助けてくれた吉松へ、役人の指でもかけさせたら、仲間へ顔出しが、出来んと、思った。
（俺は、金さえ、お二人に渡しゃ、少々、痛められてもいい身体だが、吉を痛める訳にゃあ行かねえ――余計なことをして、心配させやがる）
庄吉が、走り出した時には、往来の人々が、町人の方を眺め、町人が
「そいつ」
と、叫んで、指さす方を、眺めていた。両側の家の中から、若い男が、走って出たり、顔を出したりして
「巾着切か」
「泥棒か」
と、叫んだり、眼を見合せたりしていた。泥棒なら、捕まえて袋叩きにしてもよかったし、巾着切なら、掏られた奴が、虫の好く奴か、好かん奴かによって、追っかけて、取戻してやってもいい、と、若い衆は、考えていた。そして、周章てて、走って行く町人を見ると
「いい齢をしやがって、掏られる奴は、べらぼうってんだ」
と、呟いて――それでも、何か起るか、興味をもって、眺めていた。往来の人々が、町人と一緒になって走ったり、佇(たたず)んだり――街は、足音と、どよめきとで、騒がしくなりかけた。

（吉め、早く、逃げりゃいいのに――）
庄吉は、振向きもしないで、落ちついて行く吉松に、感心をしたり、心配をしたりしながら、走って行った。
「待てっ」
町人が、叫んで、吉の肩を掴んだ。二三人が、二人の側へ立った。庄吉が、袖をひらひらさせて近づくと
「返せっ」
と、町人が、半分の恐怖と、半分の薄気味悪さとで、こういうと、吉は、にやりと笑って
「これかい」
懐中から、大形のいんでんの懐中物を取出して
「気をつけな」
と、云って、町人の足下へ、ぽんと、抛(な)げ出した。そして、四方の群集へ
「何い、見てやがる」
と、云って、睨みつけた。群集が、さっと開いた。吉が、その中を、静かに出て行くと、足早に、露路の中へ、入ってしまった。町人は、細い紐を、ぐるぐる巻きつけてある紙入を、足下から拾って、懐中して
「何うも、皆さん、お騒がせ致しまして」
と、群集にお叩頭した。
「まあ、よかった」
と、一人が云った。庄吉は、微笑して
「本当に、よかった」
と、云った。一人が
「もしもし」
と、町人の歩きかけたのを、呼びとめて
「中を改めてみんと、お前さん」
と、注意した。
「ああ、何うも――」
と、町人が周章てて、紙入を出して、中を覗くと
「いけないっ――彼奴、何処へ行った。畜生っ」
と、叫んで、群集の中を、掻き分けて、出て行こうとした。二三人が
「何処へ行きゃがったんだろう」
と、四方を見廻した。庄吉は、ぶらぶら歩きながら
「吉公、何処へ行った。油買いに、酢買いに、か」
と、呟いた。

（吉の奴――度胸もできたし、腕も、ようなったわい）
庄吉は、すっかり安心して、微笑すると同時に
（いい兄弟分を、持った）
と、思った。吉松の入った袋露路には、仲間の一人がいて、隣町へ、すぐ抜けられるようになっていた。そして、そこへ逃げ込んだなら、何処へ抜けて、何処へ落ちつくか、それは、仲間の約束が定まっていた。庄吉は
（しかし、俺(おいら)一人で、そう合点していたって、もしかして――）
と、吉松に、ちらっと、不安を感じながら、横町へ曲った。
「庄吉」
「おおっ、兄弟」
「俺とな、仲間との餞別だあ」

吉松は、もう、姿を変えて、職人風で、手拭を、頭から冠りながら
「世間様、どさくさしていなさるから、稼ぎ時だ」
と、笑って、重い財布を、庄吉の掌の中へ渡した。
「お前、俺の蹤けてたのを、知っていたのかい？」
「兄貴、長いことする仕事じゃあねえ、お前、ぷっつり、この道あ、よしたと考えていたが――危え、左手一本で、昔のように、上手な仕事が出来るもんけえ。俺、見かねたから、手伝ったが、兄貴、もうよしねえ、いいことじゃねえ。本当に、俺あ、お前が、もうよしたと思って、喜んでいたんだぜ。益満さんに、この間逢ったら、その内、庄吉は、何んとかしてやろうと、仰しゃったが、益満さんに、縋って、人間らしく、行ってくれ」
「うん――判ったよ――忘れねえよ」
庄吉は、そういって、顔を上げて
「有難うよ、もらっておかあ。皆に、よく礼を申しといてくんな。もしかしたなら、兄弟、これが見納めになるかも知れねえ」
「仕方がねえ、やるところまで、やってみな。牧の便りも、もう来るだろう。お嬢さん達ゃ、その金さえありゃあ、立てるんだろう」
「判るかえ」
「それんくらいのこと判らねえで、何うする」
「そうかえ」
庄吉は、笑いながら、薄い涙を、眼瞼へ出していた。
「お前が死ぬのが早いか、俺が早いか、江戸も、黒船のために、煙になるって、評判じゃあねえか」
「そうだってのう、じゃあ、もらって行くぜ」
「達者で、行きな」
「牧の野郎の、便りを頼むぜ」
「いいとも――」
庄吉が、歩きかけると
「道中で、ひょんな気を起しなさんな」
と、吉が、又注意した。
「心配しなさんな」
「お嬢さんにもな」
と、吉が、笑った。
「戯談（じょうだん）、云うねえ」
庄吉が、振向いて、笑うと同時に
「あばよ」
と、吉松が云って、足早に、歩いて行ってしまった。庄吉は、その後姿へ、一寸、振向いて
（有難う）
と、心の中で叫んだ。そして、懐中の金の重さを計ってみて
（七八十両はある）
と、思うと同時に、小走りに、走り出した。
（路銀は十分だ。深雪さんっ――着物を売るにゃあ当らねえ。若い娘が、着物を売るなんて――他人のことでも、庄吉は、見ておれない性なんだ）
庄吉は、笑いながら、走った。

寄席の、軒下に
一世一代此の世の名残り、桃牛舎南玉、長講二席相勤候
と、天地紅の、びらが、貼ってあった。中へ入ると、汚い敷物の上に、七八人の客が坐っていた。
「大分、騒いでおりますな」
と、木枕をいじりながら、隠居らしい人が、隣りの男へ、声をかけた。
「本当にねえ、芝を逃げ出すくらいなら、芝で生れねえのがいいや」
軒下で、怒鳴っている寄席の若い衆が
「いらっしゃいっ」
と、声をかけると、暖簾(のれん)を、頭で分けて、一人が
「おうおう、集まって来てやがるぜ、おけら共が――」
「よう、禿亀(はげかめ)、相変らず、のんびりしているな」
「うむ、今夜は、南玉と二人っきりだろうと思ったら――」
と、云った時、又
「いらっしゃい」
と、呼ぶ声がした。
「来るぜ。胆の据ったのが、うようよといるらしいのう」
「何をっ。手前のは、胆が、からっきし無えから、怖くねえんだろう。お前んとこの長屋の奴は、青梅に逃げたってね」
「うむ、えらく、腹がへった」
一人は、そういって、帳場を振向いて
「売子の娘は居ねえのう」
「危えからって、青梅へ行ったのだろう」
「今朝っからの騒ぎで、お前、商売は出来ねえし、こんな時だ、一つ、品川の女郎屋へ行ってやれ。女郎は、何っかへ、皆逃げっちめえやがっただろう。大広間で、一つ、一人で暴れてこまそと、八つ山まで行くと、抜身の槍だ。成る程、物騒だ、と、木戸を抜けて、入口へかかると、お前、でんでん、太鼓を叩いて遊んでやがらあ。嬉しくなっちまった。江戸っ子だねえ。臍の曲ってるところが、おもしろいじゃねえか。黒船が来るっていうのに、お前、わざわざ品川へ行って、遊んでいるなんざ、これ、人間業じゃあねえぜ」
「ここへ来ている奴等も、一寸、変ってるのう」
「俺は、お前、嬶(かかあ)に、こんな晩、妾を見すてて、寄席へ行くなら離縁してもらいましょう、と、いわれてね。ぽかんと、撲って、走って来たが――南玉の野郎、一世一代、この世の別れとは、何んだろう」
「長い馴染だから、実は、俺も嬶に叱られながら、やって来たが、おかしな奴だからのう」
町内で、顔馴染の人々が、二三十人にもなってきた。茶を飲んだり、臥たり、話をしたり――そのうちに、一人が、手を叩いた。二三人が、つづいて叩いた。客は、時々、未だ入って来て、お互に、挨拶しながら、世間の騒ぎと、江戸っ子だということと、南玉を助けてやろうということとを、又話した。
南玉が、狭い板廊下の向うから、俯向いて、湯呑をもって笑いながら、足早に出て来た。そして御叩頭(おじぎ)をしてから、高座へ上った。人々が、一斉に、拍手した。一人が
「師匠、首でも、縊(くく)るのかい？　この世の名残って――」

南玉は、湯を呑みながら、御叩頭をして
「ただ今、その訳を――」
そうして、湯呑を置いて、張扇で、ぽんと一つ、見台を叩いて
「さて、かようの晩の御入来、一方ならぬ御贔屓のせいと、ひたすらに、専ら、感涙に咽び泣いております――ええ、そもそも、南玉、一世一代、これが見納め、聞き納め、笑い納めの、泣き納め、たんだ、納まらないのは、胸の内――」
ぽんと、自分の胸を叩いた。
「そも、過ぎつ年、逝きし頃――この前、黒船の参りました時、憶えもござりましょうが、三田は、薩摩の御邸で、夜を徹しての、能狂言、謡の声も、晴れ晴れと、鼓の音も、ぽんぽんと、それで、すっかり、附近の町家は、落ちつきまして、御門の前へ、朝になると、大きな膏薬、はがしてみると、その下に、天下の大出来物、と、書いてあったと、この時の、大出来者島津斉興が、今も猶大出来者か、或いは又、大不出来か、ちらり、ほらりと、雨夜星、琴平湯の、浴槽にて、弁慶床の店先にて、人の噂に聞きつらん。例の、お由羅に丸められて、昔時の俤や、今、何処にかある。忠勇義烈の勇士をば、させもさせたり、しもしたり、三千と三百八十人、並べておいて、腹を切らした――とは、嘘じゃのめの傘で、ちっと披げすぎたが、当時、評判のお話じゃ――ところで――」
南玉は、湯を一つ飲んで、羽織を脱いで、後方へすてると、腕まくりをした。
「ところが、ところで、このところ――拙、南玉が、あら不思議、この御家騒動の後ろ楯、万事の采配を振っている――えへん、ただの講釈師とは、講釈師がちがう――お聞き及びの、呪い殺し、あれは、兵道の名誉、牧仲太郎の仕業であるが、これを討つのが、仙波小太郎、これを助けて、桃牛舎南玉、いよいよ、牧を討取ろうという段取りになったが――」
と、云って、右手の指で、丸をこしらえて、突き出して
「これが無い。そこで、考えたのが、あの表のびらだ。桃牛舎南玉一世一代、此世の名残、長講二席、多年の、お馴染甲斐で、きっと、引っかかって来やがるだろう、かかって来たなら、しめ子の兎、一人頭に、二三十文ずつ、絞り上げても、路銀の足しになると――恐れ入ったる智慧袋、呆れ返った無心沙汰――」
南玉は、こう云って
「香奠をやると、思しめして――」
と、いうと、高座から、前へ、ひらりと、飛び降りた。そして、扇を右手に、左手は、掌を披げて
「はい、お頼み申します」
「何あんだ――畜生、人が食ったことを、吐かしゃあがって――」
と、一人が、笑った。
「いや、おかしいとおもったよ。然し、師匠が、浪人者を見てるって話は、聞いているよ。なあ、江戸っ子だ。嘘でもいいや」
「洒落た事をするぜ。師匠らしくていいや、ほらっ――」
誰も、笑っていた。そして、財布を出して、南玉の廻って来るのを、待っていた。

「本当に、師匠、行くのかい？」
南玉は、真面目な顔をして
「ここ、二三ヶ月の内に、瓦版になって出ますよ。はい、有難う、はい、有難う」
と、云いながら、人々の間を廻って、銭を手から袖へ、扇から袖へ――そして、一廻りしてから
「厚く、御馴染様に、御礼申し上げます。さあて――まだまだお早うございますゆえ、かく、お銭の集まりましたる上からは、一つ、黒船おっ払いの、お呪いとして、南玉一世一代の踊を、御覧に入れます。後の世までの、語り草――いやあーっ、てん、てん」
と、口で、拍子をとって、尻を端折(はしょ)った。そして、鉢巻をしめて高座へ上って、手をかざして、延び上りながら
品川沖を、見渡せば
ハリスや、ハリス
帆をハリス
煙をハリス、黒船が
来たっ、こりゃ、ばかりで
腰が抜け
見たっ、こりゃ、ばかりで
胆つぶれ
と、唄いながら、出鱈目に、踊り出した。

益満は、掛物さえかかってない、小さい置床を枕に、仰向きに、寝ていた。二人の浪人者が、一人は、濡縁から、庭――それは名ばかりの、一坪あるなしの庭へ、足を出して、腹這っていたし、一人は、両腕に頭をのせて、仰向いていた。
「世の中に、退屈しているくらい、辛いことはないのう」
一人が、こう云ったが、二人とも、黙っていた。暫くして、益満が
「小太郎のように、一心に、牧を狙っておれる奴は、幸だ」
と、呟いた。
「近日、又、牧を捜しに立つらしいが、助けてやらんでよいのか」
「それを考えているが、俺の路銀を、南玉に皆くれてやったから――」
「あの、よぼ講釈師が行ったとて、何になる」
「俺は、俺で、又、名越から借りもできるが――俺は、ついでに、京都へ行ってみようと思っている。江戸が騒ぐよりも前に、京都の天地の方が、面白そうだ。吉田松陰が捕えられたし、佐久間象山が捕えられたし、斉彬公の御代になるのを待って、錦旗を乞うて、一戦仕出かすには、何うしても、京都へ一度行かんといけぬ」
益満が、こう云った時、長屋の外で
「この店に、益満って人は、居るかい」
飛脚屋の声らしかった。一人が
「ここだ」
と、云って、起き上ろうとした時、富士春の声で
「ええ」
と、聞えると、下駄の音がして、格子が開いた。
「お前さん、赤紙付の手紙だよ。一寸、印をついておくれな」
富士春は、湯戻りらしく、襟白粉を濃くして、七つ道具を

片手に抱えて、右手に、手紙を持って来た。
「おいきた」
一人が、受取ると、益満が、矢立を開いて、朱肉を印へついて、手紙を、裏返すと
「うむ」
と、云った。そして
「おい」
と、赤紙を、富士春に渡して、封を切って読んで行くと、微笑して
「あはははは、西郷め、大きな図体を、持て余して、居やがるぞ」
そう云って、披げたままの手紙を、二人の前へ投げ出した。
二人は、少し読んで行くと、笑顔になって
「面白いが、ちと、手荒いの」
「御用盗とは、よく名づけた」
富士春は、鏡台の前で、鬢(びん)を掻き出しながら
「何んの手紙？」
一人が
「女、童(わらべ)の知ることならず」
と、台詞もどきに云って
「行かずばなるまい」
益満は、手紙を、引きとって、巻き納めながら
「調所(ずしょ)の残しておいた金が、かようの役に立とうとは、不思議なものじゃ。一つ、京へ上って、四五千両せしめて来るか」
そう云いながら、手を延して、付木をとって、煙草盆の火をうつすと、手紙の端へ、火をつけた。

「ああ、今、そんなことをしては、髪が、大変――」
と、云って、富士春は、片手で、髪を押えながら、片手で、鏡台を、左へやって、二三尺も、避けて、頭の上で、片手を振った。
「俺も、同じようなことを考えていた。こんなことを考えるのは、俺のような乱暴者ばかりかと思っていたが、人間の考えというものは、一刻早いか、遅いかだ、のう。俺が、これを始めたなら、幾人、俺もそう考えていた、という奴があるかしれん」
益満は、手紙の灰を見ながらいった。
「何かい、商売でも、あるのかえ」
「うむ」
一人が
「姐御(あねご)、って、商売だ」
と、いうと、富士春が、振向いて
「いいねえ」
と、笑った。益満が
「明日にも立とう」
「立とう、とは？」
「上方へ」
「ええ？」
富士春は、周章てて、肩を入れて、襟を直しながら
「又、急に――」
と、益満の方へ、膝を向けた。
「一月、膝っ小僧と、寝てりゃいいんだ」

「いやだよ――妾ゃ。厭(いや)だよ」
富士春は、煙管へ手を延して、煙草をつめかけた。一人が
「三人では、然し、心細いの」
「同志は、いくらもある」
益満は、富士春のつんとした顔へ、笑いながら
「此奴(こいつ)との流しも、いざといえば、こういう時のためと、人の勝手元から、家内の模様を見ておいたが、案外早く、役に立つ時が参った」
「そりゃ、何んの話だえ」
「女、童の知ることでない」
「変な台詞、よしておくれよ――妾ゃ、厭だよ――何処までで、くっついて行くよ」
「それもよかろう」
益満は、そう笑って
「それでは、上方への路銀を、一つ、名越で、いたぶって来るかな」
と、呟いた。
「お前さん」
と、富士春が言葉を鋭くして
「妾を、棄てるつもりなのかい？」
「時と場合、義理と道理とによりましてはな」
「妾ゃ、戯談にいってるのじゃないよ。庄吉に――棄てられて、又――」
富士春は、涙声になっていた。
「ささ、その嘆きも御尤も」
益満が、仮声(こわいろ)をつかった。二人の浪人は、腕組をして、天井を眺めていた。
「た、たよりないったら――お前も、茶化してばかりいて、頼りないし、妾ゃ――妾ゃ、この齢で――」
そういうと、袖を目へ当てて、泣きじゃくった。一人が
「お春さん――益満は、そんな、薄情者じゃない。安心して――」
「頼りのうて――この齢をして、これから先、何うなるかと思うと――心細うて」
「わしも、金が無うて、心細うて――」
益満は、富士春の真似をして
「あったら、白粉を、三文方台なしにして――はい、行って参じます」
と、富士春の側を通って、出ようとした。富士春が
「お前さん」
と、延す手を、素早く避けて
「金を、小判というものを、たんと土産に致します。泣かずに待っていやしゃんせ、チチントンシャン」
と、唄いながら、出て行ってしまった。

同じ道に

斉興公の供の中へ加わって、京都の藩邸へ着いた月丸は、湯から上ると、庭へ出て、月を眺めていた。

（わしの地位として、齢として、手柄は十分に立てた。然し――）

月丸は、月の明りの中に、黒々と聳えている叡山を見て

（綱手を、手にかけて――それから、七瀬も――）

と、思うと、初めて契った叡山の夜が、悔恨と、なつかしさとを混えて、想い出されてきた。

庭の立木の、朦朧（もうろう）としたのが、何んとなく、二人の怨念を含んでいるように感じられた。

（叡山へ登って、八郎太の、あの墓の中へ、綱手の鏡を、埋めてやったなら――）

月丸は、己の功名のために利用はしたが、好きであった綱手のために、あの世において、いい目を見せてやろうと、思った。

（鏡――そうだ、当時は、肌につけていたが、いつの間にか――何処へ行ったか――探せば出て来るであろう）

月丸は、二人で登って行った時のこと、お堂のことを思い出すと

（そうだ、あの坊主、あの坊主）

月丸は、悲しい、呪わしい叡山の記憶の中に、黒く、口惜しさの現れてきたことに、腹が立ってきた。

（一太刀でもいい、斬ってやったら――斬って斬れぬことはあるまい）

そう思うと、一つは綱手のために、一つは、己の面目のために、叡山へ登ってみたくなってきた。

（明後日、出立とすれば、中一日、その間には仕事もあるし、重役に願って、五日七日の暇をもらったなら――そうだ、外の者とはちがうのだから――）

月丸は、そう思いながら、部屋へ戻って来た。若い人々は、旅の疲れもなく、何処へか遊びに出たと見えて、一人も居なかった。入ると、何んとなく陰気で、黒い天井に、二人の血が滲んでいるように感じられたし、薄暗い部屋の襖の向うの暗闇の中には、綱手と、七瀬とが、血塗れになって、立っているようにも感じた。

（気の弱い――急に、ここへ来て二人のことを、こんなに思い出すなど――不覚だ――何を二人のために憐むのか？　父が、お為派なら、わしは、或いは、人の刃にかかって、死んでいるかもしれぬ。何方（どっち）が善で、何方が悪か、誰が判る？　所詮は、武士というものの辛さだ）

そう思う片方から

（わしは然し、一旦脱走して、帰参を許されたものの、それは、許されて元々だ。綱手を失っただけが損だ）

とも、考えた。そして、暫く、俯向いて、腕組をしていたが

（そうだ、あの鏡――）

と、思った。そして、小さい、旅行李を出して、蓋をとった。その中には、懐中薬だの、折本の、道中細見、手帳、守り札、着換え、というようなものが、入っていた。そして、

その底に、印籠の側に、薄い絹でくるんだ、綱手の形見の鏡が、入っていた。
薄い絹は、少し、黒くなっていた。それは、鏡をしまっていた懐へ流れ込んできた綱手の血に、染まったところであった。
月丸は、鏡を手にとって、自分の顔を、写してみた。そして、じっと、睨みつけていたが、ふっと
（もしかしたなら、父が――父も、叡山へ、来てはいないであろうか）
と、思った。父に似た自分の顔に、父に似た曇りと、疲れとの出ているのを、月丸は、感じた。

月丸は、兵道家の子として、兵道を学びはしなかったが、その少しを、知ってはいた。仙波八郎太のために、叡山の上の、修法場を荒された牧仲太郎は、いつか又、叡山で、修法を――それは、最初の行よりも、三倍の行をしなければならなかった。
（父は、叡山へ来るかも知れぬ――自分が、京へ入ると共に、急に、あの山へ行ってみたくなったのは、何かしら、父の霊と、自分の霊とが、ふれているのでは、ないであろうか）
そういう風にも、思えてきた。
（そんなことは、あるまい――父は、よく、人の霊魂の、不思議を説くが、自分は、七瀬の夢さえ見たことがない――魂の不思議――そんなことがあるであろうか？）
月丸は、父の修法の効験のことを考えると、十分に、あるとも思えたが、自分が、二人の女を殺したのに、何んの不思議も、起って来ないのを考えると、無いようにも思えた。だが、こうして、叡山のことを、考えていると、何かしら、自分が、叡山へ行ったなら、不思議な事が、起るような気もした。そして、そのことが、不安なようであり、怯けるようであり――行ってみたいが、何んとなく、恐ろしいようにも、感じられた。
（何を、怯ける？――行こう――きっと、行く）
月丸は、そう決心した。そして、鏡を、絹へ包みかけて、もう一度、自分の顔を、写してみて
（よく、剣難の相とか、水難の相とか、ということがあるが――）
と、じっと、自分の顔を見ていると、何かしち、いつもよりも、険しいものが、眉に、眼に現れていた。
「剣難の相」
と、呟いて
（対手から、理不尽に、斬られるようなことは、そう、人間には、起らない筈だ。己の心から起したことによって、剣難がくるものとすれば、わしの、近頃の心は、何んとなく、自分を斬り、人を斬るという心だ。これが、剣難であろう。気の短くなったのが、眉間に、現れている）
そう、月丸が、感じた刹那
（綱手の呪い）
と、頭の底深く、閃くものがあった。
（綱手の鏡で、そういうことを、考えるのは――それが、霊の仕業というのであろうか）
月丸は、鏡の裏を、眺めた。蓬莱山が、浮彫りにしてあっ

た。その図を見ると同時に、胸が、じりっと、苦しさに、圧迫された。
（嫁入の品として、求めたのであろうに）
と、思うと、その苦しさが、悲しさを混えて、だんだん強くなってきた。
「愚にもつかん」
と、いって、月丸は、頭を振った。そして、鏡を、手早く、行李の中へ、入れてしまった。
足音が、遠くから、入り乱れて、響いて来た。人々が、戻って来たらしく、話声と共に、近づいて来た。そして、襖が開くと
「一人で？」
七八人の人々が、入って来て、どかどかと、坐って、刀を、座に置いて
「いよいよ、天下、動乱かのう」
一人が
「月丸」
と、呼んで
「頼山陽の倅を存じているか」
「三樹か」
「三樹三郎が、捕えられた。今、聞いて参ったが、京都の天地は、今にも、覆（くつがえ）りそうだぞ。おもしろうなって来たわい」
と、いって、酔っているらしく、刀を、どんと畳の上へ、響きを立てて、突立てた。
おなあーじ、ツンテン
庄吉は、大きい声で、歌を唄いながら、湯殿へ入ってきた。その後方から、南玉が
「根に出た朝顔が、かね」
蔓の先にて、いがみあい、テンシャン
湯殿の中も、湯槽の中も、湯気と、乏しい光とで、薄暗かった。庄吉は、唄いながら、戸棚の上へ着物を脱ぎすてて、右手の切口へ、手拭を、巻きつけて
「御免よ」
と、湯槽の中へ降りた。黒の人影が、うごめいていて、話が、立籠めていた。南玉が、庄吉のあとから
ぽこぺっぽ、ぺっぽっぽ
風呂は、鉄砲で、ぺっぽっぽ
船は、黒船、おそロシヤ
はい、皆様、御免なさいっ
一人が、南玉を、すかして見て
「お早い、お着き様で――お前さん、江戸の衆ですかい」
と、聞いた。
「はいっ、はいっ、はい、はい、はい、左様でござい」
「一寸、お訊ねしてえが、江戸は、大丈夫でござんすかの」
「え、え、え？　大丈夫とは、そも、これ如何に」
「いえ、黒船が――」
「あっ、その話か、猫、鳶に、河童の屁だ」
「と、申しますと」
「一寸、お顔を、見せてみな」
「ははあ、人相を見て、それで？」
「成る程、多少、延びているな」

「旅のことで、多少は」
と、云って、男は、頤を撫でた。
「ははは、いよいよお延び奉ってやがるな」
南玉が、湯にかかりながら、喋っているのを見て、庄吉が
「あんな噂は、お前さん、何んでもござんせんよ、交易をしたいってんで、やって来やがるっんで」
「交易って、貴下――」
「おいでなすったね」
と、又、南玉が口を出して
「交とは、それ、交合の交、交際の交、陰陽相交わるの形であって」
「取引さ、日本と、商売がしてえって」
「易とは、これ、八卦屋の漢語だ。唐では、八卦見のことを、易家というな。八卦屋が、二つに分れると、四い屋になって、四い屋と、八卦屋とが合併すると、ハッケヨイヤ」
「うるせえな、師匠」
「師匠が二つに分れると、既ち二升、冠婚葬祭、総て、酒は二升ときまっている。物の道理は、恐ろしい」
「わしの娘が、江戸へ嫁づいておりますので、そいつが心配で、心配で」
「ああ、あの娘は、お前さんのか」
「御存じで？」
「江戸の娘なら、大抵、知っている」
「いいえ、嫁で」
「嫁なら、猶詳しい」
「お父っあん、こいつあ、狂人だから、相手にしなさんな。江戸は、心配することはないよ、黒船が来たって、交易のためで、何も、人を取って食おうの、何んのって、そんな――」
と、いった時、入口から
「庄兄い」
と、いう声がした。
「誰でえ」
「俺だ。仁吉だ。軒下の笠を、見かけたんで、飛んで来たが――」
「判ったか？」
「うむ、牧って人あ、大阪へ行っての、お国許から、戻りの、御殿様に逢ったってまでは判ったが、それから先が、判らねえってことだよ」
庄吉は、湯槽から出た。

「若旦那」
庄吉は、浴衣の前を押えたまま、入って来て
「今、仲間の若い奴が」
と、云いかけると、小太郎が
「仁吉か」
「お聞きになりましたか」
「いいや、すぐ、お前のところへ行ったが」
深雪が、じっと、庄吉の顔を、眺めていた。庄吉は、片手で、帯を巻きながら
「牧の野郎のことでござんすが、仁吉の云うにゃ、大阪で、斉興さんに、逢ったらしゅうござんすが」
小太郎が、頷いた。

「それから、何うしたか、野郎、一向に姿を見せませんが、多分、蔵屋敷の中に、おるんじゃないかって、こういう知らせで、ござんすが」
「忝(かたじけ)ない」
「それで――」
「それで、判っておる」
「お判りになりますかい、行く先が？」
「うむ」
「何うして？――何うして、判ります？」
「叡山で、待てば、よいであろう」
南玉が、入って来て
「おお、暑い」
と、云って、肌脱ぎのままで坐った。そして
「矢張り、道中は、庄吉をお連れになった方が、ようがしょうがな」
「何うして、お判りになります？」
「それはの、聞くところによると、兵道家は、修法場を汚された時には、その汚れを払い、諸神に、謝罪するため、三倍の修法を、その場所にて致すものであるそうだ。牧が、大阪へ行った以上、父のために汚された叡山へ行くのは、必定だ。ただ、すでに行ったその戻りに寄ったのか、これから行くのか、もし、すでに行った後とすれば、恐らく、牧は、大阪を立てば、国許に戻るであろう」
「成る程な」
庄吉は、俯向いて、呟いた。南玉が
「講釈の本にも、そう書いてある。牧、牧直(まきなお)しに叡山登山の条(くだり)、ての」
「いろいろと、忝ない。急げば、明後日には、京へ入れようが、その足で、とにかく、叡山へ参ろう」
「では、若旦那、大津から坂本へ出まして、そこから」
「そう」
小太郎は、頷いて
「父の墓参も致したいし、義観と申す、命の恩人にも、礼を申したい」
「お兄様」
と、深雪が
「お姉様の、お墓は？――何処に、ござりましょうか」
「綱手か――墓はない」
「では、埋めましたところは？」
「知らぬ」
深雪は、俯向いた。四人は、暫く黙っていた。深雪が
「妾、お姉様の、笄(こうがい)と、肌襦袢とを、持って参っておりますが、それを、お父様の、お墓の横へ――お墓を立てましては？」
「姉の墓よりも、己の墓のことを考えい。今度の旅は、死出の旅と、同じであるぞ」
「はい」
「庄吉に、吾々と一緒に、葬ってくれるよう、頼んでおけ」
「はい」
庄吉が
「あっしらの骨も一緒に、その義観って、ずく入(にゅう)に、頼んじまおうじゃござんせんか。四人心中の墓ってね。一人二人は、

面倒臭えや、師匠も、死ぬだろう。もういい齢だから」
「うむ、齢と一度、相談してきめようかの」
「俺、とにかく、牧の鼻を、齧るんだ」
庄吉は、右肩を、聳かしていた。

「旦那へ」
と、駕屋が、瀬田の橋の真中――小さい森が、橋と、橋とをつないで、湖の中へ突き出ているところで、肩をかえながら
「旦那あ、御武家じゃございませんけ」
と、聞いた。
「うむ、町武家と申してな、江戸の流行物(はやりもの)じゃ」
「へえ、町武家？」
「黒船以来、町人の武家ができた」
「えらい騒ぎだそうでございますな、黒船って奴で」
「京は、何うじゃ」
「京は旦那様、うっかり、夜も歩けやしません」
「辻斬りか」
「いいえ、辻斬りは、出ませんが、生首に躓(つまず)くんで」
先棒が、じっと、益満を見ていたが
「旦那あ、何んだな、俺の睨んだところでは、関東の隠密だな」
と、云って、首を傾けて
「そうでござんしょう」
「そう見えるか」
「そりゃ、人を見て、飯を食ってるんでござんすから、それくらいのことは、こう睨むと、外れませんよ」
「俺も、そうらしいと思った。旦那、用心なさいまし、京は、そら、志士って奴が、のさばり返っていて、お上(かみ)の者と見ると、ばさりと、やるそうでしてな。この間も、そのために、彦根のお侍が、大分、お入りになりましたが、何うも、江戸も、京も、物騒になりましたな」
「うむ」
「さ、行こうか」
駕屋は、手拭を、棒鼻へかけて、肩を入れた。
「あれが、叡山か」
「へえ」
益満は、一日先に立って行った小太郎が、何うしたか？
（道中一本筋で、何っかで、逢う筈だが）
と、思いながら、駕の中で、腕組をして、凭(もた)れ込んで、じっと、叡山を、眺めていた。
（先に、叡山へ行ってみるか、それとも、京へ寄って、牧の行方を聞いてみるか？）
益満は
（助太刀をしてやりたいが、俺の仕事を、まず片づけてから――小太郎一人を殺したとて、牧一人を討ったとて――それは、天下の形勢に、何んでも無いことだ。俺は、今、天下のために、働かねばならぬ。天下には、今、俺でないと出来ぬことがある。西郷でないと、やれぬことがある。天下の勢いも勢いであるが、それを導くものは、人物だ。大義、親を滅す。小太郎のことは、余力で為すべきだ）
益満は、叡山から、眼を放した。そして、そのまま、じっ

と、眼を閉じて、考え込んでいた。
「はい――はい」
駕が、誰かに、声をかけて、通り抜けたらしかった。その刹那
「おやっ」
と、いう声がした。益満が
（南玉に似た声――）
と、感じた時、駕の後方に、走って来る足音がして
「益満さんでは？」
益満が、駕の中から、振向くと、南玉が
「矢張りそうだ」
と、いうと、すぐ、後方へ
「若旦那」
と、叫んだ。益満が
「駕屋、とめろ」
と、云った。

「駕屋、橋詰で、待っていてくれんか」
益満は、行手の方を指さした。二人の駕屋は、深雪を、じっと眺めてから、囁き合って、去って行った。
「ところも、瀬田の唐橋で、手前に大津とは、紀妙寺（きみょうでら）、へい、今日は」
南玉が、御叩頭をして、後方を振向くと、庄吉が
「何うも――今日、逢えるか、明日、逢えるか」
「お久しゅう存じます。お変りござりませぬか、その節にはいろいろと――」
と、深雪が、丁寧に、手を膝へおろして、挨拶するのを
「小太、一寸来い」
益満は、大声で、小太郎へ叫んで、欄干へ凭れかかった。小太郎が、静かに近づいて
「いろいろと、世話をかけたらしいが」
「大津から、叡山へでも行くのか」
「そのつもり」
益満は、頷いて
「わしは、真直ぐに、京へ入る」
南玉が
「いかがでしょう、一寸、叡山参詣は？　四明から見下ろすと、京の町中は一望の下に」
益満は、それに答えないで
「牧の消息は、判っているのか」
「大阪らしいが。とにかく、叡山へ行って、牧が、修法を済ませたか、済ませぬかを見届けた上で、いずれとも、考えようと思う」
「警固の手配などは？」
「判らぬ」
「わしを、頼みにはしておらんであろうな」
「しておらぬ」
小太郎は、そういって、微笑した。
「女だの、仇討だのと、申すものは、小太、ちょいちょいとして、ちょいちょいと、済ましてしまわんといかん。男子一生の精魂を傾けて為す程のことではない」
庄吉が

「旦那、お春は？」
益満は、見向きもせずに
「無事だ」
と、云って、小太郎に
「わしの、今度、京へ上るのは、小太」
益満は、声を低くして
「倒幕の機運が近づいたからじゃ」
小太郎は、じっと、益満の眼を凝視(みつ)めて、頷いた。
「江戸で入用の金をな、取りに――何んと、庄吉」
「へい」
「あの調所が、一生かかって積立てた金が、我等同志の役に立つとは、不思議なことではないのか。調所が、自害せなんだなら、今でも、手がつけられんが――こう考えてくると、巾着切一人の手柄だの」
「益満さん、その手柄に免じて、一つ、小太郎さんを、お助け下さいませんか」
「暇があればの。わしは、今夜、三条小橋の池田屋で泊る。七日、十日は、逗留しておろう。万一の時には、知らせるがよい。当にせんとな」
小太郎は、頷いた。
「深雪、わしと一緒に、京へ来るがいい。ついておっては、兄の働きの邪魔になるぞ」
「はい」
「忝ないが、いつも申す通り――わしは、他人の世話にばかりなって、つくづく武士に愛想のつきているおりだ。せめて、牧を討って、それを申訳に残して、妹と二人で、あの世へ――」
「たわけたことを申すな」
と、益満が、怒鳴った。
「男子の尊ぶべきところは、その意気にある。百難に屈せぬ意気にある。貴様の心は、素直であるが、少しの余裕もない。素直は、一つの善であるが、善のみでは、この世に処して、値打ちが無いぞ。善を行うに勇、勇を行うに明。よいか。勇は、勇そのもののみで、値打ちだぞ。その勇がよし、悪を行うにしろ、悪に徹するだけの勇力が、もしあれば、その悪は、万人嘆称の悪だ。いいや、悪に対する嘆称ではなく、悪を徹底せしめたるその勇気を、嘆称するのだ。貴様の勇に、これだけの覚悟があるか？　庄吉の手を借りるのは済まぬ、とか、仇討の者が、女に手を出しては、汚れるとか、孔孟の弟子みたいな考えで、この乱れんとする当節に、物の役に立つか？」
「そう云ったって、貴下――」
と、南玉が、口を出したのを
「黙れ、駄講」
益満は、退けて
「もし、牧を、首尾よく討ったとしたなら、その後、一体、小太は、何を目当として、暮して行く。島津に対して、いかにも、牧は悪逆の徒じゃ。これを誅するのは、善にして、勇なるものであろう。然しながら、天下の形勢は、島津をして、薩南偏僻(へんぺき)の、田舎者のみにしておかなくなったぞ。徳川に代って天下をとるか？　取らぬか？　よし、取るにしても、取らぬにしても、島津は、今や、天下の島津だ。世界万国に対

して、将軍よりも、斉彬だ。よいか、吾々、島津の家来は、島津家一家に対して、忠であると共に、天下に対して、大いになすべき使命があるのだ。片手に牧を討って、片手に、天下の蒼生を救うのだ。黒船の来襲、これを、小太、誰が救う？」

「手前の踊で――」

と、南玉が云って

瀬田の橋から見渡せば

矢走の船も、帆をハリス

と、口吟(ずさ)みながら、それでも、その眼は、情熱をもって、益満を凝視していたし、その耳は、一語を、一句を、頭の中へ、滲ませていた。

庄吉は、欄干へ片手をのせて、その上へ顎を置いて、清冽(せいれつ)な水を眺めながら

（うめえことをいうわい）

と、感心していた。深雪は、時々、通りながら、じろじろ眺めて行く旅人の眼を避けて、庄吉と同じように、湖水を見ながら――だが、その心は、益満の話を聞きながら

（本当に――）

と、思ったり、そう思うと、小太郎の、父に似た頑ななところを、早く、益満のように、捌けてくれたらと、思ったり、俯向いている小太郎を、眼の隅で見ては

（何んとか、云えばいいのに）

と、兄の肩をもったり――していた。

「わしは、徳川倒壊のために、西郷吉之助等と、力を合せて、江戸表にて、事を起そうと企んでおる。その起す事の第一が、小太、驚くな、押込強盗をするのじゃ」

四人が、一斉に、益満の顔を見た。

「悪事であろう。押込は――然しながら、ここから、倒幕の火の手が上って、それが、天下のためになることなら、即ち、勇を振って押切るの一手だ。悪にして、大善。大道、大義に通じるものじゃ。牧一人を、終生の目当として、斉彬公のお心の百分の一にも当らぬことに、一生を賭すなどとは、少しちがうぞ。わしが、貴様を、救おうともし、救わぬかもしれぬと申すのも、この大きい目当の邪魔になるかならんかが、その岐(わか)れ目だ。判るだろうな、小太」

「よく――よく判る」

と、小太郎は、大きく、頷いた。

「判るか」

益満は、微笑して

「男子、天下の難に赴く、事の成否を論ぜず、善悪を問わず、ただ、勇躍して、死地に入るのみだ。元亀、天正に謳われた、薩摩隼人の意気を、今や、再び、天下に示す時だ。小太郎、嘗ては、身の軽輩に生れたことを嘆じたが、今日では、軽輩であるゆえに、仕事の仕甲斐があると申すものだ。馬鹿老中、馬鹿大名のできぬ仕事を、素町人並に扱われていた軽輩が、しでかすのだ。千載一遇の時期とは、かくの如き時世だぞ。京へ入ってみい、天下の浪人が、風を切って歩いている。五年前に、京都所司代が一睨みすれば、ちぢみ上っていた浪人共が、あべこべに、所司代を脅かしておる。五年後には、何うなるか？　俺は、それを思うと、じっとしておられん。小太、共々に力を合そうではないか？　牧を討つのはよい。然

し、討たずともよい。天下のことも、死をもって当らなくてはならん。同じ死ぬなら天下のために死ね。今の時世に於て、只一つ正義は、大義は、徳川を倒して、王政を復古させることだ。よし、破れても、天下対手にして、破れるのは、男子の本懐ではないか？　謂わんや、天下の勢いとして、吾等がよし破れようと、必ず後継者の起る以上、男子として、武士として、この志に赴くのは快心事ではないか。のう、卿等、碌々人によって事を為すの徒、燕雀何んぞ、大鵬の志を知らんや、という語があるの――」

「子曰(のたまわ)くにございましたかね」

「これで別れよう。深雪、わしと、京へ行って、小太郎の便りを待て」

「はい、でも――父の墓へ、一寸――」

「墓へ詣って父が喜ぶか、天下のために働いて、父が喜ぶか、女子などの知ったことか。わしの指図に従え」

小太郎は、心の中で

（益満にあずけおけば、家の名ぐらいは、残るであろう――それがいい）

と、思った。

「深雪、益満に、万事任せておけ」

「はい」

「庄吉」

と、益満が呼んで

「深雪の供をして参れ」

「ええ――然し、若旦那を――」

「それでは、小太郎について行け」

南玉が

「一向、手前には、御指図がございませんが――」

「貴様、この水の中へでも潜っていろ」

南玉は、首を一つ振って

「手前は、講釈師で、水芸師ではございません」

「若旦那御一人じゃあ、ね――師匠、俺(おいら)が、若旦那にくっついてくよ。深雪さんは、益満さんに、あずけときゃあ、大丈夫だ。二人で、一番、牧の野郎の睾丸(きんたま)へでも、ぶら下っちまおうじゃねえか」

「鼻を齧るのはよしたか」

「お嬢さん、命があったら、又――」

と、庄吉は、笑った。小太郎が

「両人共、深雪について参れ」

「いやだ」

と、南玉が、首を振って

「俺、その刀をもらって、金のかたにせんとのう」

と、云って、横を向いてしまった。益満が

「庄吉、ついて参れ。小太郎一人でよい。牧の消息を知ってからのことにして、遅うはない、ついて来んと、深雪を、島原へ、叩き売ってしまうぞ。ついて来い、ついて来い、とっとと、ついて来い」

益満は、節をつけて、ついて来い、といいながら、歩き出してしまった。深雪が

「お兄様」

「行けっ、心配すな」

益満は、足早に、四人は、そろそろと、橋の上を歩いて行

った。
瀬田の橋の下に、もう、一刻近くにもなるであろうか、小舟が一艘、じっと、していた。
「この湖から、竜宮へ通じるというが、こうして見ていると、成る程、綺麗な水で、何かが、水底にありそうだの」
一人の船頭が――姿は、船頭であるが、武士の言葉で、こう低く云った。
「うん」
一人は、腕を組んで、眼を閉って、身動きもしなかった。
二人とも、頬冠りをしていたが
「一度、様子を見るか」
と、水の面から眼を放すと
「あああ、畜生っ」
と、欠伸をしてから
「もう、来なくちゃならぬ、陽ざしであるが――」
と、呟いた。
「追っつけ来るであろう」
一人は、未だ眼を閉じたままで、答えた。
「待つ身になるな、虫の声、志賀の都は、荒れ果てて、か。山崎西に去れば、桜井の駅、伝う、これ楠公子に別るるのところ」
小声で、詩を吟じかけた時、馬蹄の音が、橋板一面に響いて、水の面へ拡がって、京の方から、聞えてきた。眼を閉じていたのが、腕を解いて、眼を開くと
「有村」
二人は、ちらっと、眼で、語り合うと、すぐ、艪をとって、艪臍へ落した。静まり返っていた水が、左右へ揺れて、うねりが、だんだん拡がると共に、舟は、橋の下を離れて、湖心の方へ、すべり出した。
有村は、舟の中でしゃがみながら、じっと、橋の上を眺めていたが、馬蹄の轟く音が、近づくと共に、
「そうだ」
といった。
「見えるか？」
と、伊牟田が振向いて
「御持槍が見える。愚図愚図してはおれんぞ、有村」
艪をすてて、胴の間へ、どんと、飛び降りると、二人とも、短銃へ、弾丸を込めた。二梃とも、精巧な舶来物であった。
島津斉興公の出府人数は、先払いから、小半町遅れて徒士頭を先頭に、丸に十字の金紋打った直槍をつづかせ――だが、急ぎの道中のことといい、町を離れてからのこととて、槍を伏せて、制止声もかけず、足並を乱して、足早に、槍が二本、日傘、坊主、小姓、馬廻り、挟函、医者、胡牀、馬、土産の長持――いつもよりも、人数は少いが、それでも、二百人余りが、長々と橋を轟かして、渡って来た。
お由羅は、朱塗、金蒔絵の女駕に、斉興も、駕に、平、将曹等は、馬上で――その左右には、書院番、奥小姓などが、付き添うて、それぞれ、陣笠に、陽を避けつつ、いろいろの響きを、混合させて、橋いっぱいになって、通りかかって来た。
「顔がしかと見えぬが――」

「前のが、平だ」
伊牟田は、こういって、短銃を、右手にして、四辺の舟を、十分に注意してから
「よいか」
と、有村を見た。
「よしっ」
有村は、いつでも、帆を上げられるように、用意して、その帆の蔭から
「将曹を撃つぞ」
と、いって、狙いを定めた。
「十分に、狙いを――落ちついて」
と、伊牟田が、声をかけて、片膝を立てながら、引金へ指を立てた。

駕脇の一人が
「あっ」
と、叫んで、湖水を、指さすと、一人が
「曲者っ」
と、叫んだ。人々が、湖上から、それを見つけ出そうと、一斉に、左を向いた刹那
「危いぞ」
と、平が、叫んで、馬の頸へ、身体を、伏せようとした。その、ほんの一刹那――だ、だあーん――湖水いっぱいに、山々に、橋に、響き渡った。
駕脇の士は、刀の柄へ手をかけて、お互に身体をぶっつけながら、駕に当りながら、駕を守った。

「急げっ、急げっ、走るんだ」
と、供頭が、陸尺(ろくしゃく)を、叱りつけて、棒鼻を叩いた。駕は人々と一緒に走り出した。足音と、叫び声とが、高く、渦巻いた時、将曹が
「周章てるな、不覚者。何が、恐ろしい！」
と、叫びざま、馬から、降りた。そして、右手で、左の腕を押えていた。二三人が
「御前、手疵を――」
と、顔を寄せると
「掠(かす)れ弾(だま)じゃ」
と、云って、
「曲者を追え。その辺に漁夫の舟があろう」
「はい」
と、答えて、二三人が、左右へ、走ったが、それよりも早くに、後の方にいた七八人の人々が、もう走って行っていたし――走りながら
「船頭、舟を貸せっ」
と、叫んだり
「おーい、船頭、その舟を捕えろ」
と、絶叫したりしていた。一人が、橋の上から袴を脱いで、飛び込もうとするのを、一人が
「泳いで、追いつけるか、この馬鹿」
しがと、止めたり――平は、馬の頸に、獅噛(しが)みついて、滑り落ちるように、飛び降りると、びゅーんと弾丸の唸りを聞いた。
（危いっ）

と、感じ、そして、将曹の、撃たれたらしいのを見ると
「何うした？」
と、侍に守られながら近づいた。
「お上は？」
と、将曹が聞いて、周囲へ群立って来た人々へ
「馬鹿っ。何故、お上を警固せん。わしに係り合って、何になるかっ」
と、怒鳴った。そして、逃げて行く舟を見ながら
「これしきのことに、騒ぐな。みっともない」
手で、傷を押えて、歩みかけると、医師が来て
「御手当を」
と、云った。将曹が、腕をまくると、二の腕のうしろから血が出ている。
「これは、掠れ弾で、ござります。別条のない――」
と、医師が云って、供の持っている函の中から、膏薬を出してきた。
有村の舟は、帆を上げて、艪を漕いで走っていた。二三艘の舟が、近づいたが、短銃に、威嚇されたらしく、追って行かなくなった。
橋づめから、一艘の舟へ、七八人の人々が、乗り込んで、漕ぎ出したが、船頭が一人らしく、有村の舟を、追えそうにもない、舟足の鈍さをしていた。
「お為派であろう」
と、平が、将曹に云った。
「さあ、何れにしても、まず、仕合せ」
と、将曹は、腕に繃帯をしながら
「駕脇を十分に固めて、先触れの人数を、もっとふやすがよい。江戸まで、油断ならんぞ」
と、人々に、注意した。
「何んと、まんまと、失敗(しくじ)ったの」
有村は、追って来る舟を、時々、振返りながら
「何うも、命を惜しんでする仕事は、いかんて」
「いかんと申しても、これで、気が済む。何うも、短銃は、便利は便利だが、武士の用具ではないのう。矢張り、近づいて、刺すのが、一番確かのようじゃ。こんなもので、遠いところから、どんと、やらかして、命もありますよう、逃げられますよう、対手を殺しますよう――そんな覚悟で、人を殺そうというのが、土台おもしろうない。異邦人共の心懸けは、こんなもんかも知らん。隼人の持つべき武器ではない。玩具――こけ脅かしで、こいつあ、音でびっくりするのう、雀を追っ払うのにええ」
伊牟田は、帆を操って、追手の船を、眺めながら
「あんな小舟に、七八人も――馬鹿め、舟足がおそくなるだけではないか」
「何うせ、将曹の手下共じゃ。一つ、あの舟を狙って、撃ってやろうか」
艪を漕ぎながら、振向いた。
「無益の殺生はよせ、唐崎辺へつけて、叡山から、雲母(きらら)越えに戻ろう。大津は、危いかも知れん」
「然し、恭平、これを熟練して、百歩にして、柳葉を撃つ、というようになれば、剣など廃(すた)るの」

と、有村は、板の上の短銃を、じっと眺めていた。
「心さえ到っておったなら、この短銃と、三十歩にて、小太刀で立合える、と、わしは思う――将曹対手に、命を棄てるのも、と、そんな心掛けでは、矢張り討てんのう。将曹づれを討つにしても、矢張り命を棄ててかからぬとのう」
「長州が、鷹司家へ、よく出入するようになったと聞いたが、長州も、動くのか」
「長州も、土州も、続々浪人して、京へ集まって来るらしい。水藩の有志なども、四方へ奔走しているそうだ。益満が、もう、来る頃ではないか？　彼奴に、江戸のことを聞いて」
と、いった伊牟田が
「有村、もう、追手は、諦めたらしいぞ。そう、漕がずとよい。今度は――」
と、立上って
「わしが代ろう」
と、艫（とも）の方へ行った。有村は、それでも、漕ぎながら
「牧の奴、大阪にいるというが、本当かのう」
「居るには居ったが、今は、居らんらしい。何んでも、伊吹山、とか申す山へ行ったと聞いたが――」
「伊吹山なら、あれだ」
と、有村が、指さした。伊牟田が
「そうか」
と、云って、その方へ眼をやりながら
「小太郎などと申す代物は、一体、何うしているのか？　父の仇、主君の敵でありながら――討てば忠孝両全のことを――」
「人のことは、何うでもよい。同志への誓約を、果した上は――」
「果したとは云えぬぞ」
「果したことにしておけ――あれが、唐崎であろう。早う、京へ入って、人を斬らんと、短銃で、やり損じて、胸につかえた形だ」
「斬りたいのう」
伊牟田は、こう云って、刀の鯉口を、一寸くつろげてみた。
「天下御免で人が斬れるなど、いい御時世だの」
二人は、いつの間にか、近づいて来た叡山を、唐崎を見ながら、追手が来ないと知って、あぐらをかいて、坐ってしまった。帆は、十分に風をはらんでいた。
「ほほう、これは、尤物（ゆうぶつ）だ」
有村が、入ると、深雪を見て、益満へ、こういった。深雪は、ちらっと、赤くなったが、心の中で
（何んという失礼な――）
と、憤った。益満とは、小さい時からの馴染で、兄のように仕えているから、益満の、ふしだらな言行に、何んの反感も、憎悪も起きなかったが、他人から、こんなことをいわれるのは――町人の、巾着切の庄吉でさえ、ちゃんと、礼を心得ているのに、武士が――人の上に立つ武士が――
（何んという無礼な）
と、感じると、深雪は、顔も、膝も、横に向けてしまった。
薄暗い造りの京の宿――手摺も、階段も、廊下も、黒光に光っていたし、つつましい床の間、渋い襖――それは、粗末

な、街道筋の宿とは、全くちがって、品のいいものであったが、深雪の心は、だんだん、おちつきが無くなって来ていた。
何んとなく頭のうしろに、鉛が沈んでいるように重かったし、眼を閉じても、光る水玉のようなものが、きらきらと――時々は、眼を開いていても、ちらちらと見えた。
（何うして、こう、不幸なのだろう）
と、思うと、京へついた夜から、眠れなかった。親に、姉に、兄に――ただ、従え、おとなしくしていろ、と――益満までならいいが
（こんな田舎侍に、あんなことをいわれても）
と、思うと、横を向いていても、涙が出そうであった。
（お母様から聞くと、国許では、もっと、女子は、男に柔順だというが――何一つ、自分のしたいことも出来ずに）
深雪は、いろいろの、姉の、自分の、母の苦労を想い出した。
（でも、お由羅様を刺そうとして、あんなに、みじめに捕えられたり――矢張り、女は、駄目かしら？）
そうも思えたし
（姉さんは、自分のしたいことを、一寸、したばかりに、人手にかかって――）
と、思うと、男の命のままに、じっとしているより外に、ないようにも思えた。だが、益満が、出たり、入ったり――そして、庄吉が、欠伸をしているのみで、部屋から、一足も踏み出すことのできない深雪は
（せめて、この間に、叡山へ行って、父の墓詣りくらいはしてもいいのに――）
と、益満へ、不平の心が、起きて来た。それから
（町方の女が、羨ましい）
とも――それは、自由に出歩ける女を、二階から見ていると、墓詣り一つにさえ――父の墓へ、初めて詣るということ一つでさえ、思うままにならぬ自分に、腹が立ってくるのであった。
「密談がある。次の間へ」
と、益満が云った。深雪は、何故かしら、腹が立った。
「妾――叡山へ、墓詣りに参りたいと、存じますが――」
益満が、頷いて
「そうか――うむ、行くがよい。庄吉でも、つれて」
と、云った。深雪は、中っ腹で、突っかかったのに、益満が、すぐ、承知してくれたので
（怒ったりして、済まぬ）
と、思うた時
「墓詣り？――何んなら、拙者が」
有村が、あぐらをかいたまま、笑った。そして
「誰の墓だの。云いかわした男の――いや、墓詣りなどと申して――よくある手じゃて――益満、何うして、手に入れた女だ」
深雪は、一言一言に、汚れて行くように感じた。
「父の墓で、ございます」
こういって、深雪は
「では、すぐに行って参ります」
と、立とうとすると、益満が

「これは、仙波の娘じゃ」
「ほほう、八郎太の――そうか、それは、とんと御無礼だ。御両親とも、無残な御最期で、御察し申す。わしは又、江戸の――」
と、いいかけているのへ、深雪が
「あの」
と、叫んで、顔色を変えながら
「ただ今、仰しゃりました――」
と、いいかけると、益満が
「七瀬も、人手にかかったのか？」
と、口早に、聞いた。
「知らんのか」
「誰に？」
庄吉が、次の間で、聞いたらしく、動く気配がした。
「牧の倅に」
「百城月丸か」
「月丸？」
「大阪では、変名しておったそうだが――」
深雪が
「あの、それは――」
と、いったまま、拳を顫わせて、眼を、ヒステリカルに光らせて、呼吸を喘(はず)ませてしまった。
「不思議なこともある」
益満が、いつにない真面目な、腕組をして
「この姉が、矢張り、牧の手にかかって、相果てた」
「ふむ、矢張り、尤物であろうの。それは、惜しい。成る程、不思議なこともあるが、牧の倅と申せば、斉興公の御一行に入っている筈であるが――」
「何うして？　七瀬殿が、又、牧の手にかかったのか――」
「詳しいことは判らんが、噂に聞くと、彼奴、お由羅派として、四ツ本喜十郎の許におったらしい。それへ、何うしたのか、その七瀬が斬込んで、殺されたというがの。無礼討ちになった、という噂もあるし――何れにせよ、牧の小倅の手にかかったことは、真実じゃ」
深雪は、俯向いていたが、泣いていなかった。死んでみても、何う苦しんでみても、何をしてみても、何を考えてみても、何うしようもない、大きい魔物の力が、自分達一家を引っ掴んでいるように思えた。小太郎が
「死出の旅だぞ」
と、いったのが、頭の心へ、しみ通って感じられた。
（次は、妾の番――それから、兄上――いいえ、今頃は、もう兄上が、何んなことになっているか――叡山――父の斬死した叡山へ、兄が一人で――）
そう思うと、叡山の上に、何か、大変なことが起っているような気がした。そして、それは、同時に
（一家が、死絶えるのなら、せめて、姉さまを、母上を、手にかけた、その牧の息子を――百城月丸を殺して――）
深雪は、狂人のように興奮してきた。
「月丸は、斉興公の御供の中におりましょうか」
「さ、しかとは、判らぬが――」
深雪は
（兄に逢うて、このことを話して、それから、斉興公のあと

を追って、百城を――兄が承知しても、しないでも――万一の時には、庄吉と二人で――庄吉は、きっと、死んでくれるであろう）

そう思うと、庄吉と、二人で、斬り殺されて、何も知らぬ人々から、二人が不義をしていたように見られて

「武士の娘が、巾着切と――姉も姉なら、妹も妹だ」

と、罵られるのが、はっきり想像できた。だが、深雪は

（何うなってもいい――もう、自棄（やけ）だ）

と、思った。

「庄吉」

と、益満が、呼んだ。

「へい」

襖を開けて、入って、有村に

「お越しなさいませ。手前、庄吉と申す、やくざで、ございます」

左手をついて、丁寧に、御叩頭をした。有村が

「うむ」

と、頷いた。深雪は

（あんなに、威張って――）

と、又、腹が立った。

（貴下方よりも、ずっと、庄吉の方が、よい人間でございます。武士の、士のと云って――人を見下げてばかりいて、本当に、やさしい心の人は、一人だっていないのに――それどころか、人の母を殺し、姉を殺し――）

と、思ってくると、有村も――益満さえ、憎くなってきた。

「深雪と一緒に、叡山へ行ってくれんか、墓詣りにの。すぐ立てば、白川へは、夜に入らぬ内につくであろう。気晴らしに、行って来るがよい」

庄吉は、俯向いたまま

「はい」

と、答えた。

「その間に、わしは、同志と打ち合せをしておく。或いは、小太郎と、逢えるかも知れんが、逢ったなら、共々、ここへ参るがよい」

「ほほう、小太郎が、叡山に？」

と、有村が、

「彼奴は、よい稚児（ちご）であろうが」

深雪は、自分だけでなく、兄まで、汚されるような気がして

「行って参ります」

と、益満へ、手をついた。

「庄吉、物騒なところゆえ、気をつけい」

「ええ」

庄吉は、襖越しに聞いた七瀬の話――二人っきりで語った時の、深雪の愚痴話を思い出し――それから、深雪が、自分の口から、叡山へ行きたい、と、云い出したの、と、三つを考え合せると、はっきりと、深雪の気持が判った。

（よく死にたい、と仰しゃるが、今のようだと、本当に、そんな事になるかもしれん）

と、思えた。そして

（この人が死んじまったら、俺は――）

と、考えると、身体中から、何かが、悉く抜け出してしま

うような感じがした。
（一緒に死ぬ？――馬鹿らしい。ここで、この人を死なしちゃあ、己の男が立たねえ。死ぬったって、そいつを止めて、笑顔を見せるようにするのが、男ってもんだ、それが男の強い力ってもんだ）
庄吉は、自分さえついていたなら、侍の一人や、二人――
（俺が死ぬつもりなら、指一本、ささせるものか）
と、思った。だが、その底の方には、深雪の悲しみに同感して、同じように、泣き濡れている心が、じめじめとしていた。
「行って参ります」
「深雪、懐剣は？」
「片時も放しませぬ」
「では、庄吉、頼むぞ。駕をやとって、陽の落ちぬうちに戻れ」
「心得ました。では、貴下様」
有村に、お叩頭をすると
「羨ましいぞ、こら」
と、云って
「貴様、片腕か」
「女に手を出して、斬られたの」
庄吉も
（厭な野郎め。手前なんかに、江戸っ子がわかるけえ）
と、怒りながら
「切口の鑑定はわかっても、心の善悪は、ね」
と、いって、立上った。
「切口か、うむ、出してみろ」
「へへへ、戻ってからね」
と、いって、庄吉は、襖を出て行った。
（父の、斬死した山――）
小太郎は、夏の、陽盛りの空に聳えている叡山を見て
（そして、自分の、死にかけた山）
それは、二つながら、自分の眼で見、自分の身体に刻みつけた事実であったが、恐ろしい夢の記憶のように、自分の経験ではなく、もう一つ別の自分の経験であるように、感じられた。
床下から、調伏（ちょうぶく）の人形を掘り出して以来の、旋風のような、いろいろの事件――それは、悉く、小太郎を巻き込んでいたが、自分の――人間の、体験したことではないように思えた。自分の見た、自分の芝居、事実らしい夢――それは、父の斬死にさえ、こうしていると、悲しみも、憤りも、起って来なかった。人間の経験にしては、余りに、異常な、余りに恐ろしい事実であった。
（あの山で、ああしたことを、自分がしたのであろうか）
と、小太郎は、疑った。
（もう一度、同じことをせよと、云われたなら？――二度とは、出来ない）
小太郎は、汗を拭きながら、肩にかけた荷物の下の、汗にじめじめするのを、度々、掛けかえながら、少し、引きつる脚で、大津から、坂本への道を、急いでいた。
（綱手――こいつも、死んだ）

小太郎は、綱手のことをおもうと、父の斬死よりも、可哀そうな気がしてきた。
（父は、本望であったかも知れん。然し、綱手は？）
月丸の手に抱かれて、月丸の手にかかって、死んだのは、その男と契った女として、幸であるかも知れぬが、その齢の若さ、死ななかったなら、何んな幸福が、その将来につづいたか？　と、思うと、同じような暮しを、長くつづけて来て、これから後も、又、同じである父に比べて、綱手は、人生の、一番幸福なことを、経験しないで、死んで行ったのだと思えた。そして、それが、堪らなく、不憫に感じられた。
（母は、何うしているか？）
七瀬のことを考えると、それは、薄墨色をしていて、考えようがなかった。ただ、母が、苛立ちながら走り歩いたり、行燈の下で、子のことを、心配している姿だけが、思い出されてきた。そして、母よりも、深雪のことの方が、心配になってきた。
（せめて、綱手の代りに、深雪を人並に、暮せるよう――）
小太郎は、そのことを考えると、自分の仕事の、牧を討つ、ということや、益満の、天下を対手のことやよりも、南玉の生活が、庄吉の生活が――その人々の住んでいた長屋の人々の生活の方が、遥かに、幸福のようにも、考えられてきた。
（弓矢の意地？――主君への忠義――そのために、一家を、悉く犠牲にして――）
と、思うと、益満の言葉が、しみじみと判ってきた。
（世の中が、ちがってきた――それは本当だ）
旅人姿をして歩いて行く小太郎と、南玉とに、通行の人々は、道を避けた。そして、不安な眼をして、眺めた。そういうことは、今までに、ないことであった。
（京都へ、不逞浪人が入り込んで、血を流すから、それらと、わしとを、一緒に考えているらしい）
小太郎は、右に、広々として、ぎらぎらと輝く湖を見、左に、聳立（しょうりつ）している山を見て
（益満の云う如く、わしの考えは、小さいかも知れぬ）
と、感じた。

「若旦那、何を、お考えで」
南玉が、汗を拭きつつ
「こう申しちゃあ、何んでげすが、同じ死ぬんなら、あの山あ、景気がようて、ようがすな。朝夕、この景色を眺めておられたら、死んだって、長生きできますぜ」
「親子は一世、夫婦は二世と、申すが、兄妹は、何世であろうな。世間の兄妹と申すものは、朋輩より水臭いが、わしらは、苦労をしたせいか、父のことを思い出すと、斬殺された綱手の方を不憫におもうし、母のことを思うと、深雪の方が、いじらしい」
「ねえ」
南玉は、頷いて
「御尤も様でござんす。苦労だって、一通りや、二通りではないんでげすからね。何かといや、斬るの、殺すの――」
「いや、それも、貧の辛さだのう」
「それには、手前がついておりやす。ぽんと叩くと、銭が儲かるし、ぽんと叩くと、人でも斬れるし――」

「南玉」
小太郎は、日吉(ひえ)神社から、爪立ち登りになってきた道を、千鳥形に、縫って上りながら、佇んで
「わしは、もしかしたら、今度は、父と同じになるかも知れんが――深雪のことについてだのう」
南玉は、肥った身体の、山登りに、もう、呼吸を喘がせて、肌衣一つになって、それでも、肌衣に、汗を滲ませながら、小太郎の言葉を聞くと
(庄吉の嫁に、と、いわねえもんかの)
と、思った。そして、小太郎が、そのまま、言葉を切って、湖水の景色を眺めているので
(もしかしたなら、そうかも知れんぞ――なまじっか、身分の低い士より、庄吉の方が、人間は――)
と、考えてきて
(巾着切で、片腕が無(の)うて、さて、堅気になったところで、これという商売の当もないし)
と、思うと、庄吉の嫁にしたいし、することが出来ないようでもあった。
「庄吉の志も判るし、人間のよさも判るが、それに、深雪も――わしが強いてと申せば、否とも申すまいが――」
南玉は、唾を飲みこんで、身体中を、固くして聞いていた。
「庄吉は――何うして、生計を立てて行くか。わしは、彼奴を、身分ちがいの、言葉をかけるのも、汚らわしい奴と考えておったが、交際(つきあ)っておると、頼もしくなってきたし、わしの一家のような悲惨な目に逢うと、せめて、深雪一人だけでも、ああしてまで、深雪のことを想うてくれる庄吉の手に、任しておいてやりたいような気がする。身分ちがいでも、片腕でも、何んでもよいから、お前だの、庄吉だのへ任せておいた方が、よいようにおもう」
「ええ」
南玉は、それにちがいない、と思った。だが
(庄吉が一人になりゃあ、一体、何うしてあいつは暮すつもりか? 富士春に養われて――深雪さんじゃ、そうは行かないし、と、いって、巾着切はできめえし、俺の前座は、勤まるめえし、勤めたって、前座の実入(みいり)じゃ二人暮しはできないし――)
と、考えてくると、庄吉の恋も、仙波の家の運命と同じように、悲惨なものに、思えた。
「一寸、こいつは――一寸、若旦那、考えさして、おくんなさい。こいつあ、弓矢の意地や、二一天作の五のように、簡単にゃ行かねえ。講釈の方でも、人情話は、難かしゅうござんして――」
「わしも、考えようが、わしは、わし自分をさえ、養えない身だからの――斬死の外にない」
小太郎は、湖を眺めて、呟いた。南玉は、何んとか、うまいことをいって、小太郎を、慰めたかったが、何ういっていいか、判らなかった。

陽ざしは、暑かったが、山風は、冷たかった。杉木立の深い中へ入ると、蝉の声が、時々聞えるだけで、身体も、心も、落ちついてくるようであった。
(何うにもならん――因果な身の上、因果な恋――というよ

り外に――なにしろ元が巾着切で、今は巾着切仲間の情に生きている奴で、おまけに、片腕がないと来て――当り前の、そこいらの娘だって、嫁に来る身分じゃあねえ――だが、侠気(おとこぎ)があって、素直で、命がけに惚れ込んで、それでいて、男らしく諦めて――）

南玉は、同じことを、幾度も幾度も繰返して考えてみたが、どう処置していいか、判らなかった。

「涼しいの」

小太郎が、振向いて

「この山に、一刻も、こうしておったなら、心気が、静まるであろう。死を覚悟しておりながら、いろいろの妄念に煩(わずら)わされるが――南玉、見えた、あれが、義観のおるお堂じゃ。見えるであろう」

小太郎の指さす杉木立の深い中に、堂の屋根が見えていた。

二人は、草の中を急いだ。

「老師」

と、縁側から声をかけた。

「誰じゃ」

寝ているらしく、畳の上から、返事が聞えた。

「仙波小太郎で、ござります」

「ああ久しいの――上るがよい」

小太郎は、荷物を置いて、脚絆をとった。そして、縁側へ、膝をついて

「ここからで、よろしゅうございますか」

「うむ」

障子を開けると、義観は、汚い木の枕をして、詩集らしい、薄い本を、額の上へ、開いたままのせて

「よう来たのう、すっかり、よいか」

と、笑った。そして、南玉を見て

「連れか。上るがよい」

「何んとも、お礼の申し上げようが、ございませぬ」

小太郎は、両手をついて、礼をいった。

「余り、固くるしいことをするな。何しに来た？」

「お礼のためなり、墓参のためもあり、又、牧の行方を捜すために」

「未だ、討てぬか」

「お恥かしゅう存じます」

「噂に聞くと、天下も、島津も、物騒だの。会(え)すれば則(すなわ)ち事(じ)同一家(け)、不会なれば万別千差、不会なれば事同一家、会すれば則ち万別千差。討つのもよい。忠孝両全の道じゃ。討たぬのもよい。神仏と心を同じゅうするものじゃ。世の中のこと、して悪いということはない。自分でしたいと、思うことはの」

「恐れながら」

南玉が首を延して

「巾着切などと申しますことは？」

「したくはないが、しておるのであろう、気が咎めているであろう。気の咎めることをするのは、したくないことを、しておるからじゃ。したいことに、悪いことはない。したくないことは、大抵悪い。お前が、巾着切か」

「あの者は、桃牛舎南玉と申し、江戸の講釈師でござります」

「何を講釈するな」

「上(かみ)は天文より、下(しも)は男女の色事にかけ」

「ははは、落語家の一種か。なかなか、あれは面白いものだの」
と、義観はいって、鋭く
「小太郎、生死の道は、心得ておろうな」
と、聞いた。
「今度のこと、覚悟は致しております」
小太郎は、頭を下げた。

義観は、唇に微笑していたが、眼は鋭く光っていた。
「死は覚悟とは、死ぬつもりか？」
「はい」
「借金を背負っても、首は縊れるし、女に迷うても、水に陥れるぞ。この間の死の区別は如何」
「はい」
「はい、では、判らぬ。徒らに、死ぬ覚悟だけなら、匹夫、婦女子にでもできるぞ」
小太郎は、俯向いて、耳から、首筋まで、赤くなっていた。
「剣客の覚悟、士の用意と、遊冶郎の情死との間に、如何の差かある？」
「はい」
「判らぬか」
小太郎は、黙っていた。判るようでもあり、判らぬようでもあった。ちがうと思えたし、同じようにも思えた。
（死ねばいい。死ぬ覚悟で、働く！）
と、思った時
「判らぬか」
「はい」
「莫迦っ」
その声は、達人の気合と同じように、頭の中へ、胃の中へ、鉄刀を突き通すように、鋭く響くもので、同時に一つの力として、身体を、圧倒するようにも響くのであったし、身体も、心も、ちぢみ上って、固くなる鋭さをもっていた。
「生とは、徒らの生でなく、死とは、徒らに、犬死することではないぞ。死とは、自棄自暴して、生を断つことではなく、永劫の命、来世の生のために、喜んで赴くの心だ。死の覚悟とは、絶望しての覚悟でなく、十方を通貫して、転変自在の意じゃ。内外打成一片にして、善なく、悪無し。千刀万剣を、唯一心に具足して、死生を超越す。これが、士の、剣客の、生死の覚悟じゃ。痛まず、悩まず、悲しまず、変ぜず、驚かず、これ、剣客の心じゃ。それに、何んぞや、父の墓参？わしへの礼？　左様の世上凡俗の習慣を、訣別の大事と心得ているようで、生死を越えての覚悟がついておると思うか？
死の覚悟とは、心を極め、天命を知り、一切有為世界の諸欲を棄て、天地微塵となるとも、聊かも、変動しない、この心が、剣刃上の悟りではないか――剣刃上を行き、氷稜上を走る、階梯を渉らず、懸崖に手を撒す、この危い境地をくぐって、小太郎、この四明の上に於て、まさに、剣刃上を行き、懸崖を走りながら、未だ、世上煩悩を棄てきれぬか」
小太郎は、手をついて、だんだん頭を下げて行った。
死ぬより外にないから、死のうとする、絶望の死であって、明るい、希望をもった死ではなかった。そして、死を覚悟しながら、深雪のことに、生計のことに、心を煩わしていた。

それは、決して、死を悟っているものではなく、死に、透徹したものではなかった。ただ死を恐れない――というよりも、盲目的に、死のうとするだけで、士として、剣客として、決して、生死の覚悟ができている、と云えないものであった。
小太郎は、絶望的にはなっていたが
（せめて、義観には、自分の志を、知ってもらって――）
と、考えていた。その義観から、こう云われると、恥入りもしたし、教えても、欲しかった。
「某、愚昧にして――」
義観の手が、右へ閃くと――小太郎の前へ、戒刀が、転がった。
「死ねっ」
と、義観が叫んだ。南玉は、蒼白になっていた。

縁側にいた南玉が
（おや）
と、思って、自分の側を、影の如く、通って行った武士の後姿へ、眼をつけた時、小太郎が
「おお、百城」
と、声をかけた。それと同時に、百城が
「ずく入（にゅう）」
と、叫んだ。そう叫ぶのと、義観が
「馬鹿っ」
と、叫んだのと、百城が、抜討ちに、義観へ斬りつけたのと、そうして、小太郎が、下から、戒刀で、月丸の臂を、打ったのと、同時であった。

小太郎は、鞘ぐるみの戒刀で、月丸の臂を打って、脇差を、放させると同時に、もう、次の溝えを、義観の前に、半立ちになって、つけていた。
月丸は、小太郎に、一撃されて、臂から、肩へかけ、手首へかけて、しびれさせたまま、義観を睨みつけて、突っ立っていた。
南玉は、縁側の端へ、立上って、脣を噛みながら、眉をひそめて、拳を握っていた。
義観は、眉の下から、冷笑したように、呼吸を、喘ませながら、立っている月丸を見上げて
「いつかの猿か、敵討ちに来たのだの」
と、いった。月丸は、膝も、拳も、脣も顫わせながら、呼吸を荒くして、義観を、睨みつけていた。小太郎が
「無礼なっ、百城。何事じゃっ、何事じゃっ、その様（ざま）は」
舎（いえ）の中へ、響き亙るように怒鳴った。月丸は、ちらっと、小太郎を見たが、すぐ、義観へ
「ずく入」
と、罵った。それを聞くと、小太郎は、立上りざま
「出ろ」
小太郎の突いて来る手を避けて、月丸は、肩を躱（かわ）して
「何をっ」
「無礼者、出ろっ」
二度目の小太郎の突く手を肩に受けて、月丸は、よろめいた。そして、小太郎を、鋭く睨んで
「の、残りの勝負だ。出い。坊主諸共叩っ斬ってくれる」
と、叫ぶと、縁側へ、足早に出て行った。南玉が、周章（あわ）て

て、身体を引いた。義観は、脣を尖らして、眼に、微笑を浮べて、眺めていたが
「小太郎」
と、呼んで、転がっていた脇差を、取って
「戻してやれ」
「はい」
小太郎が、脇差の抜身を持って縁側へ出ると、月丸は、襷を、袖の中から、取出していた。右手が痛むらしく、不自由そうであった。だが
「支度をせい、うぬから先に、勝負だ」
と、叫んだ。小太郎は、縁側へ、脇差をおいて
「これへ置く」
そう云って、南玉に
「危いから、入っておるがいい」
南玉は、一つ、頭を下げて
「講釈じゃ、こうは行かない」
と、呟いた。義観が、箒(ほうき)を持って、月丸の草鞋の土を、掃き出していた。南玉が
「手前、致します」
と、箒をとった時、月丸が
「何が、生死を超越すだ。薩摩隼人は、いつでも、超越しておるぞ。この生臭。小太郎、勝負せい。ずく入風情に、云いすくめられて、それが、隼人か。恥を知れ、恥を」
と、叫んだ。少し、顔色が、蒼白めていた。
小太郎は、縁側に、突立ったまま、黙っていた。義観が
「そう怒るものではない」
と、いって、小太郎の横へ立って、月丸に
「果合は、いつでも出来る。上って来るがよい。その草鞋を、脱いでな」
「降りろ、小太郎」
月丸は、杉木立の中の、しめった草の中へ立って
「隼人の名の汚れを、知らぬか。生臭風情に罵られて、それが、隼人か。腰抜け。斬ってやる。参れ――大阪での勝負のつづきだ――うぬ、人の邪魔立をして――」
月丸は、刀の柄へ、手をかけたが、臂の痛みを、感じると
（七瀬も、綱手も、こやつも、親子諸共に、斬ってやるぞ）
と、思った。臂の痛みも、己の技量も――総ての考慮を、判断を失っていた。義観を討ち洩らした口惜しさ、それを妨げた小太郎への憤りが、身体中を、焔のように、駈け廻っていた。父、牧仲太郎の、悪い、黒い血だけが、月丸の血管に、流れているようであった。
「降りぬか」
「お前、わしを、斬りたいのか」
義観が、笑った。
「もう、貴様などに、用はない。小太郎っ、卑怯者っ。七瀬も、わしが、殺したぞ」
「月丸」
と、小太郎が、叫んだ。だが、そう叫んだまま、黙ってしまった。
（本当か？　わしを、憤らせて、誘い出す手か？――よし、本当にしろ、義観のいった生死のこと――あのことを、もっ

と、考えて――）
南玉が
「困った方で、ございますな」
と、いって、箒を持って、敷居のところへ出て来た。
「よし、降りて参らぬなら、それへ、参るぞ」
月丸は、窪地の、草の中から、歩き出して来た。
「拙者対手仕ります」
小太郎が、義観にいった。義観が、南玉に、手を出して
「箒」
と、いった。そして、箒を手にして、縁側へ出ると、ずかずかと、低い、崖から、登って来る月丸の顔へ
「猿」
と、叫ぶと、ぱっと、砂を、浴せた。砂は、生物のように、義観の心のままに、月丸の顔へ、当って、散った。
「うぬっ」
月丸が、右手で、刀を抜き払って、左手で眼を防いだが、砂が、眼に入ったらしく、そのまま、佇んで、眼を押えてしまった。
「二度も、生臭坊主の手込めに逢った上は、恥辱であろうから、死ぬがよい。首を縊るなら、枝が、いろいろとあるし、腹を切るなら、得物は手にあるし――隼人が、泣いてはいかん。泣くくらい口惜しければ、切腹するのだの。引導は、わしが、勤める――」
月丸は、眼を拭きつつ、一寸、開いてみて、一足進んだ。そして、顔中を、しかめて、又、一足進んだ。そして、もう一度、涙で開かぬ眼を、開いて、一足進んだ時、第二の砂が、あっと、思って、眼を閉じた瞬間、それよりも早く、眼を刺していた。月丸は、刀を振りかざして、崖を、一飛びに、登った。その刹那
「馬鹿っ」
小太郎は、声と、身体とを、一つの鉄丸のように、月丸へ、叩きつけた。月丸は、草の中へ、仰向きに、ぶっ倒れた。
「若旦郡、その馬鹿野郎をっ――」
と、南玉が、叫んで
「月丸って――あの、綱手様を、殺した月丸？」
小太郎は、倒れたまま、暫く、起き上らない月丸から、南玉へ振向いて
「そうじゃ」
と、頷いて、足の泥を払って、縁側へ、上って来た。そして
「如何、取計いましょうか」
と、義観に聞いた。
「綱手――あの、妹を、あれが、殺したと、いうのかな」
「はい」
「そうか――そして、さっき申した七瀬と、申すのは？」
「綱手の母にございます」
「それも、殺したのか」
「さ、しかと存じませぬが――母は、遠く、国許に居りまして――」
と、答えた時、月丸が、草叢（くさむら）の中へ、坐った。そして、刀を持ったまま、じっと、眼を閉じていた。涙が、頬へ流れて

いた。
「小太郎――心の出来ておらぬ、武士の意地とは、かようのものじゃ。己を知らず、人を知らず、恥を知って、恥を知らず、恥かしめるを知って、恥かしめられるを知らず、殺人刀を知って、活人剣を知らず、猿が、影を捉えるようなものじゃ。よいか、殺を論じて、一毫(いちごう)を破らず、活を論じて、喪身失命すとは、このことじゃ。わしは、殺を論じたが、一毫も、自他を破らぬが、彼の仁、活を論じて、自らを失っておる。剣刃上に、殺活を論じ、棒頭上に機宜を別つ。わしと、月丸との、この試合をよく考えてみい。人を殺して、生かす、生かして、殺す。二人を較べる時に、自(おのずか)ら、会(え)するところがあろう。身に邪心なく、真知の働く時は、思わざるに、勝ち、然らざる時には、量らざるに破れる。一心、生死を放念し、雑念を去る時、即ち、生を離れ、死を離れるの時じゃ。先刻、わしを、庇った時の働き、あの境を、よく味わってみい。わしを、庇い、且つ、月丸を、庇って、純一無類、それが、不偏不倚(ふき)、無一無適の意(こころ)じゃ。判るか。言葉にすれば、難かしいが、味わえば、やさしい。どうじゃの」
と、義観は、南玉を、振向いて
「上は天文、判るかの」
と、笑った。
「へっ」
と、南玉は、お叩頭をした。月丸が、眼を拭いて、起ち上った。そして
「仙波」
と、叫んだ。小太郎は、義観の言葉を考えていて、答えなかった。
「討つぞ――忘れるな」
月丸は、刀を、鞘へ納めて
「坊主、いずれ、その首を、取るぞ」
「ああ」
義観が、笑って、頷いた。そして
「然し、のう、月丸、わしの首を、取るより前に、気の毒じゃが、死相が現れているぞ、死に近い相が――」
月丸は、鏡を見た時に、自分でも、そう感じたのを、思い出した。そして
(何かしら、魔物の住家のような山だ)
と、思った――そして、口惜しさが、全身に、溢れていたが、いくらか、落ちつくと
(二人がいる上に、臂を打たれているのでは、敵わぬ。ここを耐えて、次の機を――だが、隼人の意気は、十分、見せておいた。今夜にも、あの坊主を――そうだ、綱手の鏡を埋めて――忘れていた)
と、思って、歩みにくいが、一足歩み出した。そして
(俺は、卑怯で、逃げるのではないぞ)
と、思った。南玉が
「若旦那、綱手様の敵(かたき)を――」
と、いいかけると
「霊地を、汚すのではない」
と、小太郎が、静かにいった。
木立の中――遥かに、上の梢で、小鳥が鳴いた。月丸には、

それが、自分を侮っているような声に聞えた。
（何かしら、わしは、心の平均を、失っているようだ）
と、思った。
（この間から、眠れないで、気が立っているが――）
それが、義観に斬りつけて、失敗（しくじ）った因のように思えた。
（あいつは、魔物だ――小太郎が、一喝されて、縮み上ったのも、無理はない。然し、意気地の無い――わしは、よし、彼の坊主に、殺されようとも、もう一度は、必ず、襲ってやるぞ）
月丸は、綱手と契った夜の無念さを、忘れることができなかった。義観を怨むというよりも、義観のために一喝されて、木にぶっつかりつつ、石に躓きつつ、逃げ出した自分の醜さに対して――人に顔向けのできぬ、その時の醜さに対して、自分の心の癒えるように、したかった。
（もっと、落ちついて――あの、小太郎への説法ぐらいに、吾を忘れて、憤るようでは、いかん。何うして、こう、気短かになったのか――それにしても、小太郎の技量は、一流の達人だ。わしも、不用意であったが、義観へ、斬り込んだ時に、臂を打った早業は、人間業ではなかった）
月丸は、草の中、木の中を歩みながら、八郎太を埋めてある墓の方へ近づきつつ
（真知の働く時は、思わざるに勝つ、と、あの坊主は、小太郎に説いていたが――）
そう考えてくると、心が、落ちついてくるし、小太郎に対して、説いていた義観の言葉が、頭の中へ明るく、微笑して、浮んできた。だが
「馬鹿らしい」
と、呟いた。
「糞坊主、坊主の分際で、隼人に剣を説き――小太郎め、説かれて、恐れ入って、何んたるざまだ」
月丸は、憑（つ）かれた人のように、独り言を云いつつ、くるりと、堂の方を、振向いた。もう、縁側には誰も居なかった。
月丸は、大きい溜息をした。そして、暫く、じっと、凝視めていたが、振返って、踏み出そうとして、さっと、顔色を変えた。
今まで、前方を、眺めながら、歩いて来たのに、少しも、眼に入らなかった墓が、はっきりと、眼についたのであった。そして、それが、眼に入ると同時に、月丸は、何かしら、脚下から、寒いものが、背骨を伝って、全身を掠（かす）めて行ったような気がした。
（墓が、おれを、招いている）
と、感じた。そして、佇んだまま、じっと、墓を睨みつけていた。
（こんなに、明瞭（はっきり）と、こうしていて見えるものなら、先刻から、見えるべき筈だ）
月丸は、何かしら、墓が、生きているように思われた。風もないし、小鳥も囀（さえず）らないし、寂寞とした、深い杉木立の中に、じっと、生きている墓を、睨みつづけていた月丸は
（八郎太が、招いている）
と、感じると同時に、綱手の死んだ時の血の臭が、鼻を掠めた。七瀬が、手を握りしめて、白い眼を剥き出して、脣を噛み切って、仰向きに、転がった時の、その、怨恨に充ちた

眼を、思い出した。立っている地が裂けて、地獄へ陥るように感じたり、墓の後方から、三人の霊が、のぞくようにも、感じた。
（何うかしている）
月丸は、眼を閉じて、落ちつこうとしたが、眼を閉じると、赤く閃く玉が、上へ昇ったり、下へ降りたりするし、又、血の臭が、鼻の中へ、蘇ってきた。

（心の迷い――何んの、たわけた）
月丸は、眼を開いて、一足踏み出した。そして
（あの坊主は、心を説いていたが――）
と、思った。だが、それに感心するのは、何かしら、義観に、降伏するような感じがして
「くそっ」
と、懸声をして、勢いよく、八郎太の墓の方へ、足早に行った。
（死霊だの、幽霊だのと、愚にもつかぬ――そうだ、こういう深山へ入ると、人間の心が、こういう風になるのじゃ。それで、霊山などと――わしは、斉興公へ忠義のために、七瀬を殺したのだ。父への孝行のために、綱手を殺したのだ。何を、心に咎めることがある）
墓は、崖のところに――いつの間にか、草が茂り、土が、落ちついて、下に眠っている人の安らかさを、現しているようであった。
（こんな石に脅えて――心が足りなかったからだ。父も、心の不思議を説くが――）

月丸は、考えてみたが判らなかったし、長く考えもしなかったし、又、出来なかった。墓の前へ、膝をついて、懐中から、綱手の形見の鏡を出した。そして、それを包んである薄い絹をとって、鼻へ当てた。微かな、香の匂のほか、血の香はしなかった。
（何故、さっき、血の臭がしたのかしら――それも、心のせい）
だが、香の匂を嗅ぐと同時に、綱手の肌を、四肢を、思い出した。眼が、頭が、血管が、熱くなってきた。自分以外の世の中での、一番、いい物を失くしたように感じた。
「綱手」
と、云って、鏡を眺めてから
「わしを恨んでくれるな。そちを、決して、欺いたのではないぞ。わしは、そちに、惚れていたが、武士の意地として、仕方がなかったのじゃ。成仏してくれ。お前の、霊（たましい）の籠っているこの鏡を、父の墓へ埋めてやるから、父の側で――父に抱かれて、安らけく、眠るがいい」
そう云っているうちに、だんだん、涙で、眼が曇ってきた。
（お前の母を、わしが、手にかけたと同様にして殺したが、よく、冥土で、母に、わしの恋の、偽りでなかったことを、話してくれ）
月丸は、頬へ、涙の流れるまま、暫く、眼を閉じていたが
（義観に近い、こんなところで、泣いて、もしも、見つかったなら――）
と、思うと、手拭で、手早く、涙を拭いた。そうして、鏡を、丁寧に、拭って、自分の顔を写してみた。そして

「判るか、綱手」
と、いった。そして、微笑してみて、鏡に写った自分の微笑んでいる顔へ
「判ったか？」
と、頷いてみた。
「今、父の側へ、埋めてやるぞ。これが、別れじゃ。綱手、よく、顔を見ておけ」

月丸は、狂人のように、自分の顔へ、言葉をかけて、又、涙を流した。
「別れるぞ――綱手、別れるぞ」
と、いうと、声まで、涙で、曇ってきた。
「綱手、さらばじゃ」
月丸は、そう叫ぶと、鏡を、口にくわえておいて、小柄を抜いて、墓石の下を、掘り出した。土を掬い上げ、小柄で掘り――二つの手を、土まみれにして、五六寸の深さに、掘った。そして、鏡を、絹に包んで、
「よく眠れよ――さらばであるぞ」
と、いうと、穴の中へ、静かに置いた。そして、合掌をしてから、自分の小柄を、その上へ入れて
「その小柄を、わしと思え。南無阿弥陀仏」
と、又、合掌して、それから、土を落した。そして、手で叩いて、その上へ、石をのせて、そのまま、俯向いて、合掌していた。
「何うどすっか」

と、擦れちがった登山の人々の、振向きつつ、降って行く、後方へ、庄吉は、こう云って
「べらぼうめ――えろう、綺麗な、娘はんやおまへんか。何うどすーっ、何うどすーっ」
庄吉は、節をつけて、怒鳴った。
「これ庄吉、聞えるではないか」
深雪が、微笑しながら、たしなめた。
「南玉の爺なら、四方の山々眺むれば、とかなんとか、やらかしゃあがるところだ」
庄吉は、宿を出る時から、はしゃいでいた。それは、深雪と二人で、初めて――よし、一日であろうとも、旅らしいものへ出る喜びも、あるには、あったが、それよりも、庄吉を愉快にさせたものは、自分と二人だけでも、深雪が、安心して、旅に出る、ということからであった。
「へっ、何うどすうーっ」
庄吉の声が、谷へ、向う峯へ、響いた。
「まあ――」
「何うどすうーっ――だんだん上手になってくらあ。何うどすうーっ。うめえ、うめえ、何う――」
「庄吉ったら」
「何うどすうーっ」
深雪が、笑い出した。降りて来た四人連れの男女が、二人を、まじまじと、見つめて、擦れちがうと
「何うえ、夫婦（めおと）かいな」
と、云った刹那、庄吉が
「そうどすうーっ。へい、御免なさい。今日（こんち）は」

四人は、びっくりして、足を早めて、降りて行った。
「庄吉、よしませぬか」
「てへへ、面白うござんすね。夫婦かいな、と、抜かしゃがって、何うどすえ、と、称めやがらねえから、一番、おどかしてやったんで――何うも、京女郎(おんな)に、東男(あずまおとこ)なんて、何を云ってやがる。一人も、面らしい面は、ありゃあしませんや。ほい、又、来た。そうれ、何奴も、此奴も、婆ばかりだ」
「聞えるから――」
「なあに、齢をとると、耳が遠くなるから」
婆さんづれの三人が、降って来て、中の一人が、庄吉へ、笑いかけると、
「お気の毒えな、婆様ばかりで」
と、声をかけた。庄吉が
「おう、おう、おう」
深雪は、真赤になって、俯向いて、先に登って行った。
「若い女子衆と登ると、お山が、荒れるえ」
「婆さん、お前さん、嫁いびりしなさんなよ。死んで、地獄へ行くからの」
婆さんは、歯を出して、笑うと、降りて行った。
「まあ、庄吉。少し、嗜(たしな)みませんと、もし、口論にでもなったら――」
「ああ、びっくりした。恐ろしく、気の強い婆も居やがったもんだ」
駕屋が、うるさくすすめるし、腰を押す小さい女の子が、つき纏って来たが、深雪は、断りながら、静かに――だが、正確に、歩いて登った。
「いざ、というと、成る程、えらいものだ」
と、云って、庄吉は、左手で、手拭を使っていた。右手が無くなってから、遠い路には、身体が、早く疲れてくるようであった。そして、だんだん喋らなくなった。
「お嬢さん、一休みしようじゃあ、ござんせんか」
庄吉は、真赤な顔をして、汗を拭き拭き声をかけた。

茶店の中へ入ると、その中に、休んでいた人々が、一時に、二人の方を見た。深雪は、俯向いて、腰掛の端へ、腰をおろした。
「ようこそ」
と、いって、婆が、他の客へ、餅を持って行っての戻りに、深雪の前を、通ったが
「ああ――」
と、いって、一寸、足を停めて
「何うえ、ま、よく、似て――のう、爺さん」
と、叫んだ。爺は、竈(かまど)の前に、立っていたが
「何が？」
「そら、いつかの、お雛さんのような――さっき登って行かっしゃった、お侍衆と、いつかござった、そら――齢をとると、ぼけて」
「お前がか」
「お前が、ぼけて――」
「う、う、義観さんのところへ行くと、仰しゃって、お登りになった――そうそう、あのえらい斬合の後でのう」
「その時の、嫁御寮(よめごりょう)に、何んとまあ、美しい、よう、似てご

ざる方」
深雪も、庄吉も、身体を固くして、昂(たかぶ)ってくる心を、押えて、じっと、聞いていた。深雪は
（姉のことであろう）
と、思ったし、庄吉は
（月丸のことではないか――いいや、小太郎？――いいや、小太郎は、坂本から、登ったのだから――）
と、思うと
「婆さん」
と、声をかけた。
「その、お侍は、いい男で、齢の頃、二十二三か、四五ではないか」
「そうえ――本当に、そっくりよな、爺さん」
婆は、深雪を、じっと、眺めていた。客は、婆の大声と、深雪の美しさに、物も云わないで、話を聞き、深雪を、見ていた。
「義観って坊さんを、訊ねて行ったって、何をしに、行ったのか、聞かなかったのかい」
「えろう、沈んで、ござって、碌々(ろくろく)口も利きませんがの、いつか見た時に、あんまり、美しいので、よう憶えていましたが――」
「その時の女子衆は、このお嬢さんよりも、二つ、三つ齢上で――」
「矢張り、この方の、姉さんかいな」
「そうでもないが――そして、その坊さんの居なさるところは？」
「根本中堂(こんぽんちゅうどう)の上やで――」
「いつ頃、登って行ったかのう」
「さあ、もう、一刻になろうか」
と、爺が、考えて、陽ざしを見ていたが
「五つ半下(いつはんさが)り頃かの、婆さん」
「そんなものかのう」
「もう、四つ半に近いから――」
深雪は、心を顫わせていた。
（月丸が、何んのために）
そう思って、この、同じ道に、姉を殺し、母を殺した対手がいる、と思うと、身体が引きしまってきて、冷たくなって行くようであった。庄吉は
（顔は知らねえが、逢えば判るだろう）
と、思って
（逢ったなら――）
逢った時のことを想像すると、死物狂いに突きかかりながら、月丸の物に斬られる自分の姿。そして、それと同じように、血塗れになって悶(もだ)えて転がっている深雪の姿が、眼にあった。
（ほんの一寸、深雪と、二人きりになれたと思や――一体、運がいいってのか、悪いってのか、月丸が、この山に登っているなんて、何んかの引合せだ――八郎太様の、御手引だ――やっつけろ。ぶつかりゃあ、それまでだ）
と、思うと
「お嬢さん、一つ、急ぎましょうね」
と、いった。

茶店を出ると、庄吉は
「お嬢さん」
そう声をかけて、じっと、深雪の横顔を、眺めながら
「あっしゃ、覚悟しておりますよ」
「妾も、しております」
「腕は、片方しかないが、なあに、人間一心凝めて――矢の立つためし有りってんだ。何うせ棄てた命だ。深雪さん、あんたの前で、綺麗、さっぱり、捨てて御覧に入れますからね。安心していておくんなさい」
「月丸は、何ういう男かしら」
「いい男――ちえっ、聞いただけで、げえっと来らあ。男がいいの、色が白いのって、男の値打ちあ、ここでげしょう」
と、胸をさした。
深雪は、頷いた。
「こういや、綱手さんの悪口になるが――魔がさしたんでげしょうな」
「兄に聞くと、なかなかの腕前ゆえ、お前と、二人ぐらいでは――」
「だから、だからよ。人間一心、虎々って、そら、虎を見て、何んとかしたって話がありまさあね。あいつだ」
「虎と見て、石に矢の立つ？」
「そうそう、南玉め、虎々々と、教えやがって――ところで、若旦那あ、未だ、京へお入りになりませんが、矢張り、この辺で、虎々じゃあねえんでしょうか」
「さあ、もしかしたなら――でも、庄吉、決して、兄を頼みにしては、なりませぬぞえ、何処までも、二人で――」
「二人っ」
と、庄吉が、叫んだ。
「二人だっ、嬉しいことを仰しゃいますね。ええ、あっしゃ、命をすてますよ。なあ、いつか聞いた極意だ。斬らしておいて、斬れ。斬るより突け。一太刀でいいんだ。野郎の面へ、ぐさっと、斬りゃいいんだ。死にますよ。脚へ、齧りついたって――そうだ、ねえ、深雪さん。野郎に、貴女が、深雪と、名乗りかけて、話をしている、その後方から、あっしが、短刀で、一突きに――何んとか、そういう工夫を一つ、思案しておきやしょう。もし、出逢ったら、何ういうことになさいます？」
「死ぬつもりゆえ、仮令（たとい）月丸を、殺さないまでも――殺すなどと、思いもよらぬこと。一刀なり恨めばよいゆえ、命をすてて、尋常に名乗りかけて、討たれましょう。何れ、小太郎の耳へ入れば、捨てておきますまい。月丸とて、一流の使手ゆえ、女風情や、お前が、何う工夫したとて、討てるものではなし、要らぬ計（はかりごと）をして、月丸に侮られるより、立派に、太刀打をして、討たれましょう。母子三人、討たれたなら、天の冥利としても、月丸は、いつか殺されよう。なまじ――」
「判った。判った」
庄吉は、片手で、押えて
「もう、何も申しません。身を捨ててこそ、浮む瀬も――いや、こいつもいけねえ、浮む瀬も、沈む瀬も考えねえで、正面から、やっつけるんだ。ええ、判りやした。ようござんす。えらい、御覚悟で、あっしゃあ、鼻ぺちゃだ――成る程ねえ。武家育ちだけに、ちがったものだ」

庄吉は、首を振って
「然しね、お嬢さん、あっしを、先に、死なして下せえよ。これが、お頼みだ。万一、お嬢さんが、先だったら、あっしゃ、生きていねえが――こいつは、心中じゃござんせんでしょう」
「それは、その時の運次第、一緒に、死ぬかも知れないから」
「一緒にね――一緒に」
庄吉は、微笑して
「さあ、来いっ、月丸。野郎、出て来いっ。何うどすうーってんだ」
と、叫んだ。

「お頼み申します」
と、深雪が、声をかけた。
「お嬢さん」
南玉の声が、障子の内でした。
「師匠がいる――師匠」
障子が開いて、南玉の姿が現れると同時に、深雪は、小太郎と、義観の、眼を見た。深雪は、膝のところまで、両手を下げて、義観にお叩頭した。
「これは、これは、さ、上るがよい。其処から上るがよい」
義観が、笑って、声をかけた。南玉が
「月丸に、逢わなんだかい？」
と、庄吉に囁いた。庄吉は、南玉の顔へ、鋭く眼を光らせて
「来たか、彼奴」

深雪が
「いつ頃？」
「今しがた、未だ、その辺に、うろうろしているかも知れん」
庄吉と、深雪とは、右を、左を、振向いた。杉木立ばかりであった。部屋の中では、義観が、小太郎に、何か云っていた。小太郎は、俯向いて、手を膝に、頷いていた。
「そして、師匠、若旦那は、月丸を、見逃しちまったのかい」
「うむ」
「何うして？　何うしてだい。そんな法ってものがあるけえ。野郎、何っちの方角へ、行きゃあがった」
「大きい声するな」
南玉が、低く叱った。
「するなって、そんな法があるけえ」
「ま、上るがいい」
「いやだ。俺(おいら)あ、その辺、捜して来らあ。お嬢さん、何うなさいます」
「兄も居りますし、和尚様にも、一度、挨拶をしてから――」
「じゃあ、貴女は、そうなさいまし。あっしゃあ、捜して来る」
庄吉が、行こうとした時、南玉が
「待てったら、庄吉」
と、叫んだ。その途端
「捜さずともよい」
義観が、声をかけて
「今に戻って来る」
南玉が、振向いて

「ええ？　戻って参りますかい」
「ああ来る」
　義観は、頷いた。
「上って、待っているがよい。行きづまりの方へ行ったから、追っつけ、戻って来る。討てん時には、討てんが、討てる時になると、向うから、討たれに来る」
　庄吉が、小声で
「成る程、この坊主あ、悟ってやがらあ」
　と、呟いた。小太郎が
「深雪、ここへ来て、お礼を申せ」
「はい」
「一度は、身体の命を救ってもらい、今又、心の命を救ってもろうた。よく、お前からも、お礼を申してくれ」
　庄吉は、縁側に腰をかけて、片手で、草鞋の紐を解きながら
「心の命？――何んですい、それは？」
　と、俯向きながら、云った。南玉が
「心とは、これ、十方を通貫して、無色、無声。剣道で申さば、所謂八方破れの構え。技を超越して、敵の動きにより千変万化――確か、そうでござんしたねえ」
　と、振向いた。
「今度あ、一番、高座で、びっくらさしてやるんだ」
　庄吉が、紐を解いて上りかけながら
「師匠は、生きて戻るつもりかい――俺あ、死ぬんだ」
　と、呟いた。
　挨拶が終ると、小太郎が
「益満は？」
「浪士方と、お忙がしそうでございます」
「何も聞かぬか」
「何か、江戸に、騒ぎを起して、公方様から兵を出させ、薩摩と、長州と、水戸とが連合して、東西から、江戸を衝く、というような――」
「薩摩では、誰々が、来ているな」
「伊牟田、有村、有馬、奈良原と申しますような方々が、お見えになります」
「成る程、軽輩の、暴れ者ばかりだのう」
　義観が
「天下が、苦しくなっているから、上の者は、金が無いと動かぬし、動けぬし、下を動かすには、上に金が無く、上の進退谷(きわ)まっている時には、必ず下から動くものじゃ」
「下には、英才がおりますから――」
「英才は、いつでも、動くところに生じる。英才がいて、天下を動かすのではなく、動くと、動くところに英才が出て来るのじゃ。人の能力は、下と上と、さまでの相違は無い。上にも、英才はいるが、上は動けん。動きの無いところ、英才がおっても、才の発揮がでけん」
　庄吉が
「野郎、現れて来ねえな」
　と、呟いた。深雪が
「父上の、お墓は？」
　と、小太郎を見た。

「すぐ、このお堂の後方にある」
「今の間に、一寸、詣って参りたいと存じますが」
「詣って来るがよい」
深雪が、膝を動かすと、義観が
「月丸は、墓のある方へ参ったが――」
「ええ？」
と、低く叫んで、深雪は、膝をおろした。そして、小太郎の顔を見た。
（追っかけて、討ちましょうか）
と、いう瞳であった。庄吉が
「あっしが、先に、捜して参りやす。この裏でげすな」
と、半分立ちながら、義観に聞いた。
「そうじゃ」
「一寸、待っていておくんなさい」
庄吉が、立上ると、南玉が
「待て」
と、同じように立って
「お前、彼奴あ、狂人のようになっているんだからの。もう、さっき和尚さんに、斬りかかったり――」
「心配すな」
庄吉は、縁側へ出ていた。
「だって、お前、斬られりゃあ、犬死だぞ。何をしやがるか判らねえんだから。野郎の、現れ出るのを待って――」
「江戸っ子は、気が短えや」
庄吉は、そう云って、跣足（はだし）のまま、縁側を降りて
「堂の後方って、この堂は、ずんべらぼうじゃあねえか。何っちが、師匠、後方なんだえ？」
「山の方だろう」
庄吉は、崖を降りて、堂の屋根越しに、山を見ていたが
「後方は、行きどまりの山じゃあねえか。若旦那、何っちですい」
と、左右を見てから
「こっちだな」
と、呟いて、右手の方へ歩き出した。
「兄様、大丈夫でござりましょうか」
「月丸も、まさか、血迷いはすまい」
南玉が
「待て、庄公」
と、云って、同じように跣足で、飛び出して行った。

「お兄様――二人に、もしものことが、ございましては」
小太郎は、深雪へ、振向いて
「わしに、力を貸せ、と申すのか」
「はい」
と、答えて
「悪うござりますか」
「悪い」
深雪の眼に、険しい表情が閃いた。だが、すぐ、その眼を、膝へ落して
「もし、二人に、万一のことが、ございましたなら、妾（わたし）ら二人は、あれだけ世話になっておりまして、世間へ、顔向けができませぬ」

「何故、月丸を討つ？」
「姉の仇敵(かたき)でございます」
「妹の仇敵を、兄が討てるか。仇敵討(うち)の法に、目下(めした)の仇敵を討つことは、禁じてあるぞ」
「はい」
深雪は、暫く、黙っていたが
「妾が、討ちます」
顔色が、少し、蒼白めていた。
「成る程」
と、義観が、笑って
「えらい」
深雪は
「討てぬかもしれませぬ。その時は――」
と、云って、両手を、義観へついて
「父と共に、埋めて頂きとう存じます」
「ああ、よいとも」
義観が、頷いた。
「お兄様、お別れ申します」
小太郎は、何んともいわずに、腕組をしていたが
「脇差を持って参れ」
と、云って、佩(はい)していたのを、手渡した。
「有難う存じます」
深雪が、立上った。義観が
「やれ、今日は、念仏に、忙がしいぞ」
と、呟いた。深雪は、縁側へ出て、左の方を、じっと、眺めていたが、裾を折って、帯へはさんだ。そして、脇差を差して、草履の無いのに、一寸、躊躇していたが、すぐ、跣足のまま、急ぎ足に――二人の方へ、振向きもしないで、去ってしまった。
「一切有縁(うえん)を放下(ほうげ)して、八方空」
「心のままに、働けまする」
小太郎が、微笑した。その瞳を、じっと、義観が、凝視めていたが、頷いて
「助力してやるがよい」
と、云った。
「はい」
「助太刀にも、いろいろとある」
「心得ております」
「剣をもってか」
「いいえ」
「言葉でか」
「いいえ」
「然らば」
「月丸、自ら、月丸を裁く」
「出来たっ」
義観が、叫んだ。
「そうなくてはならん。よく、到った。それでよい」
義観が、頷いた。
「では――」
小太郎は、右手に置いてある刀を取ろうともしないで、礼をして、立上った。
「どうれ、わしも、見物に参ろう。茶でも飲んでから、ゆっ

くりとの」
義観は、次の間へ、出て行った。小太郎は、縁側へ出たが――そして、耳をすましたが、何んの声も、何んの音もしなかった。そして、自分の心も、この山の中と同じように、澄んでいて、動かなかった。そして、その底に
（三人とも死にはしない）
と、いうような信念があって、少しも、心が乱れなかったし
（死んでも、何事でもない）
とも、感じていた。

（何が、怖いんだ、何が――）
と、庄吉は、自分へ、叫んでみた。だが、心臓が、昂っているし、時々、溜息をしなくてはならなかった。
（若旦那は、一体、何を、まごまごして、落ちついてるのだろう。薄っ気味悪い坊主の前で――何んだ、あの坊主は？）
庄吉は、足許を、気づかいつつ――墓を捜しつつ、歩んだ。
（野郎、うまく欺して、お嬢さんのところまで、引っ張って来りゃあ、いくら、若旦那だって、まさか、捨てておけめえし――もし、捨てておきゃあ、その時は――）
と、自分の命をすてることを考えたが、それは、深雪と、二人でいて、そう決心した時ほど、強くは感じなかった。そして
（万一の時には、小太郎が――）
と、思った。
（捨てちゃあ置かれねえことなんだから――命にかかわるんだから――）
捨てておくべきことでない、と、庄吉は思ったが、小太郎の態度を思い出すと
（もしかしたなら）
と、いう懸念が、起って来た。
「なあに」
と、口へ出して
「人間二度たあ、死なねえんだ」
と、云った時、草の上に、ちらっと、墓石らしいものが見えた。
（あれが、墓だな）
と思った時
「庄吉」
と、南玉の声がした。
（若旦那の言伝(ことづ)けでも聞いて来たんじゃあねえか――）
庄吉が、立止まった。南玉は、深い草の中を、裾まくりしつつ、近づいて来て
「居ねえの」
「うむ」
「戻って、お前、待つことにしたら」
「あの坊主、何を、抜かしゃあがるか、行きどまりだって、何処が、行きどまりだ。あれが、大旦那様の墓だろう」
庄吉が、指さした。
「あれかい」
「墓だろう」
二人が、じっと、眺めた時、墓の下から、人影が、さっと、

立った。南玉が、一足退った。庄吉が、短刀を握りしめた。そして
「畜生っ、びっくり――」
と、呟きかけて
「月丸だ」
と、云った。若い侍姿で、いい男らしかった。
「告げて来よう」
南玉が、囁いて、庄吉の袖を引くと、月丸が、じっと、二人の方を見た。
「野郎――墓へ詣ってたんだぜ」
「じゃあ、月丸と、ちがわあ」
「若い、いい男だぜ、師匠」
「だって、お前、月丸が、大旦那の墓へ、参るかえ」
「そうだのう――あれえ、泣いてるぜ。あの眼――」
月丸は、俯向きつつ、歩みだした。
「聞こうじゃあねえか」
「ちがうよ、よしな」
南玉が、袖を引いた時、後方から、草に摺れる音が、近づいて来た。振向くと、深雪であった。そして、それと、同時に、月丸が、深雪の方を、ちらっと、見て、佇むと、じっと、深雪を、凝視めた。そして、そのまま、三人の方へ、歩き出して来た。
「庄吉、大変だ」
と、南玉が、叫んだ。
「月丸だ」
庄吉は、呟くと、二人の前へ出て、月丸の来る方へ、歩き出して
「お訊ね申しやす」
と、叫んで、頭を下げた。南玉が
「お嬢さん」
と、云って、逃げろ、と、合図した。
「いいえ」
月丸は、庄吉に、答えもしないで、どんどん、近づいて来た。
「お訊ね申します。貴下様は、もしかしたなら、百城月丸様では？」
月丸が、じろっと、庄吉へ、眼をくれたまま、近づいて、深雪に
「綱手殿の、お妹御ではないか」
と、云った。
「はい」
そう、はっきりと、答えはしたが、深雪の顔色は、蒼白で、手も、膝も、顫えていた。庄吉は、懐の短刀の鯉口を切った。
「よう似ているで、もしかと、存じたら、矢張り」
月丸は、頷いた。深雪は
（何を、泣いて？）
と、月丸の、薄紅の眼瞼を見た。そして
（話のようにいい男だが、この顔ゆえに、姉様が――）
と、思うと、蒼白い怒りが、心の底から、顫え上ってきて、肌の上へまで、しみ透ってきた。月丸は、じっと、深雪の顔を見て

「よう似ておる。瓜二つじゃ」
と、呟いた。
「貴下様は、百城――月丸、様」
月丸が、頷いた。深雪は
(姉上の仇敵)
と、すぐ、叫ぼうとしたが、息切れがして、叫べなかった。
そして、全身が、顫えているので
(もっと、落ちついてから――)
と、思った。南玉も、庄吉も、蒼白になっていた。
「姉上を、不覚にも、手にかけて、只今、あの墓へ――あの墓へ、綱手殿の形見の鏡を――肌身放さずに持っておった鏡を、埋めて――そら」
月丸は、微笑して、両手を、突き出して、指を拡げた。爪の間に、土が入っていたし、手も汚れていた。
「何んと申そうか。ここでお身に、お目にかかろうとは、綱手の、手引きであろうか――今も、墓の前で、武士を捨てて、一生、墓守になろうかとも存じて、情無くも、御覧の如く泣いて。お嗤(わら)い下されい。兄上の、小太郎殿とは、敵味方ながら、己が、一生を契った綱手殿を、己が手にかけて――只今、ふっと、お顔を見た時、身の内より、ぞっとして、おお、綱手が、と――」
月丸は、未だ、深雪の顔を、じっと、眺めたままであった。
深雪は
(考えていたほど、悪い人ではなさそうだが)
と、思うと共に
(何故、母まで、殺して――)
と、思うと、その、凝視している月丸の眼を、怪しい精のように、感じた。
「定めて、憎く思われようが――全く、過って――」
庄吉が
「何故、七瀬殿を、お殺しなさいました」
鋭く云った。月丸は、ちらっと、横を向いて、庄吉を見て
「七瀬殿か。あれは、四ツ本氏が、斬ったのじゃ」
「卑怯なことを、仰しゃいますな」
「卑怯っ」
月丸は、鋭く、庄吉を睨んだ。
「卑怯?――何が卑怯っ」
「自分が、殺しておいて――」
「うぬら、下素下郎に、武士の、卑怯、卑怯でないが、判るかっ」
「何っ」
庄吉は、一足退った。そして、懐の短刀を、懐の中で抜いた。そして
(こいつを、突き出すが最後、ずばりとやられるかも知れねえんだ)
と、感じると、脣も、額も、色が変ってきた。そして、ちらっと、深雪の方を見ると、深雪も、蒼白になっていた。
「白々しいことを抜かすなっ」
庄吉が、こう叫んで
(深雪が、斬りつけて行ったら、飛び込んでやろう)
と、思った。月丸が、右手を刀をかけようとして、忘れて

いた臂の痛みに、一寸、手を止めた。
「もし、貴下――百城様」
南玉が、少し離れたところから、声をかけた。
「貴下は又、七瀬様が、その四ツ本と仰しゃる人に、殺されなさるのを、何うして、黙って――」
月丸は、険しい眼で、南玉を見て
「貴様、何者じゃ」
「手前？　こういう親爺で――」
深雪は、二人の話の間に、手早く、襷をかけた。庄吉が、それを見て
「野郎っ」
と、叫んだ。そして、短刀を、突き出して
「なあ――さあ、来いっ。江戸の巾着切の胆っ玉を見せてやらあ」
「待て、庄公」
と、南玉が、手を突き出して、叫んだ。その途端、深雪が
「百城様」
と、声をかけて、脇差へ、手をかけて
「姉の仇敵」
脣を結んで、喘いでくる呼吸を、鼻で押えて、そこまでいうと、鋭く、百城を、睨みつけて
「尋常に、勝負なされませ」
一足進もうと思ったが、膝頭が固くなってしまって、曲らぬようであったし、呼吸が乱れてきて、大きく吐かぬと、苦しくなってきた。
（お由羅様へ、斬りかかった時のような、不覚をとらぬよう）
と、思ったが、月丸への憎しみと、憤りの心ばかりが、先に立って、息も、脚も、自由にならなかった。
（こんなことでは、一太刀も、斬らぬうちに、斬られてしまう）
と、思った。だが、月丸の返答の無いうちは、刀を抜くまい、それが作法だと、柄へ手をかけたまま、抜かずにいた。
月丸は、庄吉を一打ちにしようと、睨みつけていた眼を、深雪に向けて
「仇敵？――綱手の？――いかにも」
と、云って、頷いた。
「深雪さん――危い。そりゃ、無茶だ。そんなことで、貴女――」
南玉は、深雪の横へ来て
「討てるものか。そりゃ、貴女の気性として――」
と、腕へ手をかけた時
「綱手の仇敵？　成る程――無理も無い。討たれてやりたい――その志に免じて」
月丸は、蒼白な顔に、冷たい微笑をしながら
「綱手も、喜ぶであろうが――」
じっと、深雪を、凝視めていて
「あはははは」
と、笑い出した。
三人は、じっと、月丸の顔を、眼を、脚を、手を、凝視めながら――それを、凝視めているの外
（今に、大変なことが起る）

と、いう恐怖に、肌を、冷たく、顫えさせているの外――山の静けさも、物音も、何も感じなくなっていた。
南玉は、脚も、手も、顫わせながら
（折角、ここまで、漕ぎつけて、ここで、深雪さんを殺しては――）
と、思ったが、何うすることも、できないので、手近い、灌木の枝を、しっかり掴みながら、捻じ折っていた。
庄吉は、すっかり逆上してしまって、その眼は、殺気に輝いているし、米噛（こめかみ）は興奮にふくれているし――月丸の隙を覘（ねら）っていたが、微かな不安と、恐怖とがあって、突込んで行けば、抜討を食うかもしれないし
（深雪の出ようによって――深雪への出ようによって、斬られるのは承知の上で、眼をつぶって一突き――）
と、深雪と、月丸との間に立っている殺気の崩れ方を、考えていた。
「ははははは」
月丸の笑いは、刀を抜いたよりも、凄かった。それは、可笑（おか）しいからの笑いではなかったし、又、嘲笑した笑いでもなかった。もっと、空虚な、病的な、狂人に似た笑いであった。口だけが、笑っていて、声も、眼も、冷やかであった。
そして、三人が、その笑いに、無気味さを感じた時、月丸の眼は、もっと、凄く、険しく光っていた。そして、その上に、殺気が立ってきていた。
「綱手の妹と思えば、しおらしいが、小太郎の妹――何れ、遠からんうちに、死ぬる月丸じゃ。うぬらの一家を、悉く、月丸の手にかけてくれる。父が、斉彬のお世嗣を呪殺したる如く、うぬらの一家を、悉く、わしの手で、亡ぼしてくれる」
月丸は、じいっと、一足進んだ。深雪が、脇差を抜いた。南玉は、力任せに、木の枝を捻じ切って
「危い、深雪さん」
と、叫んだ。月丸は、左手を、鯉口へかけて、柄頭（つかがしら）を、じりっと、上へ突き出しつつ
「うぬら両人――」
と、左右を、睨みつけて
「斬られたいか」
南玉も、庄吉も、もう口が利けぬくらいに、呼吸（いき）づまり、緊張し、興奮してしまっていた。
月丸の顔に、赤味がさしてきた。殺気とも、微笑ともいえぬ閃きが、深雪の顔へ、そそがれていた。
「深雪」
月丸は、その眼から、脣へ、微笑をうつしてきて
「脇差を捨てい」
月丸は、綱手の、若葉のような耳朶を思い出していた。赤く、差恥に染んだ時、濃い白粉の刷かれている時――その二つながらの時に、囁いた言葉――張り切って、艶やかな四肢、閉じている眼瞼のうるおい、喘ぐ呼吸に動く鼻翼（こばな）、少し開いた脣と、歯。ひそめた眉の媚めかしさ――月丸は、一生をかけた綱手のその面影を、もう一度、深雪の身体の上で、見たいと思った。
（この山中の、人のおらぬところで――そして、殺してしまって――）
月丸は、全身に熱を含ませながら、綱手とのことを思い出

し、深雪とのことを考えて
（この思いを遂げた上でなら、小太郎に殺されてもいい）
と、まで感じた。
「無益（むやく）の、腕立て」
月丸は、微笑しながら――だが、その眼を淫獣の如く輝かせて、深雪の方へ、一足踏み出した。
「野郎っ」
と、庄吉は、絶叫した。月丸の口へ出さない心が、庄吉には、愛する者の、鋭敏な心の働きとして
（もしかしたなら――）
と、感じていた。そして、それを感じると共に、危険さを、忘れてしまった。庄吉は、短刀を突き出して、鶏の羽搏（はばた）くように、片袖を翻しつつ、飛びかかった。
月丸は、躱して――斬ろうとした。その隙へ
「やあ」
深雪は、庄吉の危険さに、心を縮み上らせて、夢中に斬込んだ。月丸は、その刀を、柄頭で受留めて、立直ろうとしている庄吉の腰を蹴った。庄吉は、転がるまいと、もがきながら、それでも、一つもんどり打って、転がった。
「若旦那」
と、南玉が、叫んだ。
「お嬢さん」
深雪は、月丸が、左入身（ひだりいりみ）に、つつと、近づいて来たのへ、斬込むことが出来なくて、一足退った。その、退った刹那に――深雪が、斬込もうとした瞬間に、月丸は、深雪の手を、握ってしまった。
深雪は、身体を曲げ、手を曲げ、顔を歪めて、抵抗したが、痛みに耐えきれずに、脇差を放してしまった。
月丸は、処女らしい、滑らかな肌、暖かすぎるぐらいに暖かい肌、汗ばんでいる肌に、興奮を感じながら、深雪が脇差を落すと共に、左の腋下へ、素早く手を廻して、背から、抱き込んだ。
「畜生っ」
庄吉は、真赤になって、立上っていた。
（もしか、そういうことに――）
と、心をおののかせて、心配したように――深雪が、抱きすくめられているのを見ると、全身の血が、逆流した。
「お嬢さん――お嬢さんっ」
庄吉は、叫んだ。
「師匠っ」
庄吉は、自分ぐらいが一人、斬られてしまったところで、到底、月丸を傷つけることは出来ぬ、と感じた。命を棄てるのは、惜しくなかったが、月丸に、指もさせないで、斬られたくないと、思った。
「師匠。若旦那、呼んで来いっ」
「よしっ」
南玉は、走りながら
「抜かるなよ――逃がすな」
庄吉が、頷いて
「逃がすかえ」
と、叫んだ時、深雪が

「兄を呼ばぬよう」
月丸の腕の中でもがきながら、二人へ叫んだ。庄吉は、頭の中を、叩かれたように、感じた。
（腑抜けだ。こん畜生っ、俺あ――何んて、意気地なしなんだろう。命を捨てる、捨てる、と、ほざいておきながら、いざとなった時に――このざまで――）
そう感じると共に
「師匠。いらねえっ」
と、叫んだ。
「野郎」
二間余り離れて、深雪を抱き込みつつ、歩んで行く月丸へ、猟犬の如く、草叢の中から、飛んで行った。

深雪の肌は、綱手の肌よりも、暖かであった。その体温が、月丸の腕から、腋の下から、脚から、月丸の血管の中へ、しみ透った。月丸は、野獣の心以外の、総てを忘れてしまっていた。そして、庄吉を睨みつけながら、左手を、深雪の胸へかけた。指先が、乳房へ当った。深雪は、その指先から、全身を赤くすると共に
（自分も、姉のように、手込めに、逢って――）
と、感じた。それは、微かに、指先が、触れるか、触れぬか、であったが、深雪は、小太郎に対して、顔が合せられぬように、恥辱を感じた。そして、全力的に身悶えして、右手が、自由になった、と感じた時、庄吉の、飛びかかって来る顔を、ちらっと、眼の隅に、感じた。そして、それと同時に、その眼の前に突き出ている柄頭へ、月丸の手のかかってくるのを見た。
（庄吉は斬られる）
深雪は、そう感じて、右手を延した――月丸が
「懲りぬかっ」
と、大喝して、抜討ちにと、柄頭へ手をかけた、その手へ、その延した右手が、必死にからみついた。月丸は、庄吉の、棄身な、突撃を、身体ぐるみで、躱けると共に、深雪の妨げに、激怒した。
「邪魔立をっ」
と、低く叫んで、右手で、深雪の手を柄から放させようと、注意を右手に集めた時、深雪は――足で蹴り、左手を動かし、全身を悶えさせた。
「野郎っ」
庄吉は、逆上してしまっていた。月丸は、執拗に抵抗する深雪に、憤りながら、放すまいと――庄吉を、睨みつつ、二度目の、突きを躱した時
「庄吉っ、突いて――突いてっ」
深雪が、絶叫した。月丸が、力をゆるめた隙に、深雪は、両手で、月丸の刀と脇差を、抱え込んでしまった。
「お嬢さん」
庄吉は、蹴られて、よろめき、躱されて、たたらを踏みつつ、眼と、歯とを剥き出して、めちゃめちゃに斬りかかった。月丸は
（この上は――）
と、思った。そして、左手に力を入れ、右手で、柄頭を持って、一振り――深雪を、突きのけて、深雪の手が、刀の柄

頭から離れると
「えいっ」
抜討ちに、斬った――庄吉が、余りに、近づきすぎていた。月丸が、そのため、一足退ると、深雪に、どんと、ぶっつかった。そして、臂も、十分に、延びなかった。だが、庄吉は
「わっ」
と、叫んだ。顔中を歪めた。肩から、血が、見るみる着物の上へ、しみ出してきた。
「き、斬ったなっ」
庄吉は、狂的に叫んだ。そして
「お嬢さん」
庄吉の眼の表情に、月丸は、はっとした。それは、深雪が、柄頭から、手を放して、倒れかかるはずみに、脇差の方だけは、そのまま深雪の手に、抜かれて、残っているのを庄吉が見ている眼だ、と感じたからであった。その庄吉の眼、叫び――月丸は、反射的に、身体を躱して、深雪の襲撃に備えた。だが、ほんの一瞬の、油断が、その刹那を遅くした。白い刃の走りを見
（しまった）
と、感じ、深雪の乱れた髪、血走った眼を、ちらっと見た時、月丸は、腹の中へ、灼熱した棒を、突き通されたように感じた。灼痛（しゃくつう）に、全身が、凝固するように、硬くなった。
月丸の、右手は、反射的に、深雪へ打ち込もうとして動いた。油断を打たれた口惜しさと、軽侮していた者に、負けた無念さと――後悔、憤怒、恥辱――そんなものが、眼の中へ、凄い光になって、現れていた。深雪は
（兄上、父上、妾は、ここで殺されます）
と、心の中で、叫んだ。
（でも、一太刀は――お姉様、仇敵を、取りました）
深雪は、掌の中へこたえた手答えが、どのくらいの深さのものだか、判らなかったが、それでも
（十分）
と、いうような感じがした。
「くそっ」
庄吉は、野獣のように、吼吠（こうはい）した。歯を剥き出して、眼を血走らせて、狂った獣のように――月丸が、深雪へ、斬りおろそうとした腕へ、突いてかかった。
「うぬっ」
月丸は、深雪を、斬ろうとした刀を返して、庄吉の突きを、よろめきつつ、躱けて、打ち込もうとした。庄吉は、躱された刹那
（退いては、斬られる）
と、感じた。そして、本能的に、短刀をすてて月丸へ、獅噛みついてしまった。
「ううっ」
月丸の歯の間から――食いしばった歯の間から、洩れる声が聞えた。
庄吉が、身体をぶっつけて、獅噛みつくのを、振切ろうと、月丸が、身体を、振ったはずみに、深雪は、月丸の腹に突き立っている脇差から手を放して、立ちすくんでしまった。
（庄吉が、斬られた）

と、感じて、手も、肩も、固くして、ちぢみ上らせた。だが、庄吉は
「危いっ、お嬢さんっ」
と、叫びつつ、振りとばされそうなのを、全力で――襟へ、左手を、右手の二の腕で、刀の手を押えて、脚は、脚へ――そして、歯と、顎とへ、全身の力を込めて、月丸の肩へ、かぶりついてしまった。
「ああっ、誰かっ」
深雪は、月丸の眼が、苦痛と、憤怒とで、飛び出すだろうと、思った。月丸の眼は、人間の眼でなくなっていた。突き立ったままの脇差が、綱手と、七瀬との怨みを含んでいるように、月丸が、左手で庄吉の髻(もとどり)を掴んでも、二人が、身体を捻じらせて、草を踏み倒し、踏みにじり、獣の格闘の如く、呻(うな)っても、吼えても――脇差は、月丸から離れまいと、突き立っていた。
「庄吉」
深雪が、叫んだ。
「お師匠さん」
そう叫んだ時、月丸は刀をすてて、庄吉の帯へ手をかけた。深雪は、月丸が、刀を棄てたのを見て
(あれさえ、すてたら――)
と、握りしめている手を顫わして、ほっとしたが――すぐ、庄吉が、髪の毛を、掴まれて、捻じ曲げられているのを見ると
(妾を助けるために、庄吉があんなに――)
と、思った。と、同時に、顫えながら、立っている自分に、気がついた。
(死ぬつもりをしていながら、卑怯な)
と、感じた。
(兄に見られては――いいや、庄吉の、あの死物狂いに対して、恥かしい)
そう感じると、手早く、懐剣の紐をといて、顫える手に握りしめると、月丸が剥き出した、歯を、眼を、庄吉へ向けて、捻じ倒そうとしている隙へ
「庄吉、しっかりして――」
と、叫びざま、月丸の、手へ、斬りつけた。

「危い」
庄吉が、叫んだが、庄吉の声でないように聞えた。それと同時に、深雪は、胸を突かれ、脚を蹴られて、よろめくと、草の中へ倒れてしまった。それと同時に、地響きがして、庄吉と、月丸とは、組合ったまま、草の中へ転がった。荒い呼吸と、ひーっという悲鳴に似た呻きと、ううっと、短い唸りと、草の動きと、土の飛ぶのと――深雪は、すぐ、眼の前に、そうしたものの、狂闘を見た。
土が、弾ねた。灌木が、へし曲った。脚がからんで、空を蹴り、草の上を滑った。手が閃いたし、血眼の眼が、ちらっと見えると、剥き出した歯が現れ――いつの間にか、月丸に刺していた脇差が、とれてしまい、そして、二人の胸は、顔は、掌は、血だらけになってしまっていた。
深雪は、半分身体を起して、短刀を持ったまま、片手を地について、肩で呼吸をしていた。庄吉に、声をかけたかった

が、咽喉が、からからであった。短刀を、握っているのか、動かせるのか、もう、力も、何も、感じなくなっていたし、立とうとしても、膝頭が曲らなかった。それでも
（庄吉――）
と、心の中で、叫んで、左手で、土を掴んでいた。そして、月丸へ、それを抛げつけることが、いくらかでも、庄吉を、助けてやるような気がしたが、二人の格闘の狂暴さに、抛げつける暇もないし――深雪の、逆上した頭の中にさえ、恐怖と、惨酷とだけは、いっぱいになって、ぼんやりと、それを眼で凝視めながら、頭の中は、その光景に、狂いそうであった。
（兄様――）
と、ちらっと、感じた。
（庄吉が、殺されます）
そう思うと、自分が、庄吉を殺すように思えた。深雪は、這(は)って、近づこうとして、身体を、起すと
「野郎っ」
南玉の声であった。深雪の、うつろになったような頭の中に、眼の中に、棒を振上げた南玉の姿が、写った。そして、そのうしろに、小太郎の顔があった。
（兄様っ――）
と、叫ぼうとしたが、何んだか、身体が、地の中へ、落ちて行くようで、兄の顔が、急に遠くなった。
（しっかり、しなくては――）
と、思って、自分の手を、握りしめると、南玉が、棒を振上げていた。
（庄吉――）
と、思うと、草の中に、黒い凝固(かたまり)が、動いていた。胸がはだけて、血が見えていた。
（庄吉が、死んだ――殺された）
と、思うと、眼の前が、急に、暗くなって、頭を、後方へ、引倒されるように感じた。そして、それに抵抗しようとしたが、ずっと、穴の中へでも、急速度に、落ちて行くように感じると――何も、判らなくなってしまった。
「深雪」
と、叫んだらしい声だけが、ちらつと、耳の中へ聞えたようであったが
（師匠らしい）
と、感じただけで、もう、二人の死闘も、血も、草も、山も、月丸も、感じなかった。
「深雪さん」
と、いう微かな――遠いところで、誰かの呼んでいる声がした。深雪は
（声がした）
と、感じた。だが、それが、自分の名であるか――何んであるかさえ、判らないくらいに――微かにしか働かない頭は、記憶も、判断も無くなっていた。だが、もう一度
「お嬢さあーん」
と、呼ばれた時
（ああ、誰か、遠くで、自分の名を呼んでいる）
と、感じた。そして、その、呼んでいる声が、南玉の声だ

と、判ると同時に
（気を失った）
と、知った。そして、そう判ると共に
「庄吉」
と、口を動かした。頭の中、眼の奥には、血潮の散乱と、剥き出した眼球、破れた着物、掴み合う手、その手の中の乱髪、刀、踏みにじられた草、折れた灌木――そんなものが、入り乱れていた。
（ああ、二人のあの格闘、あれは、何うなったか）
深雪は、脚に、腕に、痛みを感じながら、不安と、恐怖を、全体に溢れさせて、眼を開くと、南玉の顔と一緒に、頭の中を、眼から突貫くような太陽の烈しい光を見た。そして、眼を閉じた。
「お嬢さん、しっかり――」
「庄吉は？」
深雪は、眩暈（めまい）を感じながら、細く眼を開いて、庄吉が、何うしたか、見ようとした。
「気がつきましたよ」
と、南玉が、誰かにいった。
「庄吉っ」
深雪は、そう叫んで、庄吉の答えのないのを思うと
（殺された）
と、感じた。
（床吉は死んだかしら？　もし、そうだったら、自分だけ、生きていては、庄吉の志に対して面目無い。あの男の尽してくれたことに、何一つ報いないで、殺しては、人の道に外れる。何も出来ぬが、自分のために殺された人へは、自分も亦、死んで――）
と、思った。
「お師匠さん――」
「さ、しっかり。お堂へ行って」
と、云いつつ、南玉は、抱き起そうとした。呻き声が、高く聞えた。
（庄吉だ）
と、思うと、深雪は、心臓が、凍るようであった。
「月丸、武士らしく、自裁するがよい」
小太郎の声であった。深雪は、はっきり、眼を開いた。小太郎の脚下の草の上に、庄吉が臥（ね）ていた。そして、その枕辺に、義観が、手当をしているらしく、うずくまっていた。月丸は、草の中に、俯向きに、倒れたまま、呻いていた。深雪は、南玉の手の中で、痛む身体を、起しながら
「庄吉は？」
「庄吉？　大丈夫、さ、早く、お堂へ行って。しっかり、つかまって――傷は無えんだ。さ、しっかりして――」
「お師匠さん、庄吉は？　本当に？」
「彼奴は、不死身だ。歩けますかい」
「ええ」
「えらいことをやんなすったねえ。月丸の野郎、あの一刀で、斃（くたば）っちめえやがって。ええ、もう断末魔だ」
月丸は、手を、草の中へついて、身体を起そうとした。髪は、元結（もとゆい）が切れたらしく、乱髪になり、着物が裂け、顔も、頭も血まみれで、乱髪が、頬に、額に、血と共に、こびりつ

いていた。深雪は、自分がそうしたと思うと、何かしら、恐ろしさを感じた。

「さ、急所は、外れておる」

義観が、そう云って、立上った。

「お嬢さんは？」

庄吉の声であった。深雪は

「庄吉」

と、われ知らず叫んで、ちらっと、小太郎の顔を見て

（はしたないと、叱られはすまいか）

と、思った。だが、総てを忘れて、そう叫んだ瞬間は、嬉しさで、いっぱいであった。

「ええ」

と、庄吉が答えた。

「動いてはならぬ。そのまま、臥ているがよい」

義観は、そう云って、深雪を見ると

「先へ戻るがよい。もう済んだ。死人の始末は、坊主の役じゃで――」

と、云って、月丸の背後へ廻ると、腋の下へ両手を入れて、胸を押えてみた。小太郎が

「呼吸は、ござりましょう」

義観は、頷いて、膝を、背へ当てると

「こらしょ」

と、云って、ぐっと、活を入れると共に、月丸が

「うう――ううーん」

と、唸りつつ、脣を、手を、脚を動かした。だが、眼は閉じたきりで、脣は、紫暗色に変じ、頬は、血の中から、灰紫色に見えていた。

「月丸っ」

小太郎が、叫んだ。

「無念」

低く月丸が呟いて――だが、上げかけた頭を、又、垂れてしまった。義観が、背後から、抱いたままで

「月丸、自裁せい。な、武士らしく、自裁せい」

と、耳のところで、叫んだ。月丸は、袴の地の判らぬくらいに、血を流し、血をなすりつけている腰の辺へ、手をやった。手は、顫えてもいたし、もう、感覚がないらしく、腰の辺りで、ただ、指が、動いているだけであった。

「刀か」

答えが無かった。

「刀か」

肩で大きい呼吸をすると、指が動かなくなった。だが、眼を細く開けた。然し、もう、瞳は濁ってしまっていて、視点が乱れ、力も、光も無くなっていた。

今まで、兇猛な獣の眼のように光った眼であったが、眼が、その光を無くすると共に、脣も、鼻も、眉も、おとなしくなってしまった。血に染んでいるだけで、死に行く人の平和さが、顔中に、現れていた。

小太郎は、それを見ると、ずかずかと、近づいて、深雪が、月丸を突き刺した脇差を拾い上げると、月丸の前に、しゃがんで

「綱手のところへ、行け」

と、叫んだ。月丸は、眼をしばたたきながら、瞳の乱れた眼で、何かを凝視するように、じっと、上の方を見て、微かに、笑顔をした。
「腹を切れっ」
耳許で、叫んだ。そして、指の間へ、脇差の柄を握らせて、指を押えると、暫く、指を動かしていたが、柄を滑らせると一緒に、眼を閉じてしまった。大きく、肩で呼吸をした。義観が
「腹も切れずに死んだ」
と、いって、立上った。月丸の脚へ、大きい痙攣が来た。草の上で、血まみれになって、二三度、手足に痙攣が来ると、動かなくなってしまった。誰も、暫く黙っていた。義観が
「戻ろう。ここの始末は、又、後じゃ。庄吉を、扶けて」
と、小太郎にいって、二人は、庄吉の左右へ、膝をついて
「立てるか」
「ええ――や、野郎め、死にましたかい」
庄吉は、呟いた。そして、眼を閉じた。

移り行く

「久光様が、お渡りでございます」
と、次の間から、坊主の声がした。斉興が
「うむ」
と、云った時
「未だ、お臥みではあるまい」
と、いう声がして、足音が、襖の外で、止まると
「父上」
と、襖が開いた。斉興は、じろっと、見たまま、煙草を喫っていた。久光は、坊主の持って来た褥の上へ、坐ると
「早く行け」
と、坊主に云って、次の間の者へ
「皆、暫く、遠慮致せ」
と、叫んだ。斉興が、上眼に、じろっと、久光を見て
「何んじゃ」
「家の重大事に就き、夜中を憚らず、参りました」
「わしの隠居のことか」
「左様」
「わしは、隠居をしてもええ――隠居をしたい。然し、隠居をすれば、家のつぶれることは、眼に見えている。隠居をせんでも、家は、そう濫りにつぶせるものではない」
「幾度も、聞いております。兄上の政策が、多大の金子を費し、折角、父上なり、笑左なりの立直したる藩財を、又、空しくするであろうとの御懸念で、ございましょう」

「それのみではない。不逞の浪士輩に、担ぎ上げられて、倒幕の、攘夷のと、大外れた事をしでかすかも知れぬ。それに、斉彬の代となれば、わしが、今度国許で処分した奴等の余類を取り立てて、上席の者を、悉く、処分するかもしれぬ。そうなると、いよいよ、島津の内訌は、天下に知れ渡って、これがためのみでも、転封されるかも知れん。それよりも、今暫く――機をみて、お前に、譲ろうと思うが――」

久光は、父の顔を、鋭く見て

「要りませぬ」

と、頭を振った。

「要らんなら、要らんでよい」

「父上は、茶壺と、十徳とを、二度拝領なされました」

「うむ、隠居せい、との謎じゃ。二度も、謎をかけられたのは、三百諸侯、三百年間、わし一人じゃ。あはははは」

久光は、懐へ手を入れて、書付を出して来た。

「読み上げます」

私領琉球国へ滞留罷在候異国人共之儀に付而者、追々被仰達候御趣旨之旨、相心得致指揮、仏蘭西人者、無異議引払、英国人は未だ滞留いたし居候得共、国中一統人気も平常に帰し――

「わしの稟申書ではないか」

「はい」

「それが、何うした？」

「父上、その稟申書に、書いてございます、琉球国無事安穏のことは、悉く、偽りと、幕府要路へ知れておりまするぞ。今一通――島津将曹の分――」

久光が、読みかけると

「判っている」

久光は、又、懐へ手を入れて

「今一通――これは――」

と、云って、紙を、披げると

「島津豊後と、末川近江より、石見宛の書面、これも、阿部伊勢の手に入っております」

「誰が、左様の密書を――」

「判りませぬ」

久光は、口早にいって、頭を振ると

「読み上げましょう」

と、鋭く云った。

去年十一月七日、英国船一艘、那覇へ来着、彼国軍機大臣より、更に有無之品、致交易度趣之書状持越、又者右船乗頭よりも、同様交易筋之儀申聞候に付、去午年、仏国大総兵交着之節、和好交易等相断候趣を以て――

「誰から、左様の物を手に入れた」

斉興は、大声で云って、久光を、睨みつけた。

「当路の人より」

「誰じゃ」

「申上げられませぬ」

「美濃か」

「申せませぬ」

「貸せ」

突き出した斉興の手は、微かに、顫えていた。そして、一通り目を通すと、久光が
「何故、異国人共の交易強要のあったことを、無い、無事だ、国中一統人気平常だと、偽りになりました。この一点で、上を欺いたるものとして、改易にされても、恨むべき筋はございますまい。何故、かような小刀細工をしてまで虚位虚名を、お望みになります？」
「虚位虚名？」
「そのことも、上には、御承知でございまするぞ。国許の平穏を装い、異国との交渉は無事解決と偽り、その功によって、三位に進まんとするお心でございましょう。今更、三位に進んで、何になりましょう。正四位上宰相、松平大隅守として、何不足がございます。この上に、密貿易露見のこともあり、今度の騒動のこともあり、隠居せよとの謎を、二度も受けておりながら、のめのめと――」
「何が、のめのめじゃ。何んという言葉を使う」
「殿中にても、世上にても、左様に申しております」
久光は、手早く、将曹から、幕府へ報告した文面の写しを、取り上げて
「この、稟申書の如き、署名は、ただ、将曹一人、藩老の連署が無くて、何故、この藩国の一大事件を、上へ通達するような、軽々しきことをなされました。これも、悪く推察すれば、余人に洩しては、反対されるおそれがあってのことでございましょう。何故、あったことを有りのままに、通達なされませぬ。この事実の隠蔽によって、異国係としての兄上の板挟みの苦境が、お判りになりませぬか？　母上のなさるような浅墓な企て、幕府とて、目もあれば、耳もございますぞ。まして、天下に攘夷、開国論の盛んなる折柄、異国船の来て、交易を強要したという重大事が、洩れずにおりましょうか。琉球が、辺僻の地などと、そんなことを考えて、匿せば、匿せ得るものと、お考えになっているお心が、判りませぬ。もし、兄上に、失政があれば、その時こそ、久光、兄を押除けてでも、御家を継ぎましょう。当今天下第一の人物として、上下より称讃されている兄上を、当主にせぬなどと、父上、ちと、愚にお返りではございませぬか。お為派崩れに加担した軽輩共を取立てて、上席の者を処分するであろうなどと、余り、兄上の心に、お察しが無さすぎますぞ。お為派の者が、兄上に、何をすすめても、ただ父上の御意のままに、と、国許の、彼等の陰謀も、所詮は、兄上が押えつけて、その申し分を用いなかったがための蜂起とは判りませぬか？　手前に、家督を仰せつけられる御慈悲がございますなら、手前の、この申分をお聞き入れ下さりませぬか？　父上のため、家のため、いや、天下のために、兄上を――兄上は、天下のために、父上のために――何んなに、苦労を――子供を――殺されても、愚痴一つ、洩さずに――」
久光は、涙を浮べて、声をつまらせた。斉興は、黙っていた。

将曹は、腕組をして、首を傾けたまま、黙っていた。お由羅は、すきやの着物の、襟裏を返し、少し、くつろげた胸の、濃化粧に、その襟裏の紅縮緬を映えさせて、煙草ものまずに、黙っていた。二人とも

（今、斉彬が相続しては、自分達の努力が、水の泡と、消える）
と、いう感じで、胸を圧えつけられてしまっていた。
（斉彬が、相続すれば、当然、その反対派の吾々共を、処分するだろう。何う、処分しても――何んなに軽い処分でも――）
将曹は、自分の位置として、斉彬のやり方として、斉興が、お為派に加えたような処分はしないとしても――
（役は変えられる、罷免される――命にも、石高にも別条は無いが――然し、現在の役を誰かに代えられたなら、それで、万事は、水泡に帰する）
将曹は、自分達の計画した、斉彬の世嗣を、呪殺するということが、余りに、うまく運びすぎたことに、喜んでもいたが、その底では、薄気味悪くもあった。
（お家のために、その方がいい。斉彬を、相続させてはならない）
と、いう信念が、相当に固く、あるにはあったが、呪殺という手段のことを考え、何も知らぬ幼児の、次々と、死に行く様を見ると、その死の――その幼児の怨みの幾分かは、自分へかかってくるような気がして、余りに、その死が、うまく運ぶゆえに、自分の命のことに対しても、気味悪さが、感じられた。そして、何っかに、悪いことをしているな、というような感じがあって
（お家のためだ――）
と、思ってみても
（余り、上手に、事が運びすぎる）
と、却って、不安になり
（ものは、満つれば欠ける、というが――）
と、自分達の、陰謀が、いつか、破れるような気さえした。
「斯様なことも、考えないでは、ござりませなんだが――」
と、将曹が、呟いた。
「余り早すぎて――」
お由羅は、黙ったままであった。
（斉興が、隠居をすれば、妾は、四国町へ下げられるかも知れぬ――下げられるだけならよいが、あの軽輩共は、殺しに来るかもしれぬ）
お由羅にとって、斉興を隠居せしめて、斉彬を立てようとする幕府の圧迫が、こんなに強く来ようとは、考えられぬことであった。
（斉彬を、殺す外にない――）
二人とも、そう考えはしたが、斉彬を殺すということは、同時に、自分らも、久光も、殺されて、島津の家が滅亡することであった。斉彬を殺したなら、軽輩の人々が、何をするか――その人々の気持は、十分、二人に判っていた。
（牧に命じて、呪殺を――だが、牧は、いつかの日、斉彬のような、心の強い方は、効き目がないと申していたが――それでも、牧の外に――）
と、思うと
「牧は、何処に居りましょうかの」
「さあ――」
将曹は、矢張り、腕を組み、首を傾けたままであった。
「捜して――」

「事ここに致っては、大殿に、飽くまで、隠居することを、拒絶して頂くの外に、ござりますまい。お方」
将曹は、腕を解いて、じっと、お由羅の顔を見た。
「お上も、近頃は、すっかり、気が、弱くおなりなされてのう」
「さ、それを、寝物語で一つ――何んとか、それより外に、差しずめの方法として、ござりますまい。それに、何よりも困るのは――久光公の、兄贔屓(びいき)――」
「それが、妾にものう」
お由羅が、そう答えた時、遥かの外から
「御家老様へ申し上げます」
という、女の声がした。
「何んじゃ」
将曹が、大声で答えると
「久光様、お召しでござります」
将曹は、暫く、黙っていたが
「只今参ると、申し上げておけ」
そういって、振返って
「何しろ、幕府の方に於ても、手許不如意(てもとふにょい)の上に、異国のことは、誰も、心得ておりませぬから、一にも、二にも、斉彬斉彬と、斉彬公を引出して、金と、智慧とを一時に、絞り取ろうと、幕府が必死になっているだけに、容易なことではござりませぬ。茶壺を出した上に、十徳を出して、二度も、隠居せよと――大殿も、意地になって、隠居するなど、気振りもお見せになりませぬ、と、今度は、お為派崩れを口実に、密貿易を口実に、何処までも、隠居をさせようと、この強硬手段に出る以上、ただ、頼むところは、大殿のお心の固さ一つ、それを固めるのは、お方の、その腕一つ――吾々のためではござりませぬ、当家の存亡にかかわること。何卒一つ、十分に――」
「妾も、それは、心得ますが、牧の行方を調べて、牧の意見――斉彬を、呪えるか、呪えぬか、何より、かより、それが一番大事なことゆえ、心利いた者を、すぐに、走らせてもらえませぬか」
「心得ましてござります」
将曹は、暫く考えていたが
「こちらより、両三人の者を――お方には、誰か、心づいた者がおりませぬか」
「ここより人を出しては、目に立つであろうがな。それより、京か、大阪の邸の者に、頼んで――」
「いいえ」
将曹は、首を振って
「京、大阪には、不逞者が、近頃うんと居りまして、却って、危うござります。斉彬を担ぎ上げて、幕府を倒そうなどと――この風説一つだけでも、幕府としては、聞きずてにならぬのを、知らぬ顔をして、異国掛に引上げようなどと、この肚(はら)黒い、魂胆の底には、当家の金、調所の残しておいた金が――金に目をつけての仕業でござりましょう。無けりゃ困るし、あってはうるさし――」
と、いった時
「久光様、お渡り」

と、いう声が、廊下でした。お由羅が
「また――」
と、呟いた。将曹が、立上って
「只今、そちらへ――」
と、叫んだ。そして、足早に歩き出すと、襖のところに、手燭の灯が見えて、久光が、足早に入って来た。
「急用じゃ」
と、いって
「御部屋へ――」
と、いう将曹に
「いいや、母上も、御一緒の方がよい。参れ」
と、口早にいって、将曹と、擦れちがって、お由羅の方へ行った。女中が、周章てて、褥を持って来た。将曹が、苦い顔をして、久光の後方からついて来た。

「未だ、眠(やす)みやらぬかえ」
と、お由羅が、久光に、声をかけた。
「母上は又、将曹と、何事を、お話でござりますかな」
将曹が
「つい、世間話が、長うなって――」
「世間話とは、父上が、世間から、非難されていなさるようなことをか」
「非難とは？――別に、大殿は、左様な――」
「それが判らんで、よく家老職が、つとまるの」
「久光、何を、お云いやる」
と、お由羅が、叱った。
「耳が、ついているのか」
と、久光は、将曹の耳を見た。
「これっ」
お由羅が、大きい声を出した。将曹は、じっと、久光を睨みつけて、顔を、赤くしていた。久光は、その眼を、睨みつけながら
「その眼なら、読めるであろう。只今、父上から頂戴致して参ったものじゃ。よく、拝見してみい」
と、云って、懐中から、書面を、取出して
「読んでみい、声を出して」
将曹が延した手へ、渡した。将曹は、披げて、少し読むと、顔色が変った。時々、唾を呑み込んだ。
「声を出して読め」
将曹は、答えなかった。
「これで、天下も、当家も、安泰じゃ。将曹、そうであろうが――」
と、云った時、お由羅が
「それは？――何ういう？」
と、将曹へ、話しかけた。
「貸せ」
久光は、将曹の手から、書面を、受取って
「読み上げまする。よく、お聞きなされませ。母上」
と、云って、書面を披げてしまって
琉球国へ滞留之英人差戻方之儀御国体に不拘(かかわらざるよう)様厚奉蒙御内命候付、昨年帰国之上、猶又、種々、及計策清国へ嘆訴方、深致指麾(ふかくしきいたしおきしぎ)置儀御座候に付、来春御暇被下

候得者
「母上、よろしゅうござるか、このお暇は、江戸お暇のみではござりませぬぞ」
来春御暇被下候得者
「将曹、そうであろうがな」
直に致帰国、右手当向併に海岸防禦之儀、手厚取計可申心得に候得共、私事六十余歳罷成、其上持病の痔疾差起候節者、致難儀候間、嫡子修理大夫（斉彬）儀、年齢に罷成候に付、厚申含家督相譲隠居奉願含に御座候、此段御内慮相伺候、以上
松平大隅守
「母上」
と、云って、お由羅の方へ、書付を、差出して
「父上の、筆蹟に、相違ございますまい」
お由羅は、黙っていた。
「将曹を呼んだのは、外でもない、明日、この隠居願を持って、筒井殿の邸へ参り、阿部殿へ伝達を乞うよう」
「では、大殿に――」
と、いって、将曹が、立とうとするのを
「父上は、お臥みなされた。伝達せよと、予が、聞いて参ったのじゃ。これにて、父上への世上の非難も消える。母上、いらぬことをお考えなされずに、早く、お眠みなされませ。今夜は、身も、ゆっくりと眠れる。将曹、何を浮かん顔をしておる」
お由羅と、将曹とは、自分の膝を凝視めて黙っていた。
下城して来た斉彬は、いつもより、眼の微笑が、少かった。出迎えの家来達――いよいよ正式に御世継の決まる日と、薄々洩れ聞いて、喜んでいた家来達は
（模様更（が）えになったのであろうか）
と、思った。
（今に、今にと、懸声ばかりで、本当に決まらなかったのが、大殿、御自身から、今度は、隠居願を出されて――これで、目出度く、御相続ときまったのに――あのお顔は？）
と、思うと、又何かしら、不慮の故障が入ったのではなかろうかと、何に怒っていいか、相手の判らぬ憤りが、起ってきた。そして、俯向いて、斉彬の、歩いて行く足音を聞いていたが
（何かあったにちがいない）
と、思っても、朋輩に、それをいうのも、朋輩から聞くのも、厭なような気がした。そして、黙って立つと、朋輩達も、黙って立って、詰所へ入っても、人々は、失望と、怒りとで、口を利かなかった。お互に
（何うして、こうも、御不幸な、お方であろう）
と、感じて、暗い顔をして、じっと、腕組していた。
斉彬は、居間へ入って、前からと、後方からと、袴を、裃を、女中に取らせながら、次の間の近習に
「渡来物の、氷砂糖があったの」
と、いった。
「はっ」
近習が、襖のところで、手をついた。斉彬は、褥の上へ、坐って

「それを、白金へ、御見舞に持って参れ。そして、父上の御機嫌を伺って参れ」
「はっ」
近習が、襖の蔭へ身体を引くと、廊下の方で
「久光様、お渡りでございます」
と、いう声がした。
「ああ」
斉彬は、そう云って、眼を閉じて、肩で、大きい呼吸をした。女が、褥を持って来て、つつましく、斉彬の前へ敷いた。そして、暫くすると、足音がして、久光が、現れた。
「お疲れでございましょう」
「うむ」
斉彬は、未だ、眼を閉じたままであった。坊主が、入って来て
「お薬湯」
と、云って、斉彬の膝のところへ、薬湯を置いて行った。斉彬は、眼を開いて、久光を見て
「何か、珍しい話はないか」
と、聞いて、薬湯へ、手をかけた。
「兄上の、御発明の、あの日の丸の総船印が、日本の総船印として、定められたそうで、ございませぬか」
「うむ」
「日章旗と、名づけて」
「ふむ」
久光は、世継が、今日、殿中で決まったのに、いつもより、憂鬱な顔をしている斉彬の態度に、不安な影がさしてきた。
（何うしたのか――）
と、感じながら、又、何かしら、自分の判らないことを考えて、沈んでいるのではなかろうかと、思うと、濫りに、口へ出して、聞けないような気がした。だが、斉彬が、薬湯を飲み終ると
「首尾、如何で、ございました」
と、口を切った。
「断れぬことゆえ、お受けはしたが――父上のことを思うと、気がふさいでならぬ」
久光は、はっとした。自分が、無理に、斉興にすすめて、隠居願を書かせたことなど、斉彬に知れては、何う叱られるか、知れぬと思った。
「誰がすすめたものか――」
斉彬は、湯呑の中の、薬湯を、じっと眺めながら
「父上は、未だ、隠居をなさるお心持は、無いに――誰が、おすすめ申したのか――」
久光は、自分の兄に対する唯一の好意が、兄を怒らせ、兄を苦しめていそうなので、不安に脈打つ胸を押えて、俯向いていた。
「わしは、富国強兵の策として、理化学の外にないと信じているが、これを行うと、父上の御意にもとる――もとるにしても、天下のために、所信へ邁進する外にない」
久光は、頷いた。そして、父の隠居を、誰がすすめたかという問題から、離れそうなので、安心して
「天下のためになら」
「御意に背いても、と、申すであろうが、わしも、それを思

わんではない。然し、人の命は短く、理化学の道は遠い。学文、究理のみならば、容易であるが、それを、形に造り上げるまでには、幾多の困難がある。もし、わしが、その困難に耐えて、造り上げるまで、存命しておればよいが、もし、その間に、死ぬようなことでもあれば、理化学の仕事は、悉く水泡に帰する。それを思うと、父上の御意に背いてまでもすべきことか――久光」

斉彬は、微笑して、久光を見ながら

「いっそ、すぐ様にも、わしも隠居をして、お前に、家督を譲ろうかと、おもうておるが。これが、四方八方、円く治まる法ではなかろうか」

「お断り申します」

斉彬は、床の間の手文庫から、書付を出してきた。そして

「わしの志を継いでくれる者は、お前の外にない。然し、今すぐ、わしが隠居することも叶うまい。わしは、隠居をして、異国へ、理化学の研究に参りたいが、そうもならぬ。それで、お前が、わしの志をついでくれると、信じておるが、猶、念のためにこういうものを、作っておいた」

斉彬は、その書付を開きながら

「わしは、天下のためという口実にて、父上や、家中の者と争いとうない。然し、この道の外に、富国強兵の策があろうと思えぬゆえ、お前の代になったなら、この者等と力を合せて、わしの志を継いでくれ。知己を後に待つ外に方法がない。何んとなく、わしは、疲れて来たように思う。或いは、父上に先立つかも知れん。もし、左様なことがあれば、わしは、ただ徒らに、父上の金を費したことになる。何一つ、完成せぬうちに死んでは、外のこととちがい、理化学は、途中で止めては、何んにもならん。それで、わしは、江戸在留の者、国許の者の中から、こうして、有為な青年の名を書き抜いておいた。大久保、有馬、西郷の徒は、わしらと、当面の難局に当るべき人材であるし、この者らは、三十年の後に、天下の役に立つ者共じゃ」

斉彬は、手に書面を握ったまま、語りつづけていた。久光は、斉彬が家を継いで、自分のしたいと思うことを、存分にするであろうと信じていたのに、その反対の話を聞かされて、斉彬の、斉興を思う心に――そして、その斉彬に対して、斉興や、お由羅の採っている態度に対して、涙が出てきた。何も云うことが出来なかった。

「わしが部屋住の間は、未だ責任が軽うてよかったが、当主となれば、敵は、家中のみでなく、幕府も、他藩も――それよりも、この心の中の、いろいろの苦しみ――子を失い、父と争う苦しみ――己の儲けた金でない金をもって、成るか、成らぬか判らぬ仕事をしている苦しみ――久光、お前だけが判ってくれるであろう」

「はい」

「お前は、泣いているの――わしは、泣きもできぬ」

だが、斉彬の声も、曇っていた。

「この外に、未だ未だ、有為な者がおろう。いずれ、帰国して、調べて、又、残しておこう」

斉彬は、そう云って、書付を、久光の前へ、披げておいた。

久光が、手にとると

大目付軍役（いくさやく）　新納（にいろ）刑部
船奉行教育　寺島陶蔵（後の伯爵外務卿、寺島宗則）
船奉行　五代才助
右カビテン視察の事
開成所掛大目付　町田民部（後の久成、元老院議官）
小姓組番頭　村橋直衛
当番頭　畑山良之助
同　名越平馬
右陸軍学研究の事
開成所訓導　鮫島誠蔵（後の尚信、フランス公使）
右文学研究の事
医師開成所句読師　田中静州
右医学研究の事
医師　中村宗見（後の博愛、オランダ公使）
右化学研究の事
開成所英学諸生　森金之丞（後の有礼、子爵文部大臣）
開成所句読師蘭学　吉田巳之次（後の清成、子爵）
開成所諸生　東郷愛之助
同蘭学　町田申四郎
同　町田謙次郎
奥小姓開成所入学　市来勘十郎（後の海軍中将）
右海軍測量科研究の事
開成所諸生英学生　磯永彦助（この人が、現在唯一の生存者）

「頂いておきます」

久光は、巻き納めて、押し頂いて、懐へ入れた。

「今は、何うにもなるまいが、わしの大船禁造を解くことも、容れられたし、開国も、天下の勢いとして、実行されようし、時機が来たなら、この諸生共を、それぞれ異国へやって、その学文も見習わせるがよい。化学のことに就いては、それに興味のある者が、中村の外に見当らぬ故、追って銓衡（せんこう）するとしよう」

「化学は、兄上につづく者ございますまい」

「だから、父上のお残しになった金を、化学の判らぬ人々の中で使いたくない。然し、久光、三十年、いや、二十年で、わしの志は、天下の志になるぞ。わしは、それだけを信じている。それだけを信じていると、淋しゅうない。いろいろの苦しみも忘れ果てる。榴弾も出来たし、シャフトも出来たし、紅硝子もできたし、ただ一冊の、オランダの本だけからでも、異国に負けぬものが造れた。或いは――調所がおったなら、称（ほ）めてくれるかもしれぬ。あれは、出来たらこの上ないが、出来るか出来ぬか、判らんものに、金は出せんと、反対しておったが、今存命なら、喜んでくれるであろう」

久光は、調所が斉彬呪殺の計に加わっていることを、斉彬が知りながら、心から称めるのを聞いていると、斉興が、憎くなってきた。

（父と云い争いまでして、隠居願を、無理に書かせたが、こ

の兄のためなら、もっと、強く出てもいい）
と、思った。次の間から
「白金へのお使、只今、帰りましてござります」
と、云った。
「何うであった？」
「御機嫌の体に拝しましてござります。よろしくとの、お伝えでござります」
「そうか、父上御機嫌であったか、そうか」
斉彬は、元気いい、快い笑顔になった。久光は、又、眼が熱くなってきた。

一人の浪人は、褌一つになっていた。二人は肌脱ぎになっていた。もう一人は、半肌脱ぎで
「益満が、こう遅うては、お春も、一人じゃあ寝にくかろう」
「そうさ。かぼちゃ、とうなす、いろいろあれど、主に見返す奴は無いってね」
富士春は、浴衣の襟を、くつろげて、片立膝から、水色をのぞかせながら
「今夜も、厭に蒸すねえ」
五人の前に、肴の皿と、徳利とが置いてあった。
「毛唐は、男と女と、人の前でも口を吸うというが、本当かの」
「そういう犬のような真似を致す奴輩ゆえ、捨てておけんと申すのじゃ」
「好いた仲なら、嘗めもしようさ」
「ははあ、師匠も、嘗めるか」
「当り前さ」
「何うして、嘗めるか、後学のために、拝見致したいものだの」
一人が、肱を張って、富士春の顔を見た。
「何をつまらぬことを申している」
「いや、男女のことは、造化の大道で、攘夷と共に、神州男子の心得ておらねばならぬことじゃ」
「貴島さん」
富士春は、一人の齢の若い浪人に
「こうしてさ」
と、云って、手を延して、貴島の手を、引っ張った。
「何をなされる」
「いいじゃないか――何んとか云ったね。どうかのだいど？」
「造化の大道」
「それそれ、造化の大道ってばさ、こっちお向きよ」
「師匠は、酔うといかん」
貴島は、手を振り放して
「仮令、斉彬なりと雖も、又、益満の命なりとも、開国説をとるなら、わしは、反対じゃ――」
「妾の命でも、反対か」
富士春は、膝を崩して、又、手を取ろうとした。
「拙者と、嘗めよう、お春殿」
と、褌一つのが云った。富士春は、じろっと見て
「もう少し、鼻を高くしておいで」
一人が
「師匠、淫らなっ――益満の留守に」

と、叱った。
「おやっ――」
「酔うといかん」
「妾が？――酔うている？――い、いつ酔うた？――妾が、間男でもしたというのかい？――したって何んだい、間男ぐらい」
「斉彬の真意は判らぬが、薩州の急進党は、攘夷を以て、討幕を口実にしようとしているが、幕府を討つ口実としては、開国は、違勅であるという、この一本槍で――」
「何が、一本槍だい。二本差っ、大の男のくせに、あっちいくっついたり、こっちいくっついたり、昨日まで、公方様の家来であったくせに、今日は寝返りを打ったり、憚りながら、富士春は、意地ってことを、知ってるよ――いい加減なことを云って、休之助め、京女郎と、ふやけくさって、間男が、何んだい――手前勝手な」
浪人達は、初めて見た富士春の酔態に、持て余しながら
「師匠、先に寝たら、何うじゃ」
「人のことを、かまう柄かい。居候浪人」
「何？」
一人が、睨みつけた。一人が
「馬鹿っ、酔っ払いに」
と、たしなめた。
「威張るな、貴島――小太郎を、連れて来い、小太郎を。あちきの好きな小太郎を」
富士春は、脣をなめて
「そりゃ、いい男だからねえ――鼻べちゃ、お酌」
「そう飲んではいかん」
「だ、誰の、お鳥目で買ったお酒だい。余計な世話やくから、だんだん鼻が、低くなるんだよ。こ、今夜から、釘抜で、挟んで寝るがいいや」
「心得た」
「笑ってるよ、この人は。笑うと、鼻まで笑うね」
「斉彬は、何処までも、公武合体で行こうという肚らしいが――」
「斉彬は、何うでもいい。賢明と云っても、殿様育ちにすぎん。吾々の目指すのは、薩摩の金だ。薩摩軽輩の奮起だ。益満の書状によると、姉小路卿が、いつでも立つ、というが――」
「薩州の公武合体論も、手ではあるまいか。江戸と、京都との、模様を探る手だと、わしはおもうの。益満の行動を見ると判る。策謀、又、策謀だ」
「そうだ。もし、疑うならば、薩州が、天下をとる野心かもしれぬ」
「いいや、斉彬は、そういう人物ではない」
「そりゃちがう。海軍奉行、勝麟太郎を、京都へやったのは、公武合体のためでなく、開国説を公卿間に吹き込むため、斉彬と打合せて行ったという話がある」
「それでは、斉彬は、一体、どういうのか、既に、イギリス艦を、ぶっ払ったではないか」
「そのイギリスと、手を握ったではないか」
「だから、判らんと申すのじゃ」

「そうさ、男の心なんか、判るものかい。庄吉の野郎め」
富士春は、酔ってしまったらしく、眼を閉じて、首を傾けてしまった。
「そこが、斉彬の賢明なところで、既に、異国と同じ船を造るようになったと申すではないか」
「船は同じでも――船で戦うのではない。武で戦い、魂で争うのだ」
「それは、そうだが、長篠の戦いに、武田の精兵が、織田の鉄砲に、打ちすくめられたように、異国の兵器は侮れん。斉彬が、その点へ眼をつけているのは、えらいではないか」
「そうでない。彼の祖父の重豪(しげひで)と同じで、今に、男女共、口を嘗めろ、と、悉く、異国の真似をするようになる」
富士春が
「犬を嘗めろ、鼻べちゃ」
と、呟いた。
「聞いてたか」
「酔っちゃいないよ」
富士春は、身体を一揺りすると、横になってしまった。
「俺には判らん。万事、京から、益満が、戻った上にて、進退を決しよう。話の如く、江戸を荒して、幕府と一戦すると申すなら、命をすてて、勤王の魁(さきがけ)をするし、又、変節してくるなら、吾々同志は、すぐ様、京へ上ろう」
「そうだ」
「薩州も、斉彬も、益満も、判らん」
「そういうものは判らんでもよい。吾等期するところは尊王攘夷」
「そうだ、前途程遠し、思いを禁裏勤王に馳せ、か」
「叱っ、隣りへ聞える」
と、一人が制した。一人が
「寝たらしい」
「貴島、二階へ、運んでやれ」
「女の沙汰かっ」
と、貴島が、鋭く云った。
牧仲太郎が、手を叩いた。
「はい」
次の間で、返事があった。
「山内を――」
「山内様は、先刻、お出ましになりましたまま、未だお戻りになりませぬ」
京都下河原、二階堂志津馬の寮の、一部屋であった。狭い庭であるが、鞍馬石に、木竹を配して、巧妙に布置されてあった。牧は
(山内も、家中の、尊王熱に浮されて、京の街を、歩いているのであろう)
と、思った。
(あれは、自分の腕を、人に、己に、見せたくてかなわぬらしいが)
牧が、そう思って、扇を使っているところへ
「御免」
と、廊下で、声がして
「お一人かの」

と、部屋の中を覗き込みながら、京都藩邸の用人が、入って来た。江阪という六十近い老人であった。女が、すぐ、小走りに、蒲団を持って来た。
「京都は、暑いて」
と、呟いて、額を拭いて、老人は、縁側へ、座蒲団を持って行った。そして
「江戸から、早馬が参って――」
と、庭を見ながら
「いよいよ斉彬公、御相続と、決まりましたが、それに就て――」
老人は、扇を、閉じて、牧の方へ向き直った。牧が、
「ははあ」
と、頷いた。
「万一、貴殿に、不慮のことでもあってはと、一党心ならずの心痛で、暫く、何れへか、身を――」
「忝のうござる」
牧は、冷やかに答えた。そして、
（昨日まで、斉興に忠義立てして、当主が代ると、又、斉彬の味方になる――頼むまじき人心）
と、思った。
「当地へも、大分、国許の若い者が入込んで、これが又、刀を抜きたい連中のみで、ござってのう」
「左様」
「物騒な世の中になりましたわい。わしらの若い時、三十年が程は、静かすぎるくらい、静かであったが、近頃は、公卿衆までが、先立って、お騒ぎになるようになりましたのう」
「左様」
牧は、己の信じる兵道などが、若い人々に、一顧もされず、若い人々が、悉く、斉彬の西洋学文に傾くのを見て、憤りと共に、呪い心になっていた。
（善にもあれ、悪にもあれ、己一人は、所信を貫こう。お由羅が、将曹が、よし、斉彬の方へ変更（へんが）えしようとも、己一人は、兵道の威力をもって、斉彬の化学を破って見せよう。物理、計数の上に立つ力が強いか、人間の霊妙心が強いか――斉彬を呪殺することは、よし、島津に対して不忠にもせよ、霊妙心の、不可思議を、天下に示すことは、兵道家としての務めであり、天下のためでもある。まして、謂わんや、斉興公への忠義になることを――この老人は、体よく、わしに、退去を願いに来たのであろうが、云われずとも、この炎暑の天に、諸天を迎えて祈ることは、何時よりも効験の著しいことだ――かかろう）
牧は、
「明日、早々に、山へ籠ることに仕（つかま）ろう」
「いや、そうせかずとも――」
と、江阪は、外を眺めていた。
牧は、指を繰っていた。そして
「斎宮合致の刻」
と、呟いた。
「御存じかな」
老人が、呟いて、
「聞かれましたかな」

と、振向いた。そして、膝を、牧に向けて
「御子息の」
と、顔を見た。牧は、眼を閉じて、何か考え込んでいた。
「御子息の――」
「倅の？」
「百城とか申される――」
「それが？」
「いや、未だ、お耳に入っておりませんとなれば、一大事」
牧は、それでも、眼を閉じたきりであった。
「何んと、御挨拶申し上げてよいか――」
老人は、そう云ったのに、未だ眼を開かぬ牧に、物足りなさを、感じながら、
（これだけ云えば、判りそうなものであるのに――そして、判ったなら、せめて眼だけぐらいは開くのが人の情であるのに――）
と、思った。そして
「実に、御愁傷なことで――御子息が、先日、不慮の死を遂げられたよし、聞き及んでおりますが――」
老人は、何処まで云えば、眼を開くか、意地のようなものが、出てきた。
「ははあ」
牧は、そういって、眼を開いた。だが、瞳にも、眉にも、脣にも、何んの動きも、現れもなかった。
（勘ちがいではあるまいか）
と、老人は、思った。そして
「この奥の叡山で、その百城――様かな――御子息が、町人に手傷を受けて、それが因(もと)で亡くなられたと、山でえらい評判が、京へも聞えておりますが、貴殿の、御子息に、間違いなしとしたなら、詮議もせにゃならず、始末も、せにゃならず、それで、参ったのでござるがな。一つ、所司代へ訴え出て、その手からも探索させ、又、当方からも、手をつくして――」
「御好意は、忝のうござるが、御打ち捨ておき下さるよう――」
「然し、余のことちがい――御遠慮には、及ばん。その町人を――」
「町人に手傷を受けた不出来者などは、子でござらん」
「御尤もながら、そりゃ、貴殿の御気性として、さもあるべきところでは、ござれど、親の情として――」
「お断り申す」
牧は、鋭く云った。そして、つっと立上ると、次の間を抜けて、廊下へ出て、手を叩いた。老人は、じろっと、その後姿を、睨みつけていたが
「それでは――牧殿」
と、声をかけた。牧は、廊下へ立ったまま、出て来た女中に
「山内が、その辺に居らぬか、お捜し下さるよう」
女中が、去ると
「牧殿、これへ、御手当金を、置いておきますぞ」
と、云って、金包を出して、畳へ置いて、押えつけた。そして
「どれ――どれ」

と、呟いて、立上った。遠くに、山内の笑声が、女の、甲高(かんだか)い叫び声とがして、すぐ、廊下に、山内らしい、荒い足音が、近づいて来た。老人が
「えらい強(きつ)いお方じゃ」
と、又、呟いて、戻りかけた。

「今日も、お暑うございます」
義観の姿を見た、力餅屋の亭主が、丁寧に挨拶をした。
「暑いなあ」
茶店の中にいた若い僧侶が、立上って、お叩頭をした。そして、今まで、食べていた餅の、皿を持って、片隅の方へ寄った。外の登山者達は
(汚いなりの坊さんやが、えらいのだろう。えらい人には、時々、こんな汚いえらい人があるという話だが――)
と、思って、義観を眺めていた。
「えらい騒ぎが、又、ございましたそうで」
「ふむ、餅屋、繁昌して、よかろう」
「お蔭様で――あの、娘さんは?――一体、何処の?」
「ありゃ、山の狐じゃ。淋しいから、わしの嬶(かかあ)にしてしもた。子が生れると、安倍晴明になる」
「へへへへ――もう、あの方々、皆、お立ちで?」
「京へ下りた。てんぼうが一人だけ残っている。餅を少し分けてくれんか」
「さあさあ、何うぞ、お持ち下さいますよう。五十も――」
「結構結構」
軒下には「弁慶力餅」と書いた看板が、屋根のところにも、同じ文字の白い旗が、山風に翻っていた。
根本中堂へ行く人も、四明ヶ岳へ行く人も、ここの前が、通り路であり、そして、この茶店が、唯一軒の休憩所であった。
三人の侍が、上着を脱いで、肌衣の腕も捲り上げ、手拭をつかんで、編笠の下の顔を、時々拭いながら
「やれやれ」
と、叫んだ。一人の侍は、暑さも、汗も感じぬらしく、端然として、扇子を右手にしていた。だが、茶店の前へ来ると
「許せ」
と、云って入って行った。お盆へ、小さい餅を盛っていた亭主が
「ようこそ」
と、叫んで、小さい女に
「これっ」
と、声をかけた。何か、手工に夢中になっていた女が
「お餅でございますか」
と、甲高い声で叫んで、立上ると、侍が、四人立っていたので、それきりで、黙ってしまった。
「水をくれ、水を――」
「水は、冷たかろうな」
四人は、編笠をとって、腰をかけた。
「暫く、待って下されますなら、谷へ降りて、汲んで参りますが」
亭主は、そう云いながら、義観に
「お届け申しましょうか」

「何んの、わしが、持って行く」
一人が
「間(ひま)がかかるか」
と、聞いた。
「一寸、かかりますが」
「何んでもよい。早くせい、早く」
「はいはい」
義観は、じっと、牧の横顔を、凝視めていた。そして
(月丸の父ではないか)
と、思った。
(前の祈祷を、もう一度行いに来たのであろう――よく、月丸と似ているが、月丸とは、人物の段がちがう)
そう思った時、一人の侍が、
「亭主」
と、叫んだ。

「亭主」
と、大声で呼んだ侍が
「この辺に、義観という坊主が、住んでおるか」
亭主は、その義観が、その侍の横にいるので、何う返事をしていいのか? いると云って、義観を教えたなら、侍がてれるであろうし、と云って、いないとも云えないし
「はい」
と、云ったまま、お叩頭をして、暫く、黙っていた。参詣人も、若い僧も、侍の顔をじっと見ていた。
「おらんか」

「おるぞ」
義観が云った。
「わしが、義観じゃ」
三人の侍が、振向いて、義観を見た。そして、暫く黙っていたが、一人が
「左様か」
と、云って、頷いた。
「実は――百城月丸なる者が、貴僧の手によって、厚く回向(えこう)されて、葬られたと申すことで、ござるが、真実かの」
「さあ、いろいろと回向したり、葬ったりするで――」
「仙波小太郎なる人物を、御存じかな」
「知らん」
「知らん?」
侍は、義観を、睨みつけて
「月丸を殺した対手であろうが」
「見ておられたかな」
「見てはおらぬが、小太郎兄妹の者が、月丸殿を殺したにちがいあるまい。何故、検視を受け、邸へ通知し、表向きとして、処分なされん。犬猫を埋めるように、自儘勝手に葬って、罪跡を匿そうなどと、われわれ、それを調べるために参ったのじゃ」
「はああ」
「小太郎は、何処へ逃げたか。町人が、二三人同行していたとの噂だが、それらの奴の素性、そういうことを、承りたい――」
「小場」

と、牧が、呼んで、小場が、振向くと、目で止めた。
「月丸の脇差を、取っておいた。御覧なさるがよい。立派に、腹を切っていなさる」
牧が、義観の方へ、膝を向けて
「某は、月丸の父でござる。いろいろと、御厚情の段、厚く御礼申し上げます」
と、云って、頭を下げた。
「いや、仙波八郎太を埋めたり、百城月丸を埋めたり、いろいろでござる」
牧は、義観をじっと凝視めながら、頷いて、懐から、金包を取出した。一人が、
「仙波のも、御僧、埋められたか」
と、聞いた。
「猫でも、人間でも、何んでも扱うな」
牧が、金包を義観の方へ押出して、
「軽少ながら、倅への読経料、お収め下さいますよう――せめて、水ぐらいは、お供して行って手向けてやりとうござるが、子は父の心を知らず、父は又、父の情に欠けたる者、何卒、御僧において、拙者の代りとして、よろしく、冥福をお祈り下さるよう――」
静かに云って、軽く頭を下げた。そして
「参ろう」
と、三人に云って
「暫く、お山を拝借仕ります」
牧が立上った。一人の士が、鳥目を出した。牧は、編笠へ手をかけた。そして、四人が立上った時
「山を借りるとは？」
と、義観が、牧を見上げて云った。
「山を借りるとは、修法（ずほう）のためかな」
一人が
「左様」
と、答えた。
「牧殿」
牧は、名を呼ばれて、じっと、義観を見たし、警固の人々も、編笠を手にしたまま、油断なく、義観を見守った。
「あの火炉の形は、三角でござったのう」
そう云って、牧の眼を、じっと見上げた義観を、牧も又、無言で、凝視めていた。
「三角の、鈞召（きんしょう）金剛炉は、何を祈る時に用いるものか。それを知っていて、山を貸すことは、出来んのう」
「何っ」
一人が、一足踏み出した。
「山内っ」
牧が、叱った。そして
「御尤も」
と、頷いた。
「然し、呪咀も、時により、事により、人によって――」
「いや、いやいや――」
義観は、首を振って
「斉興が当主ゆえ、その方の命にて、斉彬を呪ったとして、斉彬が当主となりゃ、これ、主殺しに当る――」

「人事の推移の如き末の末でござる。われらは、兵道の威法を示して、天下にこの法有るを知らしむれば足りる」
「物の顕現は内発による。強いて現そうとして、現す者は、常に邪道に陥る」
義観は、牧を見上げて、その眼を、じっと、睨みつけていた。
「この山は、貴様のものか」
と、山内が、怒鳴った。
「ああ、わしのものじゃ」
「何処に、貴様のものじゃという証拠があるか」
「わしのものでない、という証拠が、何処ぞにあるか？」
「何？」
「出してみい」
牧が
「山内っ」
と、又、叱った。そして、
「以前、この頂上にての修法が、乱暴者のために妨げられましたが、それをそのまま棄ておくことは、兵道家として、天に対して、恐れあり、枉(ま)げて、三五夜頂上を許して頂きとうござるが――」
と、云って、又、床几へ、腰を、静かにかけた。
「あの時のお供は、三十人余り――暫くの内に、世の中は、変るものでござるのう」
「人の心が――」
牧は、冷たい微笑をした。
「お心は、よう判る。月丸へ手向の水一つやられん心も、よう判る。又、貴殿が亡くなられたなら回向して進ぜようとも思う心もあるが、修法は、許せん。貴殿が、是と信じていることは、わしの非とするところ、この是非得失は、論じても了(お)えまい。山は、当所だけでなく、愛宕も、鞍馬もある。所信を曲げん以上、他所の山のことへまで、口は出せんが、斉彬を苦しめることは、ようないことで、ござるのう」
牧は、誰に、云われるよりも、この初見の僧に、こう云われることが、辛かった。それで、腕を組んでいると、義観は金包を、山内の袖の中へ、投げ込んで
「金は、いらん。後生は、よく弔うて上げる。もう、長い命でもござらぬぞ。あったら俊才を、惜しいことしてのけるのう」
と、牧の顔を見ながら立上った。
「無礼なっ、何を致す」
山内が、赤くなって、こう叫びながら、袂の中から、金包を掴み出した。だが、義観に渡すのも、おかしいし、自分で持っている訳にも行かず
「牧殿」
と、云って、差出した。
「うむ」
牧は、頷いただけで、義観の立去って行く後姿を見ようともせずに、じっと、腰をかけたままであった。四人は、暫く、黙っていた。義観の後姿は、杉木立の中へ、草の中へ、現れたり、隠れたりしつつ、小さくなって行っていた。一人が
「あの坊主は、当山でえらいのか？」

と、亭主の顔と、若い僧の顔とを見較べて聞いた。
「はい――なあ、良順さん、お山じゃ一番だろうの」
「うむ」
と、僧が、頷いた。そして
「又、明日」
と、亭主に、挨拶して立上った。
「先生、寺務所へ掛合って、今一応、交渉を致してみましょう」
「要らぬ」
牧は、首を振った。
（ここ一年の内に、一切の物が移ってしまった――わしの兵道が、よしその効験を現そうとも――眼前に、それを顕現しても、最早、人々は、信じないかも知れぬ。わしが命を捨ての修法も、ただ人に侮りを受けるだけのものになるかも知れぬ。兵道で尚ぶところの、以心伝心などということに、誰も興味を持たなくなった。神人相通の術などと云っても、判らなくなった。時勢であろう？　斉彬公の究理している電気術の如き、その理論を口にし、文にして、如何なる凡夫と雖も、これに通じ得、学習することができるらしいが、わしらは、それを一子相伝、家門不出の秘伝として伝えてきた。そして、兵道の秘伝以上の異国の不可思議が、誰人にも、修得できるような時代になってきて――わしらの兵道は、何うなるのか？）
牧は、黒船の来襲を聞き、その船の造りを聞き、斉彬の理化学的製作品を見た時、己の信ずる兵道以上の不思議なものを、感ぜずにおられなかった。そして、それを感じると同時に、己の兵道にて、それらを圧倒しうるか、何うかを考えて
（古来のままの兵道では、何うにもならぬかもしれぬ――）
と、考えた。だが、何うしていいか、ただ、己を苦しめて修練に修練を重ね、極度に、精神力を発揮することだけしか修業して来なかった兵道家にとって、談笑の中に、数町を距てて音信を通じ、器物によって、真正のままの肖像を写す不思議を見ては、三十年、四十年の長年月、暑熱に耐え、厳寒と闘って修業して来たことを、根底から、覆されているとしか思えなかった。
（斉彬の信じる如く、異国の奴等は、えらいのかも知れぬ）
牧は、傾いて行く陽も、感じぬらしく、じっと、考え込んでいた。
（然し――然し、ここで破れては、ここでひるんでは――疑い、怯ける心は、何よりも悪い。愛宕で、鞍馬で――そうだ。兵道家が、最後の祈り、牧仲太郎が、命をかけての修法――斉彬の異国化学が勝つか、日の本秘伝の兵道が勝つか？――」
牧は、立上って
「下山」
と、いった。三人が
「ええ？」
と、聞くと
「勘定をすまして――」
と、いいすてて、道へ出てしまった。

巷の音

燭台が、明るく、金地の襖を、磨きのかかった柱を――それから、酔った人々の顔を照らしていた。

「愉快、愉快、愉快、我輩は、舞うぞっ」

と、一人が、怒鳴って、刀を、どんと突き立てた。

「とにかく、将曹、平等、君側の奸を、先ず血祭として、それをだ、まず、軍陣の血祭として、而して、斉彬公を盟主として、討幕の師を、雷発させるんだ。ええか――」

一人は、真赤な顔をして、扇を、膝の上へ正して

「長歌」

と、叫んだ。

鳥が鳴く、東の国に
行き向い、千々の心を、尽しつつ
荒びなす、醜の醜臣
打ち払い、功業立てなむ
真心は、霞と共に
大空に立渡りける

「よう、よう」

と一人が、叫んだ時、

君不見、方今天下転変の状
内外上下都　失倫

「ちぇすとうっ」

「舞うぞ」

と、叫んで、有村が、影の閃く如く、座の真中へ出た。そして

「よーうっ」

従是、当取断一字
断行直、使避鬼神

灯をうつして、刃が、橙色に光を放って閃いた。畳が、壁が、時に柱までふるえたし、人々の懸声と、拍手と、叫び声とに、遥かに距てている往来の人さえ、足を止めて、この宿の二階を見上げた。

「そうだ。断の一字あるのみ」

「断の一字あるのみ」

英雄胸膈非無策
当　見、赫々邦家新

「新七、うまいぞっ」

「ちぇすとう」

勿言大業機未到
精神一発起皇風
況又大勢由人事
宜　将一死先群雄

「然り然り、ただ一死を以て、天下に先んずるのだ」

「まず、奸賊を倒して、吾が藩国を浄め、次に、王事に任じて、皇運の挽回に従うべし。益満、舞えっ、益満」

益満は、柱に凭れて、笑っていた。そして、側の、平野国臣に

「この元気が無うては、何事も出来んが、この元気のために、事を誤るものも多いでのう。斉彬公が又、鬱勃たる大勇を、深く蔵して発せられん方ゆえに、この元気を利用もしたいし、

斉彬公の御意に反くこともできぬし、ここをうまく操るのは至難の業でのう――ただ、西郷吉之助と申す者が、ややその器であろうか――御存じか？」
「名を承わっておるが――」
「一度、お逢いになるといい」
女中が、益満のうしろに来て
「仙波小太郎様が、お見えになりました」
と、云って来た。
「下の部屋へ――」
「同志か？」
「例の、牧を討とうとしておる男だが――」
「牧は、未だ討てんか」
「いや、近々、討てる。この近くにおるらしいから、暫時、御無礼」
と、云って、益満は、立って行った。一座には、酔った声の、詩吟と、琵琶歌と、議論とが、いっぱいに――天井から、植込みへ、離れの向うまで、溢れ出していた。

「騒がしいではないか」
小太郎が、咎めるように云って、刀を置いた。
「勢いの赴くところ、かくの如きものだ」
「月丸を討取ったぞ」
「そうか？　何処で」
「叡山の――わしを救ってくれた、あの僧侶の所の――父の墓の前で、深雪と、庄吉とで、討取った」
「ふむ、あの二人で？　よく、二人で討てたのう」

益満は微笑した。
「月丸に邪心のきざしたのが、油断になっての。自分で、自分を殺したようなものだ。義観が、万事後を引受けてくれて――わしは、これから、牧の後を追うが、何か、耳に入っておらんか」
「京の藩邸を、二三日前に出たということは、聞いておるが――」
「わしも、それは聞いた。斉彬公の御代と決まっては、邸にも置いておけまいからのう」
「深雪に、あいつらは？」
「庄吉は、手を負ってのう、三人共、義観の庵室に逗留致しておるが、落合うところは、ここと決めておいた。もし、貴公の居る内に参ったなら、よろしく頼む。要件は、それだけだ。これから、牧の足跡を求めて――」
小太郎は、そう云いながら、刀を提げて、立ちかけた。
「今度の牧の警固方は、三人と聞いたが、人情、紙よりも薄いではないか」
「国許の奴等に逢わんか、大分参っておるぞ。それに、他藩の志士もおる」
「誰々」
「伊牟田、平野、梅田と云ったような連中だが――」
「矢張り、人情紙の如きではないのか？」
小太郎は、立上って、刀を差しながら、笑った。益満は首を振って
「いいや、代々上に立って、徒らに、高禄を食(は)んだ奴は、こうした激変の時代に当って、只、失わんことを恐れて、事大

的になる。だから、紙となり、軽薄ともなるが、今集まっている代物の如き、もうこれより下れん、落ちられんというところの、底の底におって、反溌(はんぱつ)しようとしている奴等だ。この力は恐ろしいぞ。十分の闘力を、肚をもっていて、押しつけられていた奴等だから、風雲を得たなら、何処まで、登って行くかも知れん」

二人が、話しておる間にも、二階では、吟声が、足音が、拍子が、轟いていた。

「所司代は、よく、黙視しておるの」

「もう所司代は無力だ。去年と、それだけ、時世が変った。この激変は、恐らく、斉彬公の明を以てしても、お判りにはなるまい。薩摩も亦、斉彬公の御代になって、何う変るか？

小太郎、早く牧を討って、早く、吾等の仲間へ加われ。天下は、吾々のものになるぞ。必ずなるぞ。薩摩は今や、天下を二分してその一を保つだけの実力と、勢望とがある。ここに集まっている他藩の人々の説を聞いても、斉彬公の御代になって、斉彬公が、討幕の師を起すとなれば、若者は、悉く脱藩して、斉彬公の許へ走るであろうという話だ。半分に聞いても、愉快な話ではないか。小太、いい日の下に、いい主の下に、生れたものだのう」

小太郎は、立ったままで

「うむ」

と、答えた。

「わしは、七八日、ここにおって、江戸へ戻ろうが、それまでに牧を討つといいのう。手を貸そうか」

「いいや、もう袋の鼠じゃ。早く討って、早く仲間へ加わろうかの」

「そうだ。お前にもだんだん世の中がわかってきたのう」

益満は笑って、立上った。小太郎は

「少うし人間が変ったぞ」

と、云いながら、振向いて

「御一同によろしく」

と、いうと、出て行ってしまった。

「西郷どん、居るか」

と、生垣の外で、声がした。

「居る」

西郷は、机の前から、首を延した。生垣の外に、吉井仁左衛門、樺山三円、高橋新八の三人が立っていた。そして

「えらいことじゃが」

と、叫びながら、生垣を手で押しつけ、袴を引っかけて小枝を折りながら庭へ入って来た。

「斉彬公の御帰国の一行じゃが――もう、福岡へ入っている」

「うむ」

「聞いておるまい。井上出雲からの、便りは――」

「うむ」

三人は、縁側へ、腰をかけた。

「その斉彬公の御一行中に、西郷どん、何んと奇怪であろうがな、将曹も、平も、志津馬も入っておるというのじゃ。それだけでも、わしら、かっとしたのに、何うじゃ、井上出雲に御赦免が出ん――何う思う？」

垣根の外に、又人影が見えて

「来とおるか」
と、叫んで、堀仲左衛門と、岩下佐次右衛門とが、入って来た。
「斉彬公が、将曹を罰せん、という御心――いつか仰せられた、子は父のために痩す、という御孝心は、わしらとてよく判る。然し、それも、程々のものだ。見す見す、陰謀を企てた――それも、ただの陰謀ではない、御世継を呪殺するという悪逆無道の陰謀を企てた輩を、そのまま、重用していなさるとは、卑怯に似ている」
「大義、親を滅すということがあるが、この際、当家のために、天下のために、人心を一掃すべきだ。君側の奸を除いて、有為の士を登用すべきだ。わしら軽輩が、徒らに、長上を押し除けるという風説があるが、長幼軽重を論じるべき時代ではない。力のある者が、出て行くべき時勢になってきているのだ。そして、その気運は、斉彬公自ら、お作りになったのだ。それに、今日、その奸悪を、猶座右に、重宝視するなど、斉彬公御帰国の第一声として、わしは、彼奴らを除くことを、まず、進言したいのだ」
「それで、いろいろ、説が出ているが、わしは、矢張り、断だ」
と、高橋が、斬る真似をした。
「斉彬公に申し上げても、わしは、無駄だと思う。斉興公の処分なされたことを、すぐに取消して、井上出雲を召し返しなどしては、斉興公の罪を天下に示すようなものだ、という御意見はよく判る。斉彬公は、わしらに対して、お目にかけておられるように、斉興公には、もっと、御孝心の方だ。だから、この際一切を、公に知らさずに、吾々、死を以て、君側の奸を払おうと思うが、何うだろう」
「上方の有志も、同じ志だ。将曹らを討つのを機として、一挙に脱藩して、京へ集まろうというのだ。有村が、そのために、戻って来ておる」
皆が、語るべきことを語って、西郷の顔を見た。
「よかろう」
と、西郷が、頷いた。そして
「斬る外にあるまい」
と、いった。
「それで、同志の面々だが、今、血判した奴だけでこれだけある。この外に、西郷どんが、うんと云ったといや、何んぼ、ふえるか判らん」
吉井が、懐中から、書状を取出した。
「拝見しよう」
と、云って、西郷が、手を延した。
「集まったのう――大勢、集まったのう」
西郷は、微笑んで、連名を披げて行った。奉書に一人一人が、署名、血判をしていた。人々は、もう一度、自分達の署名、血判を見直そうと、頭を、その上へ集めた。そして
「俺の字は、小さくていかん。高橋のは、下手だが、元気がいい」
とか
「この血は、誰がこぼしたのだ」
とか、呟き合った。西郷が、人々の署名を読んで行くと

堀仲左衛門　（伊地知貞馨）
岩下佐次右衛門　（子爵岩下方平）
有村俊斎　（子爵海江田信義）
吉井仁左衛門　（伯爵吉井友実）
伊知地竜右衛門　（伯爵伊知地正治）
税所喜三左衛門　（子爵税所篤）
本田弥右衛門　（男爵本田親雄）
高橋新八　（後の村田新八）
奈良原喜八郎　（男爵奈良原繁）
野津七左衛門　（陸軍中将野津鎮雄）
仁礼源之丞　（子爵仁礼景範）
氷山万斎　（永山弥一郎）
野津七次　（侯爵野津道貫）
西郷竜庵　（侯爵西郷従道）
有村次左衛門
西郷吉二郎
山内一郎
有村如水　（後の国彦）
大久保一蔵　（利通）
樺山三円
奈良原喜左衛門
中原喜十郎
大山格之助　（後の綱良）

「よく揃うた、その代り――」
と、云って、西郷は、人々の顔を、見廻して
「もし、この企てが、近藤崩れのようになったなら、薩摩は、天下が取れんようになる」
「一蔵も、それを心配しておった」
「将曹や、平如き奴等二三人を討取ったがために、この有為の青年を、近藤崩れの時のように死なしては、何んにもならん。だから、討つのは、遺憾ないように、十分の人数と、十分の計とで行うて、上役人へ名乗って出るのは、人数を限らんといかん。皆が皆死んでは、第一、斉彬公に対して、不忠になる。わしが、名乗って出て、皆の罪を引受けよう」
「吉之助一人の仕業と、誰がおもう？　籤引にでもして、五人は、こしらえんといかん」
「そうじゃない」
と、西郷は、首を振って
「相手は、三人か、四人でないか。計で斬るに、一人で斬れんことがあるか。十人、二十人かかってもよいから、それを一人で斬ったように見せさえすればよいし、わしが、飽くまで一人だといえば、それで通してしまう――」
「いかん、いかん」
と、高橋が、叫んだ。
「西郷どんの腕で、三人も、斬れるかい」
「吉之助を、下手人にするのは、いかん。此奴は、斉彬公に入用じゃ。籤引にしよう、籤引に――何れ、今夜集まろうから、その場で籤引にして、切腹する奴を――三人つくろう」
「三人もいらん。将曹、平、二階堂と、ぽんぽんと、舶来銃でやっつけて、知らん顔をしておるがええ。それでやかましゅうなったら、俺がやったと申して、切腹してしまえばよい。籤引も、くそもあるもんか」

「然し、それでは、論が了えん。今夜、韃靼冬へ集まって、その上のこととしよう」
と、西郷が云った。

一人の浪人は、麻の襦袢を披げて、その背へ
露と消え身は死するとも亡き魂は
千代朝廷辺を守り奉らむ
水戸浪士　三岡源次郎吉次

と、書いて
「これでよい」
と、云って、筆を置いた。
「清川八郎でも、殺されるのだからのう。吾等とて、いつ何時、捕吏の手でやられるかも知れん――こうしておけば、わしの志だけは、判るであろう」
一人の浪人は、腕組をして、じっと、乾いて行く墨の跡を眺めていたが
「よし、わしも、一首書き残しておこう」
と、云って、押入を開けて、小さい行李から、袖の無い半襦袢を出して来た。五六人のそうした浪人のいる二階では、富士春が、爪弾きで
そぞろ、身に沁む、秋の風
招く尾花につまされて
千草を分けて入る山に
夫恋う鹿の叫び鳴く
と、唄っていた。
「あの女も、この頃は、血の道だのう。よく、一人でめそめそと泣いておる」
と、一人が云いながら、筆に、墨汁を含ませた。
「富士春一人のみでない。天下、悉く、血の道じゃ。幕府の頓馬が、我々共の勢に恐れて、浪人組を作ろうなどと致しておるが、これも、血の道、逆上の揚句じゃし、又、これへ、食えぬからとて、応募しよる浪人があるが、此奴も、血迷っておるし――ええと
帝おもう至誠の弓を一筋に
引きて返らぬ武士の道
為王事水戸脱藩士　柴山壮蔵源正忠
わしの字は拙いの。これを着て斬られているのは、余り、ええ図ではないぞ――まあええ、引きて返らぬ、武士の道じゃ」
「益満の戻りが、遅いのう」
「斉彬公が、帰国なさったゆえ、それと、途中で、何か打ち合せしておるのかもしれぬ。そういううちに、戻るであろう」
「おい、講武所の所長に、男谷下総守が選ばれたのを存じておるか？」
「本当か？」
「昨日――本当じゃ。新徴組の浪人など、束になってかかっても、怖ろしくはないが、下総が立つと、大敵だぞ」
「清川を殺したのは、男谷門下の奴ではないか」
「いいや、下総は、そんな人物ではない」
「然し、幕臣ではないか」
「新徴組には、甲斐の祐天と申す博奕打が、伍長で入っているというのう」

「何を致すか、血の道のすることは、判るものではない」
夕立に
法華も、門徒も、雨宿り
上見て、下見て、濡れまいと
同じ軒端の、押しっくら
「お春、皮肉なことを、唄っておるぞ」
一人が
「師匠っ、うまいぞっ」
と、称めた。
「吾等、大悟一番、生死の念を放擲(ほうてき)して、夕立の中へ、駈込むのだのう。濡れまいとするから、押合いになるが、十死一生と観ずれば、夕立何物ぞ」
そう叫んだ途端、格子が開いた。二三人が、一時に
「誰だっ」
と、怒鳴って、振向いた。旅姿の士が
「わしだ」
と、答えた。
「日下部だ」
「日下部」
「何うした?」
「益満は?」
人々が、一時に、喋り出した。二階の三味線が止んだ。日下部三次は、脚絆をとって、草鞋を脱ぎながら
「万事、手筈がととのったから、明日にでも、薩摩屋敷へ、一同で入りたい」
日下部の背の上で、横で、奥の間で
「占めた」
とか
「わーっ」
とか、いう叫びと一緒に、畳を踏む音、柱を擲(なぐ)る音
踏破る千山、万岳の煙
狭い家の中が、叫喚と、どよめきとに充ちた。一人が
「騒々しいっ」
と、怒鳴った。日下部は、刀を提げて、奥へ通った。そして
「益満は、近日に帰る。各々は、薩藩士として——」
と、云いながら、御門通用証を出して
「これを、銘々にもって、名越殿小屋へ通ると、門番へ申して、通行してもらえばよい」
小さい、焼印を捺した木の札を一束にしたのを出した。
「騒々しいねえ」
二階から、富士春が、降りて来て、上り口の敷居のところへ立って、日下部の顔を、じっと、眺めていた。日下部はその顔を、一寸見て
「これが、益満のか?」
と、一人に聞いた。
「左様」
日下部が
「益満は、すぐ戻るが、長々と、乱暴者をあずかってもろうて、忝(かたじけ)ない。都合にて、明日中に、引払うことになったが、今後とも、よろしく頼む」

と、口早に云って
「斉彬公の帰国の供をしている例の、お由羅一派を、血祭として、そのまま、揃って、脱藩し、京、江戸と二手に分れて、上って参る手筈になったが――」
富士春は、懐手をして、突立ったままで
「お前さん、ちょいと、お前さん」
「わしか？」
と、日下部が、見上げると
「お前さん、誰だえ？」
日下部は、一寸、見上げたまま、それに答えないで
「国許の万事は、岩下と、西郷と――」
「ちょいと――」
「何んじゃ」
「黙って入って来て、挨拶もしないで――勝手な真似をするがいいや。庄吉も、益満も、お前さん達も、何んだえ。それで、人間かえ。朝起きりゃ、お早う、晩になりゃ、お眠(やす)みくらいの挨拶を知ってるなら、拙者、何処そこの某(なにがし)くらいのこたあ、云っちゃあ、何うだい。大概、人を馬鹿にするない。いい気になっていりゃ、庄公も、益休も、勝手な――妾ゃ、い、一体、何うなるんだい。お前方あ、薩摩のお屋敷へ入っていいだろうが、妾ゃ、一体、何う、なるんだい」
富士春は、口惜しさと、怒りとに、途切れ途切れの口を利きながら、泣くまいとしても、涙がこみ上げてきた。
（何処まで、誠をつくしたなら、男ってものは、自分のしているのと同じように、妾にしてくれるのだろう？）
と、思うと、世の中も、男も、自分も、めちゃめちゃに、引き裂きたいように感じてきた。
「益満は、じき戻る」
「も、戻っていらないよ」
富士春は、こう云うと、襖の紙を、引き破った。そして、二階へ、足音荒く上ると、瀬戸物の毀(こわ)れる音がした。
「うるさくなりゃあ、斬ってしまえ。それから」
と、一人が、叫んで、肱を張った。

富士春は、湯呑を抛げつけて、こわしたが、それだけで、身体の中、胸の中、頭の中いっぱいに、湧き返っているものが、すっかり、湯呑と一緒に、こわれ飛んだとは、感じなかった。まだ、固いものがつかえていたり、口惜しさが固まっていたり――
（何うしてくれよう、畜生っ）
と、思うと、袖を噛んで、引き裂いてみた。下では、浪人が、何かに喜んでいるらしく、笑い声が、爆笑が、どっと起った。
「何が、可笑しいんだいっ」
富士春は、上り口へ、首を延して叫んだ。
（三十を越して、何うなって行くのだろう）
と、思うと、追っかけられるような焦躁と、不意に、脚下に穴でも空きそうな不安とを感じた。化粧をしていると
（未だ、これでも――）
と、思う時もあったが、鏡へ、顔を近づけると、もう、眼の四辺に、小皺が出て、肌にしみが現れていた。
（妾、何を悪いことをしたい）

と、富士春は、世間へ、啖呵(たんか)を切ってみた。世間こそ、男こそ、いろいろと、自分に悪いことをしたが、富士春は、五七人の男を代えた外に――
（それが、悪いというのかい、それが――男を代えたことが――）
自分から捨てた男もあったが、自分が捨てられた男もあったし――
（庄吉に、あんなに尽してやったのに、あいつ――）
と、思うと、差引勘定をして、少しも、自分が悪いと思えなかった。
（それに、淫乱だの、辻便所だのって――）
富士春は、世間の男女が、そういうだけでなく、自分の男である益満に養われている――毎日、益満の女である自分の手で、酒を、米を与えられている浪人達までが、少しの、尊敬をも――益満に対する尊敬の、十分の一をもしないのが、世間の口以上に、口惜しかった。
（男に、縋っているからだ。立派に、一人で――仮令、流しになったって、一人で食べて行けるのに、なまじ、男に手頼(たよ)ろうとするから、こんな目に逢うのだ。世の中は、広いんだから、旅にでも出てしまって――）
そう、時々は、考えもするが、益満と、庄吉との、愛欲の夜を思い出すと――頭の中で
（誰が、あんな薄情者に――）
と、思っても、肌が、血が、愛着の味を忘れないでいた。
（頼みになるような、ならないような――今度、戻って来て――お春、俺は、薩摩屋敷へ入るぞ。お前は、何うなっとするがいい――いわないとも限らない台詞だ――それを、又、この浪人野郎共が、黙って聞いていて、挨拶一つしないのだろう、畜生――）
富士春は、柱によりかかって、脚を投げ出したまま
「犬、猫、畜生っ」
と、叫んだ。下の浪人達は、濁った声で、甲高い声で、議論をしたり、争ったりしていた。
（天下が何うだとか、黒船を焼くとか、何いってやがるんだい）
富士春は、そんなことを聞いても、見ても、判らなかったし、判ろうともしなかった。ただ、益満の手頼りなさと、耐えきれぬ夜の淋しさとに、袖を噛んだり、酒をのんだり、唄ったり――
（本当に――こっちの惚れる男は、浮気者だし、惚れてくる奴は、いけすかないし――）
と、思いながら――少し気が静まると
（早く、益公、戻れば、いいのに――戻ってさえくれりゃ――）
と、思いながら、柱へ、身体をすりつけて、投げ出した足を、しっかり締め合せて、自分の手で、自分の二の腕を、固く抱いてみた。

三つの死

「申し上げます」
書院の中は、浪人と、雑談と、煙とでいっぱいに、騒々しかった。
「申し上げます、申し上げます」
四五人の浪人が、その大きく呼ぶ声に、気がついて振向いた。
「何うした？」
と、名越左源太が、浪人達の首と肩との間を透して、用人に、顔を見せた。
「哲丸様が、御重体で、早速――」
云い終らぬうちに、左源太が、立上って、前にいる、横にいる浪人達の、肩を押分けながら
「支度せい、支度を――」
と、叫んで、廊下へ、走り出た。そして、急に、振返って、部屋の中の人々へ
「一大事ゆえ、奥へ参る。各々方、よろしく」
一人の浪人が
「一大事とは？」
と、叫んで、片膝を立てた。一人が
「哲丸様が、御病気なのじゃ」
と、云った。左源太は、ざわめく人々を残しておいて
「早く、用意、早くっ」
と、怒鳴った。
「はい、ただ今」
と、女中の、周章てて、答える声がした。書斎へ入った名越は
（ここで、哲丸様を、死なしては――）
と、逆上しそうに、興奮していた。余りに、次々に、不可思議の死を遂げたゆえに
（お悪い）
と、一言聞いただけでも、それは、死と同じ意味にとれたし、又、必ず、死に赴く幼い子供達であった。それが
（御重体）
と、いうのであったから、左源太の頭の中には、死に悩み、死と闘う哲丸の苦しい、歪んだ顔が現れると共に
（斉彬公のお世嗣（よつぎ）が、絶える）
と、いう絶望的な考えが、狂乱的な、苛立たしさと一緒になって、回転していた。
（何んとなく、お疲れになったような顔、死ぬかも知れぬと仰しゃった言葉――もし、それが、本当になった日に、哲丸様が、又呪いの手で、お亡くなりになったとしたなら、斉彬公の御血統は、何うなるか？）
名越は、すくすくと、大きくなって来た自分の子が、何うしてか、憎いように、感じた。
（不忠者、貴様、哲丸様の、お身代りになれっ）
と、叫びたいような――自分の命を、子の命を犠牲にしても、哲丸の命だけは、引きとめたいと感じた。そして、今までに、決して、病に罹ったが最後、平癒したことのない例を思うと、拳を顫わしてみても、歯噛みしてみても――

（絶望だ）
と、いう感じが、頭中に、身体中に感じられて、自分の身体を抛げつけ、引き裂き、踏み躙って、哲丸を殺す、何かの、魔の力、魔の神の前へ、叩きつけたいように、感じた。
半狂乱の眼、喘ぐ呼吸、顫える拳――手早く、袴をつけ、肩衣をつけると
「お刀」
と、追いかける声に返事もしないで、走り出した。
（医者は、何をしているのか）
左源太は、医者を叩き斬ってやるぞ、と思った。
（乳母の税所敦子は――抱傅の吉井は）
左源太は、こういう確乎とした人物がついていて、何をしているのだ、と思うと共に、その人々の力に及ばぬ、不思議な死を遂げさす力を――何うしていいのか？――左源太は、人々の振向いて眺めるのも感じないで、脇差を押えると、奥へ走って行った。

沈んだ顔をして出迎えた士が
「御苦労に存じます」
と、挨拶をしても、左源太は、頭さえ下げなかった。廊下で坊主が、お叩頭をしても、それから、御病間へ入って、乳母の税所敦子が、血走る眼で、目礼をしても、左源太は、鋭く光る眼で、睨みつけたまま、哲丸の臥ている側へ、坐ると、じっと、眠入っている顔を眺めた。
枕頭には、二人の医者と、坊主と、敦子と、侍女が二人と、坐っていた。

「良伯」
こう医者を呼んだ左源太は
「も、もしものことがあれば、捨てておかんぞ」
と、いって、脇差へ手をかけた。良伯は、静かに
「覚悟致しております」
と、答えた。その声にも、眉にも、眼にも、決死の色が見えていた。
「税所殿、矢張り、おびえなさるか」
「はい、夜に入りますと、物の怪にでも、おそわれるように、急に、お泣き出しになり、お熱が高く――」
「床下、天井、その外、お調べになりましたか？」
「以前の例もございますれば、若侍共、隈なく捜しましたが、怪しいところは、ございませぬ」
「吉井殿は」
「お次におられましょうと、存じますが」
哲丸は、いつもの、熟した果物のような赤味と、艶とを失って、濁った白い頬をして眠入っていた。
「良伯、これで、御重体か」
「これまで、お亡くなりなされました方々と、そっくり同じ御容体にて、医薬の効目がございませぬ。先刻、将軍家より、吉田三誼先生が、お見えになりましたが、病状不明にて、拙と同じ手当より外に、思案がつかぬとの御見立でございました」
左源太は、こうして、すやすやと眠入っている哲丸が――安らかな呼吸をして、静かな脈搏をして眠入っている哲丸が、死ぬとは思えなかったが、これまで亡くなった人々のことを

思い出すと、夜に入ってからの――この幼い子供が死と闘う悲惨な努力、大人の眼に見えぬ怪しい力と、ただ一人で闘って、怯え、顫えて、救いを求める悲痛さ――そして、それに、何んの助力もできぬお付きの人々――そういうことを思い出すと、誰に憤っていいのか、何うすればいいのか？――左源太は、哲丸の苦悶する夜の顔を考えてみると、自分の胸を、腸(はらわた)を引っ掴んで、掻き廻されているように感じてきた。次の間から、吉井七郎右衛門の声がした。左源太は立上ると、襖を開けた。

「おおっ」

「吉井っ――吉井っ」

左源太は、涙声で、こう叫ぶと、吉井の手を握った。

「助ける道は無いかっ、吉井」

吉井は、老いた顔に、涙をいっぱいにしながら

「わしゃ、な、床下から、天井から、這い廻って来た。良伯も、敦子も、よくしとるが、名越」

吉井は、立ったまま、名越の手を握りしめて

「この腹一つ切って、代えられるものなら、わしの孫子が、身代りになれるものなら――」

「そうじゃ、吉井、わしらの一族と代れるものなら――」

二人は、立ったままで、泣いていた。その部屋の近習共は、俯向いたまま、泣いていた。

朝と、夕と、秋風の立っている山の中は、もう、単衣(ひとえ)の重ね着でさえ、冷たかったし、薬湯を煎じている炉の火が、うれしかった。

深雪は、古びた土瓶の中へ、薬草を入れて、松の小枝と、松葉の枯れたのを、炉で焚いて、煮出していた。

（いつまでも、こうしていたい）

深雪は、もう忘れてしまった程長い前――それは、決して、そんなに長い時間ではなかったが、余りにも、幼い女の身にとって、次々に起った烈しい事件に――そうした、姉と、母とで――今、こうして、土瓶を凝視めて、炉の下の、火加減に、心を配っているように、いつかの日、楽しく、食事ごしらえを手伝った、夢のような、昔のことを思い出していた。

（もう一度、こんな静かなところで、母と、姉と、三人で、こうして、炊事のことでも、出来たら――）

深雪は、悲しくなってきたし、淋しかったし――だが、自分のために、死にかかった庄吉のことを思うと、庄吉のために、こうして、薬の世話をするのも、唯一つの、庄吉への恩返しのように思えた。

（庄吉でなく――）

深雪は、ふっと、庄吉でない、外の――自分の夫と定まる人のために、こうしているなら、何んなに楽しいか？

（その夫が、月丸を討ってくれて、そして、妾が、こうして介抱して、だんだんその人は、よくなって行って――）

深雪は、そうした空想を暫くしていたが

（気の毒に――庄吉は――）

と、思うと、庄吉のために、こうして、長い間、世話をしていてもいいような気もしてきた。

（庄吉が、あんな前身でなかったなら――何んなに、身分が低うてもいいから、武士だったなら――）

深雪は、決して、庄吉を嫌ってはいなかったが、前身のことを思うと、すぐ、踏み止まって
（心を許してはならぬ）
と、思った。
「代りましょうかな」
と、南玉の声がした。
「いいえ」
だが、襖が開いて、南玉が
「手前にも、出来ますよ。何うも、めっきり冷とうなりあがって、京は冷えるってが、本当に、ぞくぞく冷えやがる。冷え山なんて、ここから出たのだろう」
と、喋りつつ、炉のところへ、坐った。
「火が、弱いじゃござんせんか」
「いいえ、このお薬は、松の葉か、馬糞がよろしいので、ございますって。炭火などで、かっと、煎じては効がないと、義観様、いろいろと、焚き物のことを教えて下さいましたが——お師匠さん、お粥は、土鍋で、松の木で炊いたのが、一番おいしいそうでございますって。そして、その土鍋も、京の東山の、陶清の、分厚なのがいいって。だから、ここのお粥は——」
「六十になるまで、お粥のことばかり、試して来たんだからの、あの義観和尚。和尚がお粥でくりゃ、俺、梅干で行かあ。梅干あ、五月一日、巳の一点に、下から数えて、十番目の枝の、端から数えて五番目の実をもいだのが、一番うまえ——」
「ああ、お帰り——」
と、深雪が聞えて来た足音へ呟いた。
「さあ来い、お粥坊主」
勝手口へ、義観が現れて、南玉を見ると
「ああ、南玉、小太郎のところへ、すぐ行ってもらいたい」
「へっ、お粥の講釈にな」
「何？」
義観は、炉の中の火加減を見て
「おお、上出来、上出来、半分に煮つまったかな」
と、云って、土瓶の中を、のぞきこんだ。
「なるべく、急いで——駕を云うからの」
義観は、そう云って、硯と、紙とを取出して、書き出した。
深雪は、煎じた薬を、布でこして、湯呑へ入れた。そして、次の間に臥ている庄吉の枕頭へ来ると
「済みません」
と、云って、庄吉が、見上げた。そして、起き直ろうとして、力の入らぬ、未だ痛む身体を動かすのへ、深雪は
「無理をしないように——」
と、云って、支えたり、抱えたり——庄吉は、触れまいとする肌に、暖かさに、匂に、柔かさに触れながら——快く感じて
（病気なりゃこそだ）
と、思ったり
（意地汚えことを考えるな）
と、自分へ、叱ったりした。
「もう、大丈夫——」
「人間、死損うと、なかなか、くたばらねえもんでげすよ。

これで、二度だ。三度目は、何うやって、くたばるか――」
と、呟いて、湯呑に、口をつけると、義観が
「清水寺に、月照という坊主がいる。それへ、この手紙を届けて。返事はいらん。此奴、坊主のくせに、尊王の、倒幕のと、いいおって、阿呆じゃ。それから、小太郎に逢うてのう――河内と、大和の国境に、生駒山という山がある。ええか、生駒山、生ける駒、馬と書く」
「生駒ね、はい」
「その山相、山の姿、山の形だの、それが、この頂上の四明に、よく似ている。わしが、牧に、四明での修法を断った上は、近畿の山では、生駒山の外に、同じ山相の山がない。鞍馬、愛宕でも、修法をするであろうが、第一の修法は、同じ山相の山で行うのを、秘呪の法としておるから、必ず、この生駒の頂へ参ろう。四方広濶(こうかつ)にして、山頂は草原――」
「四方広濶にして山頂は？」
「草原」
「よく判りました」
「必ず、牧は、この山へ参ろうから、余のところを捜さずとよいと、小太郎へ、伝えてもらいたい。わしゃ、忘れていてのう、云うのを――今、思い出したから、言伝けるのじゃが――手紙を先に、小太郎を後にの」
「早速、それでは――」
と、云って、南玉が、立上った。庄吉が
「師匠」
と、呼んだ。
「おいの」
襖が開いた。庄吉は、義観へ、お叩頭をしてから、南玉に
「若旦那に、くれぐれも、御用心なさってと、の――首尾よく牧をお討取りなさいますのを、祈っておりますって――」
「よしよし――お嬢さん」
南玉は、そう云いながら
（又、この娘さんを心配させることが一つ増えたが――）
と、思うと、心がしめってきた。だが
（これさえ済めば、からっと、晴れ上るんだ。深雪さんも、庄公も、わしも――）
と、思うと、何かしら、天の配剤というようなものがあって、これ以上に、仙波の一族へは、苦しみが、悲しみが、かからないような気がした。
（この義観って坊主が、天狗みたいな奴で、こいつが、平気な面をしていりゃ、俺達安心していいんだ）
と、いうような気がした。深雪が
「よろしく、と――何も、申すこと、ございません」
と、云って、俯向いた。義観が
「心配すな、牧は落ち目で、小太郎は上り目じゃ。寒いから、お粥にしようかのう」
「深雪さん、お、お粥を食って、待っていなせえ、一っ走りだ」
と、云って、南玉は、笑いながら脇差を差した。深雪も、淋しく笑った。義観が
「うまいお粥を食わしてやろ」
「ついでに、東山の土鍋を、買って参りましょうか、和尚さん、あはははは」

斉彬の居間へ近づくに従って、吉之助の心は――それから、その大きい身体さえ、顫えてきた。
それは、命を賭けた恋人に逢う気持のようでもあったし、自分を育ててくれる神、自分の縋ろうとする大きい力、世の中の称讃を一人で受けている英雄、智慧と、慈悲との権化のような主君――そして、自分のような、軽輩に、目をかけてくれる人――そういう感じが、深い、強い感激となって、肌が締ってくるように感じた。
前へ行く岩下佐次右衛門も、後方につづく吉井仁左衛門も、今まで同志と共に、将曹を討つために、興奮していたような態度は、何処にも無くなって、俯向いて、足音さえ立てないようにして、歩いていた。
（御帰国早々に、何事であろう？）
吉之助は、自分達の謀が洩れたのだとは思えなかったし――そして、御帰国のその日に、恐らくは、国許の重臣達さえ、未だお目通りをしていないと思われるうちに、召出されたということに対して、何う考えていいか？――
（然し、何か、大事なことであるには、ちがいない）
廊下がつきて、一段高くなった。先へ行く侍が、その高くなったところから又つづいている廊下へ坐って、部屋の中へ
「岩下佐次右衛門殿、西郷吉之助殿、吉井仁左衛門殿、大久保一蔵殿、罷り出ましてござります」
と、云った。四人は、廊下へ坐って、頭を下げた。部屋の中から
「お進み下さるよう」
と、云った。四人は、廊下から、膝で歩いて、敷居の内へ入った。その部屋の左手に、斉彬が居るらしく、二人の侍が、次の間との間の襖へ手をかけて、左右へ開いた。四人は、平伏した。
「近う、ずっと近う」
四人は、それが、斉彬の声であると、判ると、姿は見えないが、身体中に、寒さを感じながら、平伏してしまった。
「内談がある。ずっと、近う」
「はっ」
岩下が、口の中で、答えた。そして、身体を、左手へ向けて、斉彬の居る部屋の方へ、膝を動かした。侍が
「ずっと、お進み下さりますよう」
と、云った。四人は、平伏しながら、膝で、少しずつ進んで、次の間の敷居を入ると、又、平伏した。そして、岩下が、斉彬のいると思える正面へ
「麗（うるわ）しき御尊顔を拝し奉り、恐悦至極に存じ奉ります。早速、拝謁仰せつけられ、冥加至極、恐れ入り奉ります。某は、岩下佐次右衛門にござりまする」
「某は、西郷吉之助――」
「心得ておる。早速参ってくれて、忝（かたじけ）ない。ちと、密談があるので、ずっと、これへ進んでくれい。伝次、襖を閉めて――」
侍が
「はっ」
と、云って、襖を閉てた。二三尺余り、進んだ四人は、ようよう頭を上げて、膝へ手を置いた。斉彬の姿は見えたが、顔を見ることができなかった。

「吉之助」
「はっ」
西郷は、ちらっと、斉彬の顔を見ると、すぐ、又、頭を下げた。
「又、一段と、肥ったのう。皆、なかなか、元気で頼もしい」
斉彬のそういう声に、いつものような――いつかの時のような、元気が無いようであった。岩下が、そっと、斉彬の顔を見ると、何っかに、疲労の影と、力の無さとが、滲み出ているようであった。
（お心を、お遣いになるから――）
と、思った時
「お前達、わしのために、いろいろと企てていてくれる。忝ない――嬉しいが、少し考えが足りぬ。それで、相談をしたいがの」
口調は、柔かであったが、四人は、ぐっと、腹を突かれたように感じた。

「吉之助からの、建白書にもあるし、余の者からも聞いた。福岡で、弟からも、同じ意見が出た。将曹、平等のことについてだのう」
斉彬のそういっている呼吸の中に、微かに、喘ぎが混っていた。四人は掌を、太股へ押しつけ、呼吸を凝らし、身体を固くし、聞いていた。
「あれらを、わしのために、処分せよと――わしのためを思うてくれての志、まことに忝ない。然し、あれらの悪事の証拠が、何処にあるか？――」
吉之助は、頭の中を、熱くして
（あの呪殺だけでも――）
と、思った時――そして、三人も、それを感じた時
「お前等は、わしの子供の死んだことを申すであろうが、呪殺したという証拠が、何処にあるか？　仮りに、牧が、呪法を行うたと自白したとしても、そのために、子供が死んだのだと、何うしていえるか？　仙波の掘り出した泥人形が、仮りに、証拠物としても、子供は、六人も死んでいて、証拠は、一つしかない。よいか、仮令、無為無能としても、父上のお選びになった重臣を、かかる無証拠の下に、処分が出来るか？　出来ぬか？　わしが、当主となって、直ぐに、彼等を処分したとして、もし、彼等が父上に、何故に処分されるかと、訴え出た時、わしから、父上に、何ういう証拠を以て、申開きをする？　ましてや、父上は既に、彼等に悪事はないと、見定められて、近藤以下を処分されているのに、わしが、当主になって、彼等を処分しては、取りも直さず、父上に、謀叛するようなものじゃ」
斉彬は、そういっているうちに、幾度か、唾を飲んだ。そして、ここまで云うと、鈴を鳴らして
「湯をもて」
と、云った。吉之助が、顔を上げると、斉彬は、眼を閉じて、額を押えていた。吉之助は、久し振りに見る斉彬の顔に、暗い淋しい、力無い影のひそんでいるのを感じた。眉の下に、眼の周囲に、頬に――それらが滲み出していた。吉之助は
（お身体が悪い――）
と、感じると同時に、何かしら、斉彬に、危機が、迫って

いるように思った。いつ拝謁しても、書物を御覧になっているか、書物か、器物の調査か、寸暇も、手を、頭を、眼を休めない斉彬であったし――こうした、眼を閉じた斉彬、頬に、眉に、疲れを見せた斉彬は、考えられぬものであった。だが、すぐ

「然し、志は、よう判るし、わしにも考えがあるから――」

と、云って、眼を開いて、額の手を放すと、斉彬は

「豊後、平、将曹の外に、一三、新任したいとは思うておる。吉之助の、建白書の内、知政の始、国政を誤りたる専横の徒を貶黜すべきことあるのと、お由羅処分のこと、それから、近藤崩れにて、流謫脱奔したる者を、召還すことと、この三ヶ条は、今申したように、総て、父を恥かしめることになる。父の処分を、すぐ転覆し、父の愛妾を処分しては、今申す如く、無証拠で、左様なことをしては、天下へ、父の罪と、わしの愚とを、知らすことに相成る。くれぐれも、志はよう判るが、わしのために、忍んでもらいたい。それから、これは、噂であるが、わしが、頼もしいと思うている若者が、徒党を組んで、何かするらしいということを聞いた。岩下、何うじゃ、真実かの？」

斉彬は、微笑して、岩下の顔を見た。そして、湯呑へ手をかけた。岩下が

「お言葉に背いて恐れ入りまするが、吾等、命を棄てて、奸人を、斬りたいと存じまする」

と、少し、顫える声で、云った。

「命を棄てての？」

「はっ」

「吉之助もか」

「はっ」

「吉井もか」

「はっ」

「三四十人集まっているのう」

「はい」

「近藤崩れの時には、将曹も、由羅も、討たずに、猶且つ、有為の人々を、二十人近くも失うた。お前達、あの人々が、死に、逃れ、流されたのを、淋しいとは、感じんか。もし、ここに、天下に事が起ったなら、あの人々の居らんことが、何れだけの損であるか？　考えることが出来るか？」

四人は、又、だんだん、頭を下げた。

「討とうとしただけで、父上は、あんなに御立腹になった。もし、お前達が、その中の誰一人でも討ったとしたなら、わしは、父に対して、何うしていいか？　もし、父上が、あれも処分せい、これも処分せいと仰せられた時、わしは、何うなる、何うすればよい？　又世間から見て、父の処分したのが、あれだけ厳重であるのに、斉彬は、あれみよ、己のために、軽輩共が、上も恐れず重臣を殺したのに、あんな手ぬるい処分しか出来ぬかと、云われた時、わしは何うなる？　吉之助、一蔵――お前達の命と、豊後や、将曹の命と、かけがえになるか？　お前は、何んと思うておる？　岩下。十人の将曹よりも、一人のお前達と、頼んでいるわしの心が判らんか？　軽々しく、彼等と刺違えて死ぬような安い命か？　そんな安い命と、お前達は思うているのか？　お前達、徒党の

三四十人が、島津を背負って立つのだとは、思わないのか？
わしが、常、日頃よりお前達を頼みにしていることが、未だ得心行っていないのか？　天下のために、わしのために働かなくてはならぬぞ、というわしの言葉を、何んと聞いていた？　もし、軽挙妄動をして、父上から、血判した奴等悉く切腹させいと、命ぜられたなら、今まで、わしが、お前達を育ててきたことが、根こそぎ、潰れてしまうということが、判らぬか？　お前達が、死んだなら、島津の家に誰がいる？」
「然し――」
呼吸のつまるような声で、吉之助が、云った。
「何んじゃ？」
「はっ」
「申してみい」
「はっ――手前達、五十人、百人集まりますよりも、お上御一人の方が、日本のために、天下のために――何れだけお役に立ちますか？　そのお上に、仇を致します奸人共を討つに、吾等の十人、二十人、物の数では、ござりませぬ――」
「大間違い」
と、斉彬が、云った。
「はい」
「それは、違う、大きに違う」
四人が、俯向いて、膝へ手を置いた時、襖の外で
「坪井芳州、参上仕りましてございます」
「許す」
吉之助は、斉彬のその声に、顔を上げて
「お上は、お身体が、お悪うござりますか」
「少うし――」
そう云って、吉之助へ微笑した斉彬の顔には、熱の高そうな眼の濁りと、うるみとが、あった。芳州が入ってくると
「風邪でもひいたのか、少し、熱がある」
と、云って、手を出した。
「拝見仕ります」
芳州は、左手をついて、右手で、じっと、脈を見た。
「お前達は、天下のことを、一人の力でなせると思うている。一蔵」
「はっ」
「わし一人の力で、天下の大事がなせるような口吻（こうふん）じゃ。これは、大きにちがうぞ。岩下、お前一人の力で、先刻申す、奸党を斬るということが、出来ないように――又、一人の阿部伊勢、一人の井伊掃部（かもん）が、幕府の頽勢（たいせい）を支えきれぬように、如何に、一人のみが、傑れておろうとも、周囲に人がなく、天下に勢いがなければ、何事をも為し得ぬものじゃ」
芳州が
「お横に――」
と、云った。一蔵が
「お枕」
「いいや、いらぬ」
斉彬は、帯をゆるめると、そのまま、手枕をして、横になった。芳州は、胸を開け、腹を按じ、叩き、撫でして、診察して行った。
「難かしそうだの、芳州」

芳州は、指先で、腹を強く押えながら
「はい」
と、強く、答えた。四人が、芳州の横顔を見た。
「風邪か」
「いいえ、風邪のお熱とは、心得られませぬ。心熱が烈しゅうございまして――然し、御疲労のみでもなかりそうに心得まする」
「それでは、牧の呪いかの」
と、斉彬は、微笑した。芳州は、手を止めて
「朝稲三益殿、清水義正殿と、立会い致しとう存じまする」
と、云って、衣服を直しかけた。斉彬は起き上って、自分で、衣服を合せて
「呼ぶがよい。少し、この者等と、話があるゆえ、二人が参ったなら、次の間で、待っておるようにの」
「はい、心得ましてござります。お暇頂戴仕ります。すぐお薬湯を――」
芳州は、御叩頭して、退ろうとした。
吉之助が、呼吸を喘がせているような、せきこんだ口調で
「芳州殿」
と、呼びとめた。芳州は、片膝を立てたまま、吉之助の顔を見た。
「立会いなどと、お上の御容体は、そんなに――」
「いいや、念のため――」
斉彬が
「案じることはない。芳州、退ってよい」
芳州は、礼をして退った。斉彬は、脇差を差そうとして、膝の上へ置いて、それをいじりながら
「頼朝も、秀吉も、一人の力で、天下をとったのではない。まして、近頃の時勢は、下に権力が移ろうとして、上が、腐敗しかけている。何れの一つが因になっても、天下は変動する。これを制するのは、一人の力で及ばぬことじゃ」
「然し、その下を導き、時勢を導く人が、大切にござります。諸藩の有志は、その、戴くべき人として、お上を目指しておりますし、吾々共も、お上一人のお指図により、お力により、動こうと致しております。又――」
と、吉之助が云った。そして、斉彬の顔を見ようとして、眼を上げると、その眼を、斉彬は、鋭く、見返した。そして
「吉之助、お前は、わしが居らんと、何も出来ん男か？」
と、鋭く――それは、吉之助も、誰も、今までに聞いたことのない鋭さと、力とが入っていた。吉之助は、斉彬のその言葉と、その眼とに圧倒されて
「はっ」
と、云って、頭を下げた。
「浪人共は、わしが居らんと、勤王が出来んのか？」
吉之助は、黙って、耳を、頸を、赤くしていた。
「わしが死ぬと、お前達は、何もしないで、手を束ねているのか？　わしがおらんと、わしの志したことは出来んのか？」
斉彬は、口早に、鋭く畳みかけた。
「幾度申しても、わしの心が判らんな。わしの富国策が、理解できんの。一蔵、お前も、未だ出来ておらんか」
一蔵は

「はっ」
と、云ったまま、黙っていた。
「わしは、こういううちにも死ぬか知れぬ。又、定命から申しても、お前達より早い。もし、わしが死んだなら、島津を守立てて行く者は、誰じゃ。もし、天下に大難が来たなら、それを防ぐ人材が他に無かったなら、その難に赴く者は誰じゃ。わしの亡き後、わしの志を継ぐ者は誰じゃ。お前達は、わしを、えらいというが、わしは、お前達をえらいと、見ておる。わしの志を継いでくれる者は、お前達軽輩で、お前達が協力してくれてこそ、わしの志が達しられるものだと、わしは、それのみを望みにしておる。わしは、多くの事に、ただ目安を造っておいた。それを成就させるのは、お前達ではないか？　目安を造ったのはえらいかも知れぬ。然し、わしの造ったものは、いつか誰かが造るべき――つまり、天下の勢いの赴くところ、赴く点に置いた目安で、わしが造らずとも、誰かが造るもので、決して、わし一人の力が、天下を導こうとするのではない。お前達、わしが、廟堂に立ったからとて、この徳川の頽勢を盛り返し、尊王論を絶滅できると思うか。又わしの志す、富国強兵の策は、幾度も申す如く、理化学の道じゃ。無より有を生ぜしめ、古陋（ころう）を捨てて、新鋭につくの法じゃ。この道こそは、協力一つ。わし一人の力で、何んともなるべきことではない。調所も協力してくれた。久光も、してくれた。異国の書物も、掛の者も、衆智を集め、衆力を集めて――お前達、一目見れば判るであろう。磯浜の反射炉、大砲、紡績機、硝子製造、これら悉く、財力と、智力と、衆力と、決して、わし一人の力で出来たものではない。一人の力で、天下の重大事、国の大事が出来ると心得ておるようでは、これからの時勢に遅れるぞ。わしが無うても、わし以上にやる、という心が無うて、その若い者が、何うする。お由羅を討つの、将曹を討つのと、何故、志が、そんなに狭い。何うして、そう小さい？　何故、お前達一同が、わしにならぬ。わし以上にならぬ。わしに恐れ、わしを尊び、わし以上に出られん、と心得ているようなことで、何うするのじゃ。お前達、軽輩二十人で、天下の難に赴き、日本を双肩に――いいや、吉之助一人、一蔵一人、岩下一人で、天下を双肩に負うくらいの覚悟が無うて、何うする？　わしは、お前達が、悉く、その決心で居るとおもうていたに、何事じゃ」
吉之助も、一蔵も、俯向いたきりであった。斉彬に、いろいろ云おうとしていたことが、だんだん小さく、薄く、そして、消えてしまって、その代りに、斉彬の言葉が、頭の中の壁に、胸の中に、肚の底に、血管の中へまでも、毛髪の末へまでも、沁み込んできた。斉彬は、又、鋭く
「一同の者に申せ、心得がちがうぞ、とな。集まっている者が聞かずば、悉く、ここへ連れて参れ。参るのが厭なら、わしの申すことが判らぬなら、天下を背負って立つ底の志がないなら、わしの家来ではないから、切腹して死ね、とな。将曹、平と、刺違えるような馬鹿者は、斉彬、家来と思わんとな」
と、云った。
「はっ」
吉之助は、いつの間にか、膝の上へ、涙を落していた。

遠くから望んだ生駒山は、広々とした草原の傾斜を、展開させていた。
（あれが、山相相似ているというのか？）
小太郎は、半分逆上しながら、父と共に登って行った比叡山の、小篠（こざさ）の細径を、想い出した。
（似ていると云えば、叡山の頂上も、草原であった――然し――）
小太郎は、警固の人を斬り、父の傷ついた、篠竹（しのだけ）の深いところは、瞭乎（はっきり）、想い出せたが、頂上の草原は――草原であったような、無かったような、広かったような、そうでなかったような、そして、自分のそこでしたことは、見残した夢の如く、茫乎（ぼんやり）として、水の影の如く薄れて――ああしたことを、この自分が、本当にしたのであろうかというように思えた。
（あの時も、警固の人数の計算を誤った。今度も、三人というが、果して、三人か？――三人だけとは考えられないが――）
来る道で聞いても判らなかったし、登り口で聞いても、牧が、登ったか、何うかさえ判らなかった。
（夜に入れば、祭壇で焚く火が見えようが）
と、思ったが、夜、闘うのは、不利であった。それから、一刻も早く討ちたかったし、何よりも、義観が、この山で必ず、牧が修法を行うにちがいないと云う言葉を信じていた。
聖天と称されている仏を祭った山上へつづく道、茶店が、時々、曲り角に、そして、時々、参詣人が――。小太郎は
（この山でこそ――）
と、信じていたが、牧が来ているか、未だ、来ていないか？

それを、茶店の主人に
「四五人連れの侍が、登らなんだかのう、ここ二三日前から、こっち――」
と、聞いた。
「さあ――御武家衆は、貴下、めったに――この山は、大阪辺の、町人衆のお詣りが、多うて、御武家は、なあ――」
と、主人は、首を傾けた。
「上の寺は、旅の者を、泊めてくれるかの」
「はいはい、喜んで、お泊めなさいます。お心持次第で、結構なお寺でございます」
小太郎は、自分達の一家の悲運を思い出すと、もう、これ以上に、努力する気になれなかった。努力をした結果――呪いの人形を取出し、牧を討ちに行って、そして、得たものは、悲惨な死だけであった。
（あせらずとも、討つべき機が来れば、討てる。わしは、既に、人事を尽した。この上は、天命を待つより外にない）
小太郎は、革袋から小銭を出して、茶店を出た。そして
（義観の指図のままに動くこと、これが、天命を待つことであると共に、人事を尽すことだ）
と、思った。そして、落ちついた心になって――だが、草鞋をしらべ、帯のゆるみを調べ、いつでも、闘える用意をして、登って行った。
左へ入る細道が、一軒の茶店の方から、つづいていた。小太郎は
（この道を――）
と、思った。だが、道は下向きになっているので

（谷間へであろう）
と、行きすぎてみたが、何かしら、心にかかった。小太郎は、編笠を傾けて
「この道は、何処へ行くのかな」
と、茶店へ聞いた。
「下の道でござんすか？――この上の、広いところへ――」
「頂上への？」
「お連れでございますか」
「連れ？」
「今朝、夜の引明けに、四人連れで、お登りになりましたが、お武家衆ばかり、珍らしゅう、何かございますか？」
小太郎は
（勝った）
と、心の中で、絶叫した。

小太郎は、微笑んだ。
（わしの運は、開けて行くのだ）
と、感じた。明るい力が、髪の毛の先にまで、充ちてきた。だが、それと共に
（何故、この運が、もっと早く来なかったか？　父のいた時に――母の死ぬ前に――）
小太郎は、そう思って、二人を悲しむと同時に、二人の霊へ、この明けて行く仙波の家の運を見せようと思った。
「悉ない」
小太郎は、その茶店の前を去る時の脚に、軽さと、力とを感じた。

（三人以上の奴等が居るとしても、わしは、勝てるぞ）
と、いう信念が、手の先へまで、充ちてきた。小太郎は、編笠をとって、鉢巻を当てた。その中には、鎖が入っていた。草鞋の紐を調べてみた。帯のゆるみの有無へ、手を当ててみた。目釘を、もう一度、改めてみた。そして、崖端へおいた編笠をきて、崖沿いの細道を、少し降って、それからの爪先登りを、呼吸を整えつつ、登って行った。
崖が、だんだん低くなり、林が、まばらになり、木が少くなると、草原が、滑かな線をして、起伏してきた。
（広いところだ）
と、感じた。だが、牧は逃げない敵だと思うと、十分に、落ちついていてもよかったし、広々とした山頂は、自分の匿（かく）れるところも無い代りに、敵を匿すところもなかった。
一つの、波の上を越えると、又その向うに、一つ高く、草の波が立っていた。そして、誰も用の無さそうに見えるこの山頂の草の中に、その起伏をつなぐ、消えるばかりの小径が、つづいていた。小太郎は、一つの腹を廻り、次の頂を越えて
（あの頂へ立てば、この山は、一望の下になるだろう）
と、三度思った。そして、三度とも、未だその向うに、もう少し高い丘のあるのを見たが、四度目に、傾斜した草の中を、登ると、連河内の山々が、遠く黒ずんでおり、右手に、河内平野が、展開して、そこからは、四方が、何んの障害もなく見渡せた。
小太郎は、自分の立っている正面に、一人の影の無いのを知ると
（右か、左か――）

右にか、左にか、人影が見えなかったなら、煙の影が立っていなかったなら――
（運が開けて行く）
と、信じたことは、この夕空の如く、急に暗くなって行かなくてはならぬ、と感じた。小太郎は、この最後の一つの大事を、神に祈りたいような気持になった。だが
（女々しい迷いごと）
と、自分を叱って、右を見た。草原が、段々に、森の中へ消えていて、煙も、人も――鳥の影さえ無かった。小太郎は、女々しい迷いごとと、己の信念の崩れて行きかかるのを叱りながらも、心の顫えるのを、何うすることもできなかった。
（左だ）
小太郎は、眼を閉じて、父の顔に祈り、義観に念じ、この山の仏に、神に
（人影が見えますよう――それが、牧であるよう）
と、祈った。そして、じりじり、視線を、左へ、左へ――草原の線の重なり、その上に頂を出している森、その後方の山々、その下の平野、村々――小太郎は、左へ左へ見て行くうちに、ちらっと、黒点が、眼に入った。小太郎は眼を閉じた。そして
（人であってくれるよう。牧であってくれるよう）
心臓が、喘いできた。身体中が緊張に顫えてきた。神を念じて、眼を開くと、じっと、凝視めた。三人の人影が、草の中にうずくまっていた。
「あれで、修法が、出来るかしら――出来るとしても、験(げん)があろうか」
草の中へ、腰をおろして、吸殻を、足で擦り潰しながら一人が云った。
「あろうと、なかろうと、あああああっ」
山内は、大きく欠伸をして
「つくづく、厭になって参った。これが、京の藩邸詰なら、弁慶ではないが、夜な夜な出でては、人が斬れそうだ。今度は、所司代が、会津の容保(かたもり)と、更(かわ)るそうだが、此奴は、きっと、市中取締が手厳しくなろう。すると、諸国浪士共が、じっとしていまいし――」
一人は、その少し下、右手の方に、形ばかりの祭壇を作って、石の如く、うずくまっている牧仲太郎を、じっと、眺めていたが
「然し、牧殿の修法は、人間業ではない」
と、低いが、強く呟いた。
「もう、人の容(かたち)をしていないではないか、痩せて」
「狼の眼だのう。底の方から、何か、鬼気が、迸(ほとばし)るように――声はかれたし、足腰は立たぬようだし、よいよいの歩くように、それでいて、歩き出すと、歩くし、何うだ、あの修法中の凄まじい懸声は――」
「然し、ああなると、いかに、兵道の妙技を極めているにしても、もう、長くはあるまいぞ。今朝の水垢離の時に、裸になるのを見たが、この辺が――」
と、云って、一人は、肩から胸を指して
「一本一本、骨が見える。頬がこけて、そら、何んとかいう魚に似てきたぞ」

「餓鬼だのう」
一人は、じっと、牧の方を眺めていたが
「大分、長いぞ、俯向いたまま――死んだのではなかろうか」
「近寄ると、叱られるぞ」
「然し、これで、験があるのかのう」
「あるの、ないのと、現に、お世嗣が、次々に亡くなっているではないか」
「そうだのう――あの凄い眼を見ていると、いかにも、あの眼で、呪われたなら、死ぬという気がするのう」
「人が参る――侍が」
と、一人が、後方を振向くと云った。山内と、他の一人が、振向いて
「近寄らんように云え」
と、云った。一人が、立上って
「来てはならん」
と、手を、左右に振って、叫んだ。だが、その人影に、聞えぬらしく、三人の方へ、足早に、近づいて来た。
「京からの、使ではないか」
「さあ」
「おーい、こちらに参ってはいかん、来てはならん」
二人で、手を振った。侍は、立止まった。そして、笠へ手をかけて、じっと下を眺めた。
「聞えた」
「あちらへ参られい、あちらへ」
一人が、口へ手を当てて叫んで、右手の方を指さした。侍は、佇んで、牧の方を、じっと、眺めていたが、一足踏み出すと、その歩んで行く方角が、牧の方へ向った。
「倉田っ」
と、一人が叫んで、刀を押えて、走り出した。山内が
「使かあーっ」
と、怒鳴った。一人の侍と、倉田とが、走り上って来るのを見て、侍は、編笠を取った。白い鉢巻が、はっきりと現れていた。手早く、襷をかけた。山内が
「おおっ」
と、叫ぶと、さっと、顔を赤くした。そして
「油断すな。おうーい、小太郎だ。油断すなっ」
と、叫んで、襷をかけながら、走り出した。

二人の警固の人々は、山内が
「油断すな」
と、叫んだから、相当の腕の男だ、とは思った。然し
「小太郎だ」
と、叫んだ意味は、わからなかった。山内は、叡山での、小太郎の腕を知っていたが、二人は、それに就いて、見たこともないし――ただ、八郎太斬死の噂を聞いているだけであった。そして、二人は、二人ながら、相当の使手であったがゆえに、二人を、小太郎よりも劣ったように考えているらしい山内の言葉に、反感をもった。それで
「去れ、去らぬと、斬るぞ」
と、一人は、叫んで、刀へ手をかけたし、一人は、もう抜いてしまって、山内が、もし近づいたなら――斬りかかったなら、それよりも早く、小太郎を斬ってやろうと、足も、腰

も、十分に構えていた。
「貴殿等に、用はない。牧を討てばよい」
「去れと、申すに」
「去れと申すのが、判らぬか」
小太郎は、山内の近づくのを見て
（三人を対手にしては、面倒だ）
と、感じた。だが、なるべく、斬りたくない、とも思った。
それで、口早に
「不忠者っ。御当代の公達（きんだち）を呪う輩を、守って、それで、薩摩隼人かっ」
と、怒鳴った。そして、返事によっては、斬ろうと、柄へ手をかけた。山内が
「待て、待て」
と、叫びつつ、近づいて来た。一人が
「無益だっ」
と、叫んだ。そして、一足引いた。一人が、山内の方へ、ちらっと向いた。その瞬間、小太郎の前に、きらっと、閃くものが、掠めて、小太郎は、一足退っていた。手に、刀があった。
山内へ振向いた一人が、その掠めた閃きに、本能的に、身を躱して、一足退ると、自分の横に、立っている一人が、頭から、赤黒い血を、顔一面に――何うして、そんなに、流れたかとおもうくらいに、血にそまりつつ、よろめき、よろつき、両手で、頭を押えて――眼だけを白く剥き出しつつ、だが、眼瞼に、血をためて、頭を先に、胸を先に、よろめいて、歩き出すと、二三歩で、顔を歪めて、草の上へ倒れるのを見た。唸り声も、叫び声もしなかった。
「小太郎」
その斬られた男の跡へ、山内が立っていた。一人は、小太郎の早業に、手が、脚が、指が――そして、頭の中も、固くなってしまった。
（敵わない）
と、いう感じが、全身に恐怖を与えてしまった。一瞬で、血塗れになった朋輩で、心も、身体も、冷えてしまった。小太郎は、黙って、刀を構え直した。そして、いくらか、高いところに立っている位置を、少しずつ、低いところへ移って、山内と同じ高さになった。
「受けられるか」
小太郎は、叡山の上、伝教大師の廟の石垣へ、自分を追いつめて、のしかかって来た時の山内の顔を思い出した。
「小僧」
「やあーっ」
声の形をした、そして、形の無い闘魂、闘気ともいうべきものが、爆発した。
「おーっ」
二人が、近づき、二つの刀が近づき、もう一度、二人の声が、ぶっつかると同時に、山内の身体が傾いた。そして、傾いたのを直そうと、たたらを踏んだ。刀を杖にしてよろめいた。小太郎は、八相に構えたまま、じっと、それを、眺めていた。山内は、刀へぐったりよりかかったかと思うと、もんどり打って、下の凹地へ、転がってしまった。

久光は、斉彬の、病に臥している建物の廊下へ、足をかけると同時に、肚の底から、全体の中へ、爆発するような憤りを、感じた。
廊下には、足音の立たぬよう、蒲団が敷かれていた。それは、足で踏み、眼で見るとすぐ、斉彬の容体が、ただごとではない、ということを語っているものであった。
久光は、母お由羅、将曹、平などの企みを、信じてはいないし、牧仲太郎の呪咀などを、考えの中へ入れても居なかったが、今朝、機嫌のよかった斉彬が、その夕、危くなったということに対し――それが、瞭乎(はっきり)とした病ならば、とにかく、三人の医者にも、不明な、熱病であるだけに
(もしか、呪いが――)
と、ちらっと、そうした影が、頭の中へさすと同時に
(そんな、迷いごとを――)
と、打消しながらも、兄の心事を余りにも知らぬ母に対し、家老に対し、制しきれない憤りを感じてきた。
呪咀を否定していながら、何かしら、母達の企みでこうなったように感じた。何者かが、見えぬ力で、斉彬を呪っているように思われた。
当然、斉彬の代になれば、御役御免になるべき人々が、そのまま留任していることに対し、久光は、今まで斉彬のその寛大さに打たれて
(将曹め、兄上の御恩を、よく覚えていよ)
と、感じていただけであったが、その将曹らが、江戸からここまで従って来て、そして、斉彬の病になったのを見ると、彼等の不注意で、斉彬を病にしたように感じた。そして、廊下に敷きつめた蒲団を見ると共に
(何故、あの時に辞任しないか)
と、感じた。そして、自分に対しても
(何故、あの時、あの奴等を、辞任させるよう、兄へ諫めなかったか?――それだから、こんな事になったのだ)
と、いう風に思えた。取り返しのつかぬことが、自分達の不注意のために起り、斉彬の、神の如き人を、病にし――
(死にかかって――)
と、思うと、呼吸が喘ぐように、つまるようになってきた。小走りに近いくらいの足並で、廊下の中程まで行くと
「久光様」
と、低い声が、後方からした。久光は、その声が、耳へ入ったが、自分が呼ばれていると、感じないくらいに憤りと、不安とで、頭をいっぱいにしていた。
「久光様――御前――」
久光は、振向いて怒鳴ろうとした。老臣の一人が、泳ぐように、急いで――だが、足音を憚りながら
「亡くなりなされました――」
と、呼吸が、つまったような声で云った。久光は
(この血迷い者、亡くなったとは――不吉な――馬鹿者っ。老臣の身で――)
と、やり場のない憤りを、そして、それを口にも出せない苦しさを、眼の色に出して、睨みつけると
「哲丸様が――哲丸様が、お亡くなりに――」
久光は、心が、踏みくだかれたように、感じた。立止まると

「ほ、本当か」
「唯今、江戸表から――」
と、云って、老臣は、咳を立てまいと、廊下へ伏して、袖の中へ、顔を包んだ。久光は、身体を、その肩へ曲げて、耳許へ
「他言致すな。秘めての」
と、いうと、蒼白な顔をして、立上った。
案内の坊主が、同じように、歩き出した。
「他言すな。すると捨ておかんぞ」
と、久光は、小声で、口早に、坊主に云った。

次の間へ入ると、薄暗い中に、将曹と、平とが、坊主だの、近習だのと一緒に、詰めていた。久光の影に振向いて、頭を下げ、眼を上げたそれらへ、久光は、蹴倒し、踏みにじりたいような、怒りとも、憎しみとも、判らぬものを感じながら、その眼を睨みつけて、病間へ入ろうとした。将曹が、周章てて立って来るのへ、烈しく手を振って、制した。そして、病間へ入ると――其処に立っている屏風、煎薬の臭、恐ろしいような沈黙――それから、夜具の端、そんなものが、悉く、久光の心に、身体に、冷たいものを、押しつけた。
一足進めると、医師の顔が――それは、久光でさえ、病の障りになる、とでも云ったような烈しい眼をして――だが、お叩頭をした。二足目には、もう一人の医師の顔が――その顔は、自分が死病に罹ったように、沈鬱で、久光が、そうさせたかのように、恨めしそうな表情をして、挨拶した。久光は、その二人の医師の表情に
（兄は危いらしい）
と、感じた。
（もし、危いと、きまっていたなら――）
久光は、もう一足進んで、兄の顔を見るのが、自分の死よりも辛いように、心臓をしめつけられた。だが、その次の瞬間
（よかった）
と、感じた。三足目に久光の眼に入った斉彬は、眠っているらしく、いつもの、穏かな顔――少しの窶(やつ)れもなく、苦しみもなく眼を閉じていた。だが、三人の医者の顔が、身動きもせずに、見守っているのを見ると、その平和な顔が、却って、薄気味悪く感じられた。
（もし、このまま逝ってしまったなら、何うなるのだ）
久光は、喘いでくる心臓を、呼吸を、押えて、斉彬の枕頭へ坐った。そして、四人とも、暫く黙っていた。
「重いのか」
低く、囁いた。
「はい」
「病名は？」
「それが――申訳ござりませぬが、判りかねております」
久光は、お由羅の行っているという、呪殺の効験を信じなかったが、三人の、和洋医術に秀でた医者が、判らないというのを聞くと、ふっと
（牧の呪い）
と、感じたり
（兄のような人物は、病まで、常人でない病に罹る）

と、感じたり――だが、判らない、と聞くと、諦めきれぬような気がして、三人へ、腹が立ってきた。そして
「修業の足りないせいだ」
と、云いたかったが、そうもいえないで
「判らぬ？――」
と、低く、咎めた。
「お譫言が、時々、おうなされ遊ばすことが、時々――」
「うなされる？」
「はい」
久光は、斉彬程の人物が、うなされるとは信じられなかった。
（哲丸が、死んだというが――あの、死んだ子供達と同じ病ではないのか？　最後の子供を殺して、それから、斉彬公の――）
ふと、そう感じたが、斉彬の理化学に影響されている久光にとって、それは、愚かな閃きであると、すぐ打消されるべきことであった。医者が、手と、身体を動かして、斉彬の方へ顔を差出した。斉彬の眼が、瞼毛が、微かに動いたらしかった。久光は、心の中で
（兄上）
と、叫んだ。
（久光が参っております）
久光は、息をつめて、斉彬の顔へ、見入った。
斉彬は、眼を上げたが、物を云わなかった。久光は、その眼の光の鈍さに、心臓を冷たい手で掴まれた。
「如何でございます」
斉彬は、それに答えないで、もう一度、眼を閉じた。久光は
（苦しいのだろう？）
と、自分の健康な体力を、兄へ透そうとでもするように、膝に、身体に、力を入れて
「さすりでも――」
と、まで云った時、斉彬は、顔を歪めて、肩で、大きい息をした。三人の医者が、全身の神経を、斉彬の顔へ集めて、のぞき込んでいた。斉彬は、一二三度、大きく呼吸をしてから、眼を開いた。
「如何でございます」
「久光」
喘ぐような声であった。
「回復は――到底、難かしい」
その声の中には、斉彬の、死の覚悟が、瞭乎としていたし、死の影さえ、含まれているように感じられるものであった。
「いいえ、左様な――」
「一同を呼べ」
「はい」
久光は、そう云われて、すぐ立つことは、自分までが、斉彬の死を肯定しているようで、立てなかった。だが、常の人に、気安めをいうように、この兄に対して、ありふれた慰めの言葉も、かけられなかった。
ただ、絶望と、憤りとで、自分のこうして坐っている脚下の砂が、だんだん谷底へ、崩れ落ちて行くように感じた。何

んにも、縋るべきものがなかった――ただ一つ縋っている、斉彬が死ぬことに対して、ただ、もがくより外にない自分に対して、怒りを感じた。
「呼べ」
「はい」
久光は、一人の医者に、眼配せをした。そして
「只今」
と、云った。医者が立って行くと、すぐ、将曹、豊後、平、側用人種子島六郎、島津石見が、入って来た。久光が
「一同、御前に」
と、云った。斉彬は、眼を閉じたまま、低い声で
「わしの亡き後は、久光――忠義（久光の子）に相続させい。お前が、後見――」
久光は、腹の中へ、熱い鉄を当てられたように感じた。
「いいえ、哲丸が――」
と、云いたかったが、死んだ哲丸を――今、死んだ、と聞いた哲丸を、偽って、相続にとは、云えなかったし、哲丸が死んだということも、この死に瀕（ひん）している斉彬に、云えることではなかったし――が、黙っている訳には行かぬと思うと、腹が、胸が、悲しさに固くなって、痛みをさえ感じてきた。石見が、久光の顔を、じっと見ていたが、そっと、袖を引いた。それは
（何んとか、返事を――）
と、いう合図であった。久光は、こうした最後の時にまでなって、猶、お由羅にいいよう、斉興にいいよう――己の子の哲丸がいるのに、それを犠牲にして忠義を立てよという斉彬の心に対して――斉彬に、謝するよりも――お由羅の陰謀を、悉く知っていて、猶、父のために、島津のために、平安なれと、祈っている斉彬の心へ、泣いて謝するよりも、こうした斉彬の心事を、何一つ察しないで、事ごとに斉彬を苦しめてきた父母に対し、将曹等に対し、押えきれぬ激怒が湧き上ってきた。そして、自分が、その斉興に愛せられ、お由羅に寵愛（ちょうあい）せられているかと思うと、この兄の前に――兄の死の前に、父母に代って、何う詫びていいか、何んと云っていいか――久光は、身体を固くして、俯向いていたが、肩を動かし、眼へ手をやると同時に、声を立てて、打伏してしまった。
「何を泣く」
斉彬が、呟いた。人々が、久光を、のぞき込んだ。久光は、洩れる声を、歯で、袖でつつみながら――それでも、溢れて来る悲しさと、憤りを、何うすることも出来ないで、むせていた。
「久光」
久光は、伏している袖の中から
「はい」
と、答えた。人々は、何故久光が、泣いたのか判らなかった。それから、斉彬の病気の重いことは、十分感じていたが
（今、死ぬなど――）
と――だから、久光の、嗚咽（おえつ）に対し反感さえ感じながら
（何を泣く？）
と、思った。斉彬が、動かぬ頭を、久光の方へ向けて
「お前に、それが、合点行かぬか――」

と、低く云って、久光を、眼の隅から見ようとした。久光は、少し、頭を上げて、だが、両手をついたまま、首垂れていた。
「わしは、自分を、子供を、天下のために、家のために、犠牲にしてきた。それは――ただ、島津が一致して、天下のために、快く、働けるようになってくれたならよいという、ただそれだけの望みからであった。今――哲丸が立てば、わしの亡き後、必ず、哲丸を守る者と、それに反対する者とが、相争うであろう。それをさせたくない。それが起れば、島津は、有為の士を悉く失い、天下は、何うなるか、判らぬようになる――」
久光は、頭を上げて、夜具の端を、掴んだ。そうして
「兄上」
と、曇った声で叫んだ。
「お心は、そ、そのお心、久光――よく、お察し申しております」
斉彬は、頷いた。微かに、その眼に涙が浮んでいた。
「判ってくれるか」
「わ、判っております、お察し申します」
斉彬は、顫える手を、夜具の中で延して、久光の手を握った。久光は、熱のある人の手を掴むと、涙で、顔が上げられなくなってきた。
「哲丸は――」
と、斉彬が、呟くと共に、久光は、脣を噛んで、俯向いた。
「哲丸を――頼む」
「は、はい」
「将曹達はおるか」
「はっ」
「何事も、島津のため、天下のためとおもえ。軽輩を慈しめ。忠義をよく守立て、久光をよく輔佐せい」
将曹は、膝の上へ、涙を落していた。斉彬の最後の時として、人間の最後の時として、当然、一言でも、陰謀に対する憤りが、怨みが、せめて、皮肉な言葉であろうと――己の陰謀の成就を喜びながらも、人の死に面して、異常な仁慈の心の主君の死に対して、平静な、厳粛な心に立返っていた将曹は、そうした一つの、皮肉さえなしに、自分に対して、後事を頼み、感謝の言葉を述べた斉彬に、腹の底からの畏敬と、後悔とを感じていた。
「わしの臨終に、間に合うように、あの若者共を、庭先へ、呼んでやってくれい」
「はっ。よ、喜びましょう」
と、石見が、低く叫んで、勢いよく立って行った。歩きながら、眼を拭いていた。誰も、斉彬が、最後の一人の子供をまで、家のために、父のために犠牲にする心に、打ちくだかれてしまっていた。袖を当てたり、鼻をすすったり、しゃくり上げたり――そうして
（このまま、お逝くなりになるのかもしれない）
と、感じ、もし、このまま、逝くなれば、島津は、何うなるだろう？　軽輩と、重臣との衝突など――と、死んだ後の、混乱を考えると、何か、危急が迫って来ているように感じられた。

「お気の弱い――熱は、少しござりますが、これしきの病に――」
それは、将曹の、真心からの言葉であった。斉彬は、溜息をついて
「わしが、今死んだからとて、十年生き延びたからとて、今の天下の形勢は、何うなるものでもない。この、同じ形勢の下に、ただますます、強くなる尊王、倒幕の大勢の下に、何う処置するかは、久光、今更、申すまでもあるまい。わしが、生きておれるなら、生きておってもよい。然し、死んだとて、わしの志は、無になるまい。久光初め、重役、有為なる若者が、必ず継いでくれよう。わしは、それを信じている。わしが亡くなれば、内訌のようなことが、無くなるだけ、或いは、よいかも知れぬ。家中が一致するだけよいかも知れぬし、奮起する人間が、多くなるだけよいかも知れぬ。わしは、何も、今までに、出来なかったが、ただ、天下の赴くところにだけは、従って来た。或いは、それの一歩先へ立ってきた。このことは、久光もよく理解しておるであろうし、家中にも同意者があろうし、広い天下には、何処に、又味方が在ろうかも知れぬ。わしは、それだけを、信じることができる。そして、それさえ信じたなら、わしは、少しも、わしの死を惜しいとは思わぬ。わしに反対し、わしを邪魔にする者も多い。わしが死んだなら、喜ぶ人も多かろうが、わしの志だけは、わしが死んでも、消えるものではない。やがて、天下の大勢となり、島津は、天下に号令して、日本の基礎を立てるようになるであろう。わしの死は、わしの身体を失わしはするが、わしの心を、決して、奪いはしない。それを思うて、安らかに、逝ける。久光、わしのために、祝うてもよいのじゃ、何を泣く？　何が、悲しい？」
斉彬は、死の苦痛と闘いながら、呼吸の困難と、頭を鈍らす高熱とに、闘いながら、いつもの如く、静かに云った。石見が、戻って来て
「一同、召出すよう、申し付けましてござります」
と、云った。
「久光、重臣と共に、軽輩を、可愛がってやれよ」
「はっ」
久光は、感激に、全身を燃えさせていた。ただ一言ではあったが、それは、久光の意志が、答えたのではなく、全身の感激が、それを発射したのであった。斉彬の平生の言葉が、もう一度、その最後の言葉によって、久光の全身へ充満した。
「誓って、仕遂げ申します」
「協力して――」
「いつかの連名は、しかと、所持致しております」
「奥と、哲丸へ、よろしく、伝えてくれい」
石見が
「お二人様に、何か、お伝え申しますことがござりましょうなら――」
「何もない――哲丸が、無事に成長するようと――」
斉彬が、只一人残っている己の子の成長を――父に先立って逝ったその子を――その死も知らずに、その幻を胸にしながら逝くかとおもうと、久光は、又、涙が溢れてきた。
（云おうか――偽るまい――打明けようか）
と、頭を上げてみたが、斉彬に、残された、それがただ一

つの、恩愛の対象だと思うと、総てのものを失ってしまった斉彬に、よし、偽りにせよ、哲丸一人だけは残しておきたかった。
「哲丸は、必ず――久光、誓って、お育て申します」
と、云い終ると、又、涙の中へ、埋れてしまった。

牧仲太郎の肉体は、もう、死んでしまっていた。骨は、もう、その身体を支えきれなくなって、地上へ曲ってしまっていたし、肉は干れきって、残滓(かす)のように、皮膚の色は変色して、紫灰色に――牧は、干した蛙のように、草の中にうずくまっていた。
もう、声も出なかった。心臓だけが、消えて行く灯が、明るく最後に光るように、鼓動しているだけであった。だが、それでも、牧の精神力は、十方の空間を貫き、大地の底に徹するくらいに強かった。その頭と、その眼だけは、自分の肉体の瀕死を、少しも感じないくらいに、斉彬を呪咀する一点に、集中されていた。
まざまざとして、映じてくる網膜の上の斉彬は――ある時には、空間に引立てられて、全身が歪み、ある時には、地下へ翻々として落下しながら、恐怖の眼を見開き――それは、天魔、地神に虐げられている、牧の呪いの力によって、斉彬の体に感応した結果を現す形であった。
(成就した)
と、頭の隅で呟いた。牧は、斉彬が、真逆様に、闇黒の底に燃え上っている火焔の中へ落下して行く形を見、それを追うて、同じように、墜落して行く自分の姿をも見た。

(成就した)
動かない手を――しびれてしまった、力の尽きた、干れ細って汚い手を、じりじりと、立てて、最後の合掌を、しようとして、身体を立てかけた。そして、肩で呼吸をして、眼を閉じた。
「牧」
と、呼ぶ声がした。近くか、遠いのか、外から聞えたのか、頭の中で、そういう声が、したのか、判らなかった。
(誰であろうと、何ういうことであろうと、自分の此世における仕事は果てた。果した。斉彬――兵道の敵斉彬は、滅んでしまったのだ。斉彬も、その子も――兵道を呪咀した血は、これで、悉く絶えてしまったのだ――知ったであろう、兵道の威力を――)
牧は、笑えぬまでに、固くひからびた頬に微笑した。
「立て、牧、仙波八郎太の倅じゃ――立て、牧」
(仙波?――八郎太?)
牧の頭は、急速度に、疲弊してきた。肉体の衰亡が、一時に拡がってきた。仙波、と聞いても、記憶が、すぐ、口には、出て来なかった。
何かが、首を、身体を、ぐいぐい引上げるようであった。牧は、土のついた、濁り、淀んだ、黒灰色の顔を上げた。そして、残りの力を瞳に集め、手に集めて、手を膝へ置き、上の方を見た。
「仙波小太郎じゃ。立上れるか?」
牧は、いつの間にか、だんだん光を失って、空虚になってきた眼で、じっと、小太郎を凝視していたが

「おお」
それは、ほんの唇の端から出た、微かな響きであった。微かに唇の動いた微笑であった。
「討つがよい」
と、いいたかったが、討つ、ということが、何ういうことか、討たれるとは何か――自分も、小太郎も、頭の中で、もう判断が、つかなくなってしまった。
身体が、地の下へ、急に落ちて行くようにも、感じるし、空中に、浮き上って行くようにも思えるし、赤い強い光が、眼の前いっぱいになったかと思うと、すぐ、暗黒になるし、物音は、何も聞えないし――何かが、身体に触れるようにも感じたが――その次の瞬間には、総ての感覚を、なくしてしまっていた。

小太郎は、血のついた刀を、提げたまま、じっと、牧の身体を、見つめていた。
（これが、牧仲太郎か――わしの一家を苦しめた、牧の最期か？）
斑点が――紫色の斑点が、どす黒い肌の上へ現れて、肉が落ち、髪は枯草のように――何んの抵抗力もなく――それは、老いた乞食が、野垂死をするように――その光った眼は物乞いの憐愍（れんびん）さのような微笑さえして――その死体は、白痴のように、口を開いて――
（これが、父を殺し、一家を離散させた奴の最期か）
小太郎は、牧の首を斬り、止めを刺し、蹴倒し、踏み躙って――と、思っていたが、ここに倒れている牧仲太郎は、漂泊の末に死んで行く、老人の残骸と同じ形であった。
（この男を斬るために、二年近く、様々の苦労をして――）
と、思うと、仇敵とも、敵とも、感じようのない、みじめな牧の骸（むくろ）の前に立って、何んのために――何うして、ああまで一家が、苦労したのか、判らなくなってしまった。
（これが、わしの、一生の目当としていた仇討か――これが――）
小太郎は、夕陽の当っている牧の骸を、じっと見たが、そこには、大きい空虚があるだけで、何んの憎さも、何んの怨みも、感じることができなかった。
（せめて、一太刀でも、合せたなら――）
小太郎は、父が、物足りなく感じているであろうと思い、母が、何故もっと早く斬らなかったと、怨んでいるように思ったが
（そうだ、叡山でのあの時に――牧は、わしを救ってくれた――それは、父も知っていよう――牧は、悪人ではない、兵道家として、道を踏外しただけだ――悪人でない。決してない。わしが牧なら、矢張りこうなったかもしれぬ）
小太郎は、刀を、草の上に置いて、牧の顔の前に膝をついた。そして、合掌して、称（しょうみょう）名した。
夕陽が、大阪の先へ落ちようとして、海も、空も、真赤に――だが、山の上の雲の下だけは、牧の顔のように、どす黒い色をして、ひろがっていた。
小太郎は、脇差を抜いて、牧の頸の下へ差込んだ。そして、膝で、肩口を押え、左手で、髻を掴んで、ぐっと、引上げた。草へ、音を立ててかかるべき血が、切口から力なく流れただ

けであった。だが、切り放たれた重い頭は、小太郎の手から、落ちようとした。
（わしの仕事は、これで済んだ。然し、これが、わしの仕事であったのかしら？――こういう仕事が――）
益満の言葉が、頭の中いっぱいになって来た。小太郎は、牧の片袖を切裂いて、首を包んだ。自分の刀を、脇差を拭って、収めた。そして、立上ると、山内の倒れているところへ行って、その袴を脱せた。それを、持って戻って来て、牧の首の切口へ被せ、手を、足を、包んで、もう一度、合掌した。
何かしら、自分の身体の中いっぱいになっていたものが、訳もなく、張合もなく、すっと、抜け出てしまったように感じた。頭の中も、身体の中も、空虚になってしまった。
小太郎は、首を、脇にかかえて、立上った。下の方に、警固の侍が、まだ刀を持ったまま、呆然として立っていた。
「牧を、手厚く、葬ってやってもらいたい」
小太郎は、こう叫ぶと、何故か――それは目的を果たしたことに対する嬉しさの涙であると共に、牧への手向けの涙でもあったか――薄い憐れさが、湧いて来て、涙が浮んだ。だが
（これから、斉彬公のために尽すのだ――こうして――牧を討ってしまえば、哲丸様も、島津も、安泰だ。益満は待っておろう――妹よ、これで、仙波の家は立派に立つぞ。牧の首は、ここにある。家中の正義派は、斉彬公のために、何んなに、己をほめてくれるか？――一刻も早く、京都へ、京都へ）
小太郎は、夕陽の落ちて行く空の中を、走り出した。京都の方角の山々は、暗くなりかけていた。

馬の蹄の音が、人々も、梢も、小鳥も、沈黙している山荘の中へ、微かに、響いて来た。人々は、その蹄の音の、あわただしさに、一寸、心臓を押されたが、吉之助も、その外の人々も、俯向いているだけであった。然し、心の中では
（何かの異変であろうかな、今時分、あの、けたたましさは？）
と、感じた。だが、今まで、吉之助が、一蔵が、話をし、説いてきた斉彬の言葉に対し、何うもいいようのない人々は、自分の命にかけて、起そうと意気込んで来たことが、斉彬の、その一言で、空に帰したがために、頭の中が、抜殻のように――
（只事の馬ではない）
と、感じても、立とうとも、思わなかった。
（何うにでもなるがいい）
と、いうような気持さえ持って、黙ったまま、坐ったままでいた。門が、軋った。すぐ、廊下へ、足音が、響いてきた。見張の者が、すぐ通した人なら、大したことではない――
（誰であろう？――何をしに）
と、人々が、振向いたり、感じたりした時
「吉之助、吉之助、居るかっ」
それは、西郷吉兵衛の声であった。
「居ります」
廊下の板戸が、開くと、吉兵衛が、鞭を持って
「お上が、お危い。お前、お庭先へ廻って、お暇乞いせいと、今、石見様から、お使が見えた。馬ですぐ――」
と、いって、鞭を出した。又、馬の蹄の音が――門で、誰

かの叫びが――
「一蔵っ」
「岩下様、旦那様っ――」
座敷中の人々は、一斉に、顔色を変えて立上った。吉之助は、真赤な顔をして
「皆つづけ」
と、叫ぶと、廊下を走り出した。
「火急の用事でござります。樺山様っ」
門前から、庭から、人々を呼ぶ声が、起ってきた。人々は、刀を、周章てて、争って、取ると、誰も、眼を光らせて、誰も、怒ったように沈黙して、狭い廊下から、襖を叩き開けて、庭へ飛び降りて、走り出した。
「南無、維新公、この大難を、免れさせ給え」
と、叫んで、一人の青年は、庭で跪(ひざまず)いて、祈った。
吉之助が、門へ出ると、もう、五六頭の馬が、集まっていた。
小者も、馬丁も、ただ、目礼をしただけで、口さえ利かなかった。吉之助は、馬に跨がると
「一蔵、は、早くつづけっ」
と、叫んで、すぐ、走り出した。鞍に左手をかけ、手綱と共に、鬣(たてがみ)を引っ掴んで
（某の、到着致しますまでは――）
と、絶叫した。今朝、拝謁した時の斉彬の顔が、姿が、部屋が、庭が、いろいろの声と共に、頭の中に閃滅(せんめつ)しつつ、廻転した。ただ、呼吸もできぬような、切迫したものが、頭の中いっぱいになっていて、馬に乗っていることも、自分の身体も、感じなかった。
町へ出ると、町は、何事も知らぬように、静かに、通行の人々は、吉之助の馬の勢いに、走り、避け、見送っているだけであった。
何処を走っているのか？　何処へ行くのかも感じなかった。ただ
（もう、すぐだ）
と、思いつつ、明るい海の光っている、澄んだ空からさす陽の下の町を、絶望と、暗黒の心、固くなって、顫えている胸を抱いて、走って行った。
城へ近づくと、然し、徒歩で、馬で、人々は、急いでいた。吉之助は
（亡くなすものか――亡くなっては、いけませぬぞ――亡くなしてみるがいい）
と、歯噛みしながら――自分が、庭へ行けば、きっと、お癒ししてみせる、と云ったような意気込みで、走って行った。
もう、一族の人々は、集まりかけていて、御病床は、それらの人々の後姿で、いっぱいであった。
吉之助は、はだしのまま入って来て、後向きの人々の肩の、頭の間から、ちらっと見える、座の人々の憂色を見ると、脣を噛んで、庭先へ、坐ってしまった。
自分の息づかいも、汗も、小石に痛む膝も、暮れかかろうとする空の明るさも、何も、感じなかった。坐ると同時に、涙で、眼も、心も、曇ってしまった。
（いけないらしい）

と、部屋の、沈欝さから感じると、空も、地も、国中の人々も、天下の誰も、この人の死に対して、首をたれているような感じがして来て、ただ、じっと、冥福を祈っているより外に、何も考えることのできない、悲しみに満ちた心に、頭になってしまった。

部屋にいる人々で、庭の方に坐っている人が、左右へ開いた。斉彬の顔が、暗い部屋の中に朧気に見えた。誰かが、斉彬が、何かいっているらしく、時々、低い声が、吉之助の耳に入って来た。それから、吉之助の後方に、横に、つつましい足音と共に、軽輩が集まって来た。

「吉之助、一蔵、一同、お暇乞い申し上げい」

顔も上げ得ないで、庭に泣き伏している人々の頭の上へ、近々と、廊下から、声がかかった。誰も、答えることが出来なかった。僅かに顔を上げた。斉彬が、開くのも、憂い眼を開けたらしく、最後の力を集めて、己の仕事を継ぐべき人々を見ようとするらしく、微かに、斉彬の顔に、黒く動くものがあった。吉之助は、それを見ると

「うっ」

と、むせるように叫んで、手を顫わせ、肩を顫わせて、突っ伏してしまった。一蔵は、涙の中から、じっと、眼を据えて、斉彬の表情の、寸毫（すんごう）の動きでも、見逃すまいとしていた。

「一同、心を一つにして、兄の志を、成し遂げてくれい」

それは、久光の、曇った声であった。吉之助は

（もう、斉彬公は、物もいえぬようにおなりなされた）

と、思った。最後のお顔を、拝して、と涙を拭いて、顔を上げた。黄昏近くなってきた、暗い部屋へ、小姓達は、廊下伝いに、つつましく、燈火を持って来た。庭には、篝火（かがりび）の支度をしていた。

部屋が明るくなると共に、斉彬は、またたきをした。だが、もう視力が弱ってくるらしく、そのまま眼を閉じてしまった。医者が、絶えず、脈を取り、顔色を伺っていた。吉之助は、軽輩の身として、物もいえぬ身分を、もどかしがりながら

（手前一人にても、必ず、成し遂げます。お上の御教訓、吉之助の、髪の末へまでも、しみわたっておりまする。心安らかに、往生遂げられますよう）

心の中で、そう叫んで、斉彬の死の安楽と、その魂の静鎮とを祈った。

だんだん庭は暗くなり、部屋は明るくなってきた。吉之助が、顔を上げると、人々が、斉彬の顔のところへ、元の如く坐っていて、何も見えなかった。

庭の人々は、動きも、咳もしないらしく、何んの物音も立てずに、暗い草の上、砂の上に坐ったままであった。

「御臨終」

と、微かな声がした。庭の人々は、一斉に顔を――少し、腰を上げて、部屋の中を見た。二三人の人が立って行くのと、四五人の人が、斉彬の顔へ、のぞき込むのとが見えた。それと同時に、庭は嗚咽でいっぱいになった。部屋からもすすり泣きが、聞えてきた。

死の後に

小女に、案内されて、中庭を左に、廊下を行くと、右側の部屋に人影があった。小太郎が、急ぎ足に、歩みつつ、ちらっと、それを見ると

「おおっ」

庄吉の声と、顔とが――

（癒ったな）

と、感じた時、南玉の顔が、深雪の顔が――だが、それは、いつもの三人の表情でなく――小太郎が、戻って来るからには――牧を討ったということは、その明るい顔にも、現れているし、その腋の下の包からでも、判るのに――三人の顔には、沈んだ影が、憂いの表情があった。

（何を、三人は？――）

と、感じながら

「討ったぞ」

と、口早に、そして、腋の下の包を、ちょっと、動かして、そのまま、益満のいる大広間へ急いだ。だが、急ぎながら

（何故、三人は、飛び立って来ないのか？）

小太郎には、解ききれぬ疑問であった。

大広間には、浪人達と、益満とが――その人々も、矢張り、同じように、沈んだ表情をして、小太郎を、ちらっと見た。益満も、小太郎に、眼を上げたままで、その腋の下の包み物をも、見たのに、すぐ、俯向いてしまった。

（何か、大事の企画が、齟齬（そご）したのであろう）

小太郎は、不安な胸を押えて、人々に、黙礼して、益満の側へ坐った。

「討ったか？」

「うむ」

油紙で、がさがさ音のする、首の包を二人の間へ置いた。

「小太――」

益満は、それだけ云って、暫く言葉を切っていたが

「斉彬公がお亡くなりになったわい」

それは、いつもの益満の声でない、弱々しいものであった。だが、小太郎は、その言葉を、半分聞いた時に、全身を、冷たく襲って来る絶望感があった。

（これか、皆の、沈んでいるのは？）

小太郎は、じっと、畳を見つめたまま、眼も動かさなかった。三人が、小太郎の様子を見に、廊下の端へ出て来ている姿が、眼の隅に見えたが、小太郎は、自分も、生きているということも、世の中も、この座の人々も、感じないくらいになってしまった。

（わしの仕事は、あの哀れな牧を討つことと、それを討って、斉彬公へ尽すつもりであったのに――）

「哲丸様も、亡くなった」

小太郎は、益満のその言葉に、返事をしようにも、声が出なかったし、したくもなかった。

（わしは、今まで、何をして来た？）

牧は、斉彬と、その家を呪咀したのみでなく、自分の一家をも、呪咀し、その最後にも、殺されながら、小太郎に、打ち勝ったように思われた。一人が

「小太郎、遅かったわい」
と、云った。小太郎は、全身を突き飛ばされ、心を叩きつけられたように感じた。斉彬と、哲丸とを亡くしたのは、自分のせいのように感じた。
「今も、それで、もめたが、呪咀か、毒殺か――斉彬公は、呪咀をお信じにならなかったが――余りに不思議なお亡くなり方だ。然し、何れでもよい。小太郎、わしは、落胆しないぞ。この憤りを、幕府へ、わしは叩き返してやる。わしは、江戸へ戻って、悪鬼になって、暴れてやる。殉死の心を、生き延びて、江戸中を、血潮の巷にしてくれる。小太、共々、江戸へ立とう。国許の英才も、このまま、泣いてはおるまい。斉彬公が、お亡くなりになっても、そのお心は、骨髄にまで、沁み透っているぞ。いいや、お亡くなりになったがゆえに、わしの血は、二倍にも、燃え立ってきた。倒幕の気運は、明日から起るぞ。小太、江戸へ立とう。斉彬公は、一寸も、じっとしてはおられなかった。各各――立とう。直ちに、江戸へ立って、御遺志を継ごう」
益満は、低いが、強い声でいって、刀を、どんと、畳へ突立てた。
西郷は、又泣いたらしく、眼を赤くしていた。上下(かみしも)をつけて、袴を高く、膝頭までからげて、素足に、草鞋――それは、斉彬の柩(ひつぎ)を警固するための服装であった。
将曹等を、討とうとした、若い、軽輩の人々は、お互に、燃えるような、刺すような眼をして、その心と、心を通じさせている。
だが、階級の上の人々は、囁いたり、微笑したり、そして、吉之助とか、その外の人々の、眠らない、赤い眼を見ると、すぐ、冷たい眼になって、横を向いた。
「一蔵、わしは、江戸の軽輩と、呼応して、ひたすら、倒幕の策につこう。お前は、亡君の御遺志をついで、富国の策をとってくれい。亡君を、唯一人の人として頼んでおった浪人共は、この死によって、どう落胆し、どう変るか判らない。しかし、ここに集まっておる、この、軽輩だけで、江戸におる益満らだけで、必ず、倒幕の仕事は、成し遂げてみせる。薩摩一国で、必ず、回天の業を、遣り遂げてみせる。お前は、国許にいて、ここらにおる、あの馬鹿重臣共を押えていてくれい。亡君の仰せの如く、内訌していることではないようだ。来る便り、来る便りが、世の中の激変して来るのを知らせて来ている。軽輩共の、熱は、血は、押え切れなくなっている。亡君に、お報いするの道は唯、京師へ出で、江戸へ行くだけだと、思っている。全く、風雲は、急に、なって来たらしい。仕事は、将曹を斬るよりも、遥かに、大きい」
一蔵は、うなずきながら、陽を受けて、紫紺色にそびえている桜島を、じっと、凝視していた。二三人の、同じ姿の軽輩達が、近寄って来た。
「今までは、おすがり申していたが、お亡くなりになって、己一人でやらなければならぬと、思うと、おれは、こうして、じっとしているのでさえ、惜しくなってきた。斉彬公と共に、これまでの月日が去ってしまって、ちがった陽の下に、生れ帰って来たような気がする」
五代才助が呟くようにいった。

「わしも、昨日までのわしではなくなった」
と、一人が呟いた。一人の上席の者が、この一群の側へ通りかかって
「隼人が、何を悲しむ」
と、いいすてて、行ってしまった。才助が、その後姿へ
「もう、お前らは、対手にしないぞ」
「相手は、天下だ」
「徳川だ」
「異国だ」
立っている堀の石垣の上から、鹿児島の町は、磯浜の方へ、低く、充満して、連なっていた。浜には、斉彬公の定めた、日の丸の船印の船が。その前には、オランダ人の驚いた、新鋳の大砲庫が。松林の中には、反射炉の頭が。その手前に、紡績工場が――斉彬は、死んだが、それらのもの――日本全体を対手としても戦いうる精鋭な武器が。やがては、日本に富をもたらすべき生産設備が。右の方、城内の武器庫にも、眺めているその前方いっぱいに。左の方には、同じように石垣際に、一かたまりとなって、内部へ入れない軽輩が――それから、その人々の心の中には、斉彬の心が、いっぱいに――
吉之助は、磯浜を見、右を見、左を見て、赤い眼に、又涙をためた。だが、唇には、微笑を浮べて
「きっと、なせる。一蔵」
「なせる」
大久保一蔵は、そういってうなずくと、吉之助の手を握った。軽輩の総ては、同じ心で、磯浜を、桜島を眺めていた。
桜島は、真直ぐに、煙を立てていた。
「京は、何んだか、ざわついていたが、江戸は、相変らず、のんびりしてらあ。今にも、黒船が来るように騒いでゃあがったが――富士春のところへ、又、ぽつぽつ、旗本が、三味の稽古に来ているってじゃねえか。一体、何うなるんだか――」
「何うにか、なるだろう。何うともしてくれってんだ」
庄吉は、南玉の方へ、肩を聳やかして
「おいらあ、これで、男の一分が立ったから、おさらばってことにして――一つ、仲間の奴へ、奉加帳を廻してさ、二三十集まったら、何か、こう小商売(こあきない)でもやらかそうかと思うんだが。何うでえ師匠」
「いい思案だ」
小太郎は、縁側で、膝を抱いて、柱に凭れていたが
「庄吉――わしも、商人になろうかと思う」
と、云って、三人の方を見た。深雪が、兄の顔を見て、すぐ、俯向いた。
「若旦那あ、これからじゃあ、ござんせんか。富士春んとこの浪人衆でさえ、三田の御屋敷へこもって、一騒ぎ持ちゃげようという時節に、あんた、一文、二文の利がすりとるなるんざあ、南玉、いささか不服でげすな」
「南玉、世の中は、まだまだ変りそうだ」
「いくら変ったって、お侍は、お侍、巾着切が、二八うどんになるような――」
「いいや、そうではない。益満の企ても、国許の方々の企て

も、調所の利殖しておいた金子があればこそじゃ。斉彬公は強兵よりも、富国の策を、根本の大事とされたが、如何にも尤もじゃ。わしは、牧を討つのにかかって、何一つ、君にお報いできなかったが、同志の行動を見ると、ただ金子を使うばかりじゃ。せめて、わし一人でも、他人のせぬ、同志の卑しむ、金儲けをしようとおもう。そして、後ろ楯となろう。きっと、亡君は、お喜びになるにちがいない。又、世の中を見ると、のう、庄吉、武家は、徒らに、空威張りのみで、金子の前に、頭を下げぬ者が、幾人おる」

「そうでござんすとも――」

「調所のやった密貿易(みつがい)を、わしは、学ぼうと思う。庄吉、共々に、同じ棄てる命なら、人のせぬことをして、棄てようではないか。同志を裏切ったと、罵られようと、隼人の面目を汚したと、いわれようと、わしは、これが、斉彬公のお志の第一であったと、信じる――深雪、その心でいてくれい。わしは、今まで、武士としての半生を、空しく、過してしまった代りとして、これから後の半生を、益満より、一足先に、出ようとおもう」

「資本(もとで)は、若旦那」

「資本か」

と、いって、小太郎は、笑った。

「益満、諸共、押込じゃ」

そういった時、表から

「小太」

と、益満の声がした。

「行くか？」

「いよいよ仕事の手初めだ」

「わしも、仕事の手初めだ」

小太郎は、笑いながら、刀をとって、立上った。薄暗くなって来た表の土間に、益満か、身軽な姿で立っていた。

「今夜の、手初めが、やがて、天下を一新する手初めになるのだ」

「益満、わしは、金子を奪うぞ。それも軍用金にでなく、密貿易をする資本にだ。同志に不服の者があるが、わし一人でも、この志は変えぬ。これが、斉彬公に尽しうる、わしが、ただ一つの道だ――判るか」

益満は、暫く黙っていたが

「それもよい」

と、いった。

「行こう、益満」

と、小太郎は、明るい声をして

「お前が、天下をとるか？　わしが、天下を取らせるか。今度は負けぬぞ」

と、いって、笑った。長屋の表へ出ると、賑やかな話声と、三味の音とがしていた。

島津将曹は、小書院の窓際の、机の前に坐って――時々、暗くなってくる燭台の灯を、自分で、摘みながら、考え込んでいた。

斉彬が臨終の時にまで、何一つ、自分に対して、咎めの言葉さえ洩らさなかったということが、将曹の心を打ち砕いてしまっていた。

斉彬が世継ときまった時に、将曹は、勿論、家老職を、剥奪されるものだと、考えていたが――そして、斉彬の前へ、呼び出された時には、その覚悟だけで、いっぱいであったが、斉彬は

「父上に対していたと同様に、わしにも、輔佐してくれればよい」

と、いって、将曹の覚悟の、遣り場を、無くしてしまった。だが、将曹は、それに対して

（何か、肚に一物があるのであろう）

と、いろいろのことを考えて、十分に警戒をしていたが、それからすぐに続いて来た病の床ででも、斉彬は、何一つ、将曹に対して、その罪を責めるらしい言葉を洩らしはしなかった。

（えらいお方だ）

と、将曹は、心の底から、しみじみと、感じることが出来た。

（仕えてみて、初めて、斉彬公の非凡さが、判った――幕府が、この人を、頼みとし、天下の者が、この人に縋ろうとしているのは、尤もだ）

と、思った。だが、その斉彬に対し、斉彬の子に対して、自分の取っていたことが、悪いことであるとは、思えなかった。

（寛大、高識の君ではあるが、然し、財政の方の事には、欠けていなさる――人間、そう、完備しているものではない）

と、斉彬の、消費的方面――糸が、少し、機械の力によって、紡ぎ出せるという紡績機――

（あれは、玩具ではないか？　それに、大金を投じて――だから、父君の、御心配になるのも、当り前だ。オランダ人が来て、ほめたといっては、有頂天になっておられるが、紅毛人が、ほめたとて、何んだ。これが、斉彬公の御欠点だ。一にも、二にも、西洋西洋と、反射炉にも、ギヤマンにも、多大の金がかかったが、何一つ、それが金儲けになったという話は聞かない。折角の、調所の金が、見る見る空費されて行くが、これを、斉興公が、御心配になるのは、至極の御道理だ――その斉興公のために、犬馬の労をとっておるわしは、少しも、心に咎めることはない――斉彬公は、確かにおえらい、しかし、だからといって、わしが悪人とはいえまい）

将曹は、斉彬の寛量に、打潰（うちつぶ）された心を、取戻そうとして、じっと、考えていた。そして

（わしのして来たことは、間違っていない）

と、自分の心へ、十分、理解させようとしたが、その心の中に、幻のように、煙のように――七人の子供を殺した、ということが、閃いていた。払っても、払っても、その幻は、水の蔭のように、揺れながら立昇っていた。

（何んの罪も無い幼児を殺して――）

将曹は、新鮮な果物のような、子供の頬を思い出して

（これは、わしが、責められても申開きのできぬことだ。然し、これも、御家のためならば、何う、地獄において、呵責（かしゃく）されようとも、退く訳には、行かぬ――道はちがうが、同じく、御家を思う一心からだ）

そう考えてはみたが、自分らの陰謀が、首尾よく、成就したと思うと、何かに対して、大きい罪を犯しているような気

がした。何かしら、張りつめていたものが抜けて、弱くなって行くような気がした。

持仏の間には、大きい、広い仏壇が、黒い艶を、金色の光を、静かに、輝かせていた。

すすけた厨子の中に、真黒な裸像で立っている仏が、その前には、段々に供物が、花が、それから、その上に、白木の位牌が――それには、お由羅の筆蹟らしく

島津修理大夫源斉彬

と、書かれてあった。

殆んど、顔を合せたことのない、自分の生まぬ子――お互に、顔を合せないようにしている斉彬の死に対して、お由羅は少しの感じもしなかった。

「御逝去になりました」

と、いって来た時に

（本当であろうか）

と、すら、疑い

（本当なら、意外に早く成就した）

と、感じただけで、自分の陰謀のために、呪いのために、自分の子が亡くなったということに対して、顔を知らぬ家来の死を聞いた程にも、感じなかった。

そして、こうして、仏壇の前に、珠数をもって、称名しているが、それは、自分の心の咎めを消すためでもなく、斉彬の冥福を祈るためでもなく、一つの、体裁としてのみであった。

お由羅は、称名を、口で、唱えながら、久光のことを、忠義のことを、斉興のことを、考えていた。

（これで、悉く、成就したと、将曹などが考えていてくれたなら、大間違いであろう。これからが、大切なのだから）

お由羅は、軽輩を恐れていたし、だんだん老衰して来る斉興を、覚束なく考えていたし、斉彬を崇拝している久光のことも不安であったし――それらのことが、悉く、自分の意のままに、解決されなければ、十分な成就とはいえない、と考えていた。

（そうせんと、今度は、自分が、殺される）

と、感じていた。

（久光のために、わしの殺されるのはよいが――人を呪った上は、自分も、呪われるものであるが、妾は、子が可愛いばかりでない、お家を大事に思うからこそ、ここまで、大それたことをしてきたのだ）

と、思った。そして、そう思うと、七人もの子を、次々亡くし、その終りには、夫の斉彬さえ亡くしてしまった英姫のことが、思い出されたが、それは

（運の悪い人）

で、お由羅には、見たこともない夫人へ、同情のしようがなかった。

（一度でも、逢うていると、それは、人情として、気の毒にもなるが――）

お由羅は、自分の眼に記憶のない七人の子供の死――それは、自分が、命じて殺したのではあるが、見ていない子供の面影は、他人の話を聞くよりも――遠い昔の、そうした物語の本を読んでいるよりも、心に迫って来るものがなかった。

女中が
「お渡りで、ございます」
と、外から、声をかけた。
「今行く」
「あのう、こちらへ、参ると、仰せられてございます」
「ここへかえ」
「はい」
お由羅は、斉興が、なぜ、持仏の間へ来るか、よく判っていた。
（もう、一押ししないと、九仞（きゅうじん）の功を、何んとかに欠くということになる）
お由羅は、自分の褥を、斉興のために、布いて、自分は、下座へ退った。

斉興の顔は、いつになく、沈鬱であった。お由羅に対しては
「わしも、もう、いい齢だから――」
と、洩らすことはあったが、余人に対しては――斉彬に対してすら、まだ、少しも、衰えたところを見せまいとする斉興であった。だが、斉彬の急死に対して、父の情として――微かにでも、心のやましさを感じている人間の自然として、重苦しい鉛のようなものが、頭の中いっぱいに張りつめ、肚の中いっぱいに、沈んでいた。何う、払いのけようとしても
（わしが、殺したのも同然だ）
と、いうような気がしていた。
俯向いて、廊下から、持仏の間へ入って来た斉興に、お由羅が
「ま、かような陰気臭いところへ――」
と、いつものように、媚びた眼で見上げる顔へ、ちらっと、眼をくれたまま、仏壇の前へ坐った。そして、じっと、燈の閃いている仏壇の中を、眺めていた。
死んでみると、何か、取返しのつかぬ大切なものを亡くしたように思われた。多少いじめてもこんなに早く死ぬとは考えられぬことであった。斉彬が生きているうちは、いろいろの意見の相違、心配、不平などがあったが、死んでしまうと――そして、天下の人々が、一斉に、その死を惜しむのを聞くと、自分に対する斉彬の心づかい、一通りでない苦慮、孝心を聞くと、何んなに、お由羅が
「久光がおります」
と、いってくれても、心を傷ましめるものが、去らなかった。
（死なずともよいのに――）
と、斉彬を恨むような心さえ起ってきた。眠ろうとしても、眠ってからでも、斉彬や、お為派崩れに刑死した人々のことが、繰返し、繰返し、思い出された。
だが、そうした人々よりも、もっと斉興を痛ましめる面影は、七人の幼い子供のことであった。お由羅は、そのどの子も見たことはなかったが、斉興は、自分の孫の顔を、時々見たことがあった。
そして、こうした、老いた、衰えかけた心の中に現れて来る幼児の幻は、哲丸も、虎寿（こす）丸も、たれもかれも、皆にこにことして、笑っていた。お由羅の陰謀の手にかかって死んだ

のであるのに、それを少しも感じないように、恨んでもいないように、斉興の眼の中で、愛らしく笑っていた。何(ど)の子も、よく肥った、聡明な眼をして、笑ったり、叫んだり、もがいたりしていた。斉興は

（わしを恨んでくれい。わしを、恨んでくれる方が、わしの苦しみは、少い。何うして、お前等は、そう無邪気なのか――）

と、いう風に、それらの子供の幻に対して、悲しみに、心を、顔をゆがめながら、叫んでみた。

斉興は、暫く、そうした幻を描いてから、薄く涙の滲んだ眼を開いて、経机の上の香炉へ、線香を立てた。お由羅が、珠数を渡した。斉興は、珠数を手にかけて、俯向くと同時に、膝の上へ落ちる涙を感じた。お由羅は、それを見て

（こう弱くなってはいけない）

と、感じた。それで

「お済みになりましたら、何か気晴らしを致しましょう」

と、声をかけた。だが、斉興は、俯向いたままで、返事もしなかった。

（ここまで来て、ここで弱くなっては、何んにもならない）

お由羅は、斉興に対して、じりじりと、焼けつくような、もどかしさと、憤りとをさえ感じてきた。

大老阿部伊勢守は、黒書院控の間の、床の前に、ただ一人で、膝へ両手を置いて、瞑目していた。

（なぜ、死んでくれたか？）

伊勢守は、目でこぞ泣かなかったが――いいや、泣くだけの力さえなくなっていた。

幕府の人々の中には、誰一人として、この国の大事の時に、阿部の力となり、慰めとなる人がなかった。将軍は、重臣は、町人から献金させてでも、奢侈(しゃし)な生活をしたがっていたし、旗本は、家重代の鎧までを入質して、生活費に当てているし、大名は、各々己の家を支えるだけに、全力を挙げなくてはならなかった。

その中で、唯一人、日本のため、幕府のため、阿部のために、自分の利害を、薩摩の利害を、越えて、見識を、手腕をかしてくれた人は、斉彬であった。伊勢守にとって、斉彬を、失ったということは、自分の頭を、両脚を、背骨を、失ったと同じようなことであった。

幾度か、大きく、息を吐き、幾度か、膝の上の手を、組んだり、解いたり――伊勢守の頭の中は、斉彬の死を聞くと共に、空虚になって、急に、日本の、幕府の四方が、暗くなったように思えた。襖が開いたので、顔を上げると、西丸御留守居、筒井肥前守政憲が、入って来て

「修理が、亡くなったそうな」

と、云って、前へ坐った。そして、坊主の足早に持って来た褥を敷いて

「斉彬を奉じて、倒幕をやろうなどと企てておった浪人共は、さぞかし、力落しであろうが――惜しい人物だが、又、邪魔な人物でもあった」

伊勢守は、それに答えないで、眼を閉じたままであった。

（斉彬が、亡くなれば、異国掛が、堀田一人で、堀田と、斉彬は、段がちがう――斉彬は、勝麟太郎という軽輩を、いつ

か推しておったが、島津の家風なら、いざ知らず、幕府として、堀田と、軽輩とを、併用する訳には、行かない――国の衰える時には、人物が無いが、天下に号令をしている徳川として、堀田と、小栗。この二人しか、一人前に、用いられぬとは――）

斉彬の、温厚な、だが、肚のすわった、そして、立派な――広い知識と、高い見識とを思い出すと、筒井政憲の顔を見るのさえ、厭になってきた。

（斉彬は、日本のために、幕府のために尽して、過労で死んだのであろう。わしも、いささか、斉彬を見習って、職に倒れよう。斉彬のために、わしの最後の友情として、斉彬の志の通りに、島津の家督を、片づけてやらねばならぬ。それだけしか、わしが、斉彬に尽すことはないのだ。斉彬は、いえぬくらいに、多くを、わしのために、尽してくれたが――）

伊勢守は、斉彬の亡き後の、島津の相続について、きっと、伊達、黒田の人々は、再び、斉興を、後見役にするということに対しては反対するであろうと、信じていた。

（何んなに反対しても、斉彬の孝心としては、忠義を立てて、斉興を、後見役にしたいであろう。わしは、唯一つの、わしにできる、斉彬に報いうることとして、死後まで、斉彬の孝心を貫徹させてやらなくてはならぬ）

伊勢が、そう思った時、坊主が

「お上りになりましてござります」

と、襖越しに、声をかけた。

「お通し申せ」

と、伊勢が、答えた。

阿部伊勢守は、二人の挨拶が、終ると

「後見のことで、ござるか」

と、笑いながら聞いた。伊達宗城が

「何分、斉彬の志を、そのまま久光へ、継がせたく、忠義を当主として、後見を、久光と、御取定め願いとう存じます」

黒田長博も

「この儀、尤もかと、心得まする」

と、いった。

「わしも、いろいろと、考えた」

伊勢守は、腕組をして、絶えず、微笑しながら

「前々からの関係と申し、わが家の相続と同じように、考えておる」

二人は

「はい」

と、云って、俯向いた。

「ところで、これは、古い例で、御両所の御意に召さんかも知れんが、関ヶ原の戦いの時、大谷吉継が、石田三成に、家康は、もう五七年で死ぬゆえに、それまで待たぬか、と云った話がある。今更、こんな古めかしいことを、申し上げるのも、お笑い草だが――然し、斉彬の斉興に対する、子としての至情を見るとき、斉興が、ああいう仁ゆえ、久光を後見としては、後見が、二人あるように、斉興は、黙っておるまい、と思えるゆえ、斉彬の心としては、今暫く、後見は、斉興としておき、天寿を待って、久光が立つ。これが、わしの、斉彬の孝心を、亡き後にも、完うさせるものだと、思うている

が、何ういうものかの」
　伊勢は、黙って、俯向いておる、二人の心が、自分の説に同意していないのを、よく知っていた。それで
「久光は、わしの見るところでは――御両所の前ゆえ、忌憚なく申し上げるが、斉彬よりも若い。いろいろと若い。そして、ただ、斉彬の歩んで来た道を、ひたすらに、歩もうとしておるが、斉彬であればこそ、斉興は、己の肚の中では、反対しておっても、表面口には上せなかったが、久光では、遠慮なく、振舞うであろう。例えば、紡績で例をとると、久光は、兄の意思をつづけようとしようし、斉興は、打切ろうとするであろうが、つづけられるものなら、世のために、続けてもいいが、久光では、続けられもせず、棄て去りもせずという、ひどく中途半端なものになる。わしの心配は、ここにある。斉興が、後見として、斉彬の続けたものを、悉く、破壊してしまう。これは、一時は、惜しい。然し、斉彬は、わしに申しておった。軽輩の中から、きっと、その倍も、三倍もの力で、それを、復活させる奴がおるとな。それが、眼に見えておるから、と、いつも申しておったが、斉興が、もし、斉彬の仕事に反対したなら、反対すれば、するだけ、反溌力が、潜勢力が強くなって、蘇ってくる。斉興の命は、ここ長くとも、五六年であろうが、その五六年の後に、爆発する軽輩の力と申すものに、或いは――わしらをも、倒すかもしれぬ――それでよい。倒されるものなら、仕方があるまい。然し、今、久光が、斉興と、争って、斉彬の志を、保存するとすれば、この鬱勃たる勢いが、蓄積されまい。一つは、斉彬の愛しておった軽輩のために、一つは斉彬の孝心のために、余命のない斉興を、後見にしたいと、わしは、肚をくくっておる。いかがでござろうか――」
　二人は、阿部が、斉彬と同じように、表面は、柔かであるが、いい出したら退かぬし、尤もな意見であったから
「御高説、至極妙と存じます」
　と、黒田が、いった。
「何分とも――」
　と、宗城が、顔を上げた。

「御隠居が、後見に――」
「もう一度、老公が――」
　そうした噂は、すぐ、家中いっぱいになった。軽輩は、身体中を、蒼白めさせて、怒りに、顫えてきた。
「さんざん、斉彬公の、世話になっておきながら、阿部伊勢という奴は、何んだ」
　と、或る者は、罵った。
「福岡や、宇和島は、何をしているのだ」
　と、一人は、叫んだ。そして、そうした人々が、集まっては、階級の上の人々へ、白い眼を向けるようになった。
　上の方の人々は、近頃の世間と同じように、一口に、痩浪人がと、軽蔑しながら、その浪人達の何かの力を恐れているように
「何んの、紙漉武士共が」
　と、軽輩を、軽蔑しながら、その軽輩共の、身体から溢れて来る、眼から放射されて来る力に、圧迫を感じていた。
「老公が、後見とは、当然だ。浪人は、世の中を乱そうとす

るし、家中の軽輩共は、家を乱そうとしている。久光には、軽輩共を、押えることができまいが、斉興なら――」
「久光公は、斉彬公の真似が、上手だから、押えることができんのみか、却って、下手に、軽輩に、利用されるだろう」
「然し、もう、老公も、いいお齢だから、ここ暫くの間に、ばたばたと、押えつけてしまわぬと――」
「そうは行くまい。奴等の根というものは、ずいぶん、張っておるし、何うも、天下の大勢は、一揉めしそうではないか？」
九州の名族として、七百年来、薩南の地に、蟠居(ばんきょ)し、関ヶ原以来は、上下の分が定まって、士分階級が二つに分れ、以後三百年来、凡庸(ぼんよう)と雖も、門地さえ高ければ、傲然として下に臨み、下の者はいかに人材であろうとも、容易に、鋭出することのできなかった因襲が、斉彬のために破られて、上士の人々を、圧迫して来たことは、それらの人々にとって、容易ならぬことであった。
「奴等、低い身分の者は、失う物がない。京師へ脱走し、江戸へ出奔するに、身一つでいい――わしは、近頃、あいつらが、羨ましくなって来た」
そう嘆じる上士階級の人々もあったが、多くの人々は、
「倒幕の、何んのと、流行物(はやりもの)にすぎぬ」
と、考えていた。そう考えなければ、かれ等は、軽輩の下につかなくてはならなかった。倒幕のこと、開国のことにかけては、軽輩の方が、遥かに、経験と、理前とをもっていた。そして、軽輩が、信じている如き天下となれば、当然、そうした天下にした功労は、軽輩の手に移って、自分らの現在の地位は、逆になる虞(おそ)れがあった。だから
（流行ものだ。今に、治まる）
と、考えて、気安めをするより外になかったかれ等は、今更、軽輩の後塵を拝して、働きたくもなかったし――だが、そう考えながら
（或いは、そういうことになるかもしれぬ）
と――そして
（そうなった時には、この地位が――だが、今更、大久保や、西郷の前に、頭が下げられるか）
と、自分の考えと、自分の地位の矛盾に、いらいらしながら
（斉興公が、この際、思いきって、軽輩共を、やっつけてしまってくれたなら――）
と――それは、上士の人々は、お互に、口へは出さなかったが、肚で考えていることであった。

西郷吉之助は、すぐ、お庭方を御免になった。大久保一蔵は、琉球館書記方心得を、罷免されてしまったし、その外、斉彬の手で、取立てられ、取立てられかけていた人々は、殆んど、その位地を奪われてしまった。
そして、その人々の代りに、上士の人々が、それらの二男が、三男が入って来たが、上役は、蔭でそっと
「物の役に立たぬ」
と、呟くし、下役の人々は
「何んだ、あの野郎」
と、軽蔑した。そして、心ある上役は、軽輩時代の近づいたのを知って、斉興を、もう一度、後見にしたということは、

却って、悪かったと考え、下役の人々は
（老公は、すぐ死ぬんだ。死んでみろ、手前ら――）
と、威張るのみで、仕事のできぬ上士出の人々を、軽蔑して、斉興の死を、待つ心になっていた。
磯浜にあった紡績工場は、閉鎖されてしまった。上士達は
（何んの役にも立たぬ紡績工場など――いっそ、こわしてしまえばいい）
と、思ったし、下士達は、それが、ただ、斉彬の遺物であるというだけで、そうしたことに、深い憤りを包んでいた。
反射炉の火も消えてしまった。上士達は、それに対して
「濫りに、大砲などを鋳造して、幕府のとがめを受けるなど、愚の頂上だ。薩摩には、天嶮（てんけん）がある。誰が、入れるものか」
と、評した。そして、下級の士は、磯浜の堤の中に、沈黙している、その反射炉から生れてきた大砲を、撫でながら、或る者は、泣き、或る者は憤り、或る者は、叫んでいた。
（斉興が立とうと、久光が、立とうと、わしらの志は、変らないぞ。わしらは、それぞれ、斉彬公のお志をもつものだ。吾々の一人一人が、それぞれ天下の難に当るのだ。一人で、日本を背負って立つつもりなのだ）
三人集まれば、五人集まれば、斉彬の遺訓を口にしていた。
軽輩が、何をしても、だまっているのを、将曹等は、斉彬が亡くなっての失望だと、考えていた。
それで、硝子工場を、機械方を、造船を――斉彬が、日本の進歩のために、研究し、設備しておいたすべての事業を、「経費節約」と、いう名の下に、停止させてしまった。そうして、実際また、それらのところで働いていた人々も、斉彬を失っては、完全な仕事をし得なかった。
斉彬の、遺しておいたこうした形が、だんだん荒れて行くと共に、軽輩の力は、ますます内部で潜興（せんこう）してきた。上士の方からも、軽輩へ、近づこうとする人が、生じてきた。軽輩の中の無為な人々が、同僚の言行に対して、理解を持ち出してきた。
「おれは、斉興を、主とも頼まぬが、久光も、また、主とも頼まぬ。天下のことは、自分一人で、天下と共に、天下の勢いと共に、天下の士と共に、成し遂げて見る」
西郷吉之助は、こうした決心をした。そして、同じ心の人々は、斉彬の遺業が、斉興の手にて、破壊されると同時に、斉彬の志を奉じて、それぞれ、諸国に奔（はし）った。上士は、勤王、倒幕の遊説の士が、城下へ入るのは、防いだが、軽輩が、そのために、脱出するのを、とめはしなかった。
止めることは、激発させるおそれもあったし、一人でも、そうした男のいなくなることは、自分を安全にする道であった。上士にとって、斉彬は、理解のできぬ、大きい陰影のようなものでもあった。そして、その死と共に、それが消失すべきであるのに、だんだんその影が大きく、強くなるのに、困った。そして、その影を、消し、払うことのみに努めていた。
（兄の、遺志を、どこまでも継いで――）
その日の夜から、久光は、そう考え、そう決心をしていた。
だが、その日の夜から、重役達は、久光を除いて、密談をしていたし、その翌日、上士階級の人々は

（もう一度、斉興公に――）
と、話をしたし、その次の日には、久光が斉彬に代って、目をかけてやろうと、考えていた人々が、久光に冷やかな目を向けたし、それから、幕府は、斉彬を頼みとしていた、その一部分をも、久光を、頼みにはしていないようであった。
（兄の考えは、何一つとして間違っていない。天下も、島津も、兄の予言の如くになって行くであろう）
久光は、そう信じて、もう一度、家政を支配しようとする斉興に対し、させようとする人々に対し、押えきれぬ不満と、怒りとをもっていた。
（わしは、自分の権勢のために、忠義の後見をしようとするのではない。天下のため、島津のためにだ）
だが、久光を取巻く、上士の人々は、一人として、久光に「また、老公が、お立ちになるとは、困ったことでござりますな」
と、さえ、いう者がなかった。そして、その代りに「軽輩共は、今度の斉彬公の御逝去も、お由羅様の、呪咀だなどと申して、ひそひそ談合しております」
と、いった。そして、軽輩は、明らかに、久光を、敵視していた。久光は、葬式の日に見た西郷吉之助の、大きい眼を思い出した。それは、十分の敵意と、怨恨とを含めて、睨みつけた眼であった。久光は、遠からぬ前に、吉之助らが、斉彬のために、久光を元兇として、立とうと企てていた、ということを聞いていた。だから
（わしは、兄の志を継いで、共々天下の難に赴こうというのに、汝等、わしの肚がわからぬか）
とも、考え
（不届な）
とも、怒り――そうして、ある時には
（わしは、まだまだ兄にまでは到らぬから）
と、反省もしてみたが、重臣達は、久光を、斉彬の崇拝者として危険に思い、軽輩は、斉彬の敵として、憎んでいるかと思うと、ただ一人、孤独の立場になって、自分を知られぬ苛立たしさに、落ちつけなかった。
久光は、兄の残しておいてくれた、軽輩の人々の連名を読み、新しい器具の設計書を見、新しい知識の翻訳書を眺めて、ただ一人、部屋の中に、閉じこもっていた。
（兄は、こういう時に、いつも、判断を、誤らなかった。重役共が、己のために、斉興を立てて――父の命が、何年あると思うか？　それだけの間小康を得て、何になるか？――兄の仕事を、こわして、それで、兄の蒔いた種までが、枯れるとでも、考えているのか？）
久光は、重役とか、上士とかの人々の、あせり方と、軽輩が、斉彬の死後、何一ついわず、何一つせず――そして、ひそかに、脱藩して、京師へ、江戸へ、行くのを見ていると
（世の中も、ちがってきたが、お国風もちがってきた）
と、感じない訳には、行かなかった。
（十年前なれば、軽輩を、手もなく、押えたであろうが、今では、上士は、己を守るのみに忙がしい。勝利は、明らかに、軽輩の手にある。わしを恨んでもいいが、わしは、お前らを、十分理解しているつもりだ）
久光は、自分の代になると同時に、西郷を、大久保を斉彬

のしたと同じように、重用してやろうと決心した。
久七峠の上の、茶店に、七八人の若者が――それは、脱藩をして、江戸へ、益満等と共に、行を同じゅうせんとする人と、京師へ出て、諸国有志と、提携しようとする人と、そうして、見送りに来た人と――
「爺は、いつも変らぬのう」
「はい――」
「婆は、何うした？」
「あれは、半年ばかし前に、亡くなりましてな」
「そうか、死んだか――」
「いつだったか、矢張り、貴下方みたいな方が、この先で、斬合いをなされましたが、今日も、何か――」
若い人々は、眼を見合せて
「牧を、討ちに来た時だった、あれは」
一人が、窓から、遥かの、山裾の道を、指さして
「あの辺だった」
一人が
「ま、行こう。一刻、遅れると、一刻の損になる」
と、いって、刀をさして、立上った。
「それでは、益満に」
「ああ、西郷に」
四人は、関所の側へ、三人は、元の道の方へ
ざんば岬を、後に見て
袖をつらねて、諸人の
泣いて、別るる、旅衣
三人が、声を合せて唄った。そして、それが、終ると、四人が
渭城の朝雨、軽塵を裛す
客舎青々、柳色、新なり
君にすすむ、更に尽せ一杯の酒
西の方陽関を出づれば故人なからん
「成功をしてくれ」
「後を頼むぞっ」
「斉彬公のために」
「天下蒼生のために」
三人と、四人とは、振返り、振返り、同じ唄を、かれ等の別れの小唄を
ざんば岬を、後にみて
袖をつらねて、諸人の
曲り角へ来た時
「有村っ」
有村が、振向いて
「五代っ」
と、叫んだ。そして、手を挙げて、各々の名を呼んだ。そして、一寸、佇んだ、が、すぐ、山蔭へ――
「おーい」
と、呼ぶと
「おーい」
と、答えた。別離の悲しみが、胸いっぱいであると同時に、未来に対する希望が、明るい金の烏の形となって、若者の、軽輩の青年の頭の中を、狂った如く、飛び翔っていた。

（倒せても、倒せなくても、徳川を倒さずには、おくものか。斉彬公が、そう仰しゃっていた）
（取れても、取れなくっても、天下を取らずにおくものか。斉彬公が、そう仰しゃっていた）
（やれても、やれなくっても、吾等軽輩はやらずにおくものか。斉彬公が、そう仰しゃっていた）
行く者は、東へ、送る者は、城下へ。それは、長い距離を離れていたが、心は一つであった。斉彬の死によって、一新した心は、斉彬の遺志を展(の)べさすために、十分の熱と、力とをもっていた。
関所を抜けたらしく、四人の姿は、牧を追って山内と闘った道の辺に、小さく見えて来た。もう、声は届かなかったが、お互に、手を挙げ、手を挙げしながら――遠ざかり、曲り、そして、別れてしまった。